# 高井田遺跡Ⅲ

--- 国民年金健康保養センター建設に伴う ----〔本文編〕

1989年 3 月

柏原市教育委員会

# 高井田遺跡III

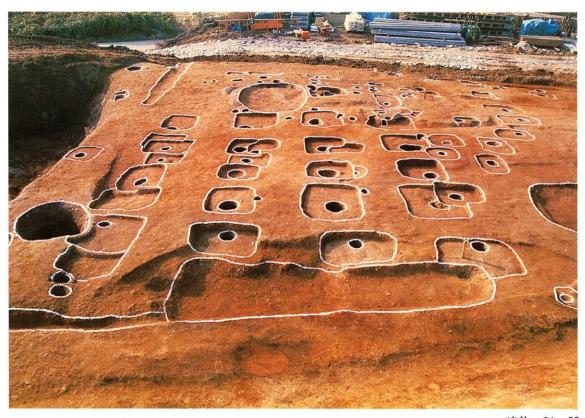
一国民年金健康保養センター建設に伴う一 [本 文 編]

1989年 3 月

柏原市教育委員会



建物-7



建物-31~33

## はしがき

本市教育委員会では、昭和62年7月より、国民年金健康保養センター建設に伴い、高井田遺跡の発掘調査を実施してまいりました。 本調査では、高井田土地区画整理事業に続いて、広範囲を調査することになり高井田遺跡が大規模な集落遺跡であったことが確認されました。鳥坂寺跡に隣接して立地する当遺跡は、鳥坂寺を建立した氏族、即ち鳥取氏の居住地と推定されるものであり、集落と古代寺院の関係を明らかにした数少ない遺跡の一つとなりました。また、調査に伴って出土した遺物は膨大な量にのぼり、古代の人々の生活を物語る資料として活用して行きたいと考えております。

これらの貴重な成果をもたらした発掘調査の後、本年4月に立派な宿泊施設やプール、テニスコートなどの完備した国民年金健康保養センターがオープンします。今後は府民の保養施設として利用され、柏原市にとっても有益な施設となることでしょう。しかし、この施設も貴重な埋蔵文化財や自然環境を失うという大きな代償を払って建設されたものであることを知っていただきたいと思います。それら失われた埋蔵文化財の調査成果をここに公にすることによって、記録を後世に残していきたいと思います。それが現代に生きる私たちの努めであると確信します。今後とも、文化財に対する御理解と御協力をよろしくお願いします。

平成元年3月

柏原市教育委員会

### 例 言

- 1. 本書は、柏原市教育委員会が、柏原市高井田及び安堂町所在の平尾山古墳群安堂支群、及 び高井田廃寺(鳥坂寺跡)における国民年金健康保養センター建設に伴って実施した緊急発 掘調査報告である。
- 2. 調査は、柏原市土地開発公社(理事長・柏原市長 山西敏一)の依頼に基づくものである。
- 3. 発掘調査は、昭和62年7月21日から昭和63年6月23日まで実施し、調査に伴う整理作業は、昭和62年10月1日から平成元年3月10日まで実施した。
- 4. 当該地は、従来の埋蔵文化財分布図では平尾山古墳群安堂支群に含まれるが、過去の調査 成果から『高井田遺跡』の名称を与え、今後はこの遺跡名を正式名称とする。
- 5. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課文化係 安村俊史、森島康雄が、整理作業は安村 が担当した。
- 6. 調査に際して、大阪府教育委員会文化財保護課 中井貞夫、阪田育功両氏より、指導、助 言をいただいた。
- 7. 本書の編集は安村が担当し、第3章の木製品の項を津田美智子が、その他全文を安村が執 筆した。
- 8. 本書で使用した方位は磁北、標高はT. P. である。なお、真北は磁北より約6°東に振っている。
- 9. 調査・整理の参加者・協力者は下記の通りである。

松井隆彦 空山 茂 竹下 賢 奥川滋敏 北野 重 桑野一幸 松下 修 秋田大介 石田成年 寺川 款 西村 威 伊藤芳匡 今中太郎 岡田嗣生 近藤康司 田中國雄 西 一晃 稲岡利彦 本多恵治 前田耕司 山口俊雄 吉谷光隆 津田美智子 竹下彰子 南 ゆう子 青木久美子 尾野知永子 出口美佐子 寺尾正美 松井美保子

乃一敏恵 横関勢津子 吉居豊子

柏原市建設部土木課

村本建設株式会社

株式会社島田組

関西航測株式会社

第	1	章	Ī	周査経過	1
第	2	章	ì	貴跡の概略	2
第	3	章	Ī	調査成果	
	1	. ,	層)	<del>-</del>	6
	2	. :	遺	<b>搆</b> ······	9
		飛	鳥	• 奈良時代の遺構	10
			Α.	. 建物・栅	10
			В.	. 井戸	101
			С.	. 土坑	106
			D.	. 曲物	114
			Ε.	. 溝·······	115
		平	安	時代の遺構	116
		鎌	倉	時代の遺構	116
		古	墳		119
	3		遺	物	121
		飛	鳥	<ul><li>奈良時代の遺物</li></ul>	121
			A	. 建物	121
			В	. 棚	125
			С	. ピット	126
			D	. 井戸	128
			Е	. 土坑	135
			F	. 溝	148
			G	. 谷-1	149
			Н	. 谷一2	170
			I	. 包含層	174
		平	安	時代の遺物	176
		鎌	倉	時代の遺物	176
		古	墳	出土遺物	178
		堆	輪	群出土遺物	178

その	他	の遺物	185
A	١.	埴輪	185
В	3.	屋瓦	194
C		木製品	198
Ι	).	鞴羽口	206
E	₤.	鉄滓	206
F	₹.	その他の土器・土製品	207
C	3.	石製品	207
		金属製品	
I	Ι.	獣骨	207
第4章	_		
1. 遺	貴構		209
2. 追	貴物	J	215
3 4	骨跡	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	218

# 挿 図 目 次

図-1	周辺の遺跡分布図3	$\boxtimes -31$	建物-18・ピット-3・4・925
$\boxtimes -2$	調査地位置図5	⊠-32	建物-1925
$\boxtimes -3$	谷-2 土層図7	⊠-33	建物-2026
<b>図</b> −4	調査地区全体図8	$\boxtimes -34$	建物-2127
図-5	遺構平面図①9	⊠-35	建物-2228
図-6	建物-110	⊠-36	建物-2328
図-7	建物-211	⊠-37	建物-2429
図-8	建物-311	⊠-38	建物-2529
図-9	建物-412	⊠-39	建物-2630
⊠-10	建物-512	⊠-40	建物-2731
図-11	建物-612	⊠-41	建物-28·····31
⊠-12	遺構平面図②13	⊠-42	栅 — 5 ······32
図-13	建物-714	⊠-43	栅−5 ・ピット−332
⊠-14	建物-815	⊠-44	栅一6 ·····32
図-15	建物-915	⊠-45	栅一7 ······33
⊠-16	棚-1 ······16	⊠-46	栅一8 ······33
⊠-17	遺構平面図③16	⊠-47	遺構平面図⑤33
図−18	建物-1017	⊠-48	建物-2934
図-19	建物-1117	⊠-49	建物-3034
⊠-20	建物-12·····18	図-50	建物-30・ピット-635
図-21	建物-13·····18	⊠-51	建物-3135
⊠-22	栅 — 2 ······19	⊠-52	建物-3236
図-23	棚 — 319	⊠-53	建物-3337
⊠-24	栅 — 4 ······19	⊠-54	建物-33・ピット-238
⊠-25	建物-1420	図-55	建物-3438
⊠-26	建物-1520	図-56	遺構平面図⑥39
図-27	遺構平面図④21	⊠-57	建物-3541
⊠-28	建物-1623	⊠-58	建物-3641
⊠-29	建物-1724	⊠-59	建物-37·····42
⊠-30	建物-18·····24	⊠-60	建物-38·····-42

図-61	建物-3943	図 <b>-94</b>	建物-6161
⊠-62	建物-4043	⊠-95	栅-1561
⊠-63	建物-4144	⊠-96	建物-6262
⊠-64	建物-42·····44	⊠-97	遺構平面図⑧63
⊠-65	建物-4345	⊠-98	建物-6365
⊠-66	建物-44·····46	⊠-99	建物-6466
⊠-67	栅 — 9 · · · · · · · · 47	図-100	建物-6567
⊠-68	栅-1047	⊠-101	建物-6668
⊠-69	栅-1147	図−102	建物-6768
⊠-70	栅-12·····47	⊠-103	建物-6869
図-71	栅-13······47	図-104	棚-1669
図-72	栅 — 14 · · · · · · · · 47	⊠-105	建物-6970
⊠-73	遺構平面図⑦ · · · · · · · 48	図−106	建物-7070
⊠-74	建物-4549	⊠-107	遺構平面図⑨71
図 <del>・</del> 75	建物-45・ピット-249	⊠-108	建物-7173
⊠-76	建物-4650	⊠-109	建物-7273
⊠-77	建物-4750	図-110	建物-7373
⊠-78	建物-4851	図-111	建物-7473
⊠-79	建物-46~48断面図51	図-112	建物-7574
図-80	建物-49·····52	図-113	建物-7675
図-81	建物-5053	⊠-114	建物-7776
⊠-82	建物-5154	図-115	建物-78·····76
⊠-83	建物-52·····54	⊠-116	棚-1777
図-84	建物-5355	⊠-117	建物-7978
⊠-85	建物-54·····55	⊠-118	建物-8078
⊠-86	建物-5556	⊠-119	建物-8179
⊠-87	建物-55・ピット-157	図−120	建物-8280
図-88	建物-5657	図-121	建物-8381
⊠-89	建物-56・ピット-2~458	図-122	建物-8482
⊠-90	建物-5758	⊠-123	建物-8582
⊠-91	建物-5859		建物-8683
⊠-92	建物-59·····60	図−125	遺構平面図⑩84
⊠-93			建物-8784

図-127	建物-88·····84	図-160 土坑-10	109
図-128	建物-8984	図-161 土坑-11	110
図-129	建物-9085	図-162 土坑-12	111
図-130	建物-9186	図-163 土坑-14	113
図-131	遺構平面図①87	図-164 曲物-1	114
⊠-132	建物-9289	図-165 曲物-2	114
図-133	建物-9389	図-166 建物-109	117
図-134	建物-9490	図-167 土坑-16	118
図-135	建物-9590	図-168 土坑-17	118
図-136	建物-9691	図-169 古墳周溝	120
⊠-137	建物-9791	図-170 建物ピット内出土遺物①	122
⊠-138	建物-9892	図-171 建物ピット内出土遺物②	124
図-139	建物-9993	図-172 棚ピット内出土遺物	126
図-140	建物-99・ピット-593	図-173 ピット内出土遺物	127
図-141	建物-10094	図-174 井戸-1 出土遺物①	129
図-142	建物-100 ・ピット-394	図-175 井戸-1出土遺物②	130
図−143	建物-10194	図-176 井戸-2下層出土遺物①	132
図-144	建物-10295	図-177 井戸-2下層出土遺物②	133
⊠-145	建物-10395	図-178 井戸-2 上層出土遺物	134
⊠-146	建物-10496	図-179 土坑-4~7·9出土遺物·······	136
⊠-147	建物-10596	図-180 土坑-8下層出土遺物	137
⊠-148	建物-10697	図-181 土坑-8上層出土遺物①	138
⊠-149	建物-10797	図-182 土坑-8 上層出土遺物②	139
図−150	建物-10898	図-183 土坑-10下層出土遺物①	141
⊠-151	栅-18·····99	図-184 土坑-10下層出土遺物②	142
⊠-152	栅-19·····99	図-185 土坑-10上層出土遺物	143
図−153	栅-20100	図-186 土坑-11出土遺物	145
図−154	井戸-1 102	図-187 土坑-12~15出土遺物	147
⊠-155	井戸-1 断面土層図 103	図-188 溝出土遺物	148
⊠-156	井戸-2 104	図-189 谷-1 東半出土遺物①	154
⊠-157	井戸-2断面土層図 105	図-190 谷-1 東半出土遺物②	155
⊠-158	土坑-4 107	図-191 谷-1 東半出土遺物③	156
⊠-159	土坑-8107	図-192 谷-1 東半出土遺物④	157

⊠-193	谷一1東半出土遺物⑤	159	⊠-215	埴輪群出土遺物③	183
図-194	谷-1東半出土遺物⑥	158	⊠-216	埴輪群出土遺物④	184
図−195	谷-1東半出土遺物⑦	161	図-217	谷-1出土埴輪①	186
図-196	谷-1東半出土遺物⑧	162	図-218	谷-1出土埴輪②	187
図-197	谷-1東半出土遺物⑨	163	図-219	谷-1出土埴輪③	189
図−198	谷-1東半出土遺物⑩	164	図-220	谷-1出土埴輪④	191
⊠-199	谷-1東半出土遺物①	·65	図-221	谷-2出土埴輪①	192
⊠-200	谷-1東半出土遺物⑫	166	⊠-222	谷-2出土埴輪②	193
図-201	谷-1東半出土遺物⑬	167	図-223	屋瓦①	195
⊠-202	谷-1西半出土遺物①	168	図-224	屋瓦②	196
⊠-203	谷-1西半出土遺物②	169	図 <b>-22</b> 5	屋瓦③	197
⊠-204	谷-2東半出土遺物①	170	⊠-226	木製品①	201
図-205	谷-2東半出土遺物②	172	⊠-227	木製品②	202
図-206	谷-2西半出土遺物①	173	⊠-228	木製品③	203
⊠-207	谷-2西半出土遺物②	174	⊠-229	木製品④	204
図−208	包含層出土遺物	175	⊠-230	木製品⑤	205
図-209	平安時代の遺物	176	$\boxtimes -231$	鞴羽口	206
図-210	鎌倉時代の遺物	177	⊠-232	その他の土器・土製品	208
図-211	古墳出土遺物①	179	<b>⊠</b> −233	石製品•金属製品	208
図-212	古墳出土遺物②	180	⊠-234	銅銭	208
図-213	埴輪群出土遺物①	181	図-235	遺構内出土遺物の比率	215
図-214	埴輪群出土遺物②	182	図-236	遺構内出土土器の器種構成	216

付図 調査地全体図

表	Ħ	次
1X		1/\

表-1	木製品観察表200 • 20
表-2	建物規模一覧表211~21

# 第1章 調査経過

かねてより計画のあった国民年金健康保養センターの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関して、事業主体である柏原市土地開発公社と柏原市教育委員会との間で、具体的な協議がもたれたのは昭和62年6月であった。その後、市企画財務部、市建設部土木課等を交え、協議を進めた結果、7月に至って調査方法等の合意に達した。その内容は、切土予定地全面を発掘調査し、盛土部分は必要に応じて調査をする。昭和62年度内に本館工事に着手する必要があり、その他の工事計画等から、調査対象地を四分割し、四期に分けて調査を実施し、調査終了地から工事に着手することを認めるというものであった。発掘調査が工事に追われるような事態となるため、教育委員会としては不本意であったが、補助金等の関係から、このような調査方法に従わざるを得なかった。

調査期間が十分に確保できなかったため、協議の合意後、直ちに7月21日より調査対象地内 に残っている葡萄棚の撤去に着手し、8月7日より人力による試掘調査を開始した。試掘によっ て、遺構が広範囲に広がっていること、調査地北寄りに東西方向の大きな開析谷(谷-1)が 存在すること等を確認した。その後、工事が村本建設株式会社によって施工されることに決定 し、9月10日より重機を導入し、全面調査を開始した。一方、1期調査の予定地内には未買収 地が残っており、その部分を避けて調査を実施することになった。1期は10月30日に航空測量 を実施したが、その頃になって、ようやく買収が完了した。その後、大阪府教育委員会文化財 保護課から買収の遅れた未調査地についても調査をするようにとの指導を受け、11月の工事着 手予定を昭和63年1月に遅らせることによって、1期の未調査地を含めた2期調査を12月28日 に終了した。それでも、開析谷が非常に深かったため、谷を完掘することはできなかった。ま た、調査地西端からまとまった建物群(建物-29~34)が検出され、これらの遺構の保存を申 し入れた。しかし、この遺構上を保養センター中央の進入道路が通過することになっており、 計画では大半が削平されることになっていた。その後、府文化財保護課・市土木課の協力を得、 再三にわたって計画変更を検討し、昭和63年6月に至って、道路の線形を変更することによっ て、これらの遺構を保存するとの回答を得た。その間も調査は続けられ、4回の航空測量を実 施したうえで、昭和63年6月23日に調査を終了した。調査総面積は約17,000㎡、出土遺物はコ ンテナ800箱、検出された遺構が2,600以上という成果があった。

このようにして調査は終了したが、調査期間が十分に確保できなかったことは、やはり残念であった。調査には最善の努力を払い、決して粗雑な調査ではなかったと信じているが、公共事業という性格上、調査期間を十分に確保して調査を実施すべきであったと思う。今後は、十分な期間・費用を確保できるような体制を整えていく必要があると考えている。

## 第2章 遺跡の概略

調査地は、生駒山地の南西端に位置し、西、もしくは南向きの斜面となる。標高は40~70mを測り、調査対象面積は約21,000㎡である。眼下には大和川が流れ、玉手山丘陵・石川・古市 古墳群などがパノラマのように眺められる。古代においても、交通上の要地であったことは確 実であろう。

調査前の状況は、大半がひな段状の葡萄畑となっており、南寄りの部分が荒地となっていた。 また、調査地の南東側は土地区画整理事業地に接し、既に宅地造成は終えられ、周辺の景観は 数年前に比べると一変している。

調査地中央には東西方向に水路がのび、現在は水路より北側が安堂町、南側が高井田となっている。しかし、この水路は近世以降のものであり、また水路の南北での地形変化も認められない。水路の北側約50mと南側約80mにかなり大きな開析谷が認められる。前者を6-1、後者を6-2として本文中で報告するが、断面は02火を呈し、現在でもわずかながら湧水が認められる。谷02は03年度の鳥坂寺寺域内の調査の際に埋没04年されている谷につながる。この谷は鳥坂寺主要伽藍と僧房間を南北に分断するものである。谷04・02は、05世紀頃には既にその大半が埋没していたようである。

今回の調査地、および区画整理事業関連の調査地から、有茎尖頭器や縄文・弥生時代の石鏃が出土しているが、生活の痕跡は認められない。少量の弥生土器片も出土しているが、他所から運びこまれた土砂に含まれていたと考えるべきであろう。

調査地周辺で確実な遺構が確認されるのは、古墳が築かれるようになってからである。調査地東方の尾根上に古墳時代前期と推定される前方後方墳があり、その周辺には時期不明であるが、前方後円墳や円墳が点在する。円墳はおそらく後期のものと考えられるが、埋葬施設はほとんど確認されていない。調査地の西方には、前方後円墳の戸坂古墳をはじめ、数基の古墳が存在するようであるが、時期は確定できない。しかし、古墳時代前期末頃の埴輪が出土していることから、前期古墳が存在することは疑いないであろう。また、区画整理事業に伴う調査によって、横穴式石室を埋葬施設とする古墳3基を調査している。そのうちの1基、安堂6支群3号墳は、切石による岩屋山式の横穴式石室であった。

今回の調査では、古墳の周溝と考えられる遺構内から円筒埴輪が樹立した状態で検出されており、直径約14mの円墳と復元できた。おそらく、埋葬施設は木棺直葬であったと推定される。また、建物-7の南側でも大量の埴輪群が検出されており、その付近に古墳があったと推定される。いずれも、7世紀代の掘立柱建物を建てる際に、墳丘が完全に削平されている。調査地、およびその周辺からは、これら以外にも多数の埴輪が出土しており、かなりの古墳が存在した

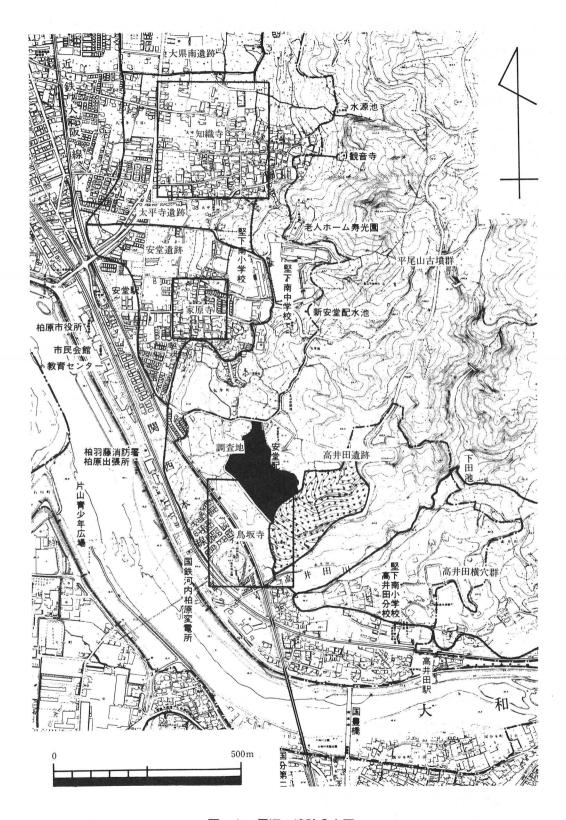


図-1 周辺の遺跡分布図

ものと思える。円筒埴輪は外面ヨコハケ調整のものもみられるが、大半はタテハケによる1次 調整のみのものであり、ヨコハケを有するものも直径が20cm前後の小さいものであることから、 5世紀後葉から6世紀前葉頃の古墳に伴うと考えられる。いずれも木棺直葬を主体とし、掘立 柱建物を建てる際や後世の開墾によって削平されたものと考えられる。

谷川を挟んで南東方向には高井田横穴群が存在する。横穴が築かれた時期は、6世紀中葉から7世紀前葉頃と推定される。今後、史跡公園として整備する予定である。

6世紀末葉頃からは、集落が営み始められたと考えられ、7世紀代には数十棟の掘立柱建物が存在したようである。建物は8世紀代になると急激に減小し、その後、空白期間をおいて、平安時代と鎌倉時代に数棟の建物が存在したようである。

調査地の南側には、7世紀前葉~中葉に創建された鳥坂寺(高井田廃寺)が位置する。高井田遺跡の集落は、この鳥坂寺を囲むようにその東、および北側の斜面に広がっている。鳥坂寺は鳥取氏の氏寺と考えられ、当然、この集落は鳥取氏の居住地と考えられる。集落と寺院の関係が把握でき、しかもその氏族まで推定できる貴重な遺跡と言えよう。また、集落の規模としても東西・南北とも300m以上の大規模なものであり、しかも、山地斜面を造成して営まれている点は注目される。現在、葡萄畑として好適なひな段状の地形は、実は7世紀代に集落を営む際に造られたものであることが確認された。逆に、ひな段状の地形を呈する葡萄畑には、7~8世紀の集落が存在すると考えて、ほぼ間違いなさそうである。

今回の調査地内南西部で、鳥坂寺の寺域を画する施設、例えば回廊や棚などが検出されるのではないかと考えていたが、谷-2が深く、これらの施設は存在しなかった。しかし、谷-2 西端の北側には、建物の存在しない平坦地がみられる。あるいは、この平坦地は寺域の一部として意識されていたものかもしれない。

#### 註

- (1) 柏原市教育委員会『鳥坂寺-寺域の調査-』1986
- (2) 北野耕平「古墳時代の富田林」『富田林市史・第一巻』1985
- (3) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975 大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』 1980
- (4)柏原市教育委員会『鳥坂寺-寺域の調査-』1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡 I 』1986
- (5)柏原市教育委員会『鳥坂寺-寺域の調査-』1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡 I 』1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡 II』1987
- (6) 大阪府教育委員会『河内高井田·鳥坂寺跡』1968

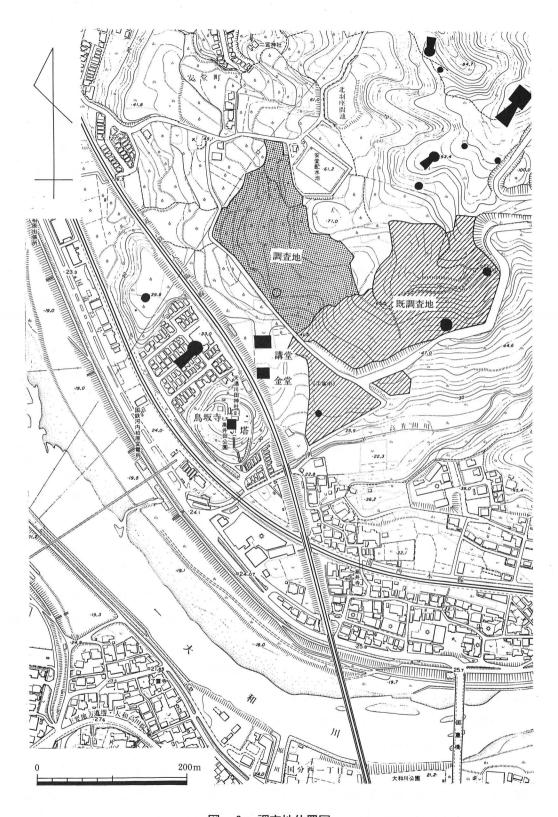


図-2 調査地位置図

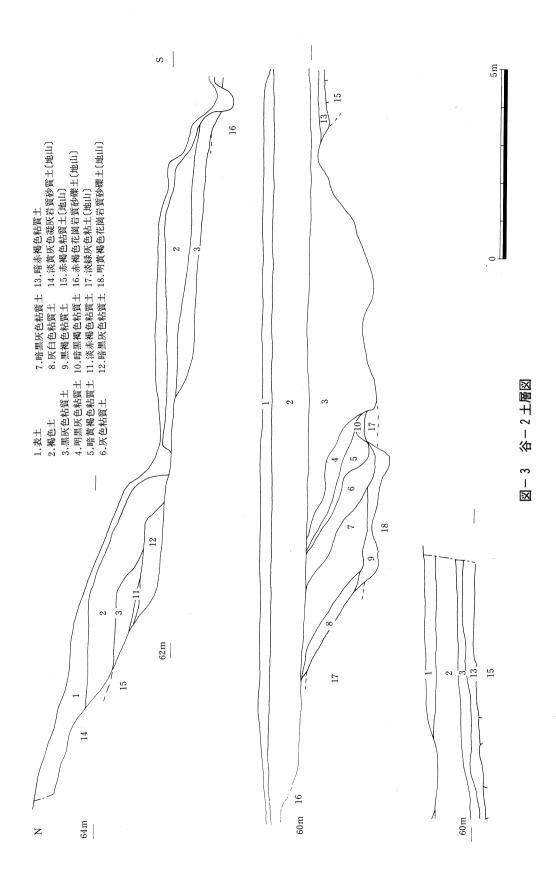
## 第3章 調査成果

#### 1. 層序

調査範囲は東西約200m、南北約250mを測り、調査面積は約17,000㎡である。調査地は斜面に位置するため、遺物包含層の堆積は少なく、調査地中央から西寄りの標高の低い部分で10~20cmの黒褐色粘質土を主とする遺物包含層が認められるのみであり、大部分は耕作土・盛土等を除去すると直接地山に達する。しかし、調査地北寄りの部分で谷-1、南寄りの部分で谷-2を検出しており、谷内からは大量の遺物が出土している。

谷-1は黒灰色~青灰色の粘土、あるいはシルトが堆積している。横断面・縦断面の土層図を作成する予定であったが、埋土が軟弱であり、壁面の崩壊が激しく不可能であった。断面の観察からは細かく分層できるようであるが、各層とも基本的には西下がりの傾斜がみられる。また、出土遺物から考えると、谷-1東半の遺物は7世紀代の遺物を中心とし、西半の遺物は8世紀代の遺物が多くみられる。東半では埋土の各土層に顕著な時期差は認められないようであるが、西半では上層が8世紀代、下層が7世紀代となるようである。しかし、前述したように、土層の確認が十分できなかったことと、土層の違いを平面的に把えることが困難であったため、層位的な発掘はできなかった。

谷-2は調査地東端の壁面で土層を確認した。表土・褐色土を除去すると遺物包含層に至る。 谷-2 北半の土層は全て南下がりとなっており、灰白色~黒褐色の粘質土(4~9層)が、薄 く何層にも堆積している。しかし、中央から南側にかけては、黒灰色粘質土(3層)の単一層 であり、この黒灰色粘質土は谷-2の北側の地山上、および南側の暗赤褐色粘質土(13層)の 上面にも薄く堆積している。ところが、黒灰色粘質土層と他の土層との境で、地山が土堤状に 盛り上がっている部分がみられる。自然流水によって地山がえぐられたとは考え難い状況であ り、黒灰色粘質土層堆積前に、谷-2は人工的に南側へ拡張されたと考えることができる。そ のために、地山が土堤状に残ったと考えられる。南側へ拡張することによって、建物-92-93 -95の北半が削平されたのであろう。本来の谷-2の底は、黒褐色粘質土(9層)であったと 判断できる。また、土堤状の地山の上に、更に暗黒褐色粘質土(10層)が土堤状に積み上げら れていることから、谷-2が人工的に南側へ拡張される以前にも、人工の手が加わっていたよ うである。しかし、このような谷-2の人工的な改変が認められるのも、西側へ約15mまでで あり、それ以西は自然地形と考えられる。また、東端では底面が比較的緩やかであるが、西方 ではV字状の断面形を呈する。谷-2でも、谷-1と同様に、平面で土層を確認することは困 難であり、やはり層位的な発掘はできなかった。谷の規模が大きいことと、斜面に位置するこ とから、層位的発掘は困難である。山地斜面での調査の限界の一面である。



**-7-**

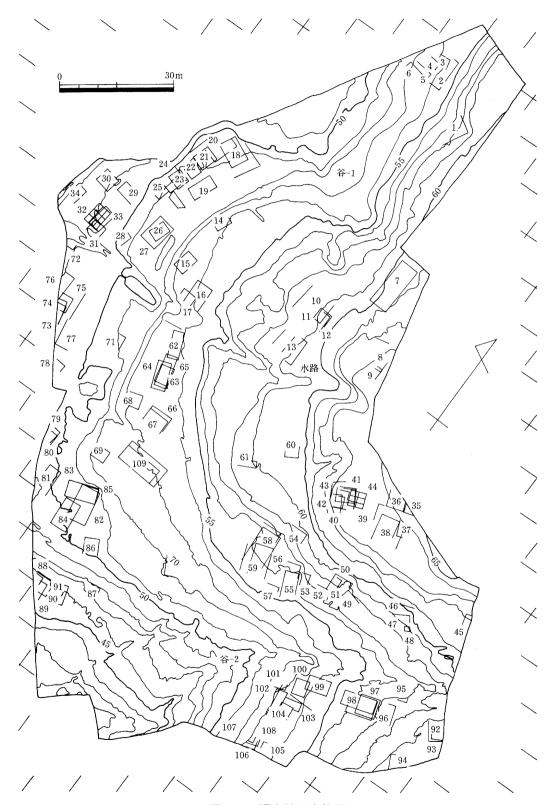


図-4 調査地区全体図

#### 2. 遺構

遺構は大半が地山面から検出されているが、一部は地山直上の薄い整地層上面で検出されている。検出された遺構を列挙すると、掘立柱柱穴2455、井戸2、土坑42、溝156、落ち込み3、古墳1である。掘立柱柱穴から復元される建物は109棟、棚が20列である。そのうち1棟(建物-109)は平安時代の建物であるが、他は全て飛鳥・奈良時代の建物である。柱穴は鎌倉時代と考えられるものも多数存在するが、建物を復元するには至らなかった。また、建物・棚を構成する柱穴は全部で838個であり、柱穴総数の約3分の1にすぎない。また、削平された柱穴も多数存在したと考えられ、建物の実数は確認した棟数の3~5倍に達するのではないかと推定される。

土坑・溝は、時期や性格の不明なものが多く、近世に下ると考えられるものもある。ここでは、時期の判明する遺物を出土した遺構、もしくは性格の推定できる遺構についてのみ取り上げ、他の遺構については省略することにする。

遺構については付図で全体を取り上げ、縮尺200分の1の遺構平面図を11枚に分けて本文中に入れているので、それぞれを参照願いたい。以下、飛鳥・奈良時代の遺構、平安時代の遺構、鎌倉時代の遺構、古墳の順に記述していく。なお、掘立柱柱穴はピットと表記し、図中では略号Pを使用している。

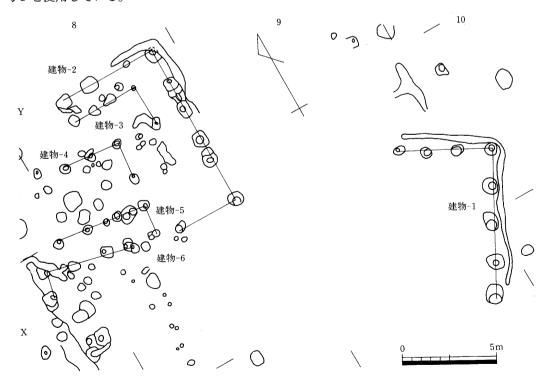


図-5 遺構平面図①

#### 飛鳥・奈良時代の遺構

#### A. 建物·栅

#### 建物-1

建物 -1 は調査地北東端近くの斜面で検出された。北辺と東辺のピットは良好に遺存しているが、南辺と西辺は残っていない。梁行 3 間以上で516cm以上。桁行 4 間以上で784cm以上。地形から考えると、おそらく 3 間× 4 間の建物であったと考えられる。柱穴の掘方は円形平面を呈するものが多く、直径は $60\sim90$ cmである。深さは最も残りの良いピット -1 で100cmに達する。各ピットともに、上面に比して底面が小さいのが特徴である。柱間寸法は172cmと196cm、柱の直径は20cm前後と考えられる。時期を確認できる遺物は出土していない。

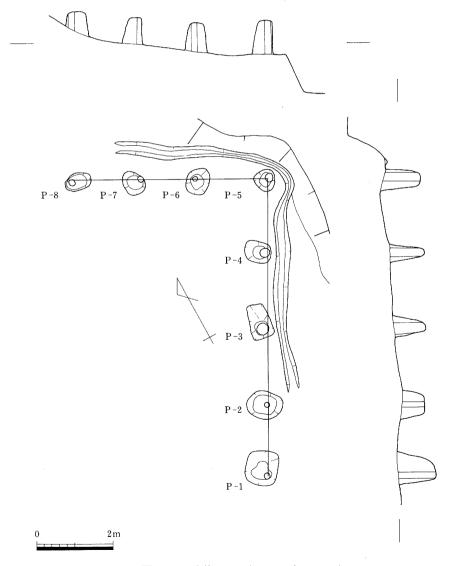


図-6 建物-1 (レベル高58.0m)

建物 $-2\sim6$  は調査地 北西端に集中している。

建物-2は梁行3間以上で540cm以上。桁行は5間以上で932cm以上の規模となる。桁方向は、本来3間であった部分を5間に建て替えられている。建て替えられたピット-2と3の間が狭く、ピット-1と2の間が広くなり。不規則な柱位置をとっている。

ピットの平面形はほぼ 方形を呈し、1辺80cm前 後、深さは60cm前後を残 す。柱の直径は30cm前後 と推定され、ピットー1 の柱は抜き取られている。

時期の確認できる遺物 は出土していない。

#### 建物-3

1間以上×2間以上の建物であり、遺存状態は非常に悪い。規模は212cm以上×352cm以上である。ピット-2と3の間には、もう1つのピットが存在したと思われる。

ピットは不整円形平面を呈し、直径は30~50cm、深さは20cmを残すにすぎない。 柱の直径は10cm前後であろう。ピットー 1から7世紀中葉頃の須恵器杯蓋が出土 している。

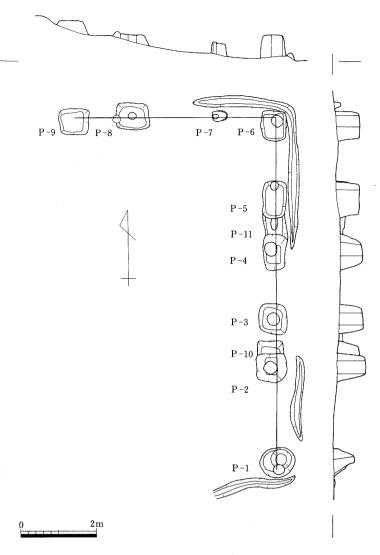


図-7 建物-2 (レベル高55.0m)

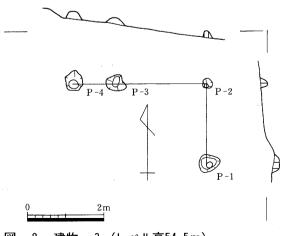


図-8 建物-3 (レベル高54.5m)

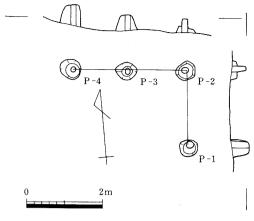


図-9 建物-4 (レベル高53.5m)

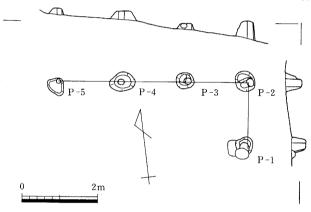


図-10 建物-5 (レベル高53.5m)

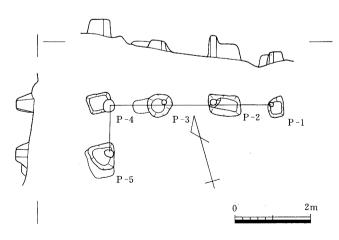


図-11 建物-6 (レベル高53.0m)

1間以上×2間以上の建物である。規模は、 196cm以上×296cm以上。ピットは、いずれも円 形平面を呈し、直径50cm前後、深さは40~60cm を残す。柱の直径は15cm前後と復元できる。

建物-2・3より、地山面が一段低くなっており、その段は建物-4を取り囲むようにめぐっている。おそらく、建物-4を建てる際に、若干、地山を掘り下げて整地したものと考えられる。

時期を確認できる遺物は出土していない。

#### 建物-5

**建物**-5は、**建物**-4の南側に位置し、軸をほぼ同じくする。

1間以上×3間以上、規模は172 cm以上×500cm以上となる。ピット は直径50cm前後の円形平面を呈し、 柱の直径は15cm前後である。

ピットー3から7世紀中葉頃の須 恵器杯蓋が出土している。

#### 建物ー6

1間以上×3間以上、124cm以上 ×422cm以上の建物である。ピット は不整方形平面を呈し、一辺は50cm 前後である。柱の直径は15~20cm、 ピットー4の柱は抜き取られている。

ピットー5から7世紀中葉の須恵 器杯蓋が出土している。

出土遺物から推定すると、建物一 $3\sim6$ の間に、ほとんど時期差は認められないようであるが、位置関係から同時存在は考え難い。方位等からは、建物-2から6の順と思える。

建物-1~6は谷-1の北 側に位置し、建物-7~91と 109は谷-1と2の間に位置 し、建物-92~108は谷-2 の南側に位置する。これらの 中で、便宜上、調査地中央の 水路によって、建物-7~91 を更に二分して記述を進めて いく。すなわち、建物-7~ 34が水路の北側に、建物-35 ~91と109が水路の南側に位 置する。但し、この水路は後 世の掘削によるものであり、 建物の時期に伴うものではな いことは、前述のとおりであ る。

#### 建物-7

建物 $-7\sim9$ 、および棚-1は谷-1と水路間の最高所に位置し、標高は $60\sim64$ mを測る。

建物-7は調査地内で最大 規模の建物であり、柱穴掘方 も最大である。梁行は3間、 桁行は5間。規模は梁行532 cm、桁行1372cmとなる。柱間 寸法は梁行が177cm、桁行は

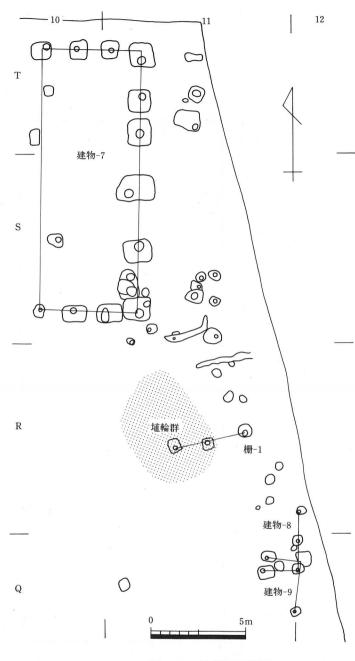


図-12 遺構平面図②

若干の差が認められ、ピットー $4\sim6$ の間は320cm、ピットー $6\sim9$ の間は約240cmとなる。柱間寸法から考えると、ピットー $6\sim9$ の間は本来は2間の予定であったものを、3間にしたものと考えられるが、如何なる理由によるものかは不明である。

掘方が最大のピット-6は、長辺210cm、短辺142cmのやや乱れた長方形平面を呈する。また、最も深いピットは、140cmの深さを残すピット-4であり、他のピットも、かなりの深さを有している。

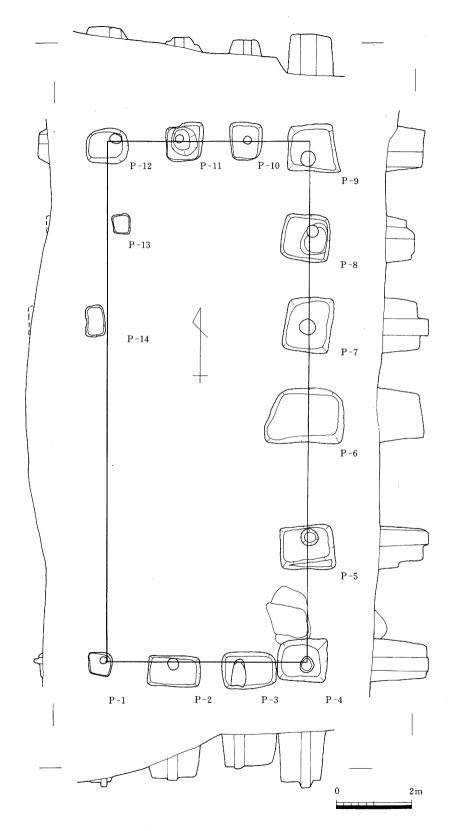


図-13 建物-7 (レベル高60.0m)

建物-7の西半は、後世に削平されているため、ピットの遺存状態が悪く、西辺のピットはほとんど残っていない。また、東辺のピットに比して、西側のピットほど規模がやや小さくなるようである。東辺の柱の直径は35~40cmと推定されるが、他の柱の直径は20~25cmと推定される。一般の建物と構造が異なっていたのであろうか。

それ以外にも、北半のピットがほぼ方形平面であるのに対して、南半のピットが長方形平面であるという特徴がある。ピット-3と4は、掘方の規模が大きく、長方形平面であるため、上面で接してしまっている。これらはピットを掘削した人間が複数であることによると思われる。また、ピット-3の柱は南へ抜き取られているが、他のピットでは柱の抜き取りはなかったようである。

ピット-5から、須恵器杯蓋(図170-3)が出土している。これ以外にも、ピット-1と4の掘方、ピット-3の柱抜き取り穴から短い立ち上がりを有する須恵器杯身が出土している。これらの中には6世紀末葉頃と思われるものが多いが、ピット-5から出土した杯蓋とピット-3の柱抜き取り穴から出土した杯身は7世紀前葉まで下ると思われる。ピット-5の須恵器杯蓋は掘方掘削時に出土したものであるが、これを柱位置出土遺物の誤認と考えると、建物-7は7世紀初頭頃に建てられ、7世紀前葉頃に廃棄されたと考えられる。

#### 建物-8

建物-8は1間以上 $\times$ 2間以上の建物であり、北側と西側は削平のために残っていない。規模は168cm以上 $\times$ 320cm以上となる。ピット-1の掘方が最も大きく、80cm $\times$ 62cmである。また、ピット-1は二段の掘方となる。柱の直径は15cm前後と考えられる。

ピット-3から須恵器杯身(図170-18)が出土しており、建物-8の時期は7世紀前葉頃と思われる。

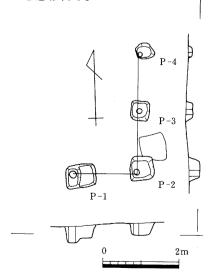


図-14 建物-8 (レベル高63.5m)

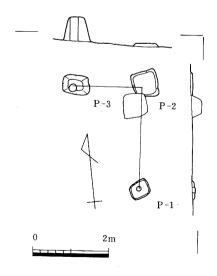


図-15 建物-9 (レベル高63.5m)

建物-9は1間以上×1間以上の建物であり、180cm以上×268cm以上の規模である。ピットの残存状態が非常に悪く、西辺・南辺は不明である。時期を確認できる遺物は出土していないが、ピット-2が建物-8のピット-2に切られており、建物-8に

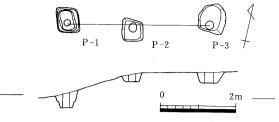


図-16 棚-1 (レベル高62.0m)

先行することが確認できる。建物-8と9はほぼ同時期と推定され、建物-8は建物-9の建て替えによるものと考えられる。

#### 栅-1

棚−1は、3個のピットからなり、長さは372cmである。各ピットは方形平面を呈し、60cm 前後の規模である。柱の直径は15~20cmと推定される。これを棚と考えたが、軸を等しくする 建物がみられないことと、北側がかなり削平されていることから、北側へのびる建物が削平された結果残ったものと考えることもできる。

ピット内からは遺物は出土していないが、ピット $-1 \cdot 2$  は埴輪群の下層で検出されており、 埴輪の大量放棄以前に建物が廃棄されていたことが確認できる。埴輪群からは、7世紀前葉頃 の須恵器蓋杯(図213)が出土しており、-1は、それ以前に廃絶していたと考えられる。

建物-7~9と栅-1は、調査地内では最も古い時期の建物群の一つと考えられる。

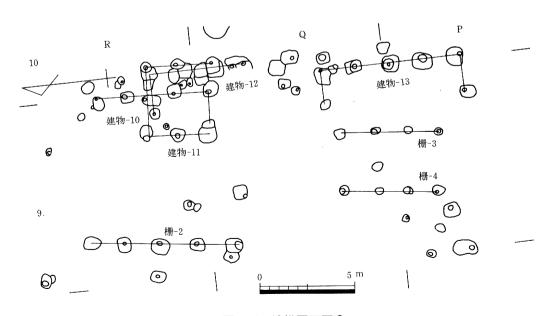


図-17 遺構平面図③

建物 $-7\sim9$ の西側下段に建物 $-10\sim13$ 、棚 $-2\sim4$ が位置する。

建物-10は、1間以上×3間以上の建物となり、168cm以上×600cm以上の規模を有する。ピットー4は、やや北寄りに位置する。各ピットは方形平面を呈し、一辺50~80cmの大きさである。深さは50cm前後を残すが、北辺・西辺のピットは削平されている。柱の直径は12cm前後である。

ピット-3から須恵器杯蓋の小片(図170-4)が出土しており、他にも同様な破片がみられることから、建物-10の時期は7世紀初頭を前後する時期が考えられる。

#### 建物-11

梁行2間、桁行2間以上、380cm×340cm以上の規模の建物である。南側がどこまでのびるかは不明である。ピットは一辺40~80cmの方形平面を基本とし、ピットー $1 \cdot 5 \cdot 7$ は柱を据える部分のみ更に掘り込まれた二段掘方となる。また、ピッ

柱の位置が掘方の一方に片寄った例がある。柱の直径は、いずれも15cm前後である。

トー4・5にみられるように、

ピットからは、時期を確認できる遺物は出土していない。しかし、建物-10のピット-1と建物-11のピット-7、また、建物-10のピット-2と建物-11のピット-1の切り合い関係から、建物-10が建物-11に先行することが確認できる。

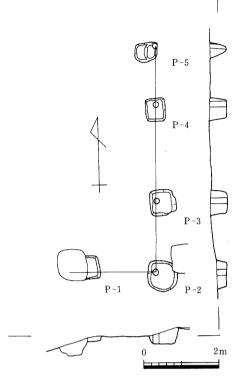


図-18 建物-10 (レベル高59.0m)

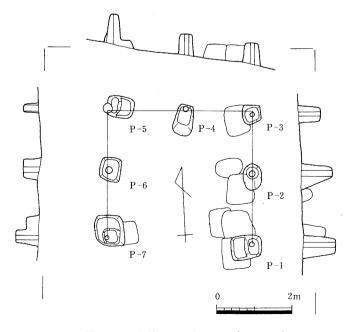


図-19 建物-11 (レベル高59.0m)

建物-13

1間以上×3間以上の建物で、西辺・南辺は不明である。規模は214cm以上×496cm以上。各ピットは1辺60~80cmの方形平面を呈し、深さは50cm前後を残す。

ピットー3から土師器の小形高杯の脚部(図171ー44)が出土しており、ピットー2から内面にかえりを有する須恵器杯蓋が出土しており、7世紀中葉頃と思われる。また、ピットー2~4が建物ー11のピットー1~3と切り合っており、建物ー12が建物ー11に先行する。更に、ピットー2と建物ー10のピットー2が間接的に切り合っており、建物ー10が建物ー12に先行すると考えられる。以上から、建物ー10、建物ー12、建物ー11と順に建てられたと考えられる。

# 1間以上×4間の建物であり、東辺のピット $-3\sim5$ は、ピット $-8\sim10$ の建てなおしと考えられる。規模は188cm以上×728cm、東辺の柱間寸法は182cm等間隔である。各ピットは方形平面を呈し、一辺60 $\sim100$ cmとかなり大きいが、建てなおされたピット $-3\sim5$ は、一辺40cm前後とかなり小さくなっている。

ピット-5の柱穴内より須恵器杯蓋(図170-1)が出土しているが、掘方内よりかえりを有する杯蓋、それに伴う杯身が出土しており、建物-13の時期は7世紀中葉頃と考えられる。

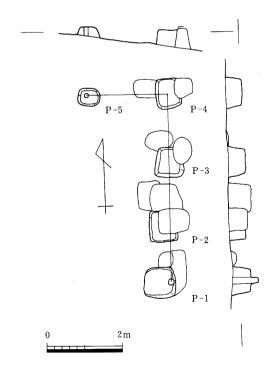


図-20 建物-12 (レベル高59.0m)

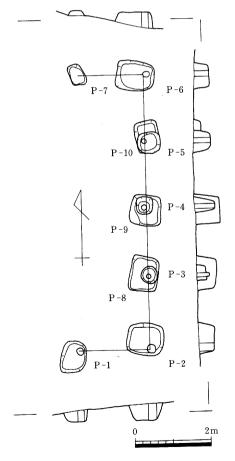


図-21 建物-13 (レベル高59.0m)

#### 栅-2

5つのピットから成り、784cmの長さである。柱間寸法196cm前後となる。各ピットは一辺80 cm前後の方形平面を呈する。柱の直径は10~15cm。ピットの遺存状態が悪いため、東側へ広がる建物の西辺のみ残ったものと考えることもできる。

ピットー4から器種不明の須恵質の土器(図172-6・7)が出土している。両者は同一個体と考えられ、羽釜と推定されるが、全形が不明である。当然ながら、その時期も不明であり、棚-2の年代は決定できない。

#### 栅 - 3

4つのピットから成り、長さは520cmである。柱間寸法は173cm前後、各ピットは直径40cm前後の不整円形平面である。ピットー3・4は二段の掘方であるが、いずれも遺存状態は悪い。 柱の直径は15~20cmと推定される。

ピット内からは時期を確定できるような遺物は出土していない。

#### 栅 - 4

長さは約500cmを測り、4つの ピットから成る。柱間寸法は167 cm前後、各ピットは直径50cm前 後の円形平面を呈する。柱の直径 は20cm前後と推定される。

ピット-4から須恵器の甕(図 172-5)が出土しているが、時 期を確定できるものではない。

棚-3・4はほぼ平行し、中間に1個のピットを介して建物になる可能性も考えられる。しかし、柱間寸法や方位に若干の差が認められるため、ここでは2列の棚と考えた。

 $m-2\sim4$  は時期の決定ができず、方位や配置からも、どの建物に伴う施設であるのかを決定できなかった。

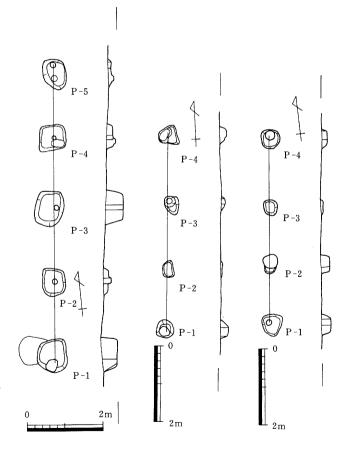


図-22 棚-2 図-23 棚-3 図-24 棚-4 (レベル高58.0m) (レベル高58.5m) (レベル高58.5m)

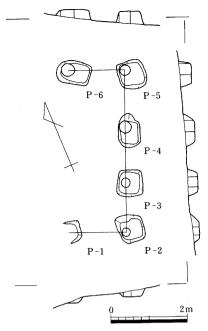


図-25 建物-14 (レベル高55.0m)

建物 $-14\sim17$ は同一平坦面に営まれ、更に南側の建物 $-62\sim68$ と一群をなす建物群である。

建物-14は1間以上×3間の建物である。西側は後世の削平によって残っていない。規模は148cm以上×430cmとなり東辺の柱間寸法は143cm等間隔となる。各ピットは1辺70cm前後の方形平面を呈し、深さは20cm程度を残すにすぎない。柱の直径は30cm弱と推定される。

ピットからは時期の判定ができる遺物は出土していない。

#### 建物-15

梁行2間、348cm、桁行3間、544cmを測る建物である。柱間寸法は、それぞれ174cm、181cmとなる。ピットの平面形は円形、方形がみられ、一定しない。その

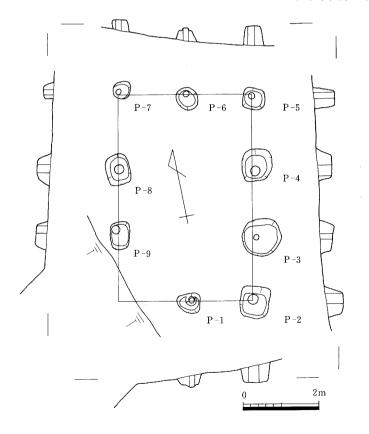


図-26 建物-15 (レベル高53.0m)

規模も40~100cmと、かなり差が認められる。柱の直径は20cm 弱であろう。南西のピットが後世の削平によって消失している。

図化可能な遺物は出土していないが、ピットー2の掘方より6世紀末葉頃の須恵器杯身片が出土しており、同じくピットー2の柱穴内より7世紀中葉頃の須恵器杯蓋片が出土している。1点ずつの出土であるが、この遺物を信用するならば、建物ー15は6世紀末葉頃に建てられ、7世紀中葉頃に放棄されたと考えられる。しかし、他に時期を決定できる資料が存在しないため、断定することは控えたいと思う。

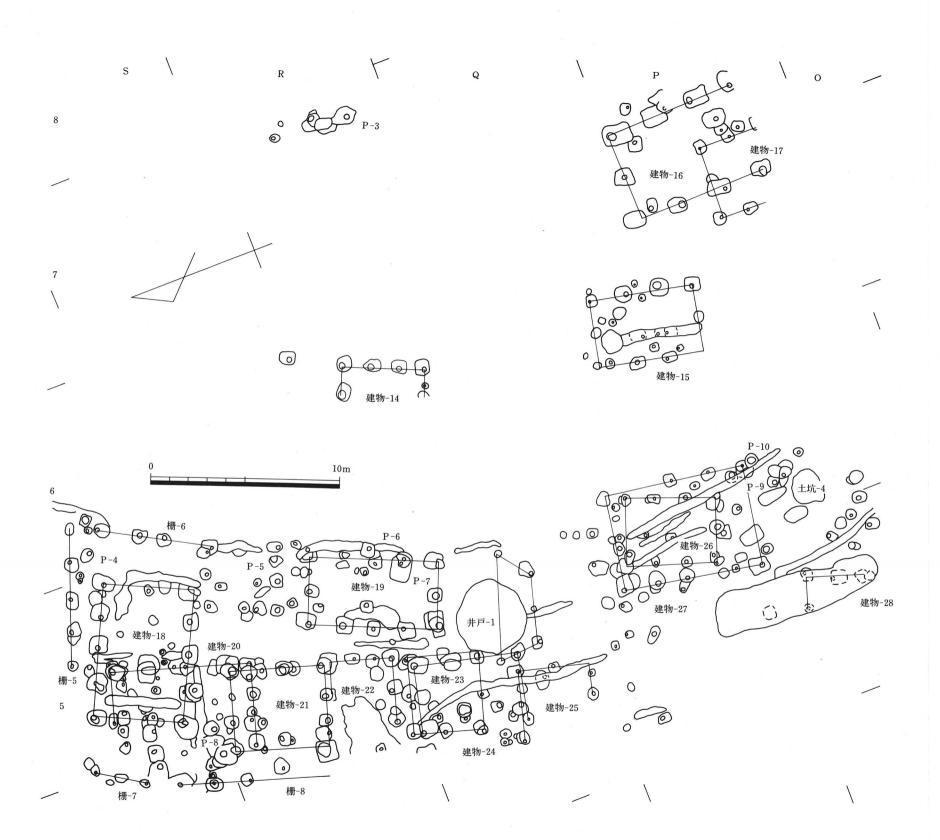


図-27 遺構平面図④

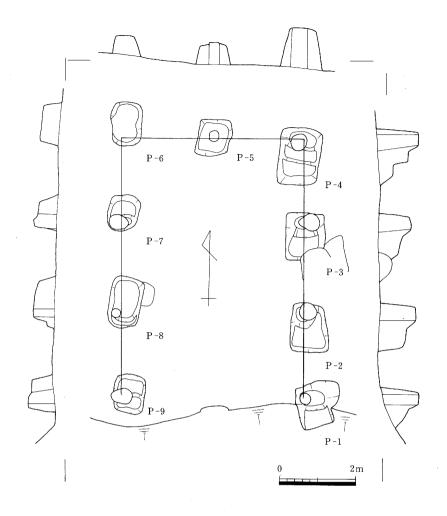


図-28 建物-16 (レベル高54.0m)

梁行2間、桁行3間以上の建物であるが、ピット-1と9の間に、ピット-5に対応するピットがみられないことから、更に南側へ続いていたと考えられる。南側は水路によって削平されており、水路の南側では建物-16に伴うと考えられるピットが検出されていないことから、桁行は4間、もしくは5間と推定される。規模は480cm×688cm以上である。

ピットの規模は大きく、80~150cmを一辺とする方形平面を呈する。ピットの底面は、ほとんどが柱位置のみ一段深く掘り込まれている。柱の直径は25cm前後と推定され、ピットー2~4・7・9で柱を抜き取った痕跡が確認できた。ピットー4を除いて、柱はいずれも建物の外側へ向けて抜かれている。

ピットが大きいにもかかわらず。ピット内からの遺物出土量は少なく、時期を決定することはできない。しかし、ピット-8が建物-17のピット-4を切っており、建物-17に後出することは確かである。なお、ピット-4から鉄鏃(図233-7)が出土している。

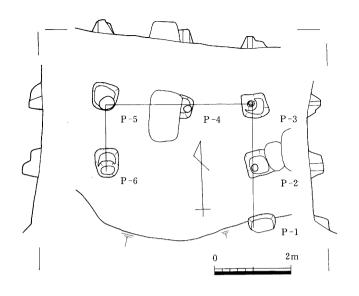


図-29 建物-17 (レベル高53.5m)

梁行 2 間、桁行 2 間以上の建物 である。規模は $388cm \times 320cm$ 以上。 ピットは一辺70cm前後の方形平面 を呈し、ピット-3 と 6 は二段掘 方となる。柱の直径は15cm前後、 ピット-5 のみ、柱の抜き取りが 確認できた。

ピット-1から、つまみや内面 のかえりのみられない須恵器杯蓋 片が出土しているが、他に時期を 決定できる資料はみられない。

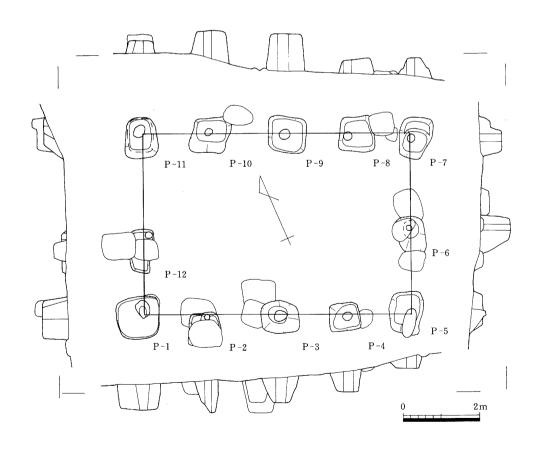


図-30 建物-18 (レベル高50.5m)

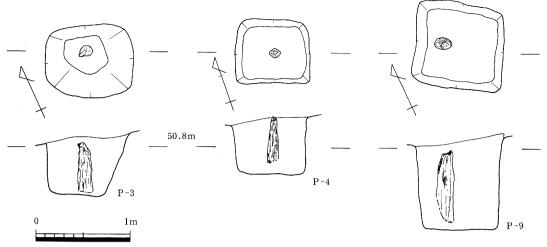


図-31 建物-18・ピット-3・4・9

建物 $-18\sim28$ と棚 $-5\sim8$ は、同一平坦面にあり、建物 $-14\sim17$ の位置する平坦面のすぐ西側にあたる。比高差は $1\sim2$  mである。また、この面で井戸-1、土坑-4を確認している。

建物-18は、梁行2間、桁行4間の建物である。梁行は480cmを測り、柱間寸法は平均240cmとなるが、ピットー12の位置が若干ずれる。桁行は176cm等間隔の704cmを測る。各ピットの平面形は一辺70~110cmの方形である。柱の直径は15~20cmと推定され、ピットー1・5・10・11の柱は抜き取られている。その一方で、ピットー3・4・9では柱は抜き取られずに遺存していた。

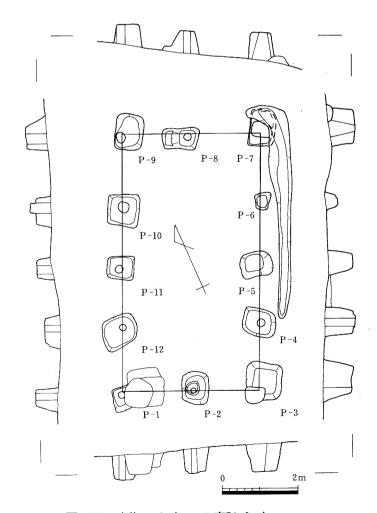


図-32 建物-19 (レベル高51.0m)

ピット-3では直径15cm、長さ54cmの柱が、ピット-4では直径12cm、長さ56cmの柱が、ピット-9では直径19cm、長さ80cmの柱がそれぞれ残っていた。いずれも、表面は腐朽しているものの、遺存状態は良好であり、上部へ向かうにつれて細くなっている。

ピット-3から、非常に短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が1点出土している。また、建物-19と軸がほぼ等しくなる。

## 建物-19

梁行2間、桁行4間の建物である。梁行は、柱間寸法が180cm間隔の360cm、桁行は、柱間寸法が170cm前後の476cmを測る。ピットー6のみが、かなり小さいが、他のピットは50~100cmの長さを一辺とする方形、もしくは長方形の平面形を呈する。深さは60~80cmを残し、比較的遺存状態は良好である。柱の直径は20cm前後となり、ピットー3・7の柱は抜き取られている。

また、ピットー4~7を取り巻くように溝がめぐっており、建物-19に伴う溝と考えられる。

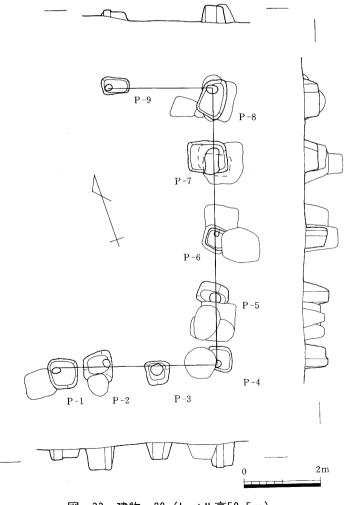


図-33 建物-20 (レベル高50.5m)

構はピットー7に接する部分で最大・最深となり、幅は60cm、深さは20cmを測る。 構底面は、北へ向かうにつれて深くなる。本来は南、西へ更に延びていたと考えられ、東側斜面からの天水を建物の北側に沿って、西側へ排水していたものと考えられる。

ピット-4から、土師器 高杯の脚部が出土している。 杯部内面に暗文を施し、脚 部上半を10面、下半を11面 に面取りしたものである。 (図171-40)

それ以外にも、ピットー 3から6世紀末葉頃の須恵 器杯身が出土しているが、 土師器の高杯からは、それ ほど時期が遡るとは考えら れない。

3間以上×4間、420cm以上×728cmの規模の建物である。柱間寸法は、それぞれ140cm、182cmの等間隔となる。西辺のピットは確認できず、ピット-8と9の間のピットも検出できなかった。後世の削平によって消失したものと思われる。ピットは一辺40~100 cmの方形平面を呈し、大きさにやや差が認められる。柱の直径は20cm前後と推定され、ピット-7の柱は抜き取られている。

時期を確認できる遺物は出土していないが、ピットー6が建物ー18のピットー3と切り合っており、建物ー20が建物ー18に先行する。また、ピットー5と建物ー21のピットー7が切り合っており、建物ー20が建物ー21に先行することが確認できる。

#### 建物-21

梁行 3 間、桁行 3 間の建物である。梁行 136cm等間隔の408cm、桁行は160cm等間隔の480cmを測る。ピット-1 と11の間にあるべきピットを欠失する。4 本の隅柱のピットは掘方、深さともに他のピットより大きいようである。柱の直径は20cm前後、ピット-1 と2 の柱が西側へ抜き取られている。

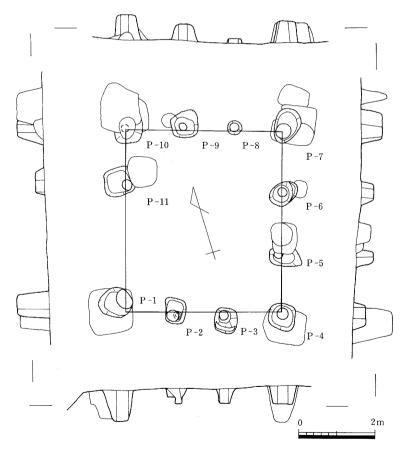


図-34 建物-21 (レベル高50.5m)

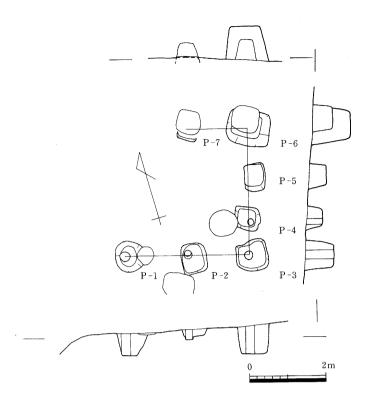


図-35 建物-22 (レベル高51.0m)

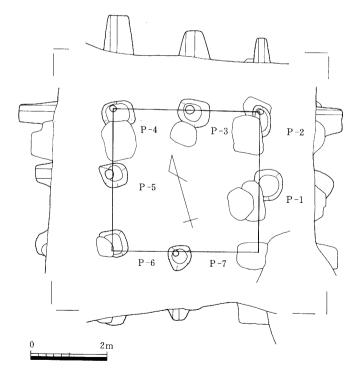


図-36 建物-23 (レベル高51.0m)

建物-21では、ピット-1
から内面にかえりを有する須恵器杯蓋(図170-7)、ピットー11から土師器小形高杯(図171-41)が出土している。それ以外に、ピットー1から内面にかえりを有するとりを有するで、ピットー6から7世紀後葉頃の上部に短い立ち上がりを有するでは現からの出土していまり、建物-21の時期は7世紀東~後葉と考えられる。

また、ピットー4が建物ー 22のピットー6を切っており、 建物ー21のほうが新しいこと がわかる。

## 建物-22

3間×2間以上の建物である。規模は332cm×328cm以上。 隅柱のピットー3・6は規模が大きく一辺100cm近くなる。 他のピットは一辺60cm程度のいずれも方形平面を呈する。 柱の直径は20cm弱と推定される。

ピット-3から、蓋内面に かえりを有する時期の須恵器 杯蓋・杯身が出土している。 7世紀中葉頃の時期と思われ る。

2間×2間、374cm×386cmの建物で ある。ピットは一辺70cm前後の方形平 面を呈し、柱の直径は15~20cmである。

時期を確認できる遺物は出土していないが、南東隅のピットとピット-1  $\sim 4$  が、それぞれ建物-24のピット-4  $\sim 8$  に切られており、建物-23が建物-24に先行すると確認できる。

## 建物-24

2間以上×3間の建物であり、規模は360cm以上×548cmを測る。ピットはほぼ方形平面をなし、1辺60~80cmである。柱位置を確認できたピットは少なく、柱の直径は20cm前後と考えられる。

ピットー6の掘方内から7世紀中葉の須恵器杯身が、柱穴内から7世紀後葉の杯蓋が出土しており、建物-24は7世紀中葉頃に建てられ、7世紀後葉頃に廃棄されたと考えられる。また、ピット-4は井戸-1に切られている。

## 建物-25

2間×2間以上、規模は382cm×388 cm以上の建物である。ピットは方形、もしくは円形平面を呈し、60cm前後の大きさである。柱の直径は20cm前後と推定される。南東隅柱と西側のピットは削平されて残っていない。

ピットー1から、6世紀末葉頃と考えられる須恵器杯身片が1点のみ出土している。

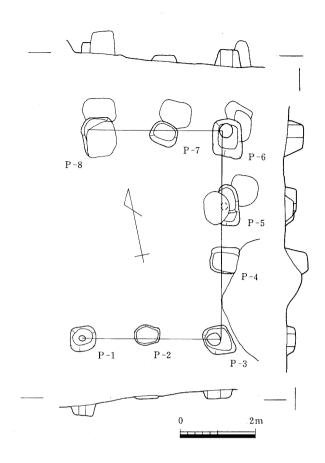


図-37 建物-24 (レベル高51.0m)

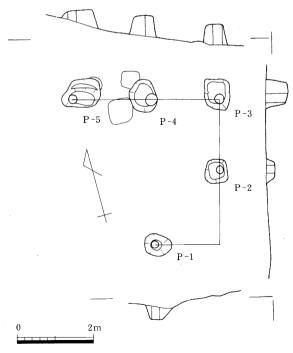


図-38 建物-25 (レベル高51.0m)

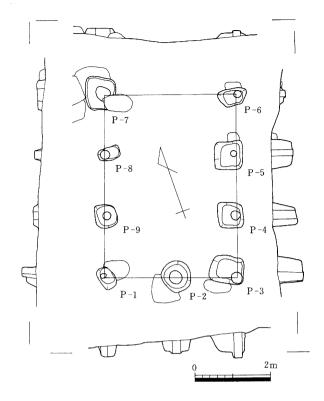


図-39 建物-26 (レベル高51.0m)

梁行2間、桁行3間の建物である。 梁行は172cm間隔の344cm、桁行は160 cm等間隔の480cmの規模である。ピットの平面形は不整なものが多く、規模 も30~80cmと一定しない。柱の直径は 20cm前後であろう。ピットー6と7の 間にあるべきピットを欠失している。

ピットー3の掘方から6世紀末葉頃 と考えられる須恵器杯身片が1点出土 している。

## 建物-27

梁行2間、桁行4間の建物と考えられる。梁行は256cm間隔の512cm、桁行は186cm等間隔の744cmの規模である。 東辺と南辺のピットをそれぞれ1個欠いている。各ピットは方形、もしくは

円形平面を呈し、規模は40~100cmとやはり一定しない。ピットの残存状態は、あまり良好でない。

時期の推定できる遺物は出土していない。

# 建物-28

1間以上×2間以上の建物であり、西側、および南側は後世に削平されている。規模は160 cm以上×320cm以上で、梁行と桁行の柱間寸法は等しくなる。ピットは、ほぼ方形平面を呈し、一辺70cm前後の規模となる。柱の直径は15cm前後であろう。

建物-28も、時期を推定できる遺物は出土していない。

## 栅 - 5

5つのピットから成り、長さは720cmである。柱間寸法は180cm前後で、ほぼ等間隔となる。各ピットは一辺70cm前後の方形平面となり、底面はピット-1と5の間で145cmもの比高差が認められる。各ピットともに、上面はかなり削平されているようであるが、もともとかなりの傾斜面に造られた棚と考えられる。ピット-3では柱が良好な状態で遺存しており、直径20cm、長さ40cmを残していた。

ピット-3から須恵器杯身(図172-3)が出土しており、ほぼ同様の杯身がピット-2からも出土している。7世紀中葉~後葉の時期と考えられる。

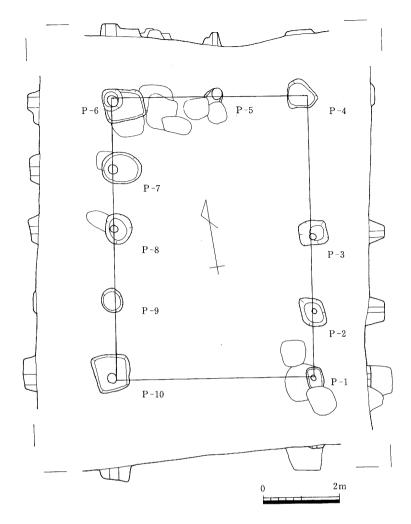


図-40 建物-27 (レベル高51.0m)

# 栅 - 6

棚-6は5つのピットから成り、長さは768cmを測る。柱間寸法は140cm $\sim$ 240cmと、かなり差が認められる。各ピットの平面形は、ほぼ方形であり、大きさは一辺 $60\sim$ 80cmを測る。柱の直径は15cm前後である。

ピットー1から、非常に短いかえりを有する須恵器 杯蓋(図172-2)が 1 点出土している。他に、時期を推定できる遺物は出土しておらず、この遺物を信用するならば、柵-6の年代は 7世紀後葉頃と推定できる。また、柵-6は建物-18に近い方位を示し、同時期と推定できる。

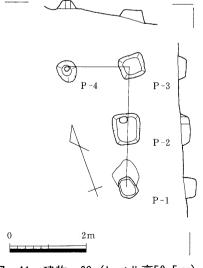
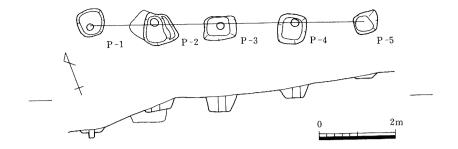


図-41 建物-28 (レベル高50.5m)



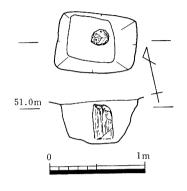


図-42 棚-5 (レベル高51.0m)

栅 - 7

棚-7は、3つのピットから成り、長さは292cmである。各 ピットの平面形は不整形であり、大きさは50cm前後となる。削 平のため、ピットの遺存状態は悪く、実際は更に長かったと思 われる。柱の直径は15cm前後であろう。

棚-7からは、時期を確定できる遺物は出土していない。

栅-8

図-43 棚-5・ピット-3 5つのピットから成り、長さは744cmである。棚-8も、更に長かった可能性が考えられる。各ピットの平面形も規模も、

大小さまざまである。特徴として、ピット-2と3の柱部分が、掘方底面より、かなり深いことがあげられる。おそらく、柱を打ち込んだものと思われる。柱の直径は $15\sim20$ cmを測る。

ピット-5から、内面にかえりを有する須恵器杯蓋片(図172-1)が出土しており、7世紀中葉頃と考えられる。

以上の内容から、建物 $-18\sim28$ 、棚 $-5\sim8$ を改めて検討してみると、建物の軸や出土遺物から次のように考えられる。最も古い建物は、建物-23と25と考えられ、6世紀の第4四半期、もしくは7世紀の第1四半期と考えられる。出土遺物からは、建物-26もほぼ同時期と考えられる。次に、建物-20・22が7世紀第2四半期と推定され、その次に7世紀第2四半期から第3四半期にかけての建物-21・24が続くと思われる。棚-5・8も建物-21・24と同時期であるう。建物 $-20\sim25$ は、ほぼ同規模であり、いずれも2棟で一対をなし、 $20\sim30$ 年間隔で建て

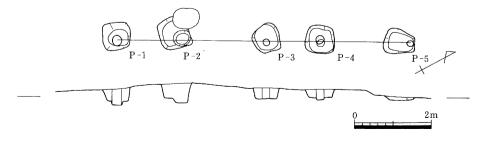


図-44 栅-6 (レベル高51.5m)

替えられているようである。これらの次に、建物 -18と19が続き、7世紀第3四半期から第4四半 期頃と推定される。この時期に至って、建物の配 置が変わり、建物の規模も大きくなったようであ る。建物-18・19からは、やや古い時期の遺物が 出土しているが、ピットの切り合い関係や、建物

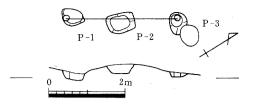


図-45 棚-7 (レベル高50.0m)

-19から出土した土師器高杯から、時期を下げて考えてみた。-6は、建物-18・-19に伴うと考えられる。また、建物-14も軸が同じであることから、同時期となる可能性が強い。

建物-27・28については、時期を推定することは、困難である。

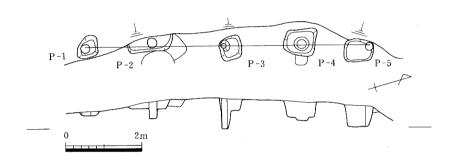


図-46 栅-8 (レベル高50.0m)

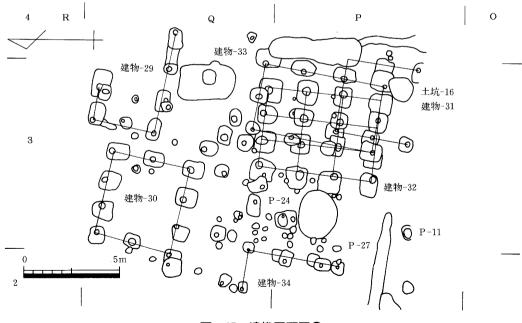


図-47 遺構平面図⑤

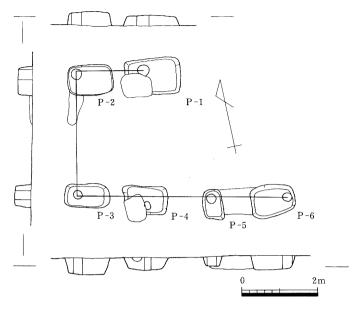


図-48 建物-29 (レベル高49.0m)

建物-29~34は、まとまりをもった建物の一群であり、 建物-18~28の位置する平坦 面の西側下段にあたる。

建物-29は、梁行1間、桁行3間以上の建物であるが、梁行が330cmの長さを有するため、ピット-2と3の間にもう一つのピットが存在した可能性が強い。また、ピットー6の東側は急斜面になっているため、ピットー6の東側へ建物が続く可能性は少なく、

建物-29は2間 $\times$  3間であったと考えられる。しかし、北東部は削平のためか、ピットは存在しない。桁行は183cm等間隔の548cmの長さを測る。

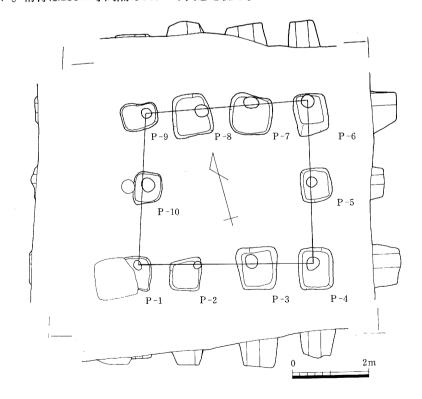


図-49 建物-30 (レベル高49.0m)

各ピットは桁方向に長い長方形平面を呈し、120cm×180cm程度の大きさである。柱の直径は25~30cmを測る。

ピットー4から須恵器の長脚二段透高杯(図170-28)が出土している。他に時期を推定できる遺物は出土していない。7世紀初頭頃であろう。

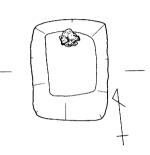
#### 建物-30

梁行2間、桁行3間の建物であるが、かなり歪んでいる。梁行は東辺で432cm、西辺で400cmを測り、桁行は南辺で462cm、北辺で428cmを測る。いずれも柱の位置は明瞭であり、柱がそれ

ぞれの辺を等分する位置にあるため、歪んだ建物であったことは疑いない。各ピットは、いずれも方形平面を呈し、一辺長は70~110cmとなる。柱の直径は20~30cmであろう。

ピット-6には、柱の下部が遺存していた。直径18cm、長さ48cmを測る。上部は腐朽のため、残っていない。

ピット内からは、時期を推定できる遺物は出土していないが、 建物の方位が、建物-29の方位にほぼ等しいため、同時期と考 <sup>45</sup> えられる。



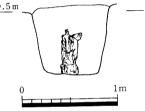


図-50 建物-30・ピット-6

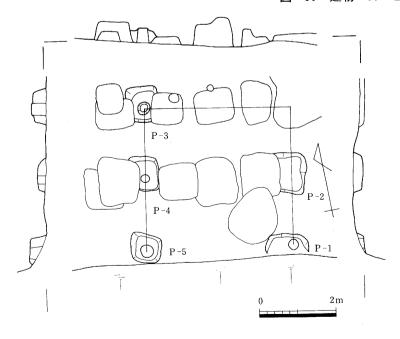


図-51 建物-31 (レベル高49.0m)

梁行は2間と推定されるが、北東隅のピットが土坑に、中央のピットが建物-32のピットー4に切られて消失している。桁行は2間まで確認できるが、南側が水路によって切られている。梁行推定長388cm、桁行現存長368cmを測る。各ピットは、いずれも方形平面であり、1 2070~110cmを測る。柱の直径は25cm前後であろう。

時期を確認できる遺物は出土していない。

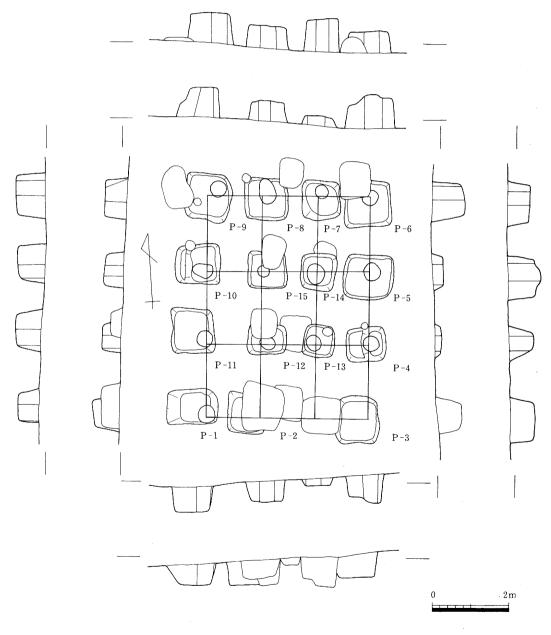


図-52 建物-32 (レベル高49.0m)

3間×3間の総柱建物である。四周のピットは、掘方も大きく、深いが、内側の4つのピットは小さくなっている。規模は426cm×586cm。ピットは、いずれも平面が方形となり、四周のピットは一辺長90~120cm、内側のピットは一辺長80~100cmを測る。深さは、最も遺存状態の良好なピット -7 で90cmを残す。柱の直径は四周が約40cm、内側が約30cmとなり、柱の太さ、束柱の存在などから、倉庫と考えられる。

ピット-12から、内面のかえりが退化した、やや直径の大きい須恵器杯蓋が出土しており、7世紀後葉頃の年代が考えられる。

建物-32のピット $-4 \cdot 12 \cdot 13$ が、建物-31のピット-3 などを切っており、建物-32のピット $-2 \cdot 3 \cdot 6 \cdot 8 \cdot 12 \cdot 15$ が、建物-33のピット $-1 \cdot 2 \cdot 7 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 9$  に切られている。以上の事実から、建物-31、建物-32、建物-33の順に建て替えられたことがわかる。

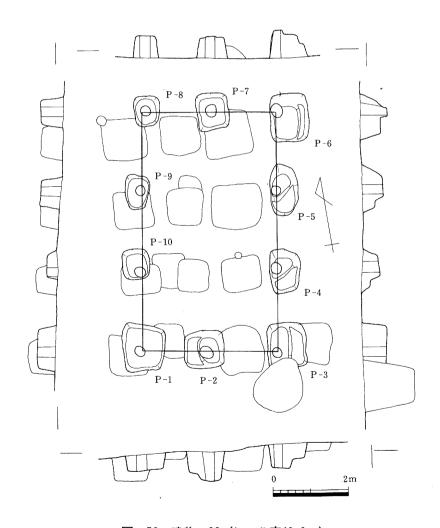
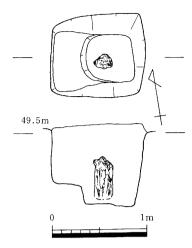


図-53 建物-33 (レベル高49.0m)



梁行 2 間、桁行 3 間の建物である。梁行は178cm等間隔の356cm、桁行は210cm等間隔の630cmである。ピットの平面形は方形のものから楕円形のものまでみられ、一定しない。大きさは $60\sim130$ cmである。ピットー  $2\sim6$  は二段の掘方となり、ピットー  $6\cdot7$  は柱位置のみ  $3\sim10$ cm掘り下げている。これらの特徴から考えると、ピットー  $1\sim3$ 、 $4\cdot5$ 、 $6\cdot7$ 、 $8\sim10$ と4 グループに分けることができ、4 人によって掘方が掘られたことを示しているのかもしれない。

図-54 建物-33・ピット-2 柱の直径は25cm前後と推定できるが、ピット-2には、柱の一部が残っていた。直径20cm、長さ46cmを残し、比較的、遺存状態は良好である。

ピットー5から、内面のかえりが消失した須恵器杯蓋(図170-11)が出土している。ピットー3からは、高台を有する須恵器杯身片が出土している。7世紀末葉 $\sim 8$ 世紀初頭と考えられる。

## 建物-34

1間以上×2間以上の建物となり、240cm以上×400cm以上の規模である。ピットは方形平面を呈し、ピット-2は二段の掘方となる。大きさは一辺40~80cm、柱の直径は15cm前後である。 建物-34に伴う遺物は認められないが、建物-33と方位が一致する。

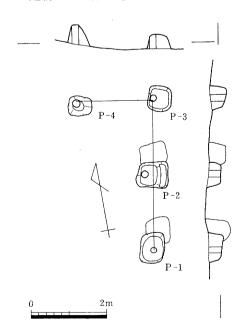


図-55 建物-34 (レベル高48.5m)

以上の内容から、建物-29~34を検討してみる と、7世紀初頭から8世紀初頭にかけて、建物-29・30、建物-31、建物-32、建物-33・34の順 に建てられたと考えられる。

この平面は、比較的遺存状態が良く、建物がまとまっていることから、保存について協議を繰り返してきた。その結果、道路によって削平される予定であった計画を、道路の線形を変更することによって保存できるようになった。 大部分の遺構が破壊された中で、わずかながら保存できた貴重な遺構である。

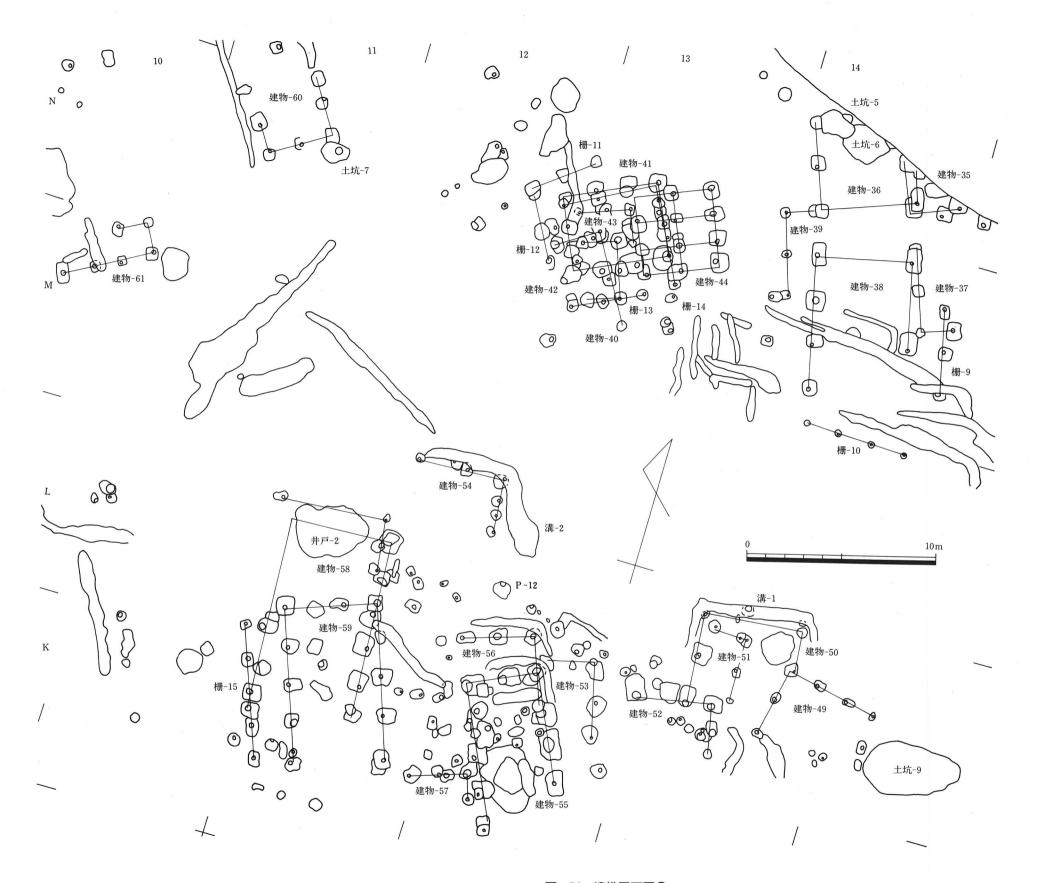


図-56 遺構平面図⑥

建物-35~44、栅-9~14は、調査地最高所 に位置し、凝灰岩質砂質土の地山を遺構面とす る。

建物-35は、1間以上 $\times$ 1間以上の建物であり、調査範囲外へ続いている。ピット $-1 \cdot 2$ 間は270cm以上、ピット $-2 \cdot 3$ 間は約240cmを測る。ピットは方形平面を呈し、一辺長は100cm近くになる。柱の直径は15cm前後か。

ピット内から時期の判明する遺物は出土して いないが、ピットー $1 \cdot 2$ は、建物-36のピットー $4 \cdot 5$ に切られており、建物-35が建物-36に先行することがわかる。

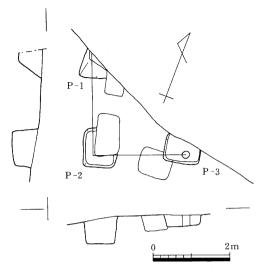


図-57 建物-35 (レベル高65.0m)

## 建物-36

1間以上×2間以上の建物である。おそらく、ピット $-3 \cdot 4$ 間に、もう一つのピットが存在したと思われる。規模は514cm×440cm以上である。ピットは一辺60cm前後の方形平面を呈す

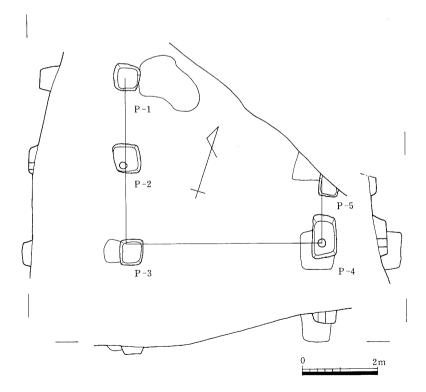


図-58 建物-36 (レベル高64.0m)

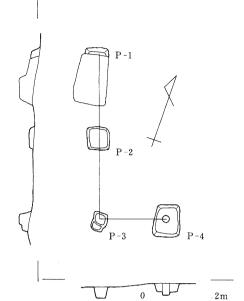


図-59 建物-37 (レベル高64.0m)

る。柱の直径は20cm前後と考えられる。

年代の判明する遺物は出土していない。

# 建物-37

1間以上×2間以上の建物である。規模は172 cm以上×424cm以上である。ピットの平面形は方 形となり、一辺長40~80cmである。

やはり、時期の判明する遺物は出土していないが、ピットー1が建物-38のピット-2に切られており、建物-37が建物-38に先行することが確認できる。

## 建物-38

1間以上×3間以上の建物であり、ピット-2と3の間には、他にピットが存在したと思われる。

規模は508cm×684cm以上となる。各ピットは 方形、もしくは長方形 平面を呈し、一辺長60 ~130cmを測る。ピットー2のみ、二段掘方 となる。柱の直径は20 ~25cm。南側のピット は、後世の削平によっ て消失したものと考え られる。

やはり、時期を推定できる遺物は出土しておらず、建物-38の時期は不明である。ただし、棚-9がほぼ同一方位となることから、建物-38と棚-9が同時期であることは疑いないであろう。

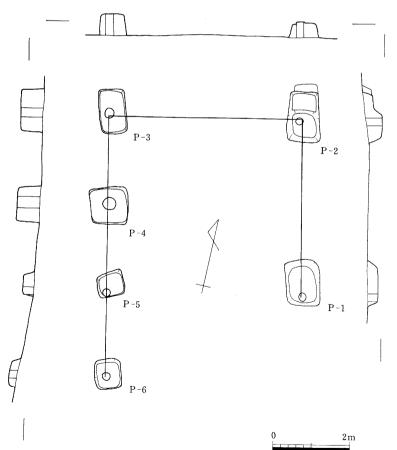


図-60 建物-38 (レベル高63.5m)

1間以上×2間以上、140cm以上×436cm以上の建物である。各ピットは、やや小形で一辺30~60cmの方形平面を呈する。柱の直径は15cm前後。ピットの遺存状態は悪く、東辺、南辺のピットは確認できない。

時期は不明であるが、ピット-1が、建物-36のピット-3に切られており、建物-39が、建物-36に先行することが確認できる。

## 建物-40

1間以上×2間以上の建物であるが、ピットの遺存状態は悪く、やはり全形は確認できない。 現存長は $252cm \times 496cm$ である。ピットー1は円形平面であるが、他は方形平面である。ピットの大きさは60cm前後、柱の直径は20cm前後である。

やはり、時期は不明であるが、ピットー2が建物ー41のピットー2に、ピットー3が建物ー42のピットー5に、それぞれ切られており、建物ー40が、建物ー $41 \cdot 42$ に先行することが確認できる。

#### 建物-41

梁行3間、桁行3間の建物。梁行は416cmを測るが、柱間寸法は北から160cm、128cm、128cmとなる。桁行は488cmを測り、やはり柱間寸法が一定でないようであるが、明確にできない。 ピットは方形平面を基本とするが、一辺長は $40\sim110$ cmとかなり異なる。柱の直径は20cm前後である。ピット-3のみ、二段掘方となる。

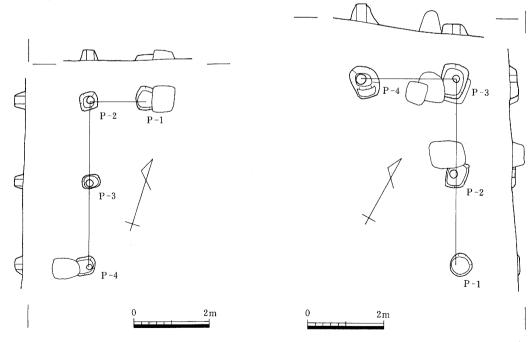


図-61 建物-39 (レベル高64.0m)

図-62 建物-40 (レベル高63.0m)

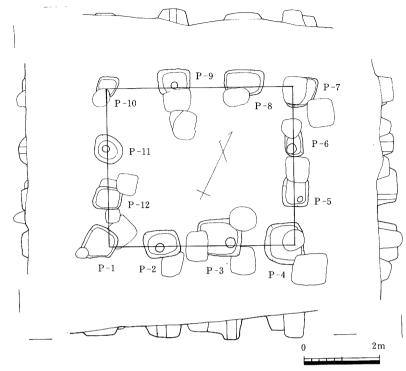


図-63 建物-41 (レベル高63.0m)

建物-41の時期は確定できないが、ピット-3が建物-42のピット-3に、ピット-12が建物-42のピット-5に、ピット-3が建物-44のピット-1・9に、ピット-4が建物-44の

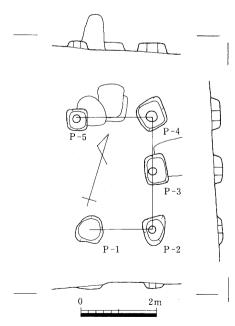


図-64 建物-42 (レベル高63.0m)

ピット-2に、ピット-7が建物-44のピット-7に、それぞれ切られている。また、ピット-4~10が、-13のピット-2~8に切られており、建物-41が、建物-42・44、-13に先行することが確認できる。

## 建物-42

2間×1間以上、296cm×192cm以上の建物である。西側は削平のため、不明である。ピットは一辺60cm前後の方形をなし、柱は直径20cm前後と推定される。

ピット $-2\sim5$ の柱が焼けており、炭状になっていた。おそらく、火災によって放棄されたと考えられる。火災の痕跡を残す建物は、他に3棟存在する。

建物-42では、ピット-4から土師器杯(図171-36)が出土している。また、ピット-5の柱穴内から、かえりをわずかに残す須恵器杯蓋が出土している。これらの遺物から、建物-42は7世紀後葉頃と考えられる。

## 建物-43

1間以上×2間以上の建物となり、西側、南側が削平されている。規模は180cm以上×272cm以上。ピット $-2 \cdot 3$ は二段の掘方である。ピットは一辺長50cm前後の方形平面をなし、柱の直径は15cm前後であろう。

時期を確認できる遺物は出土していないが、ピット-1が建物-44のピット-8に間接的に切られており、建物-43が、建物-44に先行することが確認できる。

## 建物-44

2間 $\times$  3間の総柱の建物である。ピットの遺存状態は悪く、北西隅のピットが消失している。ピットは、いずれもほぼ方形平面を呈し、ピット $-1\sim9$ は一辺長80cm前後、ピット $-10\cdot11$ は一辺長60cm前後を測る。ピット $-1\sim10$ の柱は直径25cm前後、ピット-11の柱は直径12cm程度と推定される。建物の規模は、ほぼ400cm四方の方形となる。ピット $-10\cdot11$ の規模が小さいことから、2本の束柱をもつ倉庫と考えられる。

やはり、時期を確認できる遺物は出土していない。

#### 栅 — 9

3個のピットから成り、長さは452cm、柱間寸法は226cmとなる。ピットは方形平面を呈し、一辺60cm前後の大きさである。ピットの遺存状態が悪く、更に南北に延びていた可能性がある。 柱の直径は20cm前後である。

時期を確認できる遺物は出土していないが、前述のように、**建物**-38に伴う施設と考えられる。

#### 栅-10

小規模な円形ピット4個による棚であり、184cm等間隔の552cmの長さを測る。ピットの直径は30cm前後、柱の直径は、10~15cmである。棚-10の南側は急傾斜面となっており、平坦面と斜面を区画する施設と考えられるが、棚-10に伴う建物は確認できない。

ピット内からも、遺物は出土しておらず、棚-10の時期を決定することはできない。

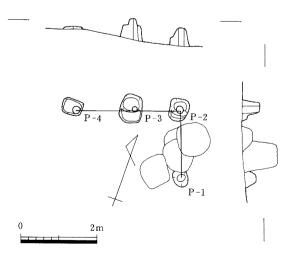


図-65 建物-43 (レベル高63.0m)

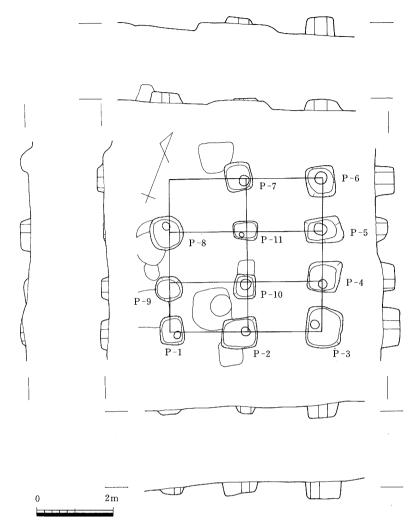


図-66 建物-44 (レベル高63.5m)

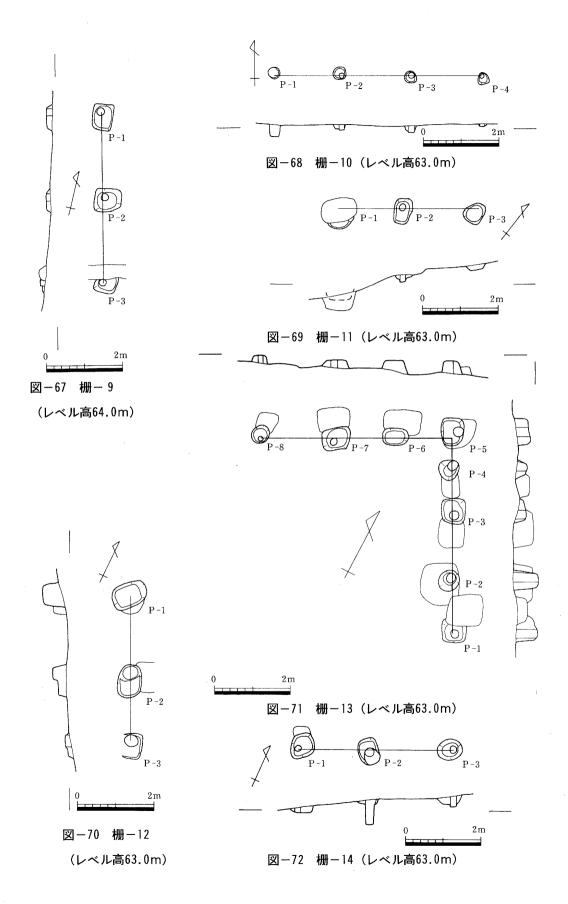
## 栅-11

長さ約360cm、3個のピットからなる棚である。棚-11の西側は、浅い谷状の地形となる。 ピット-1から、須恵器  $\bar{u}$ の口縁部(図172-4)が出土しているが、他に、時期の確認できる遺物はみられない。7世紀初頭を前後する時期であろう。

# 栅-12

長さ360cm前後、3個のピットからなる棚である。南側が急傾斜面となっており、斜面と平坦面を区画する施設であろう。ピットは一辺70cm前後の方形平面を呈すると考えられる。ピットー2と3は、二段の掘方となる。

ピット-2から、高台を有する須恵器杯身が出土しており、7世紀後葉頃であろうと思われる。また、ピット-1が、-11のピット-1を切っており、-11が-12に先行することがわかる。



## 栅-13

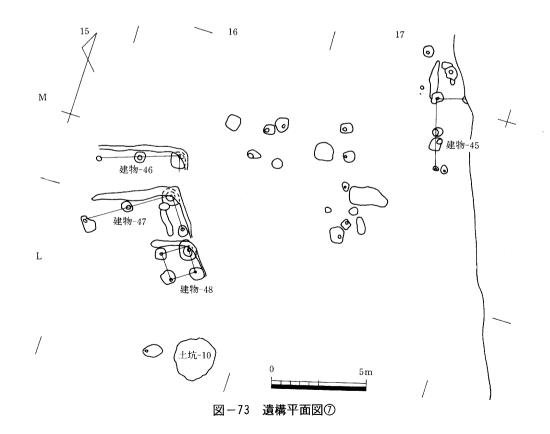
4間、3間で2面を画する棚と考えられる。長さは、それぞれ520cm、500cmを測る。ピット $-3\sim5$ の間の柱間寸法が、やや狭くなる。ピットは40 $\sim60$ cmの大きさで、方形、もしくは円形平面を呈する。柱の直径は、約25cmである。

 $\overline{m}-13$ の時期は不明である。ピット-1が、建物-44のピット-2 に切られていることから、 建物-44に先行することは確認できる。

## 栅-14

3個のピットからなり、長さ412cmを測る。ピット-2は、柱を打ち込んでいたようであり、その柱を抜き取っている。柱の直径は15cm前後であろう。やはり、時期の確認はできない。

建物 $-35\sim44$ 、棚 $-9\sim14$ の中で、時期を確認できるものは、建物-42と棚 $-11\cdot12$ のみである。そして、建物 $-40\cdot41$ が建物-42に先行することが確認できるだけであるが、建物 $-41\sim43$ の関係をみてみると、建物の軸が西寄りから、徐々に北向きになっていることがわかる。建物-44と棚を除くと、建物 $-35\sim39$ の間でも同様の傾向が指摘できる。この推定が正しいならば建物-40、41、43、42の順と考えられ、建物 $-36\cdot37\cdot43$ がほぼ同時期ではないかと考えられる。このように考えるならば、6世紀末 $\sim7$ 世紀初頭頃から7世紀後葉頃にかけて、 $2\sim3$ 棟の建物が存在したと考えられる。建物-44は、それ以後に単独で建てられたものであろう。



建物-45は、建物-46 $\sim$ 48と共に、谷-2 の北側、調査地東端に位置する。

建物-45は、1間以上×2間以上の建物であり、南側は削平のため消失している。また、東側は調査範囲外へ続いており、更に東側にも、建物群が存在すると考えられる。規模は、160cm以上×368cm以上。ピットは、ピットー4を除いて、方形平面を呈する。柱の直径は15cm前後と推定され、ピットー2には、柱の一部が残っていた。柱の直径は13cm、長さ50cmを残す。また、ピットー3の底面には扁平な石が置かれており、柱を支えるための石と考えられる。

各ピットからは、時期を確認できる遺物は出土しておらず、建物-45の時期は不明である。

## 建物-46

建物-46~48は、谷-2へ向かう南斜面に建てられて おり、斜面を大きく削りこんで平坦地を確保して、建て られている。

建物-46は、北辺のピット3 個を残すのみである。斜面を最大160cmまで方形に掘り込んで、平坦面を確保している。平坦面の周囲には浅い溝をめぐらせ、排水を考慮している。ピット $-1\sim3$  は長さ432cmを測り、ピッ

1 - 1は円形平面であるが、ピット $-2 \cdot 3$ は方形平面

である。ピットー1は、上面が大きく削平されており、ピットの底面のみ残ったため、小規模な円形ピットとなったと考えられる。

ピット-3の掘方は60cm×70cmの大きさで、深さ43cmを残す。切り合い関係では、建物周囲の溝に切られているが、建物の廃絶後に溝が掘削されたとは考え難く、建物建設前に掘削された溝が、建物存続期間中も機能しており、建物廃絶後に溝が埋まったと考えられる。他の溝をめぐらせる建物も、いずれも同様な関係が認められる。

各ピットからは、時期の確認できる遺物は出土しておらず、建物-46の時期は不明である。 また、土層からは、建物-46~48の前後関係を判断できなかった。

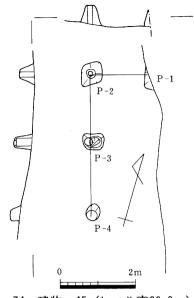


図-74 建物-45 (レベル高62.0m)

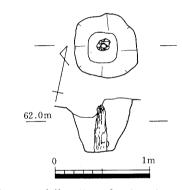


図-75 建物-45・ピット-2

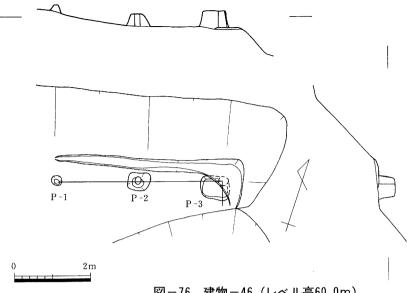


図-76 建物-46 (レベル高60.0m)

1間以上×2間以上の建物であり、建物-46の遺構面と100cm前後の比高差がある。規模は 196cm以上×464cm以上である。ピット-2は90cm四方の方形掘方を有し、深さ110cmを残す。 それに比べると、他のピットは貧弱である。柱の直径は20cm弱と推定され、ピット-2の柱の み、抜き取られているようである。

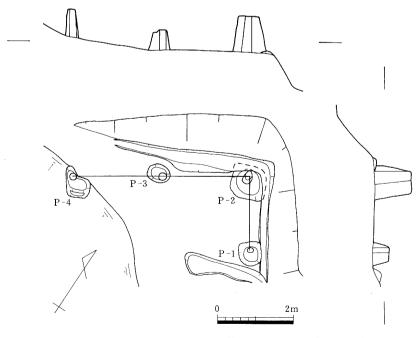


図-77 建物-47 (レベル高59.0m)

建物の周囲をめぐる溝は、最大幅60cm、最も深い部分で14cmの深さを測る。いずれもピットー2・3の中間である。また、溝底面はピットー1付近が最も高く、ピットー2・3と向かうにつれて、徐々に低くなることから、すべて西側へ排水していたと考えられる。

ピット内からは、時期の確認で きる遺物は出土していない。

## 建物-48

1間×1間の規模が確認できるが、西、南側は削平されているため、更に大きな建物であったこと

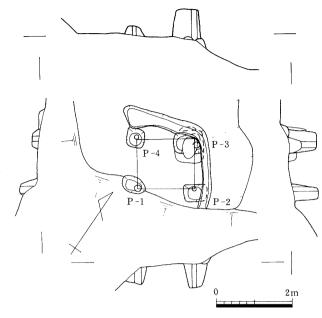


図-78 建物-48 (レベル高59.0m)

も考えられる。規模は132cm×152cm。やはり、北東隅のピット-3は60cm×80cmの方形平面を呈し、他のピットよりも大きい。また、ピット-3は複雑な切り合いが認められるが、その原因は不明である。建物周囲の溝は最大幅60cmを測り、溝底面はピット $-2 \cdot 3$ 間で最も高くなっている。

ピットー2から、非常に短い立ち上がりを有する須恵器杯身(図170-19)が完形で出土しており、地鎮に伴う遺物と考えられる。また、ピットー3の柱穴内より、内面にかえりを有する須恵器杯蓋が出土している。これらの遺物から、建物-48は7世紀前葉頃と推定される。

以上のように、建物-46~48は、ほぼ同一場所で、3時期にわたって建て替えられたと考えられる。建物-48以外は時期が不明であり、その前後関係も明確でない。しかし、広い平坦面に立地する建物と同時期であると考えられ、立地の差が、如何なる原因に基づくものか注目される。

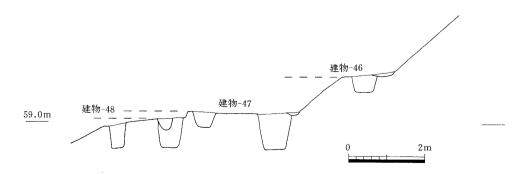


図-79 建物-46~48断面図

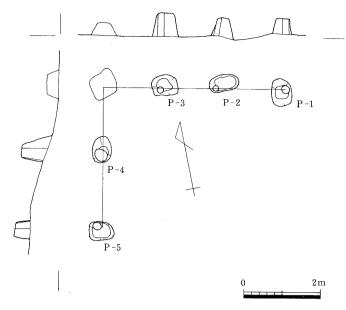


図-80 建物-49 (レベル58.0m)

建物-49~59は、建物-46 ~48の西側に位置し、斜面、 あるいは斜面を削平した平坦 地に建てられている。

建物-49は、2間以上×3間以上の建物である。規模は380cm以上×464cm以上。ピットの平面形は明瞭な方形をなさない。柱の直径は15cm前後である。

時期を確認できる遺物は出 土していないが、北西隅のピッ トが建物-50のピット-1に

切られて消失していることから、建物-49が建物-50に先行することが確認できる。

## 建物-50

1間以上×2間以上の建物である。ピットー2・3の間隔が広すぎることから、その間にもピットが存在したと考えられる。ピットー6が棟持柱の可能性も考えられるが、溝内に位置するため、疑問も残る。規模は508cm×480cm以上。斜面を大きく方形に削平し、建物一50が建てられており、やはり、建物周囲に溝がめぐる。溝の幅は60cm前後、深さは10cm前後である。柱の直径は20cm前後と推定され、ピットー4・5の柱は抜き取られている。ピットー4・5は90cm×120cm程度の方形平面であるが、ピットー2・3は直径50cm前後の円形平面となる。また、ピットー2・3は、柱位置のみ、深く掘り下げられている。

ピットー6の柱穴内から、土師器杯(図171-37)が出土しているが、時期を明確にできるものではない。

## 建物-51

1間以上×2間以上の建物。規模は184cm以上×336cm以上。ピットは円形平面を呈し、直径 $30\sim70$ cmを測る。柱の直径は15cm前後となる。

時期の判明する遺物が出土しておらず、建物-51の時期は不明である。

## 建物-52

1間以上×2間以上の建物である。規模は268cm以上×400cm以上。ピットー $2\sim4$  は方形平面を呈し、一辺 $90\sim140$ cmを測る。ピットー1 は直径約50cmの円形平面を呈するが、上面が削平されたために柱部分のみ残ったと考えることが出来る。 (レベル高48.5m) P.38の分です

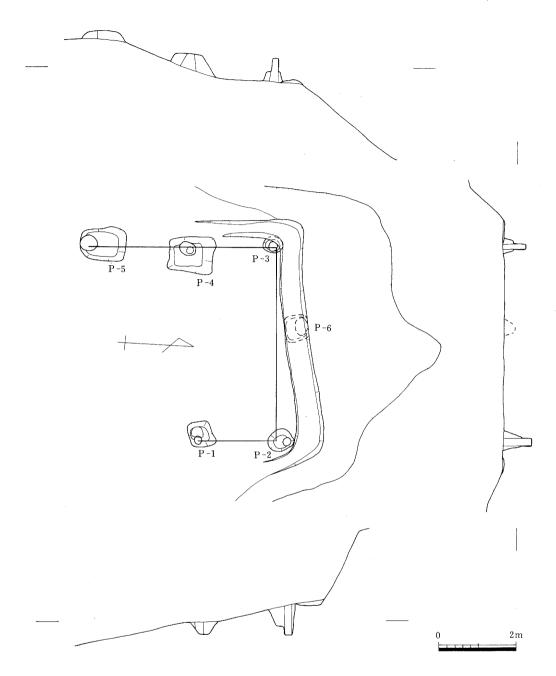


図-81 建物-50 (レベル高58.0m)

柱の直径は40cm前後と推定され、ピット-4は二段の掘方となる。

ピット-3の掘方内より、土師器高杯(図171-39)が出土しており、7世紀代と考えられる。

## 建物-53

2 間以上 $\times$  2 間以上の建物であり、272cm以上 $\times$  360cm以上の規模となる。西、および南側は建物-55によって削平されている。

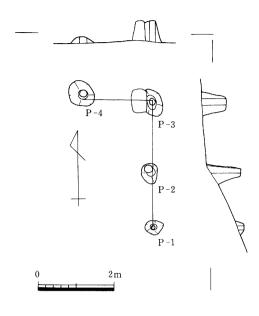


図-82 建物-51 (レベル高58.0m)

柱の直径は20cm前後と推定され、ピット-1 と2では、柱のごく一部が遺存していた。それ ぞれ直径6cm、8cmを測り、かなり腐朽してい る。

建物-53に伴う遺物も時期の判明するものがなく、時期は不明である。

## 建物-54

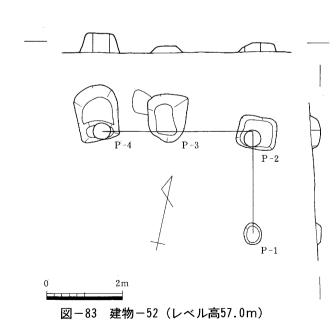
2間以上×3間以上の建物であり、周囲に溝をめぐらせている。規模は464cm以上×292cm以上を測り、西側、南側は削平のため、確認できない。柱の直径は15cm前後を測る。

溝は最大幅142cmを測り、東側では60cm以上 の深さを測る。溝底面は北東隅が最も高く、西、 南へと低くなっている。

建物-54も時期を確認できる遺物は出土していない。

## 建物-55

2間×4間以上の建物であり、規模は392cm×784cm以上を測る。柱間寸法は、梁行、桁行共に、196cmである。各ピットは方形平面をなし、一辺長80~120cmである。建物は、地山を大きく掘り込んで造られた平坦面に建てられており、建物の北側と東側に沿って、溝がめぐる。溝は50cm前後の幅で、深さ10cm程度の浅いものである。柱の直径は20cm前後と考えられ、ピットー



1では、柱の一部が残っていた。柱 は直径18cm、長さ52cmを残しており、 遺存状態は良好である。しかし、ピッ ト $-2\sim6$ では、いずれも柱が抜き 取られている。

ピット-4の上面に、建物-56の ピット-2に伴う柱が遺存していた。 この柱上部が検出された時点で、周 辺の精査を行ない、掘方の検出に努 めたが、確認できなかった。そのた め、この柱は建物-55に伴うもので はないかと考えたが、柱下部は建物 -55検出面より上位に位置すること が判明し、建物-56に伴う柱であることが確認された。よって、建物-55廃絶後、更に北側へ地山を掘り込み、その土を建物-55が位置する平坦面の上へ盛ることによって整地し、建物-56を建てていると判断できる。その際に、建物-55北半の柱が、すべて抜き取られたのであろう。

建物-55では、ピット-1から短い立ち上がりを有する須恵器杯身(図170-17)、ピット-5から須恵器の甕(図170-31)、ピット-9から土師器の鉢(図171-45)が出土している。いずれも掘方内からの出土であり、7世紀前葉頃の時期と考えられる。

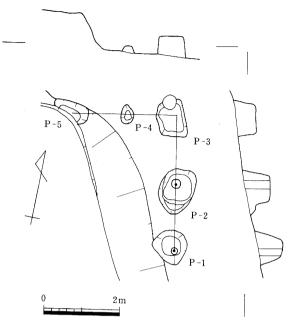


図-84 建物-53 (レベル高57.0m)

## 建物-56

2 間以上×3 間以上の建物である。ピットー $1\sim3$  の間は柱間寸法196cm等間隔の392cm、ピットー $3\sim6$  の間は480cmを測るが、柱間寸法は188cm、188cm、104cmとなり、ピットー5と6の間隔がやや狭くなる。 (レベル高57.0m)P54の分

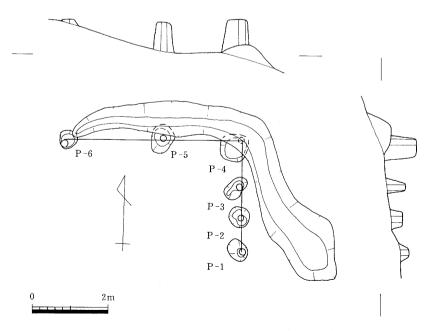


図-85 建物-54 (レベル高59.0m)

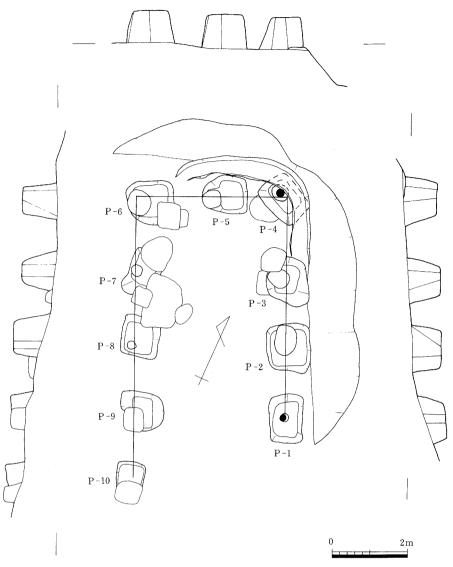


図-86 建物-55 (レベル高56.0m)

ピットは方形平面を呈するが、前述のように、ピット-2の据方は確認できなかった。また、ピット-1の底面には、薄い石が置かれていた。柱の直径は25cm前後を測り、ピット-2~6で柱の一部を残していた。ピット-2では直径21cm、長さ38cmを残し、ピット-3では直径25cm、長さ73cmを残し、ピット-4では直径31cm、長さ39cmを残す。ピット-5・6では遺存状態が悪く、直径5cm程度を残すにすぎない。

ピットー4と5から、内面にかえりを有する須恵器杯蓋(図170-10・9)が出土しており ピット-5からは、かえり出現前の須恵器杯蓋片も出土している。いずれも掘方内からの出土 であり、建物-56は7世紀中葉~後葉の時期と考えられる。遺物からも、建物-55が建物-56 に先行することが確認できる。

1間以上×2間以上の建物である。規模は132cm 以上×304cm以上となり、西側、南側は削平のため 残っていない。柱の直径は25cm前後を測り、ピット -2の柱は抜き取られているようである。

ピット-3から、内面にかえりを伴う小形の須恵 器杯蓋が出土しており、ピット-4からは同型式の 須恵器杯身が出土している。7世紀中葉頃の時期で あろう。

# 55.0m

図-87 建物-55・ピット-1

# 建物-58

梁行は542cmを測るが、間数は不明。桁行は1008cmを測り、5 間以上となる。北西部分のピットが全く残っておらず、2 列の棚列と考えることも可能である。しかし、掘方が大きいことやピットー $2 \cdot 3$  とピットー $7 \cdot 8$  が対応することから、建物と考えた。西側の柱列は、かなり削平を受けていると考えられる。また、ピットー1 と9 が対応しないが、ピットー1 はかなり削平されており、本来は更に南へ広がるピットであったと考えられる。柱の直径は20~30cmを測り、ピットー3~6 の柱は焼けて炭状になっている。また、ピットー $5 \cdot 6$  では、焼けた柱が抜き取られているが、他のピットでは火災の痕跡はみられない。

ピットー7の掘方内から、短い立ち上がりを有する須恵器杯身と、それに伴う杯蓋が出土している。7世紀前葉頃か。

また、ピットー4が建物-59のピットー5に切られており、建物-58が建物-59に先行することが確認できる。また、ピットー5・6、および北辺のピットが、井戸-2とそれに伴うピットに切られていることから、井戸-2にも先行する。

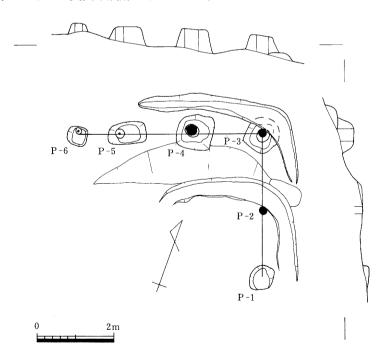


図-88 建物-56 (レベル高56.5m)

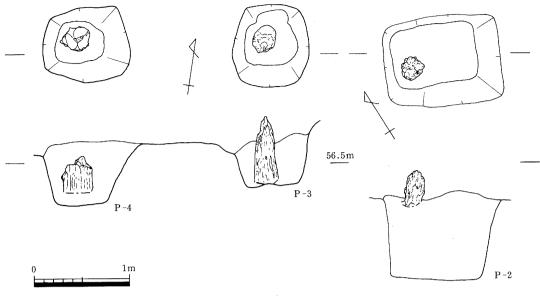


図-89 建物-56・ピット-2~4

梁行3間、桁行4間以上の建物である。梁行の柱間寸法は160cm等間隔となり、長さ480cm、桁行の柱間寸法は206cm等間隔となり、長さ824cmを測る。ピットは、いずれも方形平面を呈し、一辺長50~100cmを測る。ピットー2・6・8・11は二段の掘方となり、ピットー2・4・10の底面の柱位置には、石が置かれていた。柱の直径は25cm前後と推定される。また、ピットー8には柱の一部が残っていた。遺存状態は悪く、直径10cmを残すのみであり、腐朽が激しかった。

各ピット内からは、時期を確認できる遺物は出土しておらず、建物-59の時期は不明である。

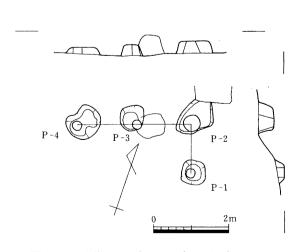


図-90 建物-57 (レベル高55.0m)

しかし、前述のような切り合い関係から、建物-58より新しいことが確認できる。また、ピット-3~5の掘方からは、多数の焼土、炭化物が出土しており、これらのピットが火災を受けた建物-58のピット-3~6に近い位置にあることから、建物-58の一部が火災を受けた後、すぐに建物-59に建て替えられたと考えられる。建物の規模がほぼ等しいことからも、建物-58から建物-59への建て替えが追認できると考える。

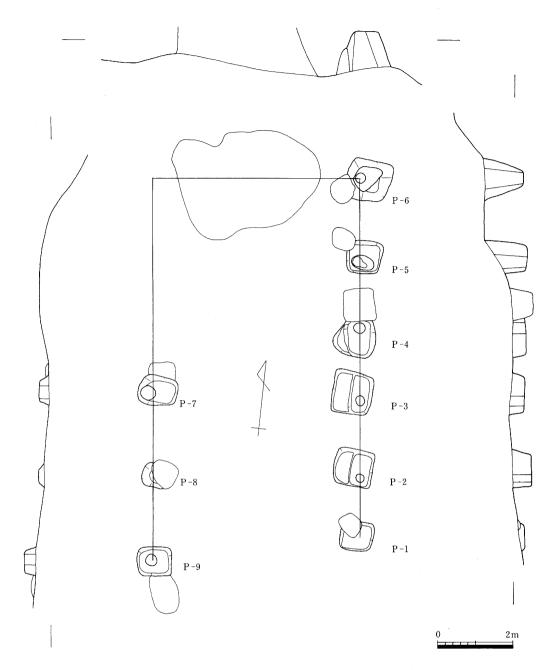


図-91 建物-58 (レベル高56.0m)

建物-60・61は、建物-49~59の北西側上段に位置し、建物-35~44の存在する平坦面の西側下段に位置する。前者の建物群より約3 m高く、後者の建物群より約3 m低い位置に平坦面が造り出されている。建物-60付近は上段より続く凝灰岩質砂質土を地山とし、建物-61付近は花崗岩風化土を地山とする。かなり広い平坦面が造られているが、後世の削平のためか、遺構の遺存状態は悪い。

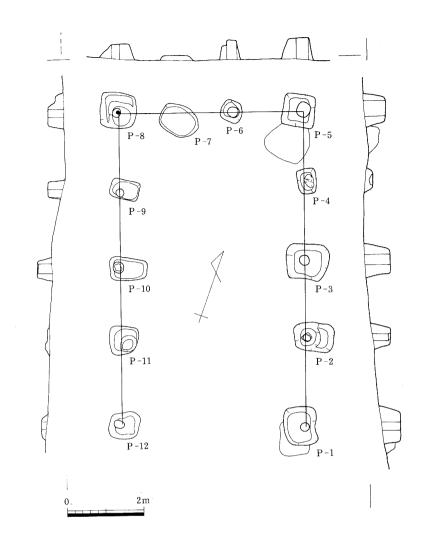


図-92 建物-59 (レベル高56.0m)

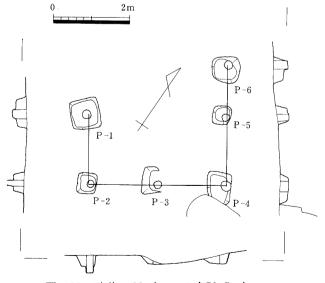


図-93 建物-60 (レベル高59.5m)

建物ー60は、梁行2間、桁行2間以上となり、360cm×320cm以上の建物である。ピットは方形平面を呈し、一辺60~80cmの長さを測る。柱の直径は20~25cmと推定できる。ピットー1・2・5・6は共に掘方底面の柱位置のみを更に10cm前後掘り下げて柱を安定させる工夫をしているようである。北側は削平を受けており、ピットが遺存していない。

ピットー2から土師器の小 形の甕(図171-46)が出土 している。口縁の一部を欠く が、他は完存する。地鎮に伴 う遺物であろうか。時期は断 定し難い。

## 建物-61

1間×3間以上の細長い建物と考えられる。規模は170cm×480cm以上となる。ピットは方形、もしくは長方形平

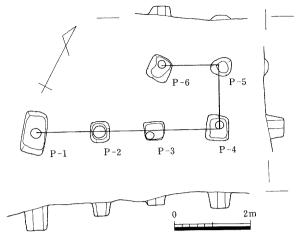


図-94 建物-61 (レベル高59.0m)

面を呈し、遺存状態は悪い。柱の直径は20cm前後と推定される。

ピット内からは、時期の確認できる遺物は出土していない。

## 栅-15

長さ880cm、6個のピットから成る棚である。柱間寸法は176cm 等間隔である。ピットは方形平面を呈し、一辺長50~100cmを測 る。柱の直径は20~30cmを測る。

棚-15の時期も不明であるが、2mの間隔をおいて建物-59に 平行することから、建物-59と同時期ではないかと考えられる。 柱が太いことから考えると板塀であったことも考えられる。建物 -59付近は西からの季節風が直接当たるため、風防のために作ら れたと考えられる。

建物-49~61を検討してみると、建物-49~54、および建物-60・61は、その時期、前後関係を明確にできない。建物-55~59については、建物-55・58が7世紀前葉頃、建物-56・57・59、棚-15が7世紀中葉~後葉頃になるのではないかと思われる。この推定が正しいならば、同時期に軸の異なる建物が存在したことになり、時期不明の建物を軸によってのみ考えることは困難となる。建物-49~59は斜面を削平して建てるという地形からの制約が大きいため、必ずしも同時期の建物が同じ方位をとらないものと考えられる。このように考えるならば、異なる建物群についても同様に、建物の軸のみで時期を考えることはできない。建物群内の限られた範囲でのみ、方位を一致させているようである。

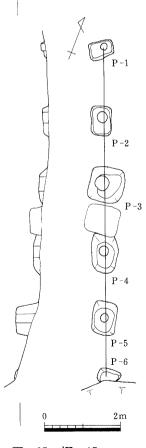
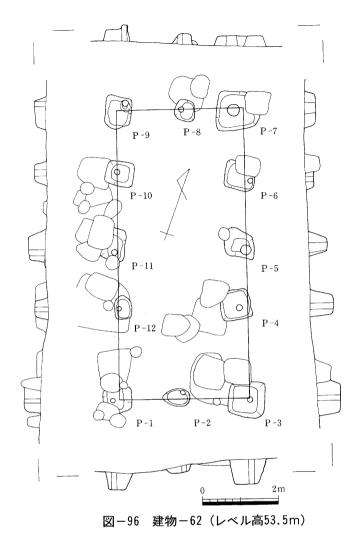


図-95 棚-15 (レベル高55.0m)



建物-62

建物-62~68は、水路と溝-6の間に位置し、標高53~54 mを測る。

建物-62は梁行2間、桁行4間の建物である。梁行は柱間寸法168cm等間隔の336cm、桁行は柱間寸法がやや不規則であるが長さは764cmを測る。また、柱位置もやや乱れている。ピットは方形平面を基本とし、一辺長は40~110cmと差が大きい。柱の直径は15cm前後を測る。

ピット-5 掘方から、非常に 短い立ち上がりを有する須恵器 杯身が、ピット-12からは、そ れよりもやや高い立ち上がりを 有する杯身が出土している。

また、ピット-3が建物-65のピット-7に切られており、 ピット-8が栅-16のピット-4を切っていることから、建物

-62は、-62は

## 建物-63

1間以上×3間の建物であり、おそらく梁行は中間に1個のピットを介して2間となると思われる。また、ピット-5・6間にあるべきピットは、建物-65のピット-12によって切られ、消失している。規模は378cm×490cmとなる。ピットは方形平面を基本とし、一辺長60~100cmを測る。柱の直径は15~20cmと推定される。

ピット内からは時期の確認できる遺物は出土していない。しかし、ピット-2が建物-64のピット-2に、ピット-7が建物-64のピット-9に、それぞれ切られている。また、ピット-4を除くすべてのピットが建物-65の各ピットに切られている。これらの関係から、建物-63が建物 $-64 \cdot 65$ に先行することが確認できる。

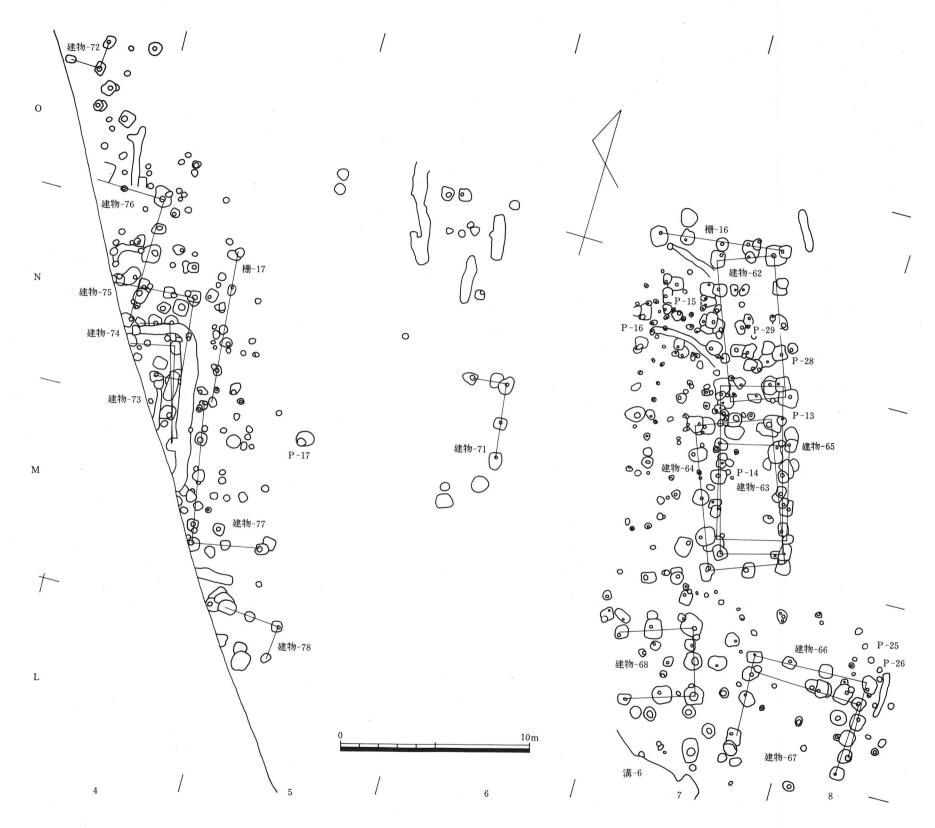


図-97 遺構平面図⑧

梁行2間、桁行4間の建物である。梁行は212cm間隔の424cm、桁行は772cmを測るが柱間寸法は等間隔とならず、南北端のみ、やや狭くなるようである。ピットは方形平面を基本とし、一辺長50~90cmを測る。ピットー3・4・7は柱位置のみ掘り下げた二段の掘方となる。柱の直径は15cm前後と推定される。

ピットー2からかえり出現前の須恵器杯蓋(図170-5)、 ピットー4から内面にかえりを有する須恵器杯蓋(図170-6)、ピットー5から土師器杯(図171-35)が、それぞれ出土している。また、ピッ

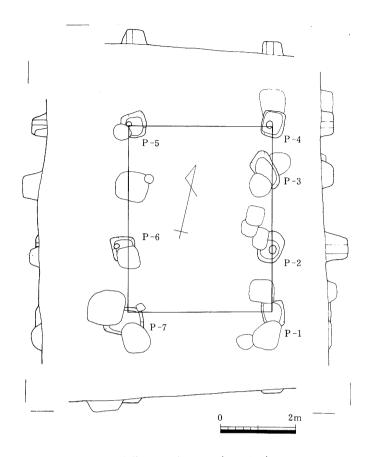


図-98 建物-63 (レベル高53.0m)

トー6・8からも、短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。いずれも掘方内からの出土であり、7世紀中葉頃の時期が考えられる。

また、ピットー1・3・4が建物ー65のピットー1・5・6にそれぞれ切られており、建物ー64が建物ー65に先行することが確認できる。また、建物ー62と軸が一致することや、規模が似ていることから同時期の可能性が考えられるが、両建物の間が1mしか開いていないため、同時期とすることに若干の疑問も残る。

#### 建物-65

梁行3間、桁行6間の建物と推定されるが、消失しているピットがあることと、柱間寸法が一定しないため、確実なことは不明である。規模は340cm×878cm。ピットの平面形は方形、円形のものがみられ、大きさも30~80cmと差が大きい。柱の直径は15cm前後と推定される。

ピット-7から、立ち上がりを有しない須恵器杯身(図170-20)と土師器杯(図171-32)が出土している。また、ピットの切り合い関係から、建物-65は建物-62~64より新しいことがわかる。これらの事実から、建物-65の時期は7世紀中葉~後葉頃になると推定することができる。

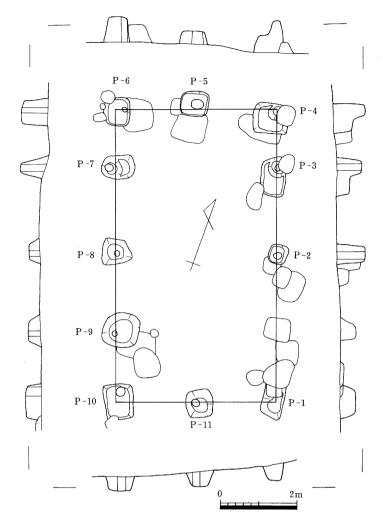


図-99 建物-64 (レベル高53.0m)

3間×2間以上の建物と推定されるが、東辺と西辺の柱間寸法が異なることから、建物とすることに若干の疑問も残る。南側は削平のため、残っていない。規模は608cm×428cm以上である。ピットは一辺50~80cmの方形平面を呈し、柱の直径は15~20cmと推定される。

ピットー4から、高台を有する須恵器杯身(図170-25・26)と、それに伴う須恵器杯蓋(図170-12)が出土している。杯身の1点(25)は柱穴内からの出土であり、他の2点は掘 方内からの出土である。これらの遺物は、8世紀中葉頃と考えられ、他の建物と比べると、かなり新しい時期になる。

建物-66と67は、軸、規模がほぼ等しくなり、建て替えによるものと考えられるが、切り合い関係は認められない。

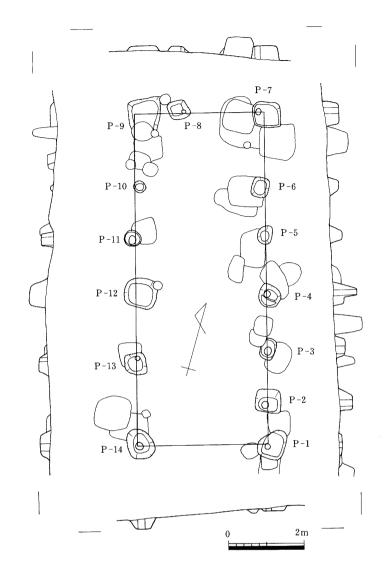


図-100 建物-65 (レベル高53.0m)

2間以上×3間以上の建物であり、ピットー4と5の間にあるべきピット、および西側、南側のピットが削平のため消失しており、全形を知り得ない。規模は380cm以上×620cm以上となる。ピットは方形平面を呈し、一辺長60~80cm、深さは10~20cmを残すにすぎない。柱の直径は10cm前後と推定できる。

ピット内からは時期を推定できる遺物は出土していないが、前述のように、建物-66に前後 する時期が考えられる。

建物-67周辺には他にもピットが存在するが、後世の削平のためか、建物を復元するまでに は至らなかった。

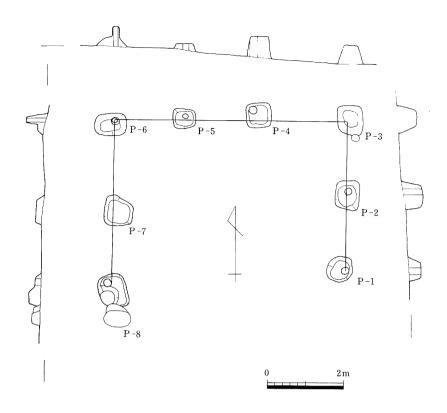


図-101 建物-66 (レベル高53.5m)

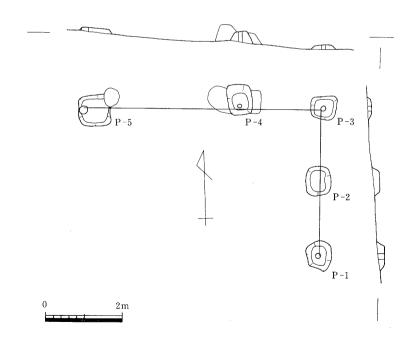


図-102 建物-67 (レベル高53.5m)

2間×2間以上の建物であり、西側は削平されている。規模は356cm×368cm以上となる。ピットは方形平面を呈し、一辺50~100cmを測る。 柱の直径は20cm前後と推定できる。

ピットー6から、短い立ち上がり を有する須恵器杯身とそれに伴う杯 蓋片が数点出土しており、7世紀初 頭~前葉の時期と考えられる。

#### 栅-16

長さ470cmを測り、4個のピットからなる棚である。削平を受けているため、更に長い棚であった可能性も考えられ、また、北側へ延びる建物の南辺であった可能性も残されて

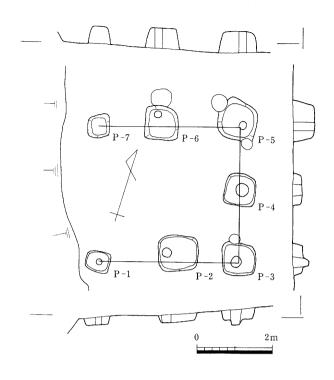


図-103 建物-68 (レベル高53.0m)

いる。各ピットは円形、もしくは方形平面を呈し、 $60\sim100$ cmの大きさを測る。柱の直径は15cm前後と推定される。

ピット内からは時期を確認できる遺物は出土していない。また、軸を等しくする建物もみられないが、建物-62に先行することは確認できる。

建物-62から65について、建物-63、64、65の順が確認でき、建物-62・64がほぼ同時期と考えられることから、7世紀前葉頃から後葉頃にかけて、順次建てられた建物群と考えられる。 建物-68は更に時期が遡ると考えられ、建物-66・67は8世紀代の建物である。

また、現在は水路によって画されている建物-14~17も、同一平坦面に存在したことになる。 建物-14の時期は不明であるが、建物-15~17はやや先行すると考えられ、建物の軸も大きく

異なり、共通点は認められない。以上の事実から、この平 坦面では、6世紀末葉頃から 8世紀代にかけて、途中断絶 をみながらも1~2棟の建物 が建てられていたと推測する ことができる。

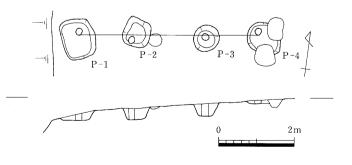


図-104 栅-16 (レベル高54.0m)

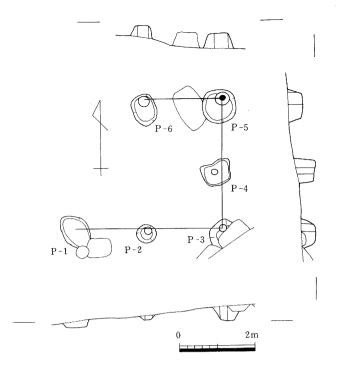


図-105 建物-69 (レベル高52.0m)

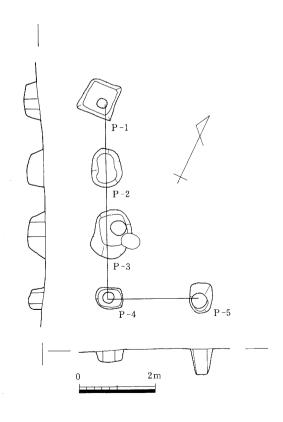


図-106 建物-70 (レベル高52.0m)

建物-69は、建物-68の約15m 南に位置する。2間×2間以上の 建物であり、規模は344cm×392cm 以上となる。柱間寸法は、それぞ れ172cm、196cm間隔である。建物 の西側は削平によって崖面となっ ており、ピットは遺存しない。

ピットの平面形は円形と方形が みられ、大きさは50~100cmを測 る。柱の直径は20cm前後と推定さ れ、ピット-5には柱の一部が残っ ていた。柱は直径14cmを測るが、 かなり腐朽している。

ピット内からは、時期の判明す る遺物は出土していない。

# 建物-70

1間以上×3間以上の建物と考えられるが、 土坑-12を囲むように位置することから、土 坑-12の覆屋、もしくは土坑-12に伴う棚か 塀の可能性がある。土坑-12は周囲を石で囲 み、水を溜めていたようであることから、覆 屋や塀を伴うことも考えられる。しかし、土 坑-12と軸が異なることに疑問も残る。ここ では、土坑-12と無関係の建物と考えることにする。

規模は240cm以上×520cm以上。ピットは方形に近い平面形となり、一辺長60~120cmである。柱の直径は25~30cmと推定される。

建物-70に伴うピット内からは時期を確認 できる遺物は出土しておらず、周辺には他の 建物もみられないため、建物-70の時期は不 明である。



図-107 遺構平面図⑨

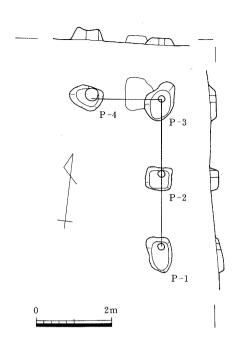
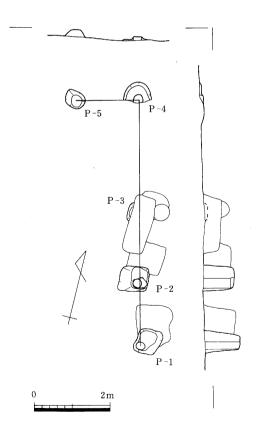


図-108 建物-71 (レベル高51.0m)



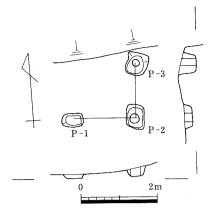


図-109 建物-72 (レベル高48.5m)

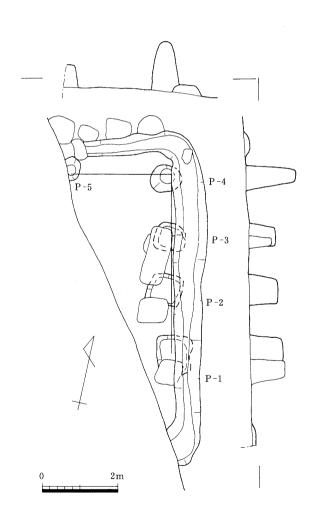


図-111 建物-74 (レベル高49.0m) 図-110 建物-73 (レベル高49.0m)

建物-71は、建物 $-62\sim68$ の位置する平坦面の西側下段に位置し、比高差2.5mを測る。かなり広い平坦面であるが、後世の削平のためか遺構の遺存状態は悪く、建物-71を1棟復元できただけである。

建物-71は、1間以上×2間以上、184cm以上×392cm以上の規模である。ピットは70cm前後の大きさを測り、柱の直径は15cm前後である。

ピット内からは時期を推定できる遺物が出土していない。

### 建物-72

建物 $-72\sim78$ は調査地西端に位置し、水路によって画される建物 $-29\sim33$ と同一平坦面に建てられている。

建物-72は1間以上×1間以上の建物であり、144cm以上×160cm以上の規模を有する。建物の西側は調査範囲外へ続いており、北側は水路によって切られている。ピットは1辺40~60cmの方形、長方形平面となり、柱の直径は20cm前後と推定される。

ピット-2 掘方内から須恵器杯身(図170-24)が1 点出土している。7 世紀末葉を前後する時期であろう。

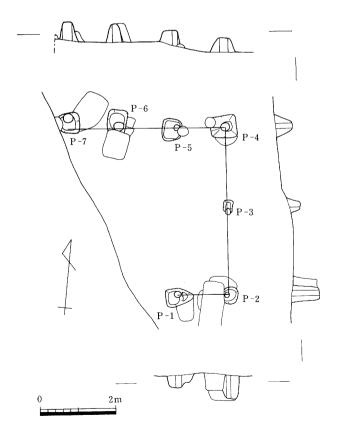


図-112 建物-75 (レベル高49.0m)

#### 建物-73

1間以上×3間以上の建物であり、西側は調査地外へ続いている。 これらのピットを取り囲むように 溝がめぐっており、建物-73に伴 う溝と考えられる。

規模は260cm以上×480cm以上となる。ピットは方形平面を呈し、1辺80cm前後を測る。また、ピットー4は深さ143cmを測る。

溝は40~80cmの幅を有し、南北 長880cmを測る。深さは南端で43 cmを残す。溝底面のレベルは北東 隅で最も高く、西、南へ、それぞ れ低くなっている。

ピット内からも、溝内からも、 時期の判明する遺物は出土してい ない。

1間以上×4間以上の建物であり、西側、南側は不明である。規模は164cm以上×640cm以上を測る。ピットの形状、大きさは一定しない。柱の直径は20cm前後と推定され、ピット-2の底には、柱を支える石が置かれている。

ピット-2から、高杯の杯部(図171-38)が出土しており、非常に短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。7世紀前葉~中葉頃であろう。

また、ピット-1・2が、建物-73のピット-1・2を切っており、建物-73が建物-74に 先行することがわかる。しかし、建物-73に伴うと考えた溝上面で検出できるはずの建物-74 のピット-4を検出できなかった。埋土が酷似したとはいえ、検出時の失敗と考えられる。これ以外にも、溝上面で検出できるはずのピットを確認できていない。

### 建物-75

梁行 2 間、桁行 3 間以上の建物である。梁行は柱間寸法220cm間隔の440cm、桁行は柱間寸法 136cm等間隔の408cmである。ピットは方形平面を呈し、一辺20~70cmの長さである。柱の直径 は20cm前後、ピットー 4 には柱の一部が残っていた。

ピットー6から須恵器甕の口縁部(図170-30)が出土しており、ピットー7から内面にかえりを有する須恵器杯蓋片が出土している。7世紀前葉~中葉の時期が考えられる。

また、ピットー6が建物-76のピット-2に切られていることから、建物-75が建物-76に先行することがわかる。

### 建物-76

2間以上×4間以上、340cm以上×640cm以上の規模の建物である。ピットー6・7は、削平のため、痕跡を留めるにすぎない。ピットは方形平面を呈し、一辺40~100cmの長さを測る。柱の直径は15~25cmであろう。調査範囲外へ続いているため、建物の全容は確認できないが、かなり削平を受けているようである。

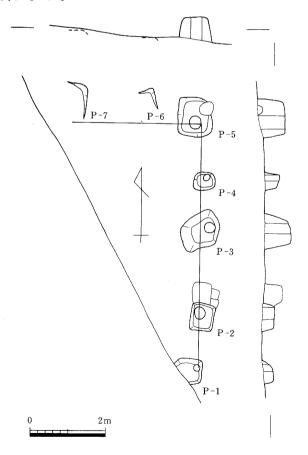


図-113 建物-76 (レベル高49.0m)

建物-76では、ピット-2から土師器の小形高杯(図171-42)と土師器の甕(図171-47)が出土している。いずれも7世紀の後半代かと思われるが、時期を決定することはできない。これ以外には、時期を決定できる遺物は出土していない。

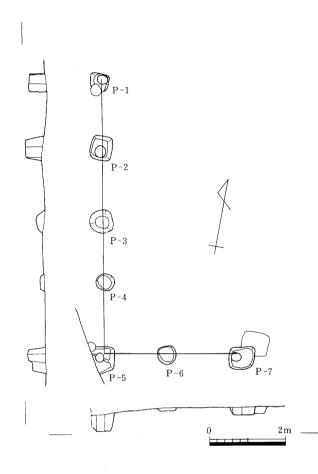


図-114 建物-77 (レベル高49.0m)

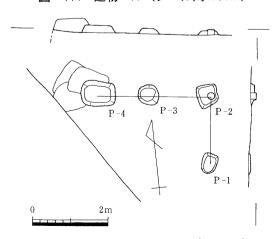


図-115 建物-78 (レベル高49.5m)

### 建物-77

2間以上×4間以上の建物。規模は344cm以上×720cm以上となり、柱間寸法は、それぞれ172cm、180cm等間隔となる。ピットの平面形は円形と方形がみられ、大きさは50~70cmである。柱の直径は20cm前後と推定できる。

ピットー2から、かえり出現前の須恵器杯蓋片が出土しており、 ピットー5から、製塩土器の小片が出土している。7世紀初頭を前後する時期であろう。

### 建物-78

1間以上×2間以上の建物であるが、調査範囲外へ続いており、 西、南側は不明である。規模は、 170cm以上×304cm以上。ピットは 方形平面を呈し、一辺長30~90cm を測る。ピット-2では、ピット

底面が柱位置のみ8cm程度掘り下げられており、柱の直径は15cm前後と判断できる。 その他のピットでは、柱位置を確認できなかった。全体に、ピットの遺存状態は非常に悪い。

ピット内からは、時期を確認できる遺物 は出土していない。また、建物-78と切り 合う建物も存在しないため、建物-78の時 期は不明である。

### 栅-17

長さ800cm、柱間寸法200cm、5個のピットから成る棚である。ピットは円形平面を呈し、直径40~50cmである。柱は直径15~20cmであろう。 削平のため、非常に遺存状態は悪い。

ピットー4から、土師器杯(図172-8)と土師器高杯の脚部(図172-9)が出土している。7世紀前葉~中葉頃の時期ではないかと考えられる。棚-17は、建物-75と184cmの間隔をおいて、ほぼ平行する。そのため、建物-75に伴う施設と考えられる。ピット内出土遺物からみても、同時期と考えることに問題はないであろう。

建物 $-72\sim78$ を改めて検討してみると、7世紀初頭前後に建物-73・77が出現し、建物-74・75、栅-17が続き、建物-76、72と7世紀後葉頃まで建てられていったと考えられる。

#### 建物-79

建物-79~86は、調査地南西部で古墳を削平して造られた標高50m前 後の平坦面に位置する。

建物-79は1間以上 $\times$  2間以上の建物であり、184cm以上 $\times$  380cm以上の規模を有する。堀方の確認が困難であったため、ピット $-1 \cdot 2$ の形状には問題もある。柱の直径は25cm前後と推定され、ピット-2の堀方は二段になっている。

P-1
P-2
P-3
P-4
P-5

図-116 棚-17 (レベル高49.0m)

ピット-2から、土師質の土錘(図171-49)が出土している。また、 図-ピット-1から短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土しており、 ( $\nu$ ~6世紀末葉を前後する時期ではないかと思われる。

# 建物-80

1間以上×3間以上の建物である。規模は232cm以上×560cm以上を測る。ピットは方形平面を呈し、1辺長 $80\sim140cm$ を測る。柱の直径は25cm前後、ピット-2のみ、底面の柱位置を掘り下げている。

ピットー4から、須恵器の杯蓋・杯身片(図170-2・8・21)と土師器の小形手づくねの高杯(図171-43)が出土している。また、ピット-3からは、土師質の土錘(図171-50)と短い立ち上がりを有する須恵器杯身が出土している。これらの遺物から、7世紀前葉~中葉の時期と考えられる。

また、ピットー $2\sim4$  が、建物-79のピットー $1\sim3$  をそれぞれ切っており、建物-79が、建物-80に先行することが確認できる。遺物から考えた前後関係も、これと矛盾するものではない。

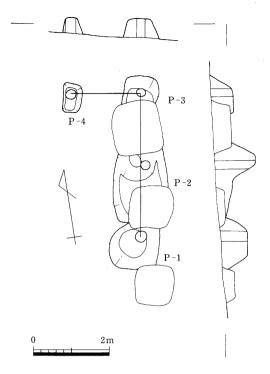


図-117 建物-79 (レベル高49.5m)

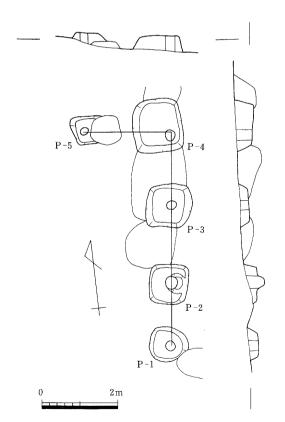


図-118 建物-80 (レベル高49.5m)

梁行2間、桁行4間以上の建物である。梁 行は180cm間隔の360cm、桁行は184cm等間隔 の736cmとなる。ピットは方形平面を呈し、 一辺長60~100cmを測る。柱の直径は20~25 cmと推定され、ピットー1・2の柱は抜き取 られている。また、ピットー5のみ、ピット 底面の柱位置を約10cm掘り下げている。

ピット-7から、短い立ち上がりを有する 須恵器杯身(図170-14)が出土している。 7世紀初頭を前後する時期であろう。

# 建物-82

梁行3間、桁行5間の建物である。ピット-7と8の間のピットが建物-83のピット-7によって消失しているが、非常に遺存状態は良好である。梁行は177cm等間隔の532cm、桁行は198cm等間隔の988cmを測る。ピットは方形平面を呈し、一辺80~130cmの長さを測る。ピットの壁面は垂直に近く掘られており非常に丁寧に掘削されている。ピットー6は南西隅のみ、底面より55cmの高さで掘り残されている。掘方掘削時の足場として使用したのであろう。またピットー11北半と、ピットー12の北東部の底面が一段掘り下げられている。柱の高さを調節したものであろうか。

柱の直径は30cm前後と推定され、規模の大きい、しっかりした建物と想像される。

ピットー4から、土師器の甕(図171-48) と、かえり出現前の須恵器杯蓋が出土しており、ピットー10から、立ち上がりを有する須恵器杯身(図170-13)が出土している。また、ピットー12の柱穴内から短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。こ

れらの遺物から、建物-82は6世 紀末葉前後に建てられ、7世紀初 頭~前葉頃に廃絶したと考えられ る。

また、ピットー7~11、13が建物-83に伴うピットに切られており、ピットー $2 \cdot 14$ が建物-84に伴うピットに切られており、ピットー $8 \sim 10$ が建物-85に伴うピットに切られている。これらの事実から、建物-82は、建物 $-83 \sim 85$ に先行することが確認できる。

#### 建物-83

梁行2間、桁行5間の建物。梁 行柱間寸法は212cm、桁行柱間寸 法は162cm等間隔となり、424cm× 808cmの規模となる。ピットは方 形平面を呈し、一辺長60~100cm を測る。ピット-2・6は二段の 堀方となる。柱の直径は25cm前後、

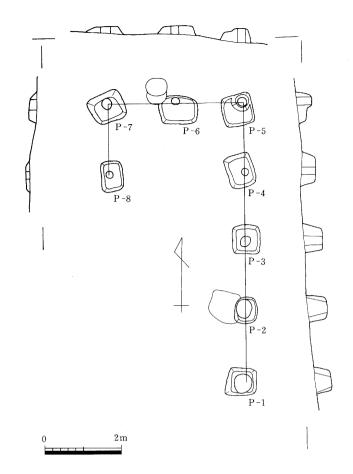


図-119 建物-81 (レベル高50.0m)

ピットー6の柱は抜き取られているようである。

ピット-11から、土師器の杯(図171-33)が出土しており、7世紀中葉 $\sim$ 後葉の時期と考えられる。

また、ピット-1が、建物-84のピット-8に切られており、ピット $-7\sim10$ が、建物-85のピット $-1\sim4$ に切られている。この事実から、建物-83が、建物 $-84\cdot85$ に先行することが確認できる。

# 建物-84

梁行 2 間、桁行 3 間の建物である。梁行は柱間寸法が232cmで、長さ464cm。桁行は柱間寸法が264cmで、長さ792cmを測る。ピットは方形平面を呈し、一辺長80cm前後を測る。ピットー 1  $\sim 3 \cdot 8$  は二段堀方となる。柱の直径は25~30cmと推定できる。

ピット-8から、短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。7世紀初頭~前葉頃と考えられる遺物であるが、切り合い関係から、建物-84は建物-83に後出することが確認されており、この遺物が建物-84の時期を示すとは考えられない。

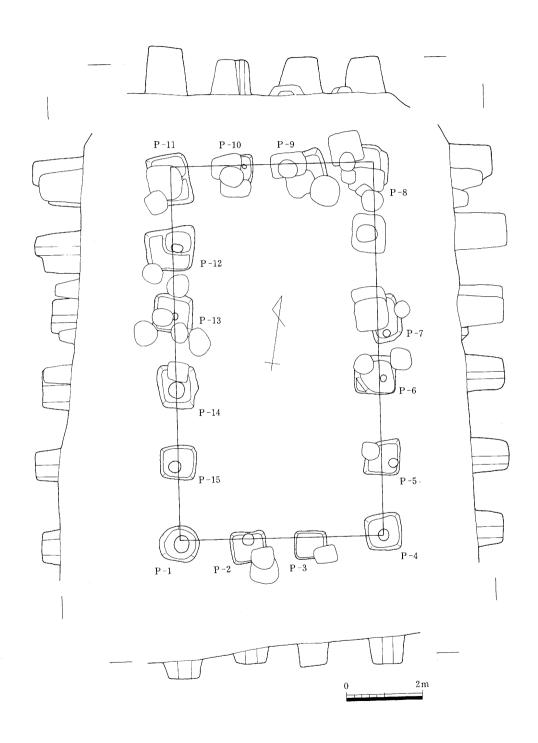


図-120 建物-82 (レベル高50.0m)

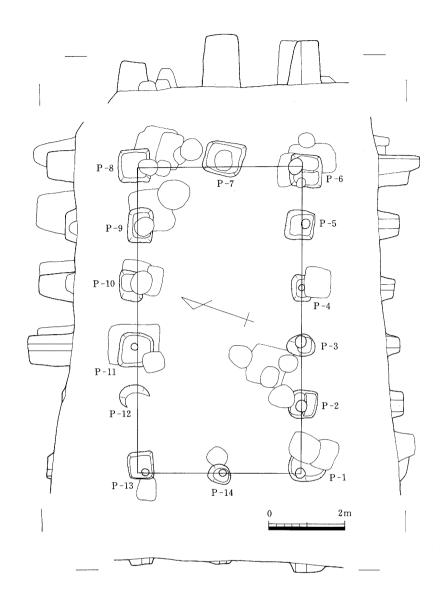


図-121 建物-83 (レベル高50.0m)

1間以上×2間以上の建物であり、他の建物が、全て地山面から掘り込まれているのに対し、建物-85は地山の上に約10cm堆積した暗灰褐色粘質土の上面から掘り込まれていた。すなわち、他の建物より層位的に新しいことが確認できる。建物-85以外に、この面で検出された遺構は存在しない。規模は196cm以上×304cm以上を測る。ピットは円形平面を呈し、直径は50cm前後となる。柱は直径15cm前後と推定される。西側、南側に続くピットは、削平のため、消失している。

ピット内からは時期を確認できる遺物は出土していない。

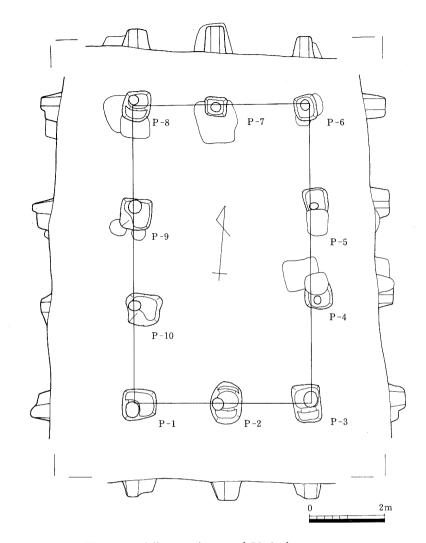


図-122 建物-84 (レベル高50.0m)

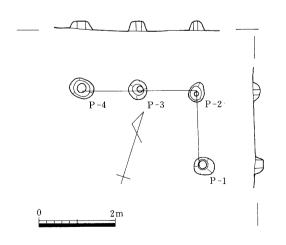


図-123 建物-85 (レベル高51.0m)

3間 $\times$  2間以上の建物を、後に 2間 $\times$  2間以上の建物に建て替えている。規模は412cm $\times$  448cm以上となり、北辺の柱間寸法は137cmを206cmに変えており、東辺、西辺の柱間寸法は224cmを測る。ピット-8は、一つの掘方内に 2本の柱を建てており、後にその中央にピット-4を掘り込んでいる。

ピットは整美な方形平面を呈し、一辺長が 120cm前後を測る。ピット-8は110cmimes 200cmの大きさである。柱の直径は約30cmである。

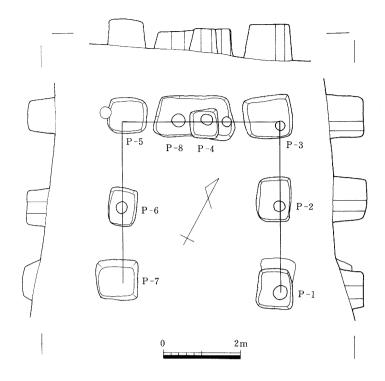


図-124 建物-86 (レベル高50.0m)

建物-86では、ピット-1から短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。7世紀初頭~前葉の時期であろう。

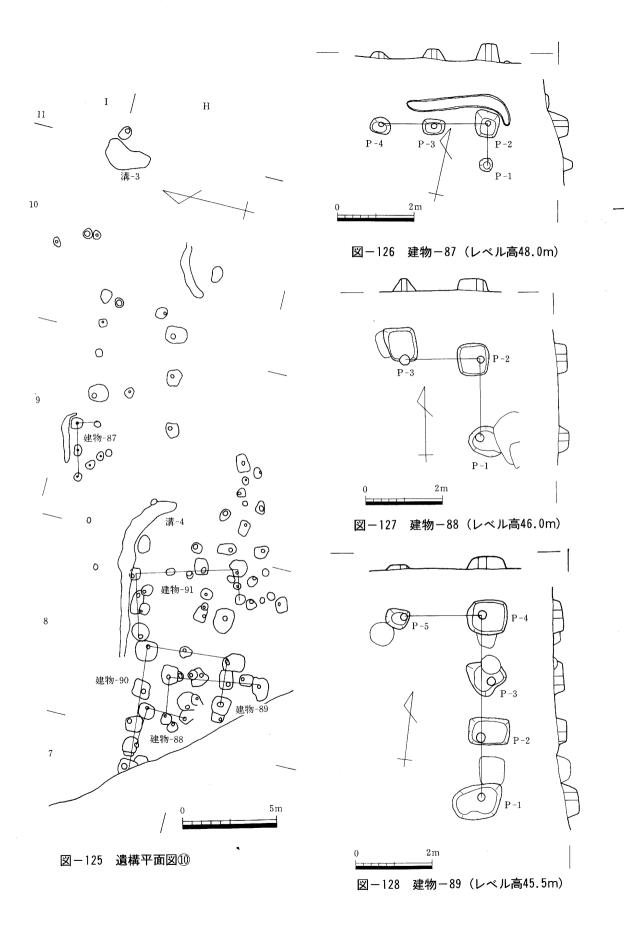
建物 $-79\sim86$ について検討してみると、建物-82、83、84、85の順は確認できるが、他の建物は、軸が大きく異なるため、同時期と推定できるものがない。出土遺物等を参考に考えると、6世紀末葉頃から7世紀後葉頃にかけて、 $1\sim2$ 棟の建物が存続したと考えられ、建物-85は8世紀以後に下ると考えられる。

#### 建物-87

1間以上×2間以上の建物で、南側は削平されている。規模は108cm以上×280cm以上。ピットー1は円形平面を呈するが、他は方形平面を呈する。大きさは40~70cmを測る。柱の直径は15cm前後であろう。ピットー2・3を取り囲むように、浅い溝がめぐっている。幅は30cm前後、深さは8cm以下である。溝底面のレベルは、西端で最も高く、南東端で最も低いことから、北側からの天水を、建物の東側を通して南へ流すための溝と考えられる。この溝は、本来、建物-87の北・東側を取り囲んでいたものと考えられる。

ピット内からは、時期の確認できる遺物は出土していない。

建物-87の南西に、建物 $-88\sim91$ が位置する。谷-2の北側にあたり、標高は $45\sim46$ mを測る。建物群の北側は急斜面となり、建物 $-79\sim86$ の位置する平坦面に至る。この建物群は、調査対象地の西側へ続いているようである。



1間以上×1間以上の建物。196cm以上×212cm以上の規模である。ピットは方形平面を呈し、一辺80cm前後を測る。柱の直径は20cm前後であろう。調査範囲外へ続いているため、西側、南側は不明である。

建物-88の時期は不明である。

# 建物-89

1間以上×3間以上、208cm以上×480cm以上の建物。ピットは方形平面を基本とし、一辺長 $60\sim120$ cmを測る。柱の直径は20cm前後を測る。西側は、調査範囲外へ広がっており、不明である。

ピット内からは、時期の確認できる遺物は出土していないが、ピット-2が、建物-90のピット-2を切っており、建物-90が建物-89に先行することが確認できる。

# 建物-90

梁行 2 間、桁行 3 間以上の建物であり、西側は調査範囲外へ続いている。規模は、 $428cm \times 656cm$ 以上を測る。ピットは方形平面を呈し、一辺長100cm前後となる。ピット $-1 \cdot 2 \cdot 6$  の 堀方は二段に掘り込まれている。柱の直径は20cm前後を測る。

建物-90の時期は不明である。

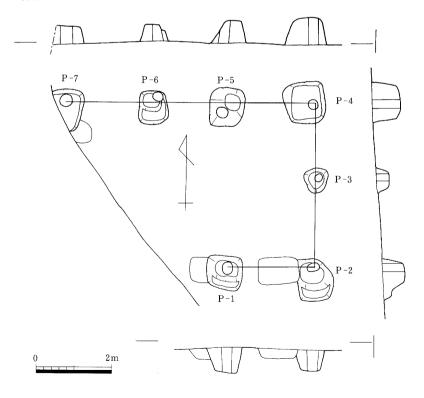


図-129 建物-90 (レベル高46.0m)

2間以上×3間の建物。規模は、328cm以上×552cm。柱間寸法は、それぞれ164cm、184cm等間隔となる。ピットー $1 \cdot 4$ は、規模が小さく、円形平面を呈するが、他のピットは方形平面を基本とする。大きさは $40\sim100$ cmとなる。柱の直径は20cm前後を測る。

建物-91を取り囲む溝-4は、建物-91に伴う施設の可能性がある。

ピットー5から、須恵器の小形台付 (20170-29) が出土している。台部を除いて、ほぼ 完存する。それ以外にも、内面にかえりを有する須恵器杯蓋片が出土しており、7世紀前葉 - 中葉頃ではないかと思える。 - 4から出土している須恵器杯蓋(2188-7 8)も、この 年代観に矛盾するものではない。

建物-87~91の中で、時期の推定ができるのは建物-91のみで、他は不明である。切り合い 関係からも、建物-90が建物-89に先行することが確認できるのみである。また、建物の軸が 一致するものは見られず、この点からも、時期の推定は困難である。上段の建物-79~86との 比較からも、時期の推定は困難である。

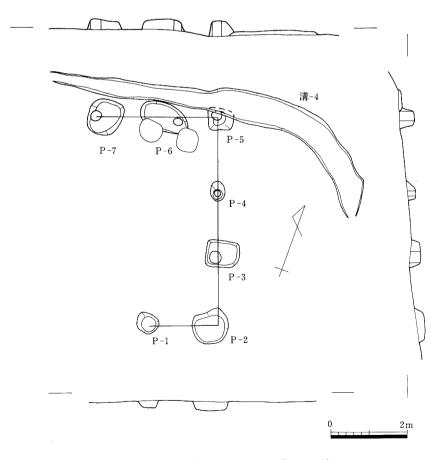


図-130 建物-91 (レベル高46.0m)

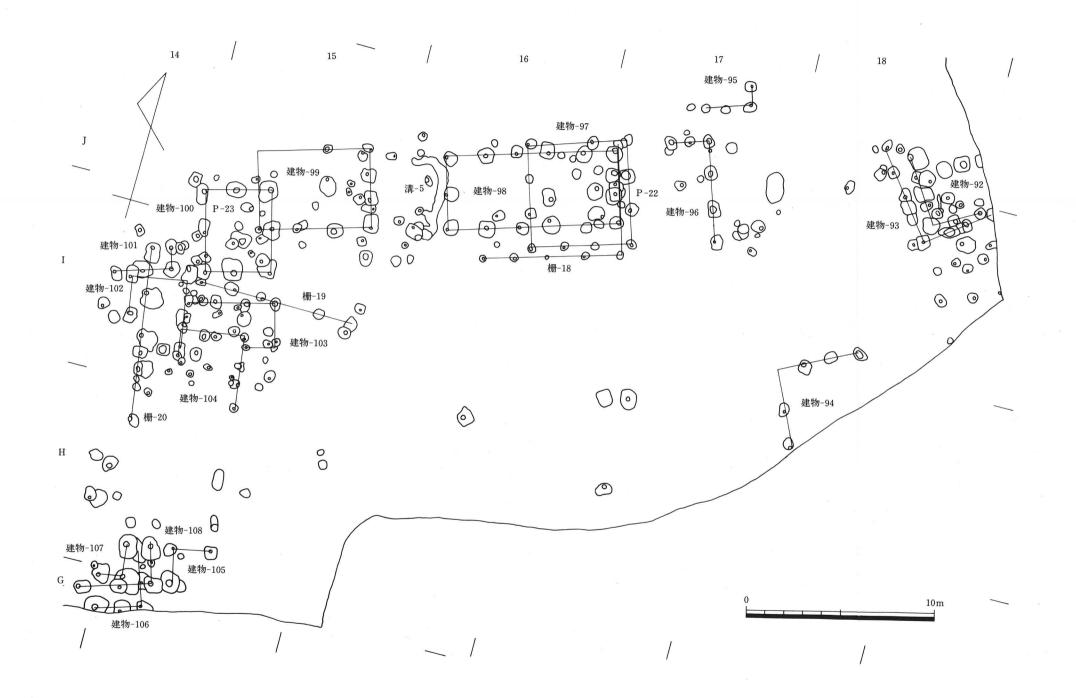


図-131 遺溝平面図①

建物-92~108は、谷-2の南側に位置し、 区画整理事業に伴って調査した建物群に続く 遺構である。

建物-92は、2間以上×2間以上の建物である。規模は272cm以上×384cm以上となり、 東側は調査範囲外へ続き、北側は谷-2への 斜面に至る。ピットは方形平面を呈し、一辺 長60~100cm、柱の直径は20cm前後と推定される。

ピットー3から、内面に鋭いかえりを有する須恵器杯蓋片が出土しており、ピットー5からは、非常に短い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。これらの遺物から、建物-92は7世紀前葉頃の時期と考えられる。

# 建物-93

3間以上×4間以上の建物であり、392cm以上×524cm以上の規模を有する。 北側は谷-2への斜面によって不明、 東側は調査範囲外へ続いている。ピットの平面形は一定しておらず、大きさも50~100cmとさまざまである。ピットー6のみ、ピット底面の柱位置部分だけ掘り下げているようである。柱の直径は15cm前後と推定され、ピットー7では、柱を抜き取っているようである。

ピット内からは、時期を推定できる 遺物は出土していない。しかし、ピットー6・7が、建物-92のピットー4 を間接的に切っていることから、建物-92が建物-93に先行することが確認 できる。

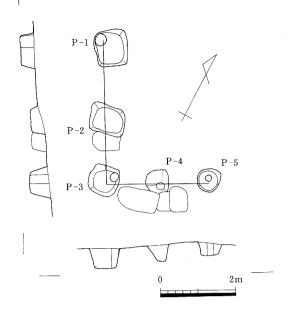


図-132 建物-92 (レベル高59.0m)

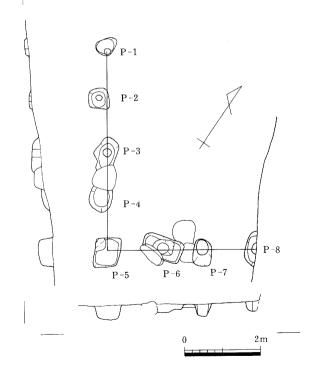


図-133 建物-93 (レベル高59.0m)

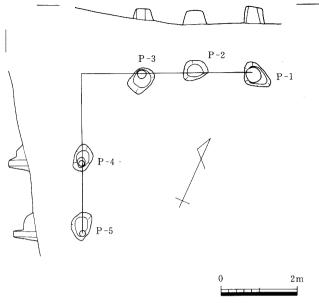


図-134 建物-94 (レベル高59.0m)

2間以上×3間以上の建物であり、南側は調査範囲外へ続いている。また、北西隅と東側のピットは、後世の削平のため、消失している。規模は424cm以上×448cm以上を測る。ピットの平面形は不整であり、60cm前後の大きさを測る。柱の直径は15cm前後と推定され、ピットー1の柱は、抜き取られているようである。ピットー4・5の底面は、柱位置のみ、25cm前後、掘り下げられている。

建物-94に伴うピット内からは、時期を推定できる遺物が出土しておらず、建物-94の時期 は不明である。

#### 建物-95

建物-95は、谷-2への傾斜面に位置し、北側は削平されている。本来は平坦面に立地したと考えられる。 1 間以上×2 間以上、112cm以上×240cm以上の規模を測る。ピットは円形、もしくは方形平面を呈し、大きさは50cm前後を測る。ピット-4 の柱直径は15cm前後と推定できるが、他のピットでは柱位置は確認できなかった。

ピット内からは、時期を推定できる遺物が出土しておらず、そのため、建物-95の時期も不明である。

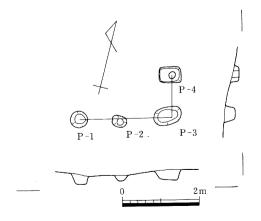


図-135 建物-95 (レベル高57.0m)

### 建物-96

2間以上×3間以上の建物である。規模は、200cm以上×528cm以上を測る。ピットは方形平面を呈し、一辺長50~80cmとなる。柱の直径は15cm前後であろう。西向きの斜面に位置し、削平のため、西側と南側のピットが消失しており、規模は不明である。

ピット内からは、時期の推定できる遺物が出 土しておらず、建物-96の時期も確定すること ができない。

3間四方の建物となり、東・西辺の長さが548 cm、南・北辺の長さが524cmを測る。柱間寸法は、それぞれ183cm、175cm等間隔となる。ピットの平面形は円形のものと方形のものがあり、大きさも40~80cmと一定しない。柱の直径は15~20cmと推定され、ピットー8と12では、柱の一部が遺存していた。ピットー8に遺存していた柱の直径は12 cmを測るが、両者とも、かなり腐朽している。また、ピットー6の柱は北西方向へ抜き取られたようであり、ピットー9底面の柱位置には、長さ24 cm、厚さ7cmの石が置かれていた。

ピット-7から、高台を有する須恵器杯身片 (図170-27) が出土しており、ピット-2から、

立ち上がりの消失した須 恵器杯身片、ピット-3 から、須恵器杯蓋の扁平 なつまみが出土している。 以上の遺物から、建物-97の年代は、7世紀後葉 ~末葉と推定される。

建物-98に伴うピット との切り合い関係につい て、建物-97が建物-98 に先行すると考えていた が、両者の切り合ってい る部分が少なく、 複雑な切り合いがあまた、 を対誤認していたようで ある。伴出遺物から考え ると、建物-98が建物-97に先行すると考えるべ きであろう。

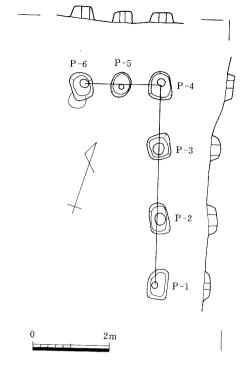


図-136 建物-96 (レベル高57.5m)

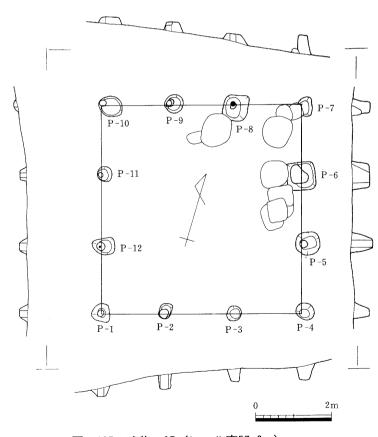


図-137 建物-97 (レベル高57.0m)

梁行2間、桁行5間の細長い建物である。規模は、梁行380cm、桁行896cmを測る。梁行の柱間寸法は190cm間隔、桁行柱間寸法は、東から176cm、176cm、152cm、176cm、216cmとなる。中央の柱間が狭く、西端の柱間が広くなっている。ピットの平面形は、方形、隅丸方形、円形とさまざまである。大きさは60~100cmを測る。柱の直径は20cm前後と推定され、ピットー14には柱の一部が残っていた。また、ピットー3の底面には、長さ60cm、幅44cm、厚さ16cmの石がピット全面を覆うように置かれていた。

ピット-12から、非常に短い立ち上がりを有する須恵器杯身(図170-16)が出土しており、これ以外にも、ピット $-2 \cdot 8$ から同様な須恵器杯身が出土している。これらの遺物から、建物-98の時期は、7世紀前葉を前後する時期と考えられる。

また、ピット-8が、-8が、-8が、-8が、-8が、-8が、-8が、-8が、-8ができる。 -97との関係については、前述のように建物-98が、-97に先行すると考えられる。

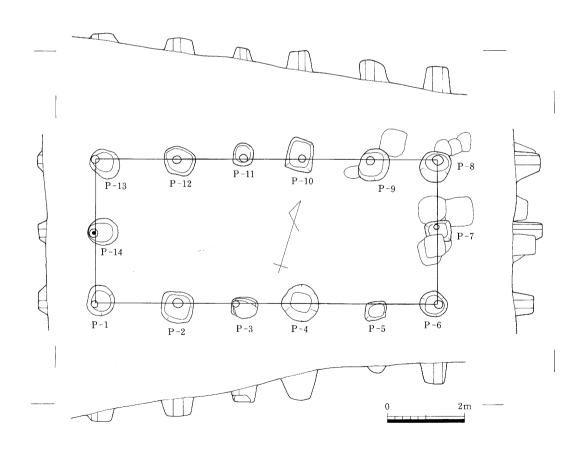


図-138 建物-98 (レベル高56.0m)

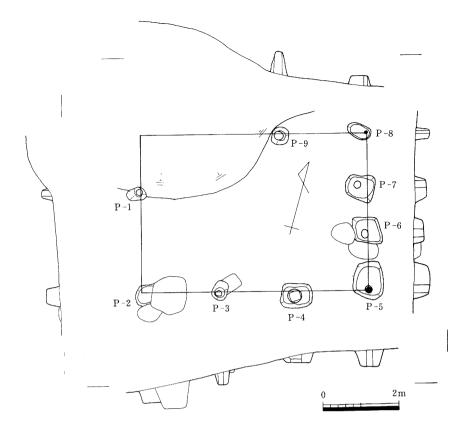


図-139 建物-99 (レベル高54.0m)

梁行 3 間、桁行 3 間の建物である。ピットー1・2 間のピットと、北西部のピットが消失している。規模は416cm×596cmを測る。ピットは30cm前後の小さいものから、100cm前後の大きさのものまでみられ、一定しない。柱の直径は20cm前後と推定され、ピットー5と8には、柱の一部が残っていた。ピットー5では、直径18cm、長さ46cmを残し、柱底部は掘方底面より18cm上位に位置する。腐朽のためであろう。ピットー8では

直径7cmを残すのみで、大部分は腐朽している。また、ピットー4底面の柱位置には、長さ30cm、幅25cm、厚さ10cmの扁平な石が置かれていた。

ピット内から、時期を推定できる遺物は出土していないが、ピット-2が、建物-100のピット-4に切られているため、建物-99が建物-100に先行することが確認できる。

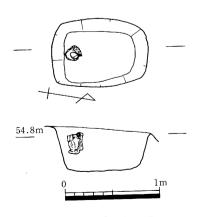


図-140 建物-99・ピット-5

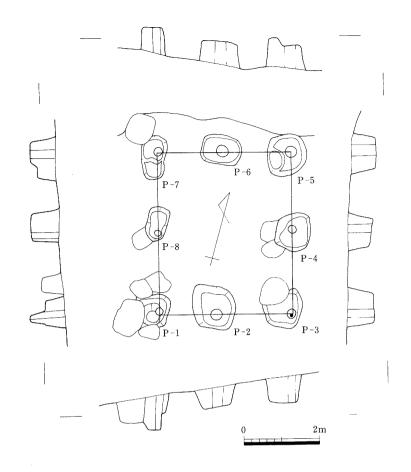


図-141 建物-100 (レベル高53.0m)

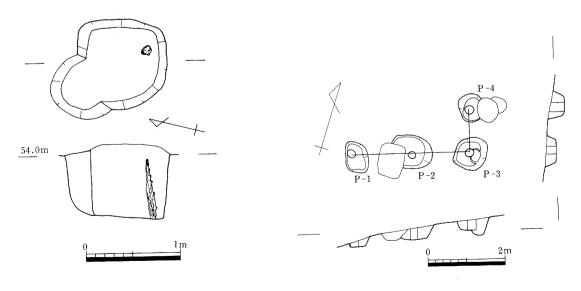


図-142 建物-100・ピット-3 図-143

図-143 建物-101 (レベル高53.0m)

2 間四方の建物である。規模は348cm×428cm、柱間寸法は174cmと214cmを測る。ピットは方形平面を基本とし、一辺長80cm前後、柱の直径は25cm前後となる。ピット-3には柱の一部が残っており、直径8cm、長さ66cmを残す。やや北へ傾いて残っている。また、ピット $-1 \cdot 5 \cdot$ 

7は二段の掘方を有するが、ピット-5では、掘り残した上段に柱が建てられたと考えられる。

建物-100の時期は確認できない。

### 建物-101

1間以上×2間以上の建物であるが、北側と西側は谷-2へ向かう斜面となっており、ピットは遺存していない。規模は108cm以上×308cm以上、ピットは80cm前後の大きさを測る。柱の直径は20cm前後であろう。

やはり、時期を推定できる遺物 は出土していないが、ピットー2 が、建物-102のピットー4に切 られており、建物-101が建物-102に先行することがわかる。

#### 建物-102

1間×2間以上の建物であるが、 梁行は中間に1個のピットを介し て2間になる可能性も考えられる。 規模は284cm×364cm以上。ピット は方形平面を呈し、一辺70~100 cmを測る。柱の直径は15cm前後と 推定される。ピットの位置や柱位 置が、やや不規則であり、建物と 考えることに若干の疑問も残って いる。

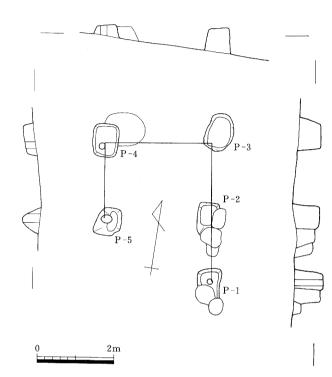


図-144 建物-102 (レベル高53.0m)

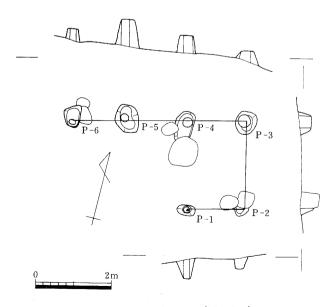


図-145 建物-103 (レベル高54.0m)

建物-102では、ピット-2から、須恵器杯身(図170-22)が出土している。杯蓋の可能性 もある器形である。これ以外に時期を推定できる遺物は出土しておらず、7世紀中葉〜後葉頃 と思える。また、ピットの切り合い関係から、建物-102が、建物-100・101に後出すること が確認できる。

# 建物-103

1間imes3間以上の建物であり、232cmimes416cm以上の規模を有する。ピットの平面は不整円形を呈し、直径は50cm前後を測る。柱の直径は20cm前後と推定され、ピット-1では、柱のごく

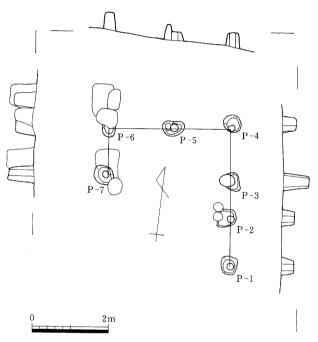


図-146 建物-104 (レベル高53.5m)

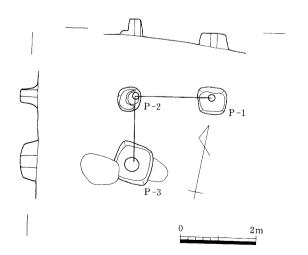


図-147 建物-105 (レベル高53.5m)

一部が残っていた。

ピット-6から、土師器の杯(図 171-34)が出土している。8世紀 中葉~後葉の時期と考えられる。

# 建物-104

2間×3間以上の建物であり、規模は320cm×360cm以上を測る。ピットは小規模な円形平面を呈し、直径は40cm前後である。柱の直径は15cm前後と推定され、ピット-3の柱は抜き取られている。また、ピット-5は、二段の掘方となるが、柱は上段に立っていたようである。

ピット-5から、短い立ち上がりを有する須恵器杯身(図170-15)、ピット-7から、立ち上がりを有しない須恵器杯身(図170-23)が、それぞれ出土している。これらの遺物から、建物-104の時期は7世紀前葉~中葉と考えられる。

また、ピットー7が、建物-102のピット-1を切っており、建物-102が、建物-104に先行することが確認できる。しかし、遺物からは、むしろ建物-104が先行するのではないかと思われ、ほとんど時期差は考えられない。

1間以上×1間以上の建物である。東側は削平のため、南側は調査範囲外へ続いているため全形は不明である。規模は180cm以上×200cm以上。ピットは方形平面を呈し、一辺長60~100 cmを測る。ピット-2は二段の掘方を有する。柱の直径は15~20cmであろう。ピット-3の柱は焼けている。

ピット内からは、時期を確認できる遺物は出土していないが、ピット-3が、建物-108のピット-3に切られていることから、建物-105が建物-108に先行することが確認できる。

### 建物-106

2間以上×2間以上の建物であるが、西側と北側は、削平のため確認できない。ピットは隅丸方形平面を呈すると考えられ、一辺長90~130cmを測る。ピットー1は二段の掘方となる。柱の直径は15~20cmと推定される。

ピットー2から、内面のかえりが消失した須恵器杯蓋片が出土しており、7世紀末葉 $\sim 8$ 世紀前葉頃と推定される。

ピットー4・5が、建物-107のピット  $-2 \cdot 3$ 、および建物-108のピット $-3 \cdot 4$ に、それぞれ切られている事実から、建物-106が建物 $-107 \cdot 108$ に先行することが確認できる。

#### 建物-107

1間以上×1間以上の建物であり、西側と北側は削平のため不明である。規模は、132cm以上×168cm以上。ピットは方形平面を呈し、一辺100~130cmの長さを測る。ピットー2は二段掘方である。柱の直径は25cm前後であろう。

建物-107の時期は不明であるが、ピット-2の柱が焼けており、軸を等しくし、やはり柱の焼けていた建物-105と同時期と考えられる。

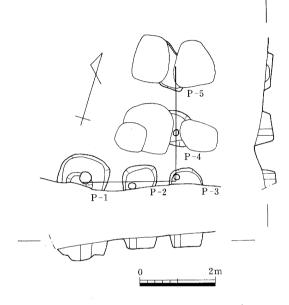


図-148 建物-106 (レベル高53.5m)

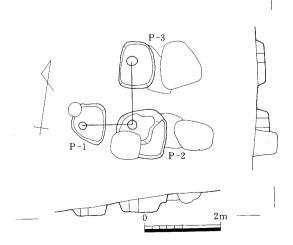


図-149 建物-107 (レベル高53.0m)

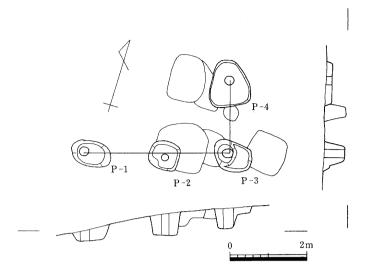


図-150 建物-108 (レベル高53.0m)

1間以上×2間以上の建物であり、やはり、西側と北側は削平されている。規模は、192cm以上×380cm以上を測る。ピットの平面形は不整形であり、大きさは70~120cmを測る。ピット-3のみ、柱位置を掘り下げた二段の掘方となる。柱の直径は20cm前後と推定される。

ピット内からは、時期を推

定できる遺物が出土していないが、ピットー3が建物-105のピットー3を切っており、ピットー3が建物-106のピットー4を、ピットー4が建物-106のピットー5をそれぞれ切っており、ピットー2が建物-107のピットー3を切っていることから、建物-108が建物-105~107より新しいことが確認できる。以上の関係から、建物-106、建物-105・107、建物-108の順に建てられたことがわかり、建物-106が7世紀末葉~8世紀前葉であることから、これらの建物は8世紀代に順次建てられたと考えられる。

なお、ピット $-2 \cdot 3$ から、炭・焼土などが出土しており、建物 $-105 \cdot 107$ が焼失後、間もなく建物-108が建てられたと考えられる。

#### 栅-18

南北2間、580cm、東西4間、712cmの2面を画する棚と考えられる。建物の一部と考えることも可能であるが、ピットや柱の規模が小さいことや、南北の柱間が広いことなどから、棚と考えておきたい。しかし、この棚に伴う建物が見られないことから、建物の一部である可能性も残しておきたい。

ピットは円形平面を呈し、直径20~50cmを測る。柱の直径は15cm前後であろう。

ピット内からは、時期の確認できる遺物は出土していないが、ピットー7が建物-98のピット-8に切られており、栅-18が建物-98に先行することが、確認できる。

#### 栅-19

長さ820cm、5個のピットから成る棚である。ピット-3・4間にも、ピットが存在したと考えられる。ピットの底面のレベルは、東から西へ順に下がっており、おそらく傾斜面に作られた棚と考えられる。かなりの削平を受けているようであり、更に長かった可能性も十分に考えられる。

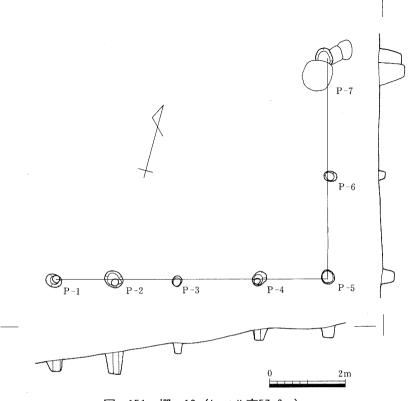


図-151 棚-18 (レベル高57.0m)

ピットは円形平面を呈し、直径40~60cmを測る。柱の直径は10~15cmと推定される。ピット - 3 では、柱位置のみ、掘方底面より約13cm深くなっている。柱の直径が小さいことから、掘った後に据えたものではなく、柱を打ち込んだものと考えられる。

ピット内からは、時期を確認できる遺物は出土していない。また、周辺の建物群の軸とも大きく異なり、-19を伴う建物は想定困難である。よって、-19の時期は、全く不明と言わざるを得ない。

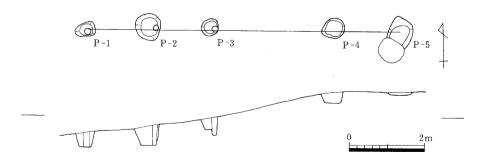


図-152 栅-19 (レベル高54.0m)

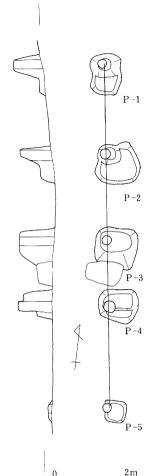


図-153 棚-20 (レベル高53.0m)

### 栅-20

5個のピットから成る南北方向の棚であり、東側の平坦面と西側の斜面との境に位置する。長さは908cmを測り、柱間寸法は不揃いである。ピットは方形平面を呈し、一辺長60~110cmを測る。ピットー1・2・4の掘方は二段となり、ピットー4では、下段から更に12cm掘り込んで柱を据えている。柱の直径は25cm前後と推定され、ピットー1には、柱のごく一部が残っていた。

栅−20の時期も全く不明である。

以上の調査結果より、建物 $-92\sim108$ について更に検討を加えると、最も古く遡るのが、建物 $-92\cdot96\cdot98\cdot99$ 、棚-18などであろう。その時期は、7世紀前葉を前後する時期と考えられる。その後、7世紀後葉 $\sim$ 末葉に至るまで2棟前後の建物が存続し、8世紀代に至っても、建物 $-106\cdot105\cdot107\cdot108\cdot103$ などが $1\sim2$ 棟ずつ存続したものと推定できる。確実に時期を把握できる建物が少ないため、詳細は不明である。

飛鳥・奈良時代の掘立柱建物は108棟、棚は20列に達する。掘立柱の性格上、遺物の出土が少なく、まして時期の推定できる遺物はごく限られてくる。そのため、掘立柱建物の時期を推定できない例が多く、時期を推定できる場合でも、1~2個の図化も不可能な遺物に頼らなければならないことが多い。

また、7世紀代の土器編年は確立しておらず、年代観の個人差が大きい。そのうえ、土師器にも須恵器にも、地域色が認められるよ

うである。機会があれば検討してみたいと考えているが、私の年代観では、かえりを有する須恵器蓋杯の出現は7世紀前葉頃と考えられ、立ち上がりを有する須恵器は7世紀中葉頃まで存続したのではないかと考えている。したがって、7世紀前葉~中葉は、両者の併存する時期と考えられる。

以上の編年観から、これら掘立柱建物群を概観してみると、6世紀末葉頃から建物が建ち始め、7世紀前葉~中葉にかけてピークを迎えたようである。その後、徐々に数が減り、8世紀代になると、急激に建物の数は少なくなる。出土遺物等から考えると、7世紀前葉~中葉に20棟以上の建物が集中し、8世紀代と推定される建物は、わずか9棟にすぎない。これらの結果は、高井田遺跡におけるこれまでの調査結果にほぼ一致し、高井田遺跡全体についての傾向ということができる。

## B. 井戸

井戸は2基、土坑は15基について報告する。井戸と土坑は、水の湧出が認められるものを井 戸としている。

# 井戸-1

井戸-1は、上面で楕円形、下部では隅丸方形の平面形を呈する。上面では長径384cm、短径357cmを測る。深さ140cm前後までは、擂鉢状の傾斜面となり、それ以下では、ほぼ垂直の壁面となり、長辺153cm、短辺134cmの大きさである。

土層から見る限りでは、擂鉢状をなす部分については、 $2\sim3$  度の掘り返しが想定される。第4層の赤褐色粘質土と灰色粘質土が混じった土層には、多量の大小の自然石が含まれている。これより上層が最終の埋戻しと考えられる。その下の第5層・灰色粘質土は第6~8層を掘り込んだものである。第6~8層は、自然埋没層と考えられるが、第8層・暗燈色シルトの堆積以前に、第9層淡赤褐色粘質土を掘り込んでおり、その際に、地山も掘削しているようである。第1~8層内からは、8世紀代の遺物が出土しているが、良好な遺物は少ない。

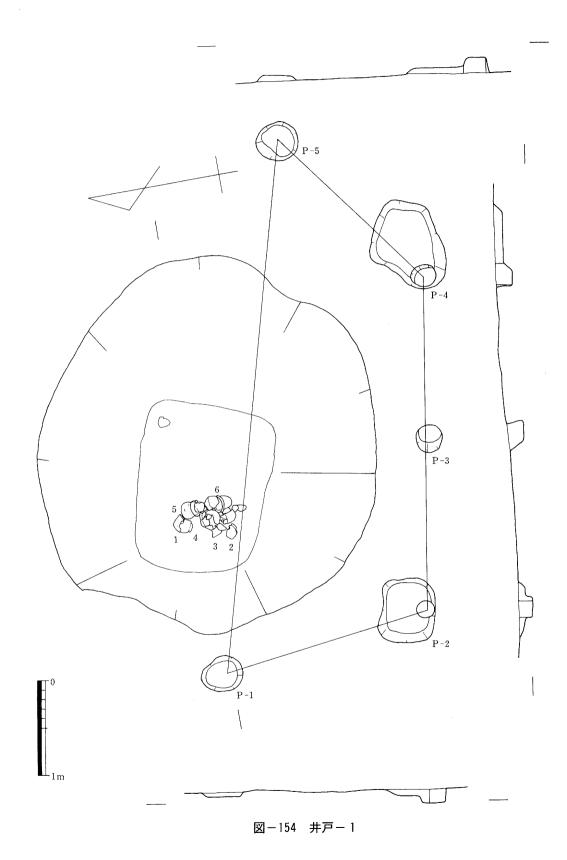
第9~11層は、水分を多く含んだ粘質土である。 T. P. 47.6mで底と考えられたが、壁面の暗青灰色粘土と、埋土の青灰色粘質土が酷似しており、見極めが困難であった。この暗青灰色粘土の地山は、 T. P. 48.7m以下でみられ、この層から、かなりの湧水が認められる。

出土遺物は、第9層から良好な遺物が出土しており、第10層・灰褐色粘質土上面で土師器の甕・羽釜( $1\sim6$ )の一括遺物が出土している。更に、T. P. 48.0m付近の第11層・青灰色粘質土からも土師器甕(12)、須恵器広口壺(16)が出土しているが、第9層からの出土遺物と時期差は認められない。(図174・175)

甕・羽釜( $1\sim6$ )の出土状況は、平面図に示したように、横倒しの状態で密集して出土している。甕(3)は、かなり破損した状況であったが、他は完形に近い。同一場所から、自然石も数点出土している。

井戸-1は7世紀後葉~8世紀初頭と考えられ、その後、若干の掘り返しはあったものの、8世紀代の間に、完全に埋められているようである。

また、井戸-1の周囲に、5個のピットがみられ、井戸-1に伴うのではないかと考えられる。5 個のピットは中軸線より南側で検出され、ピット-1と5が直径80cmの円形平面であり、ピット-2と4が長辺140cm近い長方形の掘方を有し、掘方底面の柱位置のみを16~18cm掘り下げている点で、それぞれのピットが酷似する。ピット-2  $\cdot 4$  間には、小さなピット-3 が存在する。これら5 個のピットは、井戸-1 の足場であったのではないだろうか。5 個のピットによって不整台形の板張りの足場を作ったものと思える。このように考えると、擂鉢状の井戸-1の水汲みも容易に可能となる。ピット内から時期を確定できる遺物が出土していないため、この足場が、井戸-1の掘削時まで遡るかどうかは確認できない。



**- 102 -**

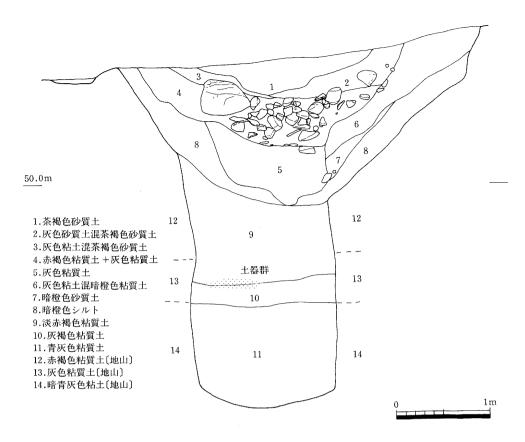


図-155 井戸-1断面土層図

#### 井戸 - 2

井戸-2は、谷-2の北側に、建物-58北辺を切る形で掘り込まれている。上面での東西方向の長さが371cm、南北方向の長さが258cmを測るが、不整形な平面である。壁面は上部では緩やかに傾斜し、下部では垂直に近い傾斜となる。下部では約130cm四方の方形を呈する。

井戸-2の埋土は、ほとんど自然堆積であると考えられる。第7層・黒灰色砂質土から第11層黒色砂質土までは、炭・焼土を多量に含んでいる。また、T. P. 52.4m以下の緑灰色砂礫土の地山からは、わずかながら湧水が認められる。

井戸-2では、遺構上面から5mの深さまで掘削したが、底を検出することはできなかった。 壁面の地山が堅固であるとはいえ、それ以上の掘削は危険を伴うため、あきらめざるを得なかった。 よって、底は未検出である。

井戸-2の東側に3個、西側に1個のピットが認められる。建物に伴うピットかもしれないが、覆屋のような施設を想定することも可能であろう。ピット-1・2は、建物-58に伴うピットを切ってており、柱の直径は15cm前後を測る。ピット-1には、直径9cmを測る柱の一部が遺存していた。南西部には、近世以降の攪乱があり、ピットは消失し、遺存していない。北辺、南辺も不明である。



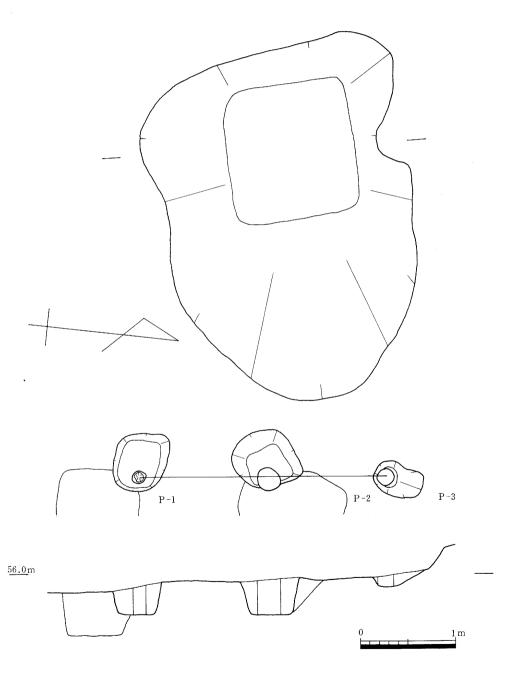
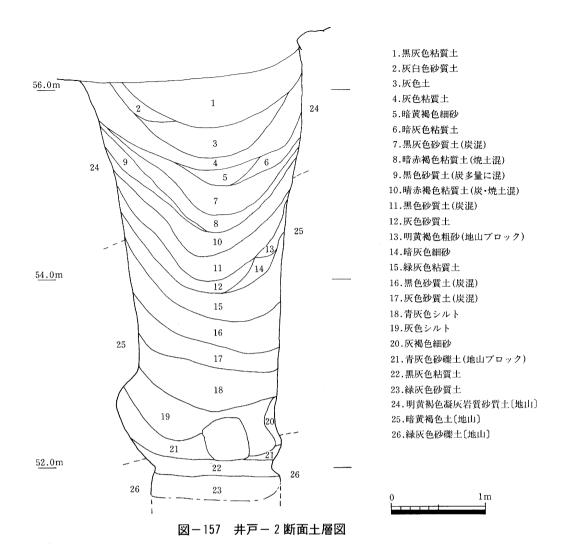


図-156 井戸-2



出土遺物は土層ごとに明瞭な時期差が認められない。そこで、明瞭に土層に差が認められる 第11層・黒色砂質土以上を上層、第12層・灰色砂質土以下を下層とした。焼土・炭を含む層は 上層にあたる。下層の遺物には、7世紀中葉~8世紀前葉の遺物が含まれている。上層の遺物 にも7世紀後葉~8世紀中葉の遺物が含まれており、あまり時期差は認められない。

以上の遺物から、井戸-2の掘削は7世紀中葉~後葉と考えられ、8世紀前葉頃に炭、焼土などによってかなり埋められ、8世紀中葉頃に埋没したと推定される。第7~11層の炭、焼土は、隣接する建物-58の焼失に伴うものではないかとも考えたが、100年近い時期差が考えられ、全く関係はないであろう。(図176~178)

また、下層からは、種々の木製品も出土している。漆塗の椀の蓋などは、非常に遺存状態の 良好なものである。

# C. 土坑

# 十坑-1

建物-1と建物-7の中間地点で検出された土坑。直径約120cmの円形平面を呈し、深さは145cmを測る。壁面の傾斜は強い。埋土は灰色粘質土の単一層である。底面から、籠が出土している。籠は細い竹を編んで作ったものであり、ほぼ完形であったが、非常に脆く、取り上げ時の破損で図化は不可能であった。土坑-1からは、土器が全く出土しておらず、時期を確認できない。

#### 十坑 - 2

谷-1の南側に位置し、長径650cm、短径320cmの楕円形平面を呈する。深さは150cmを測り、擂鉢状を呈する。土坑-2の北西部には、幅約140cmの溝状の遺構が取り付く。溝は、土坑-2の底面より約50cm高い位置から始まり、北西方向へ、緩やかに傾斜している。おそらく、土坑-2は水溜め施設であり、水が一定水量以上に溜ると、溝を通じて谷-2へ流れるように工夫されていたものと思える。土坑-2からは、7世紀代の土器が出土している。

# 十坑一3

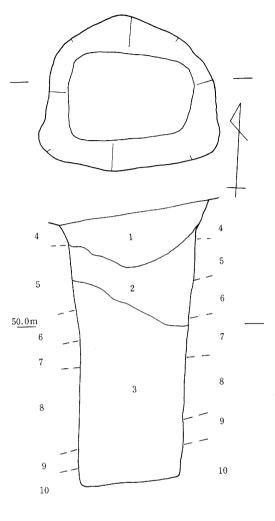
土坑-2と同様、谷-1の南側に位置する。直径120cm前後の円形平面を呈し、深さ104cmを測る。やはり、底から約60cmの高さの位置に、北向きの溝が取り付く。溝は、幅36cm前後、深さ25cmを残す。土坑-3も、土坑-2のように、一定水量以上に溜ると排水する機能を備えた水溜め施設であったと考えられる。遺物は全く出土していない。

土坑 $-2 \cdot 3$  のような水溜め施設が存在したことから考えると、谷-1 の水を、直接利用することが困難であったものと思える。谷-1 はV字状の深い開析谷であり、利用が困難であったため、生活用水は、天水を溜めて利用していたようである。ただし、建物-7 の北側付近では、谷-1 の湧水を直接利用していたことも考えられる。

# 土坑 - 4

建物-26・27の南側で検出された。長辺176cm、短辺162cmの隅丸方形状の平面形を呈する。 深さは約300cmを測り、壁面は垂直に近い。底面では青灰色シルトの地山に達しており、この 層から若干の湧水があったことも考えられるが、現在では湧水は認められない。むしろ、水溜 めとして機能したものであろう。

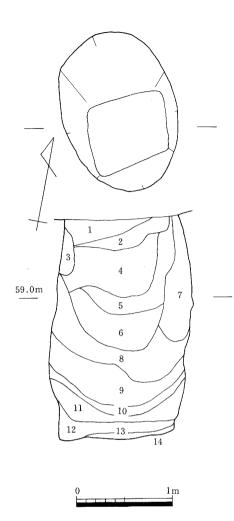
埋土は、下半が第3層・灰色粘質土と赤褐色粘質土の混じった土であり、遺物をほとんど含まない。第2層・黄褐色粘質土からは少量の遺物が出土しているのみであり、第1層・茶褐色粘質土から遺物が多数出土している。遺物は7世紀前葉~8世紀中葉のものを含んでいる。図化できた遺物は、すべて第1層からの出土であり、非常に時期幅が広い。しかし、7世紀前葉~中葉と考えられる土師器杯(2)は完形品であり、この時期に土坑-4は、既に機能していたと考えられ、掘削はそれ以前、廃絶が8世紀中葉と考えられる。(図179-1~8)





- 1.茶褐色粘質土
- 2.黄褐色粘質土
- 3.灰色粘質土+赤褐色粘質土
- 4.暗黄褐色粘土[地山] 5.灰白色砂質土〔地山〕
- 6.淡褐色粗砂[地山] 7.暗赤褐色砂礫土〔地山〕
- 8.淡灰褐色粗砂(地山)
- 9.褐色砂礫土〔地山〕
- 10.青灰色シルト〔地山〕

図-158 土坑-4



- 1.黄白色粘質土
- 2.灰色砂質土
- 3. 黄灰色砂質土[地山ブロック]
- 4.黄灰色砂質土
- 5.茶褐色砂質土
- 6.黑褐色砂質土
- 7.橙色砂質土
- 8.黄褐色砂質土
- 9. 黑褐色砂質土
- 10.淡黄褐色砂質土
- 11.暗黄褐色砂質土
- 12.黑褐色砂質土
- 13.暗茶褐色砂質土
- 14.暗黄褐色粘質土[地山]

# 図-159 土坑-8

### 十坑 - 5

土坑-5は、建物-36の北側で検出され、ピット-1との切り合い関係は明瞭ではなかった。 長径94cm、短径48cmの楕円形に近い平面形態をとる。深さは65cm。土師器の杯・鉢・甕などが 出土しており、7世紀後葉を前後する時期と考えられる。(図179 $-9\sim$ 12)

# 土坑 - 6

土坑-6は、土坑-5に接して位置する。直径110cm前後の円形平面を呈すると考えられ、深さは約40cmを残す。切り合い関係からは、土坑-6が土坑-5に先行するようであるが、土坑-6から出土した土師器杯は、8世紀代まで下ると考えられる。(図179-13)

#### 土坑-7

建物-60のピット-4を切って掘られている土坑である。長径140cm、短径100cmの楕円形の平面形となり、深さ78cmを測る。また、底面に直径30cm、深さ34cmの柱穴状の掘り込みがみられるが、性格は不明である。土師器の皿が出土しており、7世紀末葉前後の時期と考えられる。

### 土坑-8

建物-600の西方、現在の水路に接して存在する。上面での平面形は楕円形を呈するが、下面では方形を呈する。上面での規模は、長径169cm、短径118cm。下面での規模は、83cm×70cmとなる。埋土は大半が砂質土であり、湧水は認められない。壁面は、ほぼ垂直であり、深さは約240cmを測る。埋土の状況を見てみると、第6層・黒褐色砂質土の堆積以前に、一度、掘り返しているようである。よって、第 $1\sim6$ 層を上層、第 $7\sim13$ 層を下層として、遺物を区分した。

下層からの出土遺物を見てみると、土師器の杯(4)は、第8層と第12層からの出土破片が接合できた資料であり、下層内での時期差は認められないようである。時期は7世紀中葉~8世紀初頭頃であろう。上層からの出土遺物も、下層からの出土遺物と時期差は認められない。7世紀代の遺物は混入と考えると、8世紀初頭頃に掘り返され、間もなく埋まったと考えられる。(図180~182)

#### 土坑 - 9

土坑-9は、建物-49の東側で検出された土坑であり、楕円形平面を呈する。長径512cm、短径294cm、深さ20cmの浅い落ち込み状の土坑である。

土坑内からは、土師器・須恵器が出土しているが、残存状態は良好ではない。時期は、7世紀後葉 $\sim 8$ 世紀前葉と考えられる。(図 $179-15\sim 21$ )

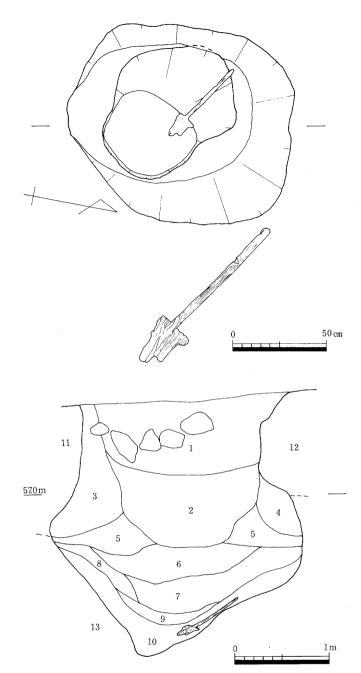
#### 土坑-10

建物-48の南、谷-2の北側に位置する。長径232cm、短径208cmの楕円形平面を呈する。壁面は垂直から外方へ張り出し、底部では擂鉢状になる。深さは約280cmを測る。埋土の観察から、第2層・灰色粘質土の堆積前に、一度、掘り返されているようである。また、第1層・黒灰色粘質土には、自然石が多数含まれている。

下層出土遺物の時期は、 7世紀後葉~8世紀前葉と 考えられ、また、上層出土 遺物も、7世紀後葉~8世 紀前葉と考えられ、時期差 は認められない。(図183 ~185)

なお、第10層・暗黄褐色 粘質土内、底面直上から、 木製の鋤が出土している。 一部欠損しているが、ほぼ 完形の鋤である。

土坑-10でも、湧水は認められなかったが、水溜めとして十分に機能するものである。中位付近での抉れや、地山ブロックが多数見られることは、滞水による壁面の崩壊と考えられる。



- 1. 黑灰色粘質土
- 2.灰色粘質土
- 3.暗赤褐色粘質土(地山ブロック)
- 4. 灰褐色砂質土(地山ブロック)
- 5.灰色砂質土
- 6. 黑褐色粘質土+褐色砂質土
- 7. 黒灰色粘質土

図-160 土坑-10

- 8.褐色砂礫土
- 9.淡緑灰色砂質土
- 10.暗黄褐色粘質土
- 11.暗赤褐色粘質土〔地山〕
- 12.灰褐色砂礫土〔地山〕
- 13. 赤褐色砂礫土〔地山〕

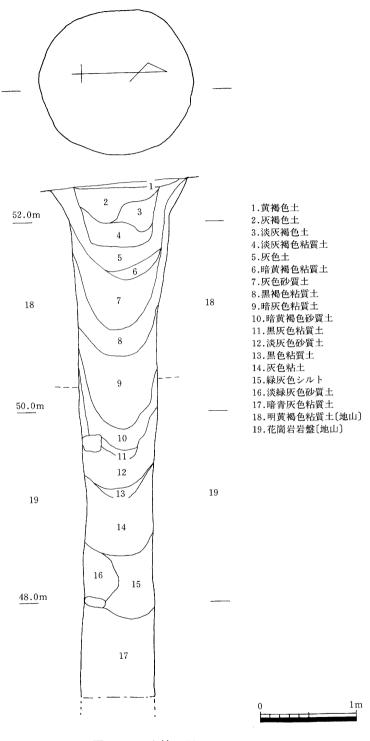


図-161 土坑-11

### 土坑-11

直径156cm前後の円形平面を呈する。壁面は、ほぼ垂直をなすが、最も狭い部分では、直径68cmとなる。約540cmの深さまで掘削したが、底には至っていない。危険を伴うため、それ以上の掘削は断念した。掘削底面の標高はT. P. 47.0mである。土坑一11では、T. P. 50.3 m付近で花崗岩の岩盤にあたっており、それ以下は花崗岩の岩盤を掘り込んでいる。花崗岩からは湧水を得難く、そのために深く掘削しているとも思えるが、その程度の知識は古代の人々も持っていたであろうから、理解に苦しむ。また、80cm前後の直径では、埋土の掘削も困難であるのに、岩盤を掘り込んでいる当時の人々の苦労が偲ばれる。

土層の観察から、第4層・淡灰褐色粘質土の堆積前に掘り返されていることがわかる。それ 以外にも、掘り返しの可能性は数箇所で認められるが、確実なものは、一箇所だけである。

出土遺物は、第 $1\sim4$  層では少なく、図化できた遺物はない。第 $5\sim8$  層出土遺物を上層とし、第9 層以下を下層とした。これは、掘削の過程で、便宜上決めたものであり、第 $8\cdot9$  層間で大きな変化が認められるものではない。

下層出土遺物の中で、須恵器杯身(3)と土師器杯(7)は、第17層・暗青灰色粘質土からの出土であるが、他は第9~14層の出土である。下層からの出土遺物は、7世紀末葉~8世紀後葉と考えられる。上層からは時期の確認できる遺物が少ないが、下層と時期差は認められないようである。なお、土坑-11からは、製塩土器の小片が多数出土している。(図186)

土坑-11は、他の土坑に比べ、少し時期が下るようである。これは、土坑-11に近い建物-66・67とほぼ同時期と考えられることに関係すると思われる。建物-66・67が建っていた頃に土坑-11は依然と使用されていたのであろう。

# 土坑-12

長辺167cm、短辺143cmの長方形平面を呈し、深さは約40cmを測る。土坑内には、平滑面を内

側に向けて $1\sim2$ 段の石で囲まれた施設が存在する。石囲み施設の内法は、一辺70cm前後の方形となる。石囲み施設の内側は、灰白色の粗砂が埋まっており、水を溜めていたものと思える。外側は砂質土や礫で埋められており、石を固定させている。

石囲み施設内の北西隅底面から正置された 土師器杯(図187-1)が出土している。他 に出土遺物は見られない。8世紀前葉頃と思 われる。なお、建物-70は、土坑-12の付属 施設の可能性がある。

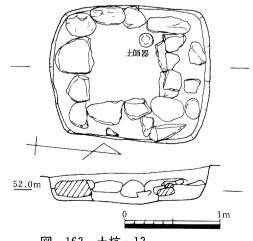


図-162 土坑-12

## 土坑-13

土坑-12の南側、南斜面の肩部に位置する。長さ約960cm、最大幅約440cmを測る不整形の土坑である。深さは約40cmを測る。

埋土からは須恵器杯身(図187-2)が出土しており、7世紀初頭頃の時期が考えられる。

### 十坑-14

土坑-12・13の東側に位置し、長径約400cm、短径約260cmの楕円形平面を呈する。底面では隅丸方形平面となり、長辺140cm、短辺110cmを測る。深さは約240cmに達する。底面から約120cmの高さの位置から南々東へのびる溝が取り付く。溝の幅は、取り付き部で約180cmを測るが徐々に狭くなり、消滅している。溝底面は緩やかに、南々東へ下がっている。

埋土を観察すると、第 $4\sim7$ 層が第 $1\cdot3$ 層に断ち切られており、第3層、もしくは第8層 堆積前に掘り返されているようである。

図化できた遺物は、いずれも第  $1\sim3$  層からの出土遺物であり、その他の層からは良好な遺物が出土していない。出土遺物は、7世紀前葉~中葉の時期と考えられる。(図 $187-3\sim8$ )

土坑-14は、土坑 $-2 \cdot 3$ と同様に、水溜め施設と考えられ、一定量以上の水は、溝を通って谷-2へ流していたと考えられる。土坑-14付近から流れる水によって形成されたと考えられる小規模な谷状の地形がみられ、谷-2へと続いている。土坑-14付近では谷-2が深くなり、谷-2の水を直接利用することが困難であったために造られた土坑と考えられる。

# 土坑-15

直径約200cmの円形平面を呈する土坑である。深さは約38cm、埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

土坑-15からは、7世紀後葉~8世紀初頭の時期の遺物が出土している。(図187-9~19)

これら以外にも土坑は存在するが、時期・性格等が不明なものは省略した。これらの土坑を 形態・機能等から考えてみると、土坑ー1・4・8・10は水溜め施設と考えられ、土坑ー2・ 3・14は一定量以上の水を排水する機能を備えた水溜め施設と考えられる。土坑ー5~7・9・ 13・15の性格は不明であるが、浅く、遺物を含んでいる典型的な土坑である。土坑ー11は、湧 水は認められないものの、井戸として掘られたものであろう。土坑ー12は不明であるが、石囲 み施設を有し、単なる土坑とは異なる。

水溜め施設と井戸は各所に分散する傾向にあり、生活用水として利用されたものであろう。 谷-1・2の流水は、調査地東端付近では利用も可能であったと考えられるが、調査地中央から西側では、谷が深すぎるため、利用できなかったようである。また、調査範囲内では、谷-1・2に伴うしがらみ等の遺構も全く認められなかった。

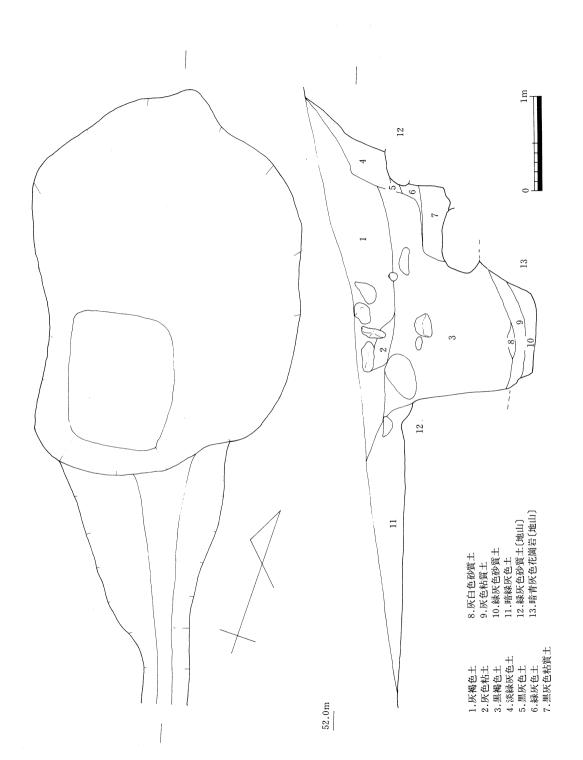


図-163 土坑-14

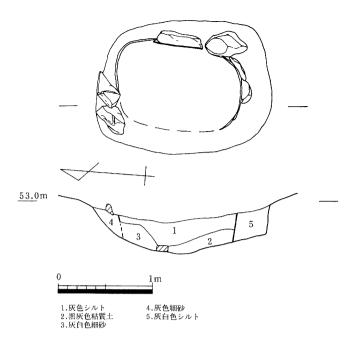


図-164 曲物-1

# D. 曲物

曲物は数点出土しているが、 土坑状に掘り込んだ底に曲物を 置いた例が2例存在する。他は 他の遺物と混在した状態で出土 している。

### 曲物-1

曲物-1は、調査地北端近く、 建物-1の西側で検出された。 谷-1の北側にあたり、現在で も若干の湧水が認められる位置 に存在する。

長辺88cm、短辺70cmの隅丸方形状の掘方の底に、やはり隅丸 方形の平面形を呈する曲物が置

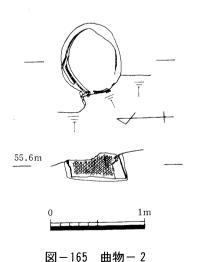
かれていた。掘方の深さは約30cmを残し、曲物の周囲は自然石で固定している。曲物の上部、 西半は削平のため、残っていない。また、残っている部分も腐朽が激しい。

曲物の裏込めには灰白色細砂・灰白色シルトが使用されており、やや外側へ倒れるような状況がみられる。なお、曲物の底板は存在しない。

また、伴出遺物がなく、時期は不明である。

#### 曲物-2

曲物-2は、土坑-3のすぐ東側で検出された。西側は破損しているが、比較的、残存状態



は良好である。曲物は直径30cm前後の円形であり、曲物より $2\sim3$  cm大きい円形の掘方を掘って、置かれている。南側は土圧のため内傾し、北側は若干外傾する。やはり底板はみられない。(図230-41)

曲物は淡灰色細砂で裏込めされており、曲物内底部には 灰白色細砂が埋まっていた。それより上部では、木の葉や 枝等を多く含む灰色粘土がみられる。

曲物-1・2は、いずれも谷-1に近い位置で検出されており、埋土から、水を溜めていたと考えられる。しかし、その性格・時期については、検出状況からは明らかにできなかった。

# E. 溝

溝は多数検出されているが、大部分が時期、性格共に不明であり、ここでは、6箇所の溝について記述する。

#### 溝-1

溝-1は建物-50に伴うと考えられる溝である。建物-50の周囲をコの字状にめぐる。溝内からは須恵器杯身・土師器杯(図 $188-1\cdot 2$ )などが出土している。7世紀前葉-後葉の遺物と考えられる。

# 溝一2

建物-54をめぐる溝である。7世紀前葉頃の須恵器杯身(図188-3)が出土している。建物-54の周辺には他の遺構が認められないので、建物-54の時期を示す遺物と考えてもよいであろう。

### 溝-3

土坑-13の南側に位置し、等高線に対して直交する溝である。溝内からは、7世紀中葉頃の 須恵器杯蓋・杯身(図188-4・5)が出土しているが、それと共に、重圏文軒丸瓦(図188-6)が出土しており、軒丸瓦が8世紀に下ることは間違いないであろう。

### 溝-4

建物-90を取り巻くように位置する溝である。須恵器杯蓋(図188-7・8)が出土しており、7世紀前葉~中葉の時期と考えられる。そのように考えると、建物-90の時期とも矛盾しない。

### 溝-5

建物-98の西側に位置し、コの字状にめぐる溝であるが、溝-5のすぐ西側が大きく削平されており、建物に伴う溝であるか否かは不明である。

幅は40cm前後、南北の長さが約400cmである。深さは20~30cmを測り、溝底面のレベルは中央付近が最も高く、南北にそれぞれ低くなっている。

溝内から出土した須恵器杯身(図188-9・10)から、7世紀前葉を前後する時期と考えられる。

### 建物-37~44上層溝

建物-37~44の周辺には多数の溝が存在する。いずれも、溝が建物のピットを切っており、 溝のほうが新しいことがわかる。溝は部分的につながり、縦横に延びている。あるいは、耕作 に伴う溝かと考えられるが、不明である。

構内からは7世紀代の遺物も出土しているが、須恵器有蓋短頸壺の蓋(図188-11)は、8世紀代に下るため、溝の時期は8世紀代と考えられる。7世紀代の遺物は、建物に伴う遺物の混入であろう。

# 平安時代の遺構

# 建物-109

建物-67と69の間に、建物-109が位置する。 2 間×5 間の身舎の北と東に庇を伴う。身舎に伴うピットは、2 個欠失しており、ピット-12の位置が、やや北にずれる。庇に伴うピットは、北東部分の4 個を欠失している。身舎は422cm×1070cm、庇の幅は、北側で160cm、東側で152cmを計測する。ピットは円形平面を呈し、直径30cm前後となるが、庇に伴うピットは、やや規模が小さくなる。柱の直径は18cm前後と推定され、庇の柱は直径12cm前後であろう。

ピット-9 掘方内から、黒色土器の椀(図209-1)が出土している。10世紀であろう。他にも、土師器の小片などが出土しており、建物-109は10世紀代と考えられる。

建物-109以外にも、 $10\sim11$ 世紀と考えられる遺物が出土しているピット( $P-24\sim26$ など)があるが、建物を復元するには至っていない。(図 $209-4\sim6$ )

#### 溝-6

溝-6 は、建物-109のピット-18付近から始まり、西へ広がっていく溝である。西側は、後世の削平によって確認できないが、現存長17.8mを測る。最大幅は約10m。深さは西端で、約120cm を測る。埋土は暗黒褐色粘質土である。

溝-6からは、黒色土器椀、土師器小皿・甕などが出土しており、10世紀代の溝と考えられる。(図209-2・3・7 $\sim$ 9)

#### 鎌倉時代の遺構

平安時代末期から鎌倉時代にかけての時期、すなわち12世紀後半から13世紀にかけての遺構 を、ここで扱う。

この時期の建物は復元できなかった。しかし、土坑-17の南西に位置するピット-27や、建物-62の位置にあるピット-28・29などから、瓦器椀(図 $210-1\sim3$ )が出土しており、建物が存在したことは確実である。いずれも小規模なピットである。

#### 十坑-16

建物-31の位置にあり、南側は、すぐ水路である。平面形は直径130cm前後の円形となり、深さは100cm強となる。下層には $20\sim30$ cmの自然石が多数含まれている。

遺物は瓦器椀、小皿、土師器小皿、土師質羽釜などが出土しており、12世紀後半頃の時期と思われる。(図 $210-4\sim6$ ・ $9\sim12$ ・14・17)

どのような目的で使用されたかは不明であるが、規模・形態等から水溜め施設と考えられる。 下層の自然石は意図的に投げ入れられたものと考えられ、12世紀後半頃に、埋められたのでは ないだろうか。

土坑-16に近接する位置には、他に同時期の遺構は認められない。

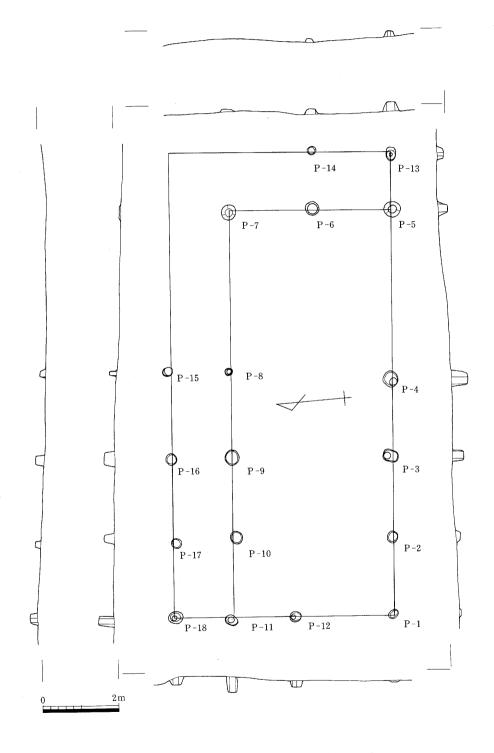
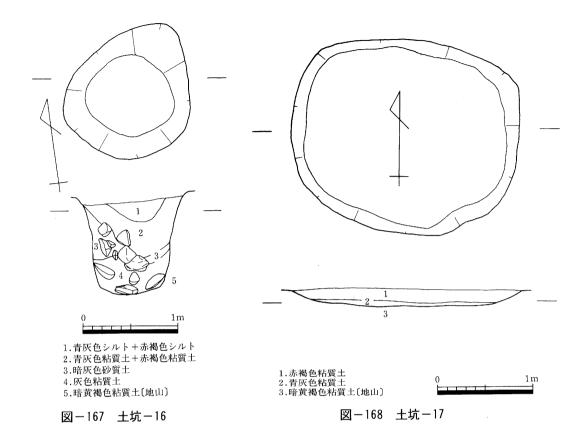


図-166 建物-109 (レベル高53.0m)



#### 十坑-17

土坑-17は、土坑-16の北西約15mに位置する。長径約240cm、短径約200cmの楕円形の平面を呈し、深さは約20cmの浅い土坑である。埋土は、上層が赤褐色粘質土、下層は青灰色粘質土である。

瓦器椀(図210-7)等が出土している。時期の確認できる遺物が少ないが、土坑-17の時期は13世紀前半頃であろう。

# 溝

土坑-17の周辺には、幅20cm前後、深さ10cm前後の溝が数本存在した。溝内からは、瓦器椀、土師器小皿、青磁椀などが出土している。13世紀頃の溝と考えられるが、性格は不明である。 (図210-8・13・15・16・18)

平安時代以後の遺構は遺存状態が悪く、建物は1棟を除いて復元できなかった。遺物・遺構は数箇所から出土しているが、まとまった状況ではなく、当時の生活を推定するまでには至らない。また、8世紀以後、連綿と集落が存続するのではなく、100~200年の空白の後、数十年間の生活が認められる状況が、繰り返されているようである。

### 古墳

調査地区南西部、建物-79~86の位置する平坦面で、古墳の周溝と考えられる溝が検出された。溝は2m前後の幅を有し、やや弧を描いて延びている。長さは約4mまで確認できている。この溝内に、3本の円筒埴輪が立っていた。最も北側の埴輪は、溝の内側の斜面を切るように立っており、中央の埴輪は、内側の斜面と底面の間に、そして南側の埴輪は底面中央に、それぞれ立っていた。溝の埋土は、上層が暗黄褐色砂質土、下層が緑灰色砂質土である。溝内からは、他の遺物は出土していない。

北側と南側の円筒埴輪は、体部二段めまで、中央の円筒埴輪は、体部一段めまで残っていた。いずれも埴輪より3cm前後大きい円形のピットを掘り、その中に埴輪を置いている。埴輪は一段めの凸帯付近まで、灰色粘質土で埋められる。また、埴輪の内部も一段めの凸帯付近まで、同質の土で埋められている。

この3本の埴輪以外にも、南西の斜面肩部で下半部が完存する円筒埴輪が、原位置を留めていると考えられる状況で出土している。これら4本の埴輪から古墳の墳丘を復元すると、直径約14mの円墳となる。3本の埴輪の心々距離を測ると、184cmと170cmになる。これらの数値から、直径14mの円墳と仮定すると、約177cm間隔で25本前後の円筒埴輪が立て並べられていたと考えられる。(図211・212)

このように復元すると、溝の北側が、まっすぐ延びすぎているように思えるが、これは地形に影響されたためであろう。等高線の張り出しから考えると、この周辺は南西へ張り出す小尾根上にあたると考えられ、山側、すなわち北側の周溝が浅く、しかも山側へ寄った位置にめぐらされていたものと考えられる。

なお、墳丘は7世紀代の掘立柱建物を建てる際の造成によって、完全に削平されている。か ろうじて、周溝の一部と、周溝内の埴輪が残されたと考えられる状況である。

また、建物-7の南側で埴輪群が検出されている。円筒埴輪が大部分を占め、一括投棄された状況であった。接合の結果、埴輪の大半が下半部のみを残すものであり、口縁部は、ほとんど認められなかった。また、埴輪群からは5世紀末葉頃の須恵器と6世紀末葉頃の須恵器が出土している。これらの状況から考えると、建物-8・9周辺に5世紀末葉頃の古墳が存在し、6世紀末葉頃までに円筒埴輪の上半が破損するような状況であった。その古墳を、墳丘もろとも完全に削平し、埴輪のみ、この位置に一括投棄したと考えられる。それは、やはり6世紀末葉頃の掘立柱建物建設に伴うものであったと考えられる。(図213~216)

この2基の古墳は、5世紀末葉を前後する時期と考えられ、いずれも、木棺直葬を埋葬施設とする古墳であったと考えられる。これ以外の場所からも、同時期と考えられる埴輪が多数出土しており、他に数基の古墳が存在したと考えられる。しかし、いずれも掘立柱建物建設等に伴って削平されたようであり、古墳の痕跡は確認できていない。

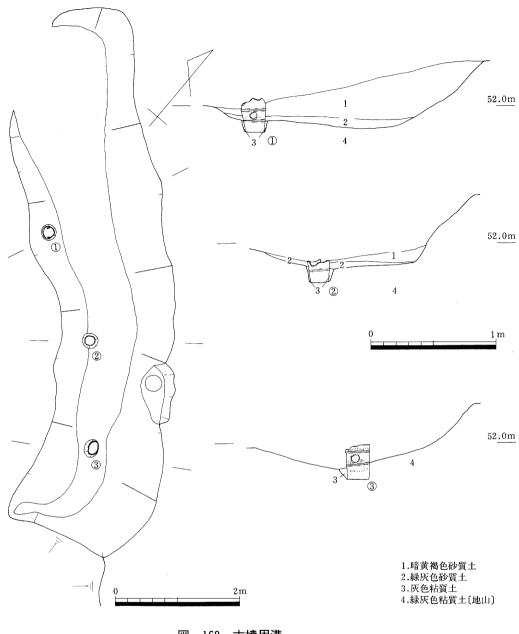


図-169 古墳周溝

高井田から、安堂、太平寺にかけての山麓部には、5世紀末葉~6世紀前葉頃の木棺直葬を 主体とする古墳が数十基は存在したと考えられる。残存状態が悪く、確認できないものが多い のが残念であるが、これらの古墳と集落の関係、そして木棺直葬墳と横穴式石室墳との関係等、 残されている課題は多い。

#### 3. 遺物

飛鳥・奈良時代の遺物

### A. 建物 (図170・171)

 $1 \sim 31$ は須恵器、 $32 \sim 50$ は土師器である。以下、建物ごとに、出土遺物について略記する。

**建物-7** ピット-6から須恵器杯蓋(3)が出土。口径に比して、器高の高いタイプの杯蓋である。

建物-10 ピット-3から須恵器杯蓋(4)が出土。口縁部のみの破片であるが、器高は高くなると思われる。

建物-12 ピット-3から土師器小形高杯(44)が出土。脚部のみであるが、手づくねによるものであり、器高は低く、脚部は大きく広がる。

建物-13 ピット-5柱穴から須恵器杯蓋(1)が出土。口縁部に強い回転ナデを施す。器 高は低くなるであろう。

建物-19 ピット-4から土師器高杯(40)が出土。杯部を欠損する。脚は端部で、大きく外方へ張り出す。杯部内底面にはラセン暗文を、脚裾部には横方向の5分割のヘラミガキを施す。脚部は鋭いヘラケズリがみられ、上半は10面、下半は11面の面をなす。脚部内面はナデ、裾部は横方向のヘラケズリを施す。

建物-21 ピット-1から須恵器杯蓋(7)、ピット-11から土師器小形高杯(41)が出土。 杯蓋はつまみを欠損する。蓋内面にかえりを有し、かえり下端は、口縁下端よりやや下方に位置する。小形高杯は手づくね、杯部は浅く、全体をナデで仕上げる。比較的、丁寧な調整である。

建物-29 ピット-4から須恵器高杯(28)が出土。杯口縁部を欠損する。脚はラッパ状に 広がり、端部は上方へ立ち上がる。二段三方に細い長方形の透孔がみられ、脚部中央に2条、 下方に1条の凹線がめぐる。

建物-33 ピット-5から須恵器杯蓋(11)が出土。天井部から、なめらかに口縁端部に至り、端部に強いナデを施す。天井中央に、非常に薄いボタン状のつまみを付す。

**建物-42** ピット-4から土師器杯(36)が出土。表面が剝離しているため、暗文・調整は不明である。

建物-48 ピット-2から須恵器杯身(19)が出土。非常に短い立ち上がりを有し、外面底部は回転へラ切り未調整。

建物-50 ピット-6から土師器の小形の杯(37)が出土。全体をナデで仕上げる。

**建物**-52 ピット-3から土師器高杯(39)が出土。杯部を欠損する。脚部外面はタテ方向のナデ、裾部はナデ。内面はナデ、ユビオサエで調整する。

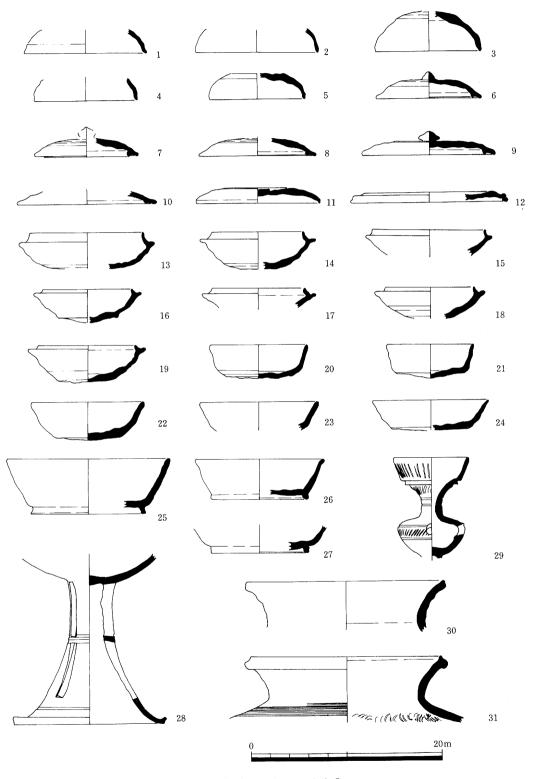


図-170 建物ピット内出土遺物①

建物-55 ピット-1から須恵器杯身(17)、ピット-5から須恵器甕口縁部(31)、ピット-9から土師器鉢(45)が出土。杯身は短い立ち上がり、浅い体部を有する。甕の口縁部は外反し、端部で厚く肥厚する。外面は平行叩きからカキメ調整。内面には同心円の当て具痕が残る。土師器鉢は推定口径29.8cmを測る。口縁端部は、つまみ上げ気味に、強いヨコナデを施す。内面には放射二段暗文を施す。外面下半はヘラケズリ調整。

建物-56 ピット-4から須恵器杯蓋(10)、ピット-5からも須恵器杯蓋(9)が出土している。9・10ともに、口径14cm前後を測り、内面に鈍いかえりを有する。9は、やや扁平な宝珠状のつまみを付す。

建物-60 ピット-2から土師器の小形甕(46)が出土。口径9.6cm、器高7.3cmを測る。口縁部は直立から端部で外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテ方向のユビナデ、体部内面は板ナデ調整。口縁の一部を欠くが、他は完存。

建物-64 ピット-2から須恵器杯蓋(5)、ピット-4から須恵器杯蓋(6)、ピット-5から土師器杯(35)が出土している。5の杯蓋は器高が低いものである。6の杯蓋は内面にかえりを有し、乳頭状のつまみを付す。杯(35)は外面指頭調整、内面に放射暗文を施す。

建物-65 ピット-7から須恵器杯身(20)、土師器杯(32)が出土。須恵器杯身は、体部からまっすぐ口縁部に至る。土師器杯は、深く、口縁部は端部でやや外反する。暗文は磨滅のため確認できない。

建物-66 ピット-4から須恵器杯蓋(12)、杯身(25·26)が出土。杯蓋は、口縁部で屈曲し、端部で肥厚する。25は大形の杯身で高台も高い。25·26ともに、底部から斜上方へ直線的にのびる口縁部を有し、26の口縁端部はやや外反する。

建物-72 ピット-2から須恵器杯身(24)が出土。口縁部は斜外方へ大きく開く。

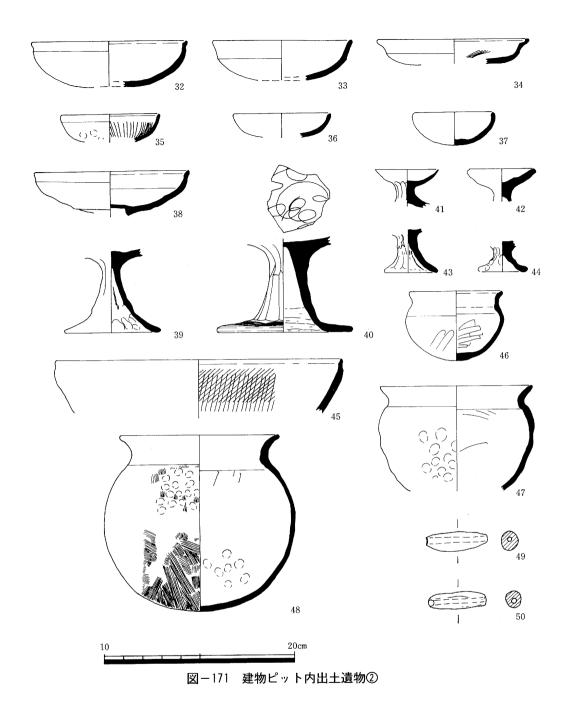
建物-74 ピット-2から土師器高杯(38)が出土。挿入式の脚部は残っておらず、杯部は ほぼ完存する。外面に弱い段がみられ、口縁部はヨコナデによってやや外反する。

建物-75 ピットー6から須恵器の甕口縁部(30)が出土。ゆるやかに外反する。

建物-76 ピット-2から土師器小形高杯(42)、甕(47)が出土。高杯は脚部下半を欠損する。杯部は斜上方にまっすぐのび、器壁が厚い。甕は、扁平な球形の体部を有し、口縁部は外反する。体部外面は指頭調整、内面は板ナデ、口縁部はヨコナデ調整である。

**建物**-79 ピット-2から土錘(49)が出土。長さ6.4cm、直径2.1cm、孔径0.5cm。全面をナデで仕上げる。

建物-80 ピット-3から土錘(50)、ピット-4から須恵器杯蓋 $(2\cdot8)$ 、杯身(21)、土師器小形高杯(43)が出土している。土錘は、長さ6.1cm、直径1.7cm、孔径0.5cm。ナデ仕上げ。杯蓋(2)は内面にかえりがみられず、杯蓋(8)は内面にかえりを有する。杯身は底部から直線的に口縁部に至る。高杯は杯部と脚部を接合した痕跡を残す。ナデ仕上げである。



建物-81 ピット-7から須恵器杯身(14)が出土。短い立ち上がりを有する。

建物-82 ピット-4から土師器甕(48)、ピット-10から須恵器杯身(13)が出土。甕(48) は球形の体部がら外反する口縁部を有する。外面はタテ方向を基本とするハケメの後、肩部を指頭調整、内面は上半が板ナデ、下半が指頭調整である。杯身(13)は直立する立ち上がりを有し、底部は回転ヘラケズリ調整である。

建物-83 ピット-11から土師器杯(33)が出土。表面剝離のため、暗文等は不明。

建物-91 ピット-5から須恵器の台付小形 (29) が出土。台部を欠損するが、他はほぼ 完存する。扁平な体部から細い頸部が外反し、鋭い稜線と段をなした後、斜上方へ口縁部がまっすぐのびる。口縁部と頸部上半にへラ描きによる連続した文様がみられ、体部には連続した刺突文をめぐらせる。また、頸部中央と体部の文様帯上下に凹線がめぐる。

建物-97 ピット-7から須恵器杯身(27)が出土。低い高台部分のみを残す。

建物-98 ピット-12から須恵器杯身(16)が出土。非常に短い立ち上がりを有する。底部は回転ヘラ切り未調整。

**建物-102** ピット-2から須恵器杯身(22)が出土。底部はやや丸味を有し、口縁部は斜上方へのびる。

建物-103 ピット-6から土師器杯(34)が出土。屈曲した口縁部は端部で肥厚する。外面 ヘラケズリ、内面に斜放射暗文を施す。

建物-104 ピット-5から須恵器杯身(15)、ピット-7からも須恵器杯身(23)が出土している。15は短い立ち上がりを有し、23は立ち上がりを伴わない。

# B. 栅(図172)

棚-2 ピット-4から須恵質の製品(6・7)が出土している。おそらく、7の体部に口縁部(6)が取り付くのであろう。6は破片からの図であるため、直立した体部に内弯する口縁が続くものかもしれない。体部には鍔が取り付き、3~4ケ所で鍔を支えるための粘土の補充がみられる。器壁は厚く、口縁端部は尖り気味になる。外面はタテ方向の板ナデと部分的なタテハケ、内面は左上がりの板ナデ、ハケメを施す。全形は不明であるが、羽釜であろう。

棚-4 ピット-4から須恵器の甕(5)が出土している。口縁部は外反から立ち上がり、 厚くなる。口縁端面は凹面をなす。外面は平行叩きを回転ナデによってスリ消し、内面は同心 円の当て具痕を部分的にスリ消している。

棚-5 ピット-3から須恵器杯身(3)が出土。口縁部は外反気味に開く。

棚−6 ピット−1から須恵器杯蓋(2)が出土。非常に鈍いかえりを有し、口径・器高が 大きい。つまみを欠損する。

棚-8 ピット-5から須恵器杯蓋(1)が出土。内面にかえりを有する。

棚-11 ピット-1から須恵器趣の口縁部(4)が出土。口縁部は斜上方へのびる。頸部との境には弱い段がみられ、ヘラ記号らしき線刻がみられる。

棚-17 ピット-4から土師器杯(8)と高杯(9)が出土。杯は器高が高く、口縁部は端部で外反する。外面は指頭調整。口縁部はヨコナデ調整である。内面は表面剝離のため、暗文等は不明である。高杯は脚部のみ残る。脚はラッパ状に開き、杯部との接合部には粘土の補充がみられる。外面はタテ方向のナデ、裾部はヨコナデを施す。内面にはシボリメが残り、裾部は指頭調整する。

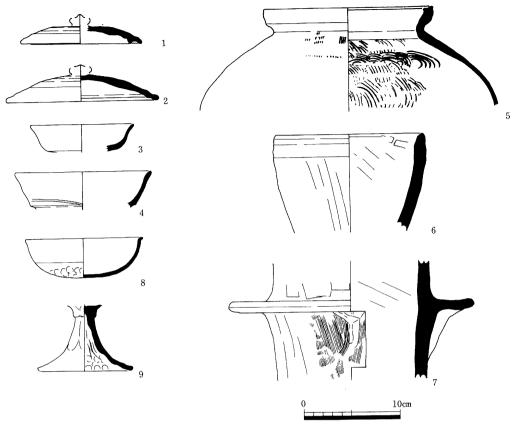


図-172 棚ピット内出土遺物

# C. ピット (図173)

建物・棚を構成しないピットから出土した遺物をここで扱う。  $1 \sim 14$ は須恵器、 $15 \sim 29$ は土 師器である。

 $1 \sim 3$ は、かえりを有しない杯蓋。それぞれ、ピット-14、21、8から出土している。

 $4 \sim 6$  は、内面にかえりを有する杯蓋。それぞれ、ピット-13、23、7から出土している。

 $7 \sim 9$  は、かえりの消失した杯蓋。扁平なつまみを伴い、小形のもの( $7 \cdot 8$ )と大形のもの

(9) がみられる。 $7 \cdot 8$ はピット-22、9はピット-1から出土している。

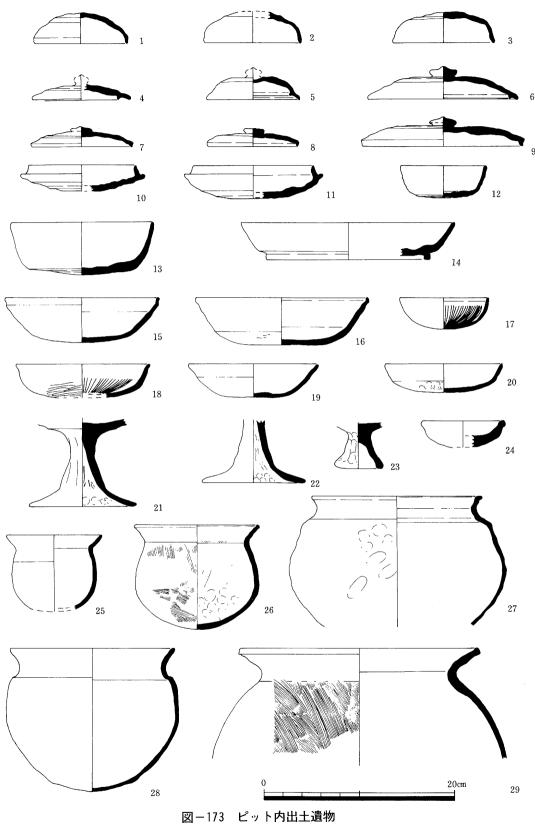
10・11は、立ち上がりを有する杯身。10の器高は低い。ピットー3、20から出土。

 $12 \cdot 13$ は、立ち上がりが消失するが、高台を有しない杯身。13は大形である。ピット-10、1から出土。

14は、高台を有する杯身。口径は大きい。ピット-1から出土。

15・16は、大形の杯。口縁端部を強くヨコナデする。表面剝離のため、調整・暗文は不明である。ピット-15、19から出土している。

17~20は、小形の杯。17・18には放射暗文が残るが、他は不明。外面調整は17・19がナデ、



18がヘラケズリ、20が指頭調整である。それぞれ、ピット-4、12、16、18から出土している。 21・22は高杯。杯部との境に段を有する。外面タテ方向のナデ、裾部ヨコナデ。内面はシボリメが残り、裾部は指頭調整。ピット-2、5 から出土。

23は、手づくねの小形高杯。全面をユビナデによって調整する。ピットー7から出土。

24は、製塩土器。器壁が厚く、浅い。ピット-9から出土。

25~29は、甕。25は小形で、内外面ナデ仕上げである。ピット-23から出土。26は口縁端部が、やや肥厚する。体部外面と口縁部内面はハケメ、体部内面は上半が右上がりのヘラケズリ、下半が指頭調整である。ピット-19から出土。27は扁平な体部に直立から端部で外反する口縁部を伴う。体部外面は指頭調整、内面はナデ仕上げ。ピット-11から出土。28は外面指頭調整、内面丁寧なナデ調整。ピット-11から出土。29は大形の甕。外面は左上がりの細かいハケメ、内面は上半がナデ、下半はヘラケズリ調整である。ピット-1から出土。

# D. 井戸

井戸-1 (図174・175)

 $1 \sim 16$ の遺物が出土。  $1 \sim 6$  は遺構平面図(図154)に出土状況を示したものである。

 $1\sim5$  は、土師器甕。体部と頸部の境で屈曲し、口縁が段をなしてのびるもの( $1\cdot2$ )と、体部から滑らかに外反する口縁部へ至るもの( $3\sim5$ )がある。いずれも、外面は指頭調整、内面は丁寧なナデ調整であるが、 $3\cdot4$  の体部内面にはヨコ方向のハケメを施している。6 は、土師器羽釜。小形で、器壁が厚い。鍔は、やや上向きに取り付き、口縁は強く外反する。体部外面はナデ、内面は板ナデの後、ナデ調整、口縁部はヨコナデ。鍔下面から体部全体に煤が付着。淡褐色~暗褐色を呈し、甕と同一の胎土である。通常の茶褐色を呈する羽釜とは胎土が異なる。

7~12は土師器、13~16は須恵器である。

7はミニチュアの甕。丁寧なナデによって仕上げる。8は杯。暗文の有無は不明。9は小形の甕。外面は指頭調整。内面は口縁部、体部ともに板ナデの後、ナデ。10~12は甕。いずれも外面指頭調整、内面ナデで仕上げるが、10の内面には、ナデに先行する板ナデの痕跡が残る。 甕は残存状態の良好なものが多く、形態や調整が似ている。

13は須恵器長頸壺の体部から頸部にかけての破片である。肩部は明瞭に張り、頸部から徐々に開いて口縁部に至る。

14~16は広口壺。外方へふんばる高台を有し、張り出した肩部から滑らかに外反する口縁部に至り、口縁端部では水平に外反した後、直立気味に肥厚する。体部下半は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。いずれも、同形態であり、口縁部が数ケ所で打ち欠かれている。井戸からの出土遺物であり、何らかの意味を有するものであろう。口縁部の打ち欠きは、土師器では認められない。

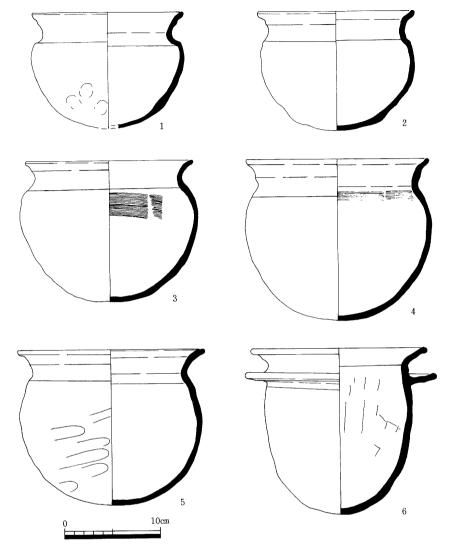


図-174 井戸-1出土遺物①

# 井戸-2 (図176~178)

井戸-2からは、 $1\sim41$ の遺物が出土している。 $1\sim8$ は下層出土の須恵器、 $9\sim22$ は下層出土の土師器、 $23\sim31$ は上層出土の須恵器、 $32\sim41$ は上層出土の土師器である。

 $1 \cdot 2$  は杯蓋。内面のかえりは消失しているが、器高は高い。扁平なつまみを伴う。  $3 \sim 5$  は高台を有する杯身。 5 は口径が大きく、器高は低い。いずれも高台は低く、口縁は斜上方へまっすぐにのびる。 6 は壺の口縁部。口縁端部は肥厚し、下端は垂下する。外面に 3 条の凹線がめぐる。外面は平行叩きの後、回転ナデ、内面も同心円の当て具痕を回転ナデによって、ナデ消している。 7 は鉢。平らな底部から、斜上方へ口縁部が立ち上がり、端部は丸くおさめる。回転ナデ調整であるが、外面下半は剝離のため、調整不明。

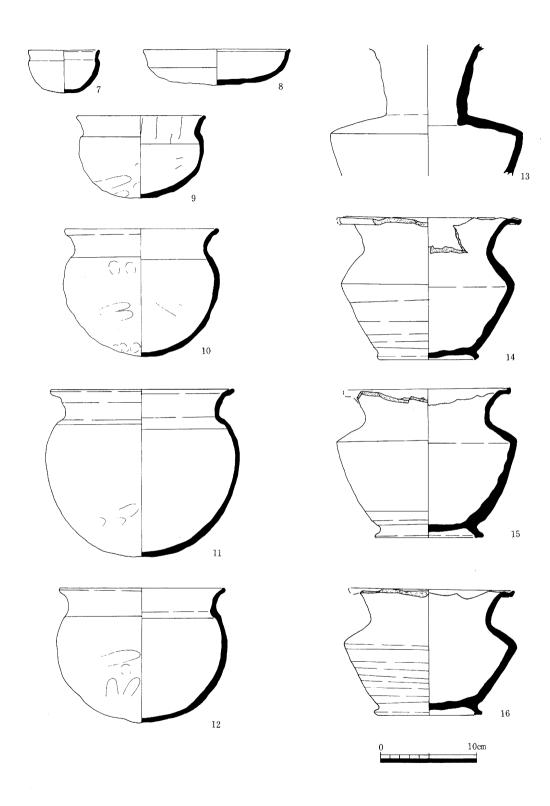


図-175 井戸-1出土遺物②

8は、かなり遺存状態の良好な壺である。体部最大径は上方に位置し、直立する頸部から外 反する口縁部に至る。口縁端部は斜下方へ張り出す。口縁部外面には、1本のへラ描きによる 波状文が3段にめぐるが、波状文は雑である。体部外面は平行叩きを回転ナデによってスリ消 している。上半は丁寧な回転ナデを施すが、下半は雑なため、叩き目がよく残っている。体部 内面は同心円の当て具痕をスリ消しているが、当て具痕は、よく残っている。頸部から口縁部 は回転ナデ調整。

9・10は土師器の蓋。器高は低く、非常に扁平なつまみを付す。9は、つまみの上面にラセン暗文を施し、外面天井部に4分割のヨコ方向のヘラミガキ、口縁部にヨコ方向のヘラミガキを施す。10も外面天井部に4分割のヘラミガキ、口縁部にヨコ方向のヘラミガキを施し、内面にラセン暗文を全面に施す。11~15は杯。いずれも、内面に放射暗文、見込みにラセン暗文を施す。11は外面全体にヘラミガキを施すが、他は外面を指頭調整、ナデによって調整するのみである。16は鉢。表面剝離のため詳細不明であるが、外面にヨコ方向のヘラミガキ、内面にラセン暗文を施す。外面下半はヘラケズリ、他はナデ調整。口縁端部は内側へ屈曲する。17は高台を有する杯。内面に放射二段暗文、見込みにラセン暗文を施す。外面は全面にヨコ方向のヘラミガキを施す。

18はミニチュアの甕。内外面ともに板ナデ調整。19は把手付きの壺。高台を有する。把手は 欠損するが、大きく弯曲する把手であろう。体部はやや扁平な球形を呈し、口縁部はほぼ直立 する。外面全面にヨコ方向のヘラミガキを8分割に施す。口縁部はヨコナデ、外面の一部にタ テハケが残る。内面は布によるナデ。20は甕。やや細長い体部から外反した口縁部は、端部で つまみあげられる。外面ハケメ、内面はヘラケズリ調整。21・22は羽釜。21は鍔が水平に取り 付き、口縁部は直立から外反し、端部で上方へ肥厚する。それに対し、22は鍔がやや上向きに 取り付き、口縁部は緩やかに外反する。体部外面タテハケ、内面は指頭調整。口縁部はヨコナ デ、21の内面にはヨコハケが認められる。

23~41は上層から出土した土器である。

 $23\sim25$ は杯蓋。23は内面にかえりを有する。 $26\sim30$ は杯身。26は高台を伴わず、口縁部は外方へ聞く。 $27\sim30$ は、いずれも高台を伴う。31は短頸壺。口縁は短く、直立する。体部外面は平行叩きをナデ消しており、内面も同心円の当て具痕をナデ消している。肩部に「 $\times$ ] の $^{-}$  記号がみられる。

32~41は土師器。32は杯蓋。外面には4分割のヘラミガキを施し、つまみ上面にはラセン暗文を施す。33・34は杯。内面に放射暗文、見込みにラセン暗文を施す。外面底部はナデ調整。口縁部は内弯気味に肥厚する。35は高台を有する杯。内面に放射二段暗文を施し、放射暗文の間にラセン暗文を一重にめぐらす。見込みはラセン暗文を施す。外面はヘラミガキを密に施す。高台は高く、下端は内方へやや屈曲する。

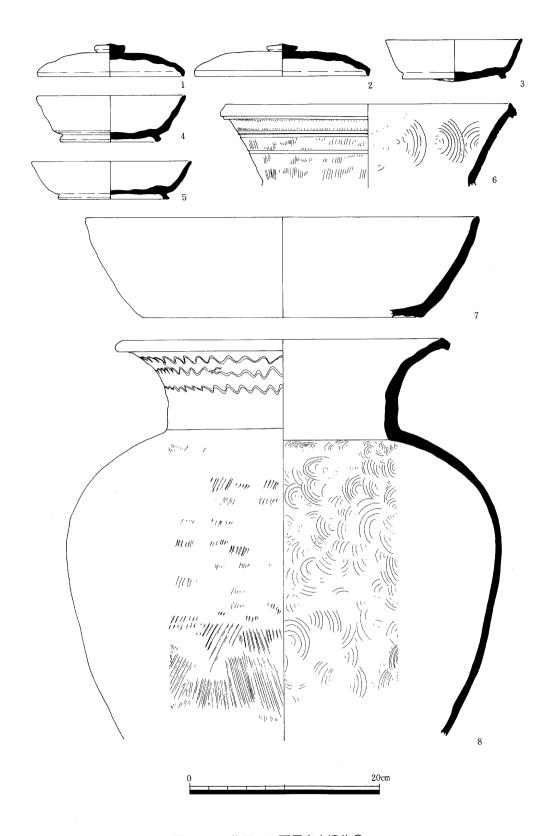
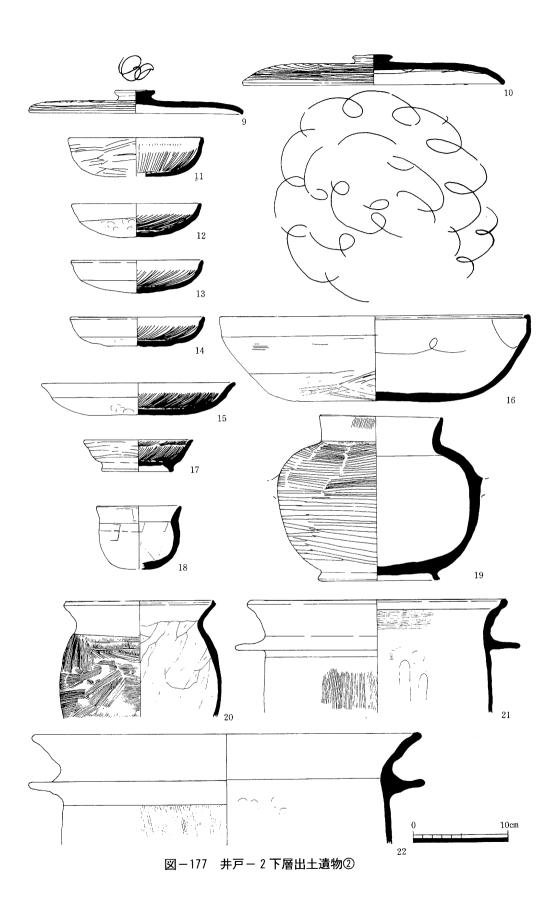


図-176 井戸-2下層出土遺物①



-133 -

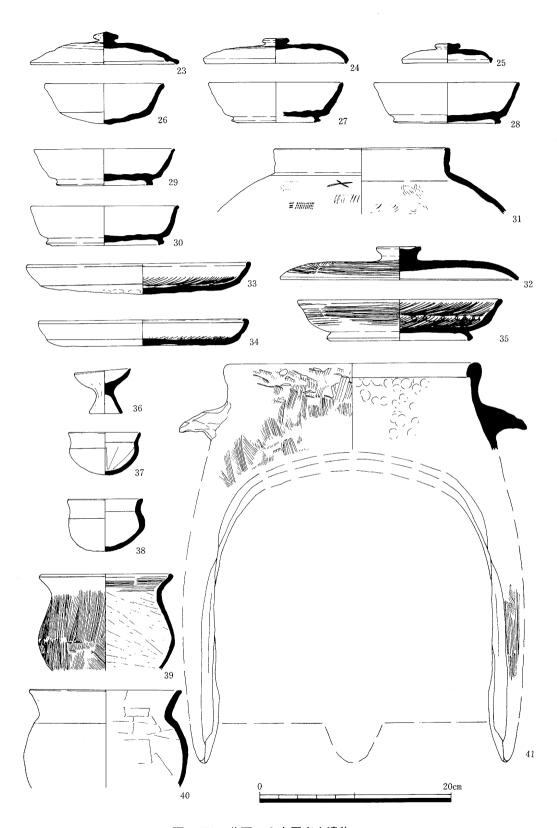


図-178 井戸-2上層出土遺物

36は手づくねの小形高杯。全面をナデ調整。37・38はミニチュアの甕。外面は指頭調整、内面は37が板ナデ、38がナデ。39・40は甕。39は口縁端部が内方へ屈曲する。体部外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリ。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ。40は外面がナデ、内面が板ナデ調整。

41は土師質の竈。口縁部は大きく肥厚し、直下に角状の把手が対向する位置に取り付く。体部の器壁は非常に薄い。太く短い脚を三方に伴うと推定される。外面は粗いハケメを雑に施し、内面は上方がユビオサエ、中央より下方はナデ調整。口縁部はヨコナデ。図上で復元したものであり、もう少し幅が広くなるかもしれない。

# E. 土坑

# 土坑-4 (図179-1~8)

1は須恵器杯身。口縁部は外方へ大きく開く。2~4は土師器杯。口縁端部は内弯気味に肥厚する。内面には放射暗文が施され、2は内底面のラセン暗文が確認できるが、他は不明。いずれも、外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。5・6は土師器皿。口縁端部は内弯気味に肥厚する。内面に放射暗文を施した後、口縁部をヨコナデする。7は手づくねの小形高杯。杯部は欠損する。8は甕。口縁部は端部で直立気味に肥厚する。外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施す。

# 土坑-5 (図179-9~12)

 $9\sim12$ は、土坑-5から出土した。いずれも土師器である。9は杯。内面に放射二段暗文を施す。外面は指頭調整。 $10\cdot11$ は鉢。11は深く、口縁が内弯する。10の外面底部はヘラケズリであるが、他は磨滅のため、調整、暗文ともに不明である。12は土師器羽釜。鍔はやや上方へ反り、口縁は直立気味になる。

#### 土坑-6 (図179-13)

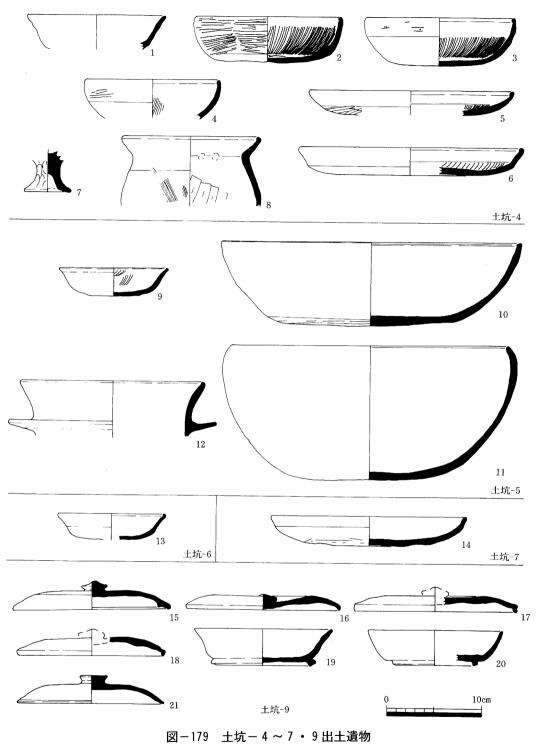
13は土師器杯。口縁端部は、やや肥厚する。表面剝離のため、調整、暗文不明。

#### 十坑-7 (図179-14)

14は土師器皿。外面底部は指頭調整後、ヘラケズリ。内面は表面剝離のため、調整、暗文ともに不明。

### 土坑-8 (図180~182)

- $1\sim11$ は下層から出土した遺物。 $12\sim35$ は上層から出土した遺物。
- 1は須恵器杯蓋。内面にかえりを有する。
- $2\sim11$ は土師器。2 は蓋。扁平なつまみを有する。外面天井部に4 分割のヘラミガキを施す。 $3\sim7$  は杯。5 の内面には放射暗文、内底面にラセン暗文を施す。他は表面剝離のため、調整、暗文は不明。8 は高台を有する杯。内面に放射二段暗文を施し、暗文の間をヨコ方向にナデた後、ラセン暗文を一重にめぐらせる。内底面にも、細かいラセン暗文を施す。外面は細く、密



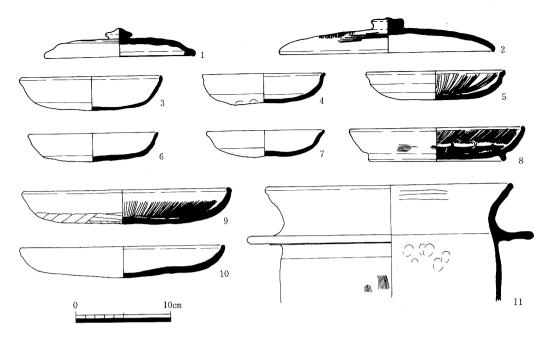


図-180 土坑-8下層出土遺物

にヨコ方向のヘラミガキを施すが、表面剝離のため、残存状態は悪い。9・10は皿。9は内面に放射暗文、内底面にラセン暗文を施す。外面底部はヘラケズリ。10も同様の調整と思われるが、表面剝離のため、調整、暗文不明。11は羽釜。鍔は水平に取り付き、口縁は外上方へのびる。体部外面タテハケ、内面は指頭調整。口縁部はヨコナデ、口縁内面には部分的にヨコハケが残る。

12~35は上層出土遺物。12~19は須恵器、20~35は土師器である。

12は杯蓋。内面のかえりは消失し、器高は高い。13~18は杯身。13・14は高台を伴わず、15~18は高台を伴う。19は台付長頸壺。台部は高く、外方へ張り出す。肩部には 1 条の凹線をめぐらせ、明瞭に屈曲する。頸部から口縁部にかけて徐々に外反し、ラッパ状に開くが、口縁端部を欠いている。頸部にも、2 条の凹線がめぐる。

20~25は甕。20は球形の体部、21~23は胴張りの体部、24・25は長胴の体部と推定される。 口縁部は、20では外反し、端部で面をなす。21~23は直線的にのび、端部は肥厚気味に面をな す。24・25は強く外反し、端部をつまみ上げるようにヨコナデを施している。外面タテハケ、 内面へラケズリ調整を基本とするが、23・25の体部内面上半には指押え痕が顕著に残り、24の 体部内面はハケ調整である。

26~30は杯。28・30は内面に放射暗文を施し、29は不明。26・27には、暗文は施されていないようである。外面は、いずれもヨコ方向のヘラミガキを施すが、29は不明。外面底部の調整は、27がヘラケズリ、28がナデと確認できる以外は不明である。26・27は大形、28~30は小形の杯であり、調整も異なるようである。

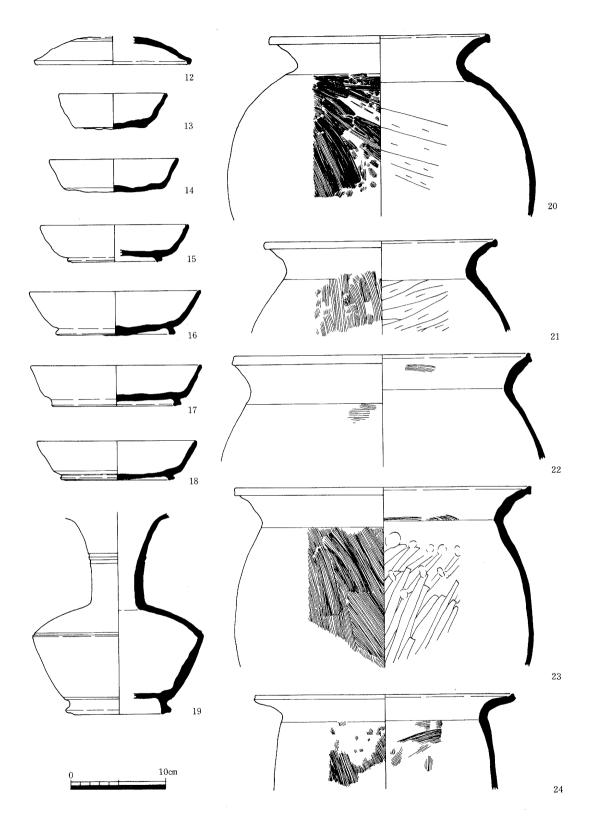
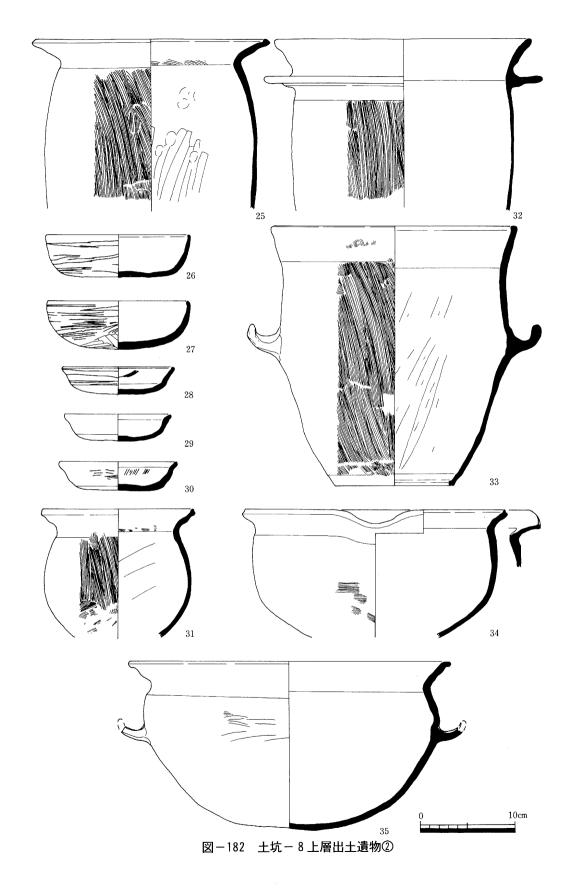


図-181 土坑-8上層出土遺物①



31は小形の甕。体部から緩やかに外反する口縁は、端部で直立気味に肥厚する。外面底部は不定方向のハケメ、体部はタテハケ、内面底部はナデ、体部はヘラケズリ。口縁部はヨコナデを施すが、頸部内面にヨコハケが部分的に残る。32は羽釜。鍔は水平に取り付き、口縁は外上方へ直線的にのびる。体部外面タテハケ、内面は指頭調整からナデを施す。33は甑。体部上半は直立から緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部下半は徐々にすぼまり、下端で内方へ屈曲する。底面は円形に完全に開いた甑である。把手は小さく、上方へ強く屈曲する。体部外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部と体部下端はヨコナデ、把手は指頭調整で仕上げる。34は片口の鉢。体部外面にハケメが残るが、磨滅のため、調整不明。35は把手付きの鍋。口縁部は端部で強く外反し、体部のやや上位に小さい把手が対向方向に取り付く。体部外面は一部にヨコ方向のヘラミガキを残すが、調整不明。内面はナデ調整である。

土坑-9 (図179-15~21)

15~18は須恵器杯蓋。15は内面にかえりを有するが、他はかえりを伴わず、端部は下方に屈曲する。19・20は須恵器杯身。低い高台を有し、19の口縁は、やや開き気味になる。

21は土師器の蓋。扁平なつまみを有し、器高は比較的高い。表面磨滅のため、調整は不明である。

土坑-10 (図183~185)

1~24は下層から出土、25~38は上層から出土した遺物である。

 $1\sim7$  は須恵器。 $1\cdot2$  は杯蓋。内面にかえりを伴わず、端部は下方へ屈曲する。器高は、やや高く、扁平なつまみを伴う。 $3\sim7$  は杯身。3 は口縁が外方へ広がる。 $4\sim7$  は高台を有する。高台は低く、口縁は外方へ開き気味である。

8~24は土師器。8・9は鉢。口縁端部は内方へ肥厚する。内面に放射暗文、内底面にラセン暗文を施す。9は放射暗文の上にも一重のラセン暗文をめぐらす。外面下半はヘラケズリ、他はナデ調整。外面にはヘラミガキを施しているようであるが、残存状態が悪い。10・11は小形の甕。どちらも外面を指頭調整。内面を板ナデで調整し、口縁部には強いヨコナデを施す。12・13も小形の甕。12は外反する口縁が端部で面をなす。体部外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリによって調整。13の口縁は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。体部外面は指頭調整、内面は板ナデによって調整する。14は把手付きの壺。外方へ広がる高台を有し、体部は球形を呈する。口縁部は短く、ほぼ直立する。頸部では器壁がやや厚く、端部で先細りとなり、丸くおさめる。把手は体部最大径よりやや上位に位置し、斜上方へのびる。対向する位置に一対が取り付く。外面はヨコ方向のヘラミガキを密に施し、口縁部下半には縦方向の細かいヘラミガキが施される。内面は板ナデとナデがみられ、口縁部はヨコナデを施す。高台はナデによって仕上げ、把手は指頭によってナデ上げられている。全体の65%を残し、残存状態は良好である。

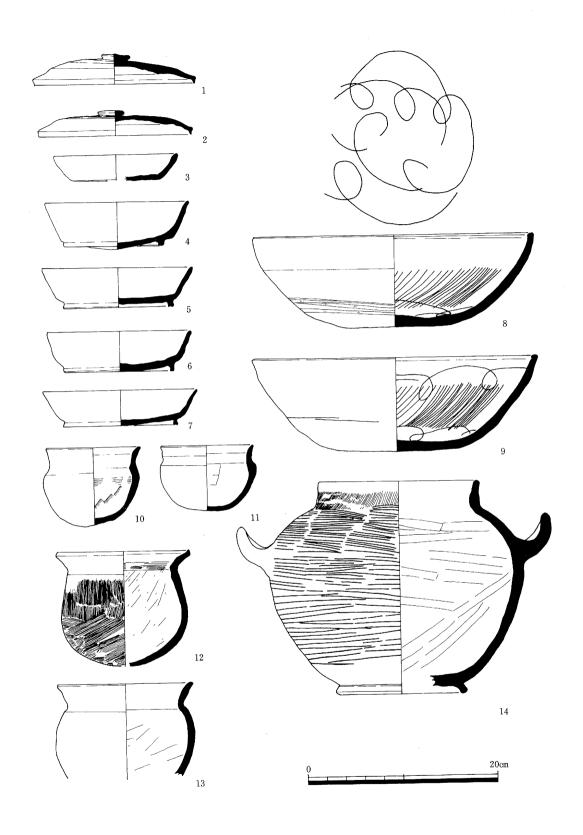


図-183 土坑-10下層出土遺物①

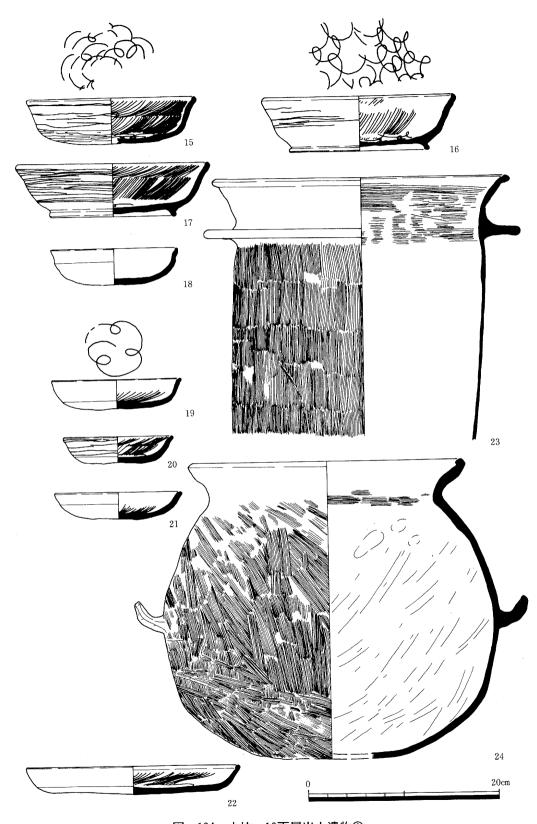


図-184 土坑-10下層出土遺物②

15~21は杯。15は内面に放射二段暗文。内底面にラセン暗文を施し、外面上半はヨコ方向のヘラミガキ、下半はヘラケズリを行う。16・17は高台を伴う杯。どちらも内面に放射二段暗文、内底面にラセン暗文を施す。16のラセン暗文は外向きのラセンである。外面はヨコ方向のヘラミガキ。18~21は小形の杯。19・21は放射暗文、20は放射二段暗文を施し、いずれも内底面にラセン暗文を施す。18は暗文の有無不明。20は外面にヨコ方向のヘラミガキを施すが、他はヘラミガキが見られない。22は皿。口縁端部は内方へやや肥厚し、内面に放射暗文、内底面にラセン暗文を施す。23は羽釜。鍔は短く、水平にのびる。口縁も短く、外反する。体部外面タテハケ、内面ナデ調整。口縁部は外面がヨコナデ、内面がヨコハケによって仕上げる。茶褐色の通有の胎土である。24は把手付きの甕。体部は扁平な球形を呈し、その中位、体部最大径の位

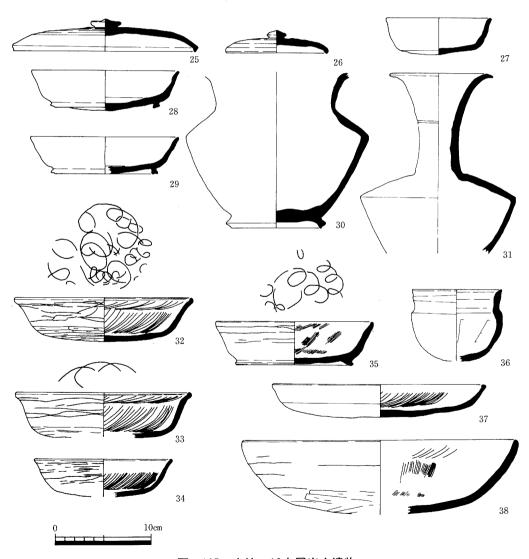


図-185 土坑-10上層出土遺物

置に、小さな把手が一対取り付く。口縁は外反した後、巻きこむように端部で肥厚する。体部 外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリを施し、内面上部のみ指頭調整がみられる。口縁部は ヨコナデ、頸部内面にはヨコ方向の細かいハケメが残る。把手は指頭調整を行う。

25~31は上層から出土した須恵器、25・26は杯蓋。口縁端部は下方へ屈曲する。27~29は杯身。28・29には高台を伴う。30は広口壺。高台を有し、肩部は明瞭に張り出す。口縁は外反し、端部で水平にのびると思われるが、端部を欠損する。31は長頸壺。底部を欠損する。肩部は明瞭に張り、細く長い頸部から、ラッパ状に開く口縁部に至る。頸部中央に1条の凹線がめぐる。

32~38は上層から出土した土師器。32~35は杯。口縁端部がやや内側へ巻き込むような形態である。35は高台を有する。32・33・35は放射二段暗文、34は放射一段暗文であり、いずれも内底面にラセン暗文を施す。外面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。外面下半は32・33がヘラケズリ、34がナデ、35は丁寧なナデによって調整する。36は小形の甕。外面指頭調整、内面板ナデ、口縁は強いヨコナデによって調整。37は皿。口縁は端部で内側へ巻きこむ。内面に放射暗文を施す。38は浅い鉢。内面に放射二段暗文、外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。外面下半はヘラケズリ、他はナデによって調整する。

#### 十坑-11 (図186)

1~11は下層から出土した遺物、12~17は上層から出土した遺物である。

1~6は須恵器。1・2は杯蓋。口縁端部は下方へ屈曲し、扁平なつまみを伴う。3・4は杯身。高台を有する。4は大形の杯身である。5は皿。平坦な底部から斜外方へのびる口縁部は、端部でやや肥厚する。外面底部は回転へラ切り未調整。6は有蓋短頸壺。しっかりした高台を有する。体部最大径は上位から3分の1の位置になり、短い口縁部が取り付く。外面下部のみ回転へラケズリ調整、他は回転ナデ調整。

7~11は土師器。7~9は杯。口縁は外方へ屈曲し、端部は内側へ肥厚し、丸くおさめる。 7は内面に暗文を施していない。8は内面に斜放射暗文、見込みにラセン暗文を施すが、非常 に雑である。9は内面に斜放射暗文を施すが、非常に間隔が広い。7は外面底部ナデ調整、8・ 9はヘラケズリ調整である。10は高杯。杯部は浅く、口縁部は強く外反し、端部で肥厚する。 脚柱部は太く、短い。裾は大きく広がる。杯内面に放射暗文がみられる。杯部外面はヘラケズ リ、脚との接合部はナデ調整を施すが、部分的に放射状の短いハケメを伴う。脚柱部外面はタ テ方向にケズリを施し、12面の面をなす。内面にはシボリメが残り、脚裾部はヨコナデ調整。 11は手づくねの小形高杯。杯部のみ残っており、ナデで仕上げている。

12~17は上層から出土した土師器。12は杯。口縁部は、やや外反する。暗文は不明。13は小形手づくねの高杯。脚部外面はタテ方向のナデ、杯部はナデ調整。14は高杯。杯部は外上方へのび、端部で外反、肥厚する。杯部内面には放射暗文が密に施される。杯部外面はヘラケズリ、ナデによって調整。脚柱部は11面のタテ方向の面取りがなされ、内面にはシボリメが残存する。

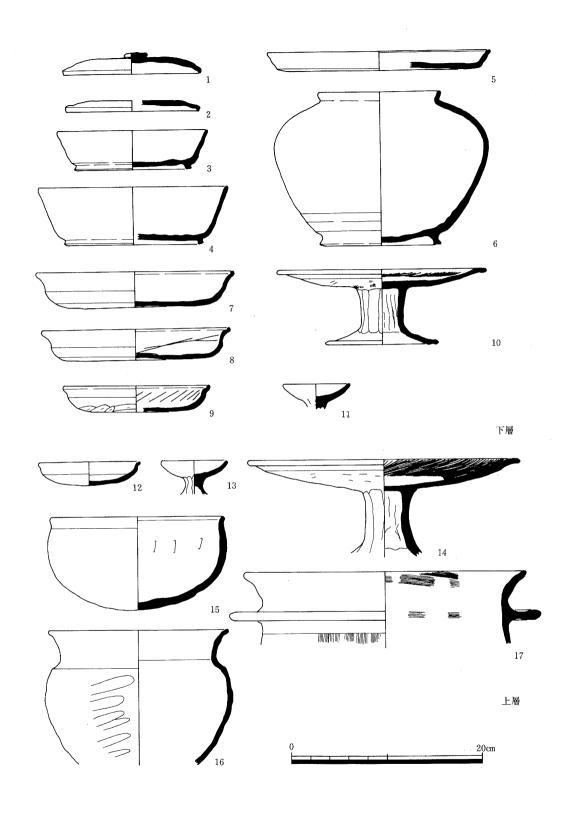


図-186 土坑-11出土遺物

15は鉢。扁平な半球形の体部を呈する。外面ナデ、内面上半は板ナデ、下半はナデ、口縁部は ヨコナデ調整。16は甕。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面は左下がりのユビナデ、 内面は丁寧なナデ、口縁部はヨコナデによって調整。17は羽釜。鍔は短く、水平に取り付く。 口縁部も短く、外反する。体部外面タテハケ、内面ナデ、口縁・鍔はヨコナデ、口縁部内面に は部分的にヨコハケが残る。

土坑-12 (図187-1)

1は土師器の杯。口縁は外反した後、端部が上方へ肥厚する。表面剝離のため、暗文、調整 は不明。

十坑-13 (図187-2)

2は須恵器の杯身。立ち上がりは短く、内傾し、受部は小さい。

土坑-14 (図 $187-3\sim8$ )

3は須恵器杯蓋。丸味をもった天井部である。4も須恵器杯蓋。内面に鋭いかえりを伴い、 かえりの下端は口縁端部より下方に位置する。5は須恵器杯身。口縁は直に立ち上がる。

6は土師器杯。内面に放射暗文を施す。7は土師器の高杯脚部。脚裾部は大きく開く。脚柱部外面はタテ方向のナデ、内面はシボリメ。裾部外面はヨコナデ、内面は指押えによって調整。8は土師器の甕。やや下ぶくれの体部を呈し、外上方へ直線的にのびる口縁部を有する。外面は細かいハケメ、内面は細かいヘラケズリ調整。口縁部外面はヨコナデ、内面にはヨコ方向のハケメが残っている。底部に直径9mmの円孔がある。焼成後の穿孔によるものである。

土坑-15 (図187-9~19)

9~16は須恵器。9・10は内面に鈍いかえりを有する杯蓋。11~13は口縁端部が下方へ屈曲する杯蓋である。14は小形の平瓶。口縁部を欠損する。肩部は明瞭に張る。外面底部は雑な手持ちヘラケズリ、他は回転ナデ調整。15は鉢。半球形の体部は、底部でやや平坦になる。口縁は内弯気味になり、端部で肥厚する。外面底部は手持ちヘラケズリ、その上を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。16は甕。口縁端部は、やや厚くなる。体部外面に平行叩き、内面に同心円の当て具痕が残る。

17~19は土師器。17は把手付きの壺。体部は球形を呈し、口縁は直立する。把手は長く、内弯する。体部外面はヨコ方向のヘラミガキ、内面上半は板ナデ、下半はナデ。外面底部はヘラケズリ調整。口縁部はヨコナデ、把手はナデによって調整する。底部に焼成後の穿孔がみられる。18は甕。体部は球形を呈し、口縁部は外反する。体部外面は指頭調整のため、凹凸が激しい。内面は板ナデの後、丁寧なナデによって平滑に仕上げる。口縁部はヨコナデ調整。19は羽釜。鍔は短く、水平に取り付く。口縁は斜外方へ直線的にのび、端部を丸くおさめる。体部内面はナデ調整、外面は不明。口縁・鍔はヨコナデ、頸部内面にはヨコハケを施す。器壁が薄いため、体部は残存していない。茶褐色の通有の胎土である。

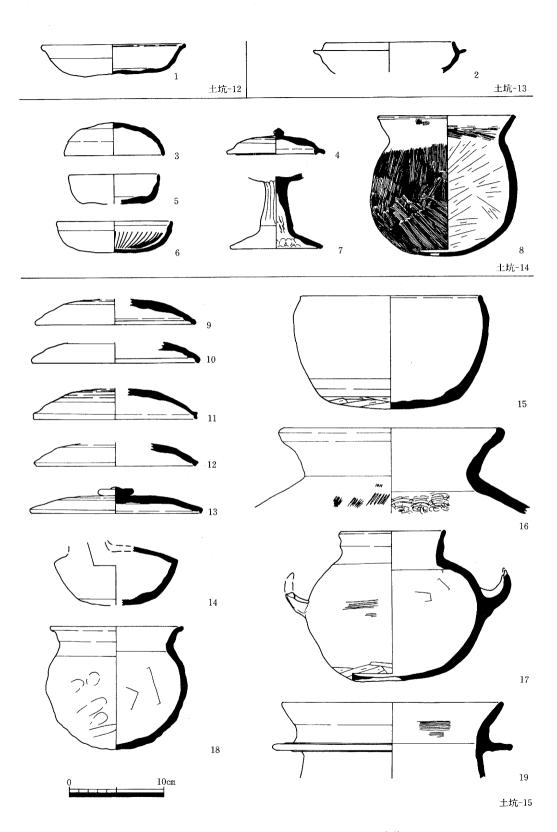


図-187 土坑-12~15出土遺物

# F. 溝

# 溝-1 (図188-1・2)

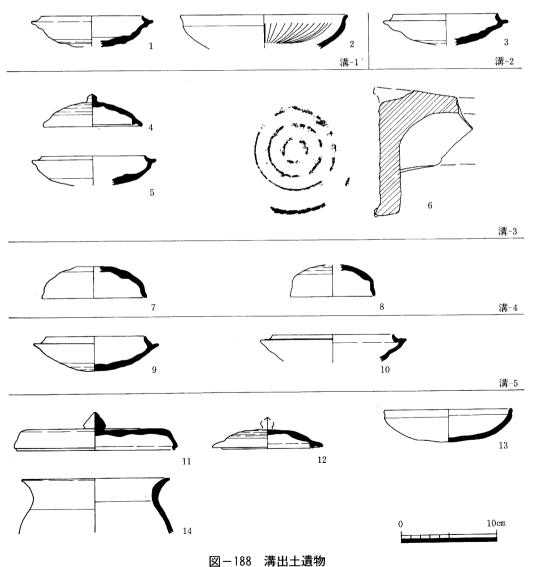
1は須恵器杯身。短く、内傾の強い立ち上がりを有する。立ち上がりと受部の境界は不明瞭。 2は土師器杯。口縁部は外反する。内面には放射暗文を施す。

## 溝-2 (図188-3)

3は須恵器杯身。短い立ち上がりを有する。

# 溝−3 (図188−4∼6)

4は須恵器杯蓋。内面にかえりを有する。5は須恵器杯身。短く、内傾する立ち上がりを有する。



---

6は重圏文軒丸瓦。三重の圏線をめぐらす。圏線の直径は、それぞれ2.7cm、5.6cm、8.6cm である。瓦当の直径は推定13.7cm、外区の幅は0.6cm前後である。丸瓦部の凸面はタテ方向のヘラケズリとナデによって調整され、凹面と瓦当裏面は丁寧なナデによって調整される。そのため、布目は残っていない。磨滅が激しく、残存状態は悪い。灰白色を呈し、焼成良好、胎土には石英・長石等の砂粒を含む。

## 溝-4 (図188-7・8)

7・8は須恵器杯蓋。7の天井部は回転ヘラ切り未調整、8の天井部は回転ヘラケズリ調整である。

## 溝-5 (図188-9·10)

9・10は須恵器杯身。立ち上がりは非常に短く、内傾する。9の底部は回転ヘラケズリ調整を施す。

## 建物-37~44上層溝 (図188-11~14)

11は須恵器の有蓋短頸壺の蓋。平坦な天井部から下方へのびる口縁部は、端部で段をなすように屈曲する。つまみは高い宝珠状のつまみである。12は須恵器杯蓋。内面にかえりを有し、かえり下端は口縁よりも下位に位置する。外面回転ヘラケズリ調整。つまみを欠く。

13は土師器杯、表面剝離のため、調整、暗文不明。14は土師器甕。口縁部は外反する。表面 剝離のため、やはり調整不明。

#### G. 谷-1 (図-189~203)

谷-1からは、大量の遺物が出土しており、ここでは須恵器と土師器の代表的な器種について記述する。なお、8 ラインから東側を東半、西側を西半と区別した。 $1\sim126$ は須恵器、 $127\sim248$ は土師器である。

 $1\sim39$ は杯蓋。 $1\sim22$ は、かえりを伴わず、 $23\sim38$ は、かえりを伴い、39は、かえりの消失したものである。1は、天井部と口縁部の境の稜線が比較的明瞭であり、この1点のみ、少し時期が遡る。また、39は口径が大きく、内面のかえりは消失し、天井部には扁平なつまみを伴う。これは、少し時期が新しくなる。

40~89は杯身。40・41は、立ち上がりが高く、回転ヘラケズリの範囲も広い。42~78は、内傾する短い立ち上がりを有する杯身である。42~49は、外面底部に回転ヘラケズリ調整を施すが、50~78は、回転ヘラ切り未調整、もしくは一部に回転ヘラケズリを施す等、調整が雑になっている。79~87は、口径が小さく、立ち上がりを有しない杯身。88・89は、高台を有する杯身。88は口径が大きく、89は小さい。88の外面底部には墨書があり、やや不明瞭ではあるが、「下八」と推測される。やはり、40・41の杯身がかなり時期が遡り、88・89は、若干新しくなる傾向にある。おそらく、1の杯蓋、40・41の杯身は古墳に伴うものと考えられる。他の遺物は6世紀末葉から7世紀中葉の時期のものである。

また、75の杯身の外面底部には緩やかな弧を描く赤色顔料が施されており、杯蓋(18)の外面、杯身(60)の内面にも赤色顔料の痕跡が認められる。

杯蓋・杯身の中で、24点にヘラ記号が認められる。最も多い「-」は、 $3\sim6$ 、18、46、50、57、67の 9 点で認められ、「<math>=」は、44、47、52、「 $\neq$ 」は、16、51に施される。他は 1 点のみであり、7に「\*」、17に「1」、17に「1」、17に「1」、17に「1」、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、17に「1]、18には斜線と平行線からなる複雑なヘラ記号が施される。

90~97は高杯。90は有蓋高杯の蓋。扁平なつまみを付し、外面の稜線は消失している。91は、杯蓋に、内面にかえりを伴う時期の杯蓋のつまみを付したような形態であり、有蓋高杯の蓋となるかどうか、やや疑問も残る。いずれにしても、7世紀前半頃の時期であろう。92は杯部外面に2条の浅い凹線をめぐらせ、その間を櫛歯状の工具による左下がりの刺突文をめぐらせる。93は長脚の二段二方に長方形の透し窓を有する高杯。杯部外面は二段の段をなす。94も同形態であるが、外面に二条の凸線をなし、脚柱部は細く、筒状をなす。95は、低脚の高杯である。杯部外面には凹線状の段がみられる。96・97は、脚部が極端に短い高杯である。96は杯部、脚部とも丸味をもった器形であるが、97は杯部から口縁部が明瞭に立ち上がり、脚端部も鋭く上方へ反り上がる。

98は皿。外面に弱い段が認められ、それより下部は回転ヘラケズリ調整である。口縁部は丸くおさめる。

99は鉢。底部を欠失するが、底部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はやや尖り 気味になる。外面底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

100は椀。丸味を有する体部から口縁部は外方へ屈曲する。

 $101\sim104$ はすり鉢。 $101\cdot102$ は器高が高く、外面に2条の凹線が施される。 $103\cdot104$ は器高が低く、103は内弯する体部を呈する。101の内底面中央には直径2 mm、深さ6 mmの刺突があり、外面底部にはかなりの擦痕が認められる。いずれも、外面底部で何かを擦ったものと思われる。

105~107は聴。いずれも小形であるが、107は非常に小さく、実用品とは考え難い。105・107の体部外面には2条の凹線がめぐり、その間に連続する刺突文をめぐらせる。107の頸部外面には2条の凹線がめぐる。106には文様は認められない。105・106の外面底部は回転ヘラケズリ調整であるが、107の外面底部は手持ちヘラケズリ調整である。いずれも口縁部はラッパ状に開き、口径が体部径を上回るものと思われる。

108は提瓶。口縁部は体部から垂直に立ち上がった後、外反し、端部で上方へつまみ上げるような形態を示す。体部は丸味をおびるが、釣り手の形態は不明。回転ナデで仕上げるが、体部外面の一部に平行叩きの痕跡が残る。

109~124は壺・甕である。109は、やや胴張りの体部から口縁部が外反する。肩部にヘラ記号がみられる。110は扁平な下ぶくれの体部を有し、体部最大径の位置に2条の凹線がめぐり、その間を刺突文でうめる。111~113は小形の短頸壺である。111の口縁部は垂直に立ち上がり、112の口縁部は内傾し、113の口縁部は外反する。111の外面肩部はカキメ調整。113の体部下半は回転ヘラケズリ調整である。

114は、口縁端部が外方へ肥厚し、断面が長方形をなす。外面に2条と4条の凹線がめぐり、その間を刺突文でうめる。115は外方へのびる口縁部が厚さを変えることなく、そのまま端部に至る。外面には、2条、1条、1条の浅い凹線がめぐり、その間に雑な波状文を三段に施す。116・117は短い口縁部が端部で肥厚する。外面は平行叩きの後、カキメ調整。内面は同心円の当て具痕。117の口縁部内面にはヘラ記号がみられる。118は、やや肩の張った球形に近い体部を有すると考えられる。口縁部外面にヘラ記号がみられる。

119は外反する口縁部であり、外面に複雑なヘラ記号がみられる。120・121は短く、外反する口縁部を有する。122は体部に比して、口径が非常に小さく、口縁部は外反し、端部でやや肥厚する。123は体部から垂直に近く口縁部が立ち上がり、端部は凹面をなす。口縁部外面には2条の浅い凹線がめぐる。124も口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、外面に2条の浅い凹線がめぐる。口縁直下には、1対の釣手状の把手がみられる。

125・126は須恵質に近い焼成で、淡灰白色の色調を呈する。技法的には土師器に含めるべきかもしれないが、おそらく、窯で焼成したと考えられ、須恵器として扱う。

125は羽釜であろう。体部から鍔は水平に取りつき、断面は長方形状をなす。体部はほぼ直線的にのびているが上下を欠失し、その形状は不明である。体部外面はタテ方向の細かいハケメ、内面はナデ、鍔はヨコナデで仕上げる。鍔径は24.9cm、体部径は15.1cmであるが、破片からの復元であるため、実際にはもう少し大きくなるかもしれない。

126は竈と推定されるが、口縁部、焚口部を欠損しており、その形状は不明である。体部下端は厚く肥厚し、平坦面をなす。両側には半球状の一対の把手が付き、体部は内傾するが、背部では、垂直よりもむしろ外傾気味に立ち上がる。外面は非常に細かいタテハケが施され、内面はタテ方向に板ナデを施す。把手は指頭によるナデで調整する。胎土・焼成等から、125と126はセットになると思われるが、火にかけた痕跡は確認できない。

127~248は土師器。

127~181は杯である。127~172は、内面に放射一段暗文を有する杯であり、大半は内底面に ラセン暗文を施すが、138、146~149、151、155、156、158~161、166、171、172にはラセン 暗文は認められない。また、142、152、154、163は磨滅のため、暗文の有無が確認できない。 また、130の暗文はラセン暗文の周囲を円形の暗文で囲んでいる。外面のヘラミガキは128~130、 132~136、141でのみ認められる。外面底部のヘラケズリ調整は、127~133、135、136でのみ 認められ、他は指頭押圧などによる指頭調整である。

 $173 \cdot 174$ の暗文は不明、 $175 \sim 177$ には暗文は認められない。178は小形であるが、内面に放射二段暗文を施す。 $179 \cdot 180$ には暗文は認められず、口縁部に二段の強いヨコナデを施す。

181は深い杯部から口縁端部が外反し、内面には放射暗文が施される。外面底部には指頭圧痕が明瞭に残る。

182~184は皿。182は内面下半に放射暗文、上半には斜格子状の暗文が施される。暗文を施した後、口縁部をヨコナデしたため、口縁部の暗文は消失している。183は内底面にラセン暗文、内面に放射二段暗文を施す。外面はヘラケズリの後、部分的にヘラミガキを施す。184はラセン暗文と放射一段暗文が内面にみられ、外面は183と同様に、ヘラケズリの後、部分的にヘラミガキを施す。

185~189は小形の杯の形態を示す。いずれもナデ、ヨコナデによって調整し、半球形の体部を有する。186・189は器表面に融着物が厚く付着し、自然釉をかぶったと思われる部分がある。 鍛冶関係の土器と思われる。188は二次焼成を受けており、製塩土器として使用されたのではないかと考えられる。

190は高台を有する杯。高台部は欠損する。内面に放射二段暗文を施すが、上段の暗文は左上がりの斜放射となる。外面はヘラケズリの後、雑なヘラミガキ。191は口縁部が外反する杯。 内面には間隔の疎な放射暗文を施す。外面底部は不定方向のヘラケズリ、体部下半は指頭調整。

192は口縁部が体部から内弯した後、端部で立ち上がる。内面の暗文は確認できないが、外面にはヘラミガキを施す。

193~195は鉢。193の口縁部は体部から内弯し、内面に放射暗文、外面にヘラミガキを施す。194は内面に放射暗文、内底面と口縁部にラセン状の暗文が施される。195は大形の鉢。内面には放射二段暗文が施され、暗文の接する部分にラセン状の暗文をめぐらす。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキ。

196・197は把手付の鉢。半球形の体部に長く、弯曲する把手を伴う。内面に放射暗文、外面にヘラミガキを施す。197は直径10cmと小形である。198は大形で深い鉢である。口縁部は内弯し、端部でつまみ上げる。内面は板ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、体部上半斜め方向の板ナデ、下半はヘラケズリ、その後、密なヘラミガキを施す。

199は小形の鉢。器壁は厚い。200も同形態の鉢であるが、やや大きい。底部は厚く、口縁部はやや外反する。底部外面一面に多数の刺突痕がある。201は、口径が大きく、器壁も非常に薄い。外面底部はヘラケズリ、体部はタテ方向の細かいハケメ、口縁部はヨコナデ。内面は、ヨコ方向のハケメの後、ヘラケズリによってケズリ上げる。一部に指頭痕も残る。調整は非常に丁寧である。

202~219は高杯。202は大形の高杯で、復元口径38.0cmを測る。内面には放射暗文、口縁部にはヨコ方向の暗文を施す。203は深い杯部、裾広がりの脚部を有する。杯部外面には凸線状の段がみられ、内面には放射暗文がみられる。204・205は杯部外面に弱い段を有し、内面に放射暗文を施す。更に、204では三段に、205でも口縁部にラセン暗文がみられる。

206~209は更に浅い杯部を有し、裾広がりの脚を有する。206の内面には放射二段暗文が施され、内底面と中間と口縁部にラセン暗文が施される。外面には四分割の密なヘラミガキがみられる。207~209は内底面にラセン暗文、内面に放射暗文を施す。209のラセン暗文は不規則な波状をなす。

210~219は小形、手づくねの高杯。形態はさまざまであるが、概して杯部は浅く、短く、直線的に広がる脚部を有する。

220~222は蓋。220は小形で乳頭状のつまみを付す。内面に放射暗文がみられる。221は上面の平坦なつまみを伴い。外面上半は五分割の密なヘラミガキ、口縁部はヨコ方向のヘラミガキを施す。222は大形で、やや扁平なつまみを伴う。外面には四分割の丁寧なヘラミガキ、内面にはラセン暗文と放射二段暗文を施す。放射暗文は上下の傾きが異なる。

223は把手付きの鉢。体部は口縁部にかけて内弯し、長く、弯曲の強い把手を体部中央に一対付す。外面にヨコ方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ、内面はナデで仕上げる。

224は長頸壺。やや扁平な球形の体部から、直線的に口縁部がのびる。体部上半は四分割の ヘラミガキ、下半はヘラケズリ、頸部外面にはタテ方向のヘラミガキがジグザグに施される。

225・226は短頸壺。やや扁平な球形の体部から、垂直に口縁部が立ち上がる。体部上半はヨコ方向のヘラミガキ、下半はヘラケズリ。口縁部外面はタテ方向のヘラミガキ、体部内面は板ナデ調整である。225では、口縁部内面にもヨコ方向のヘラミガキがみられる。

227~229は小形の壺。227は球形の体部から外方へのびる口縁部が取りつく。表面磨滅のため、調整不明。228は扁平な体部に短い口縁部が取りつく。器壁は厚い。外面指頭調整、内面ナデ調整。229は口径4.2cm、器高5.0cmのミニチュアの壺。口縁部は外反し、器壁は厚い。全面ナデで仕上げる。

230~234は把手付きの鍋。外面調整は230・231がハケ、232・233は板ナデ。内面調整は、230が板ナデ+ハケ、231が、板ナデ+ハケ+ヘラケズリ、232・233が板ナデである。

235~238は甕。胴長で大きく外反する口縁部を有するもの(235・236)と球形の体部に外反する口縁部を伴うもの(237・238)がある。239は羽釜。鍔は短く、口縁の外反は弱い。

240~245は小形の甕。下ぶくれの体部を呈するもの(240)、球形の体部を呈するもの(241・ 242)、小形で扁平な体部を呈するもの(243~245)がある。

246~248は甑。体部は直線状にのび、把手は長く、弯曲が強い。外面はタテ方向の板ナデ、 内面はタテ方向のヘラケズリで丁寧に調整される。

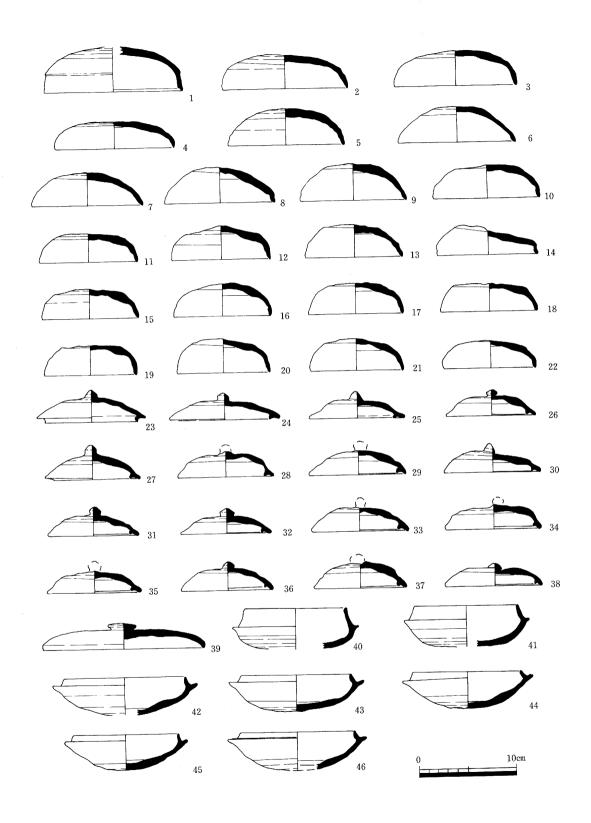


図-189 谷-1東半出土遺物①

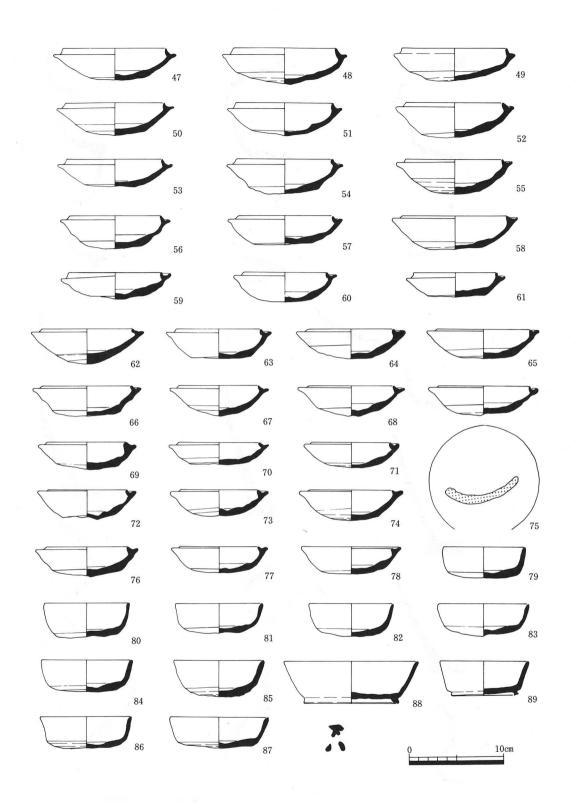


図-190 谷-1東半出土遺物②

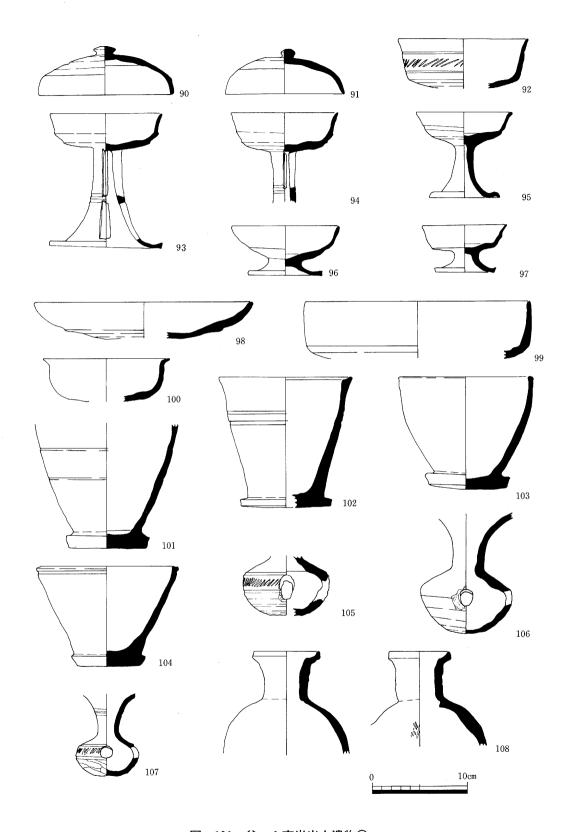


図-191 谷-1東半出土遺物③

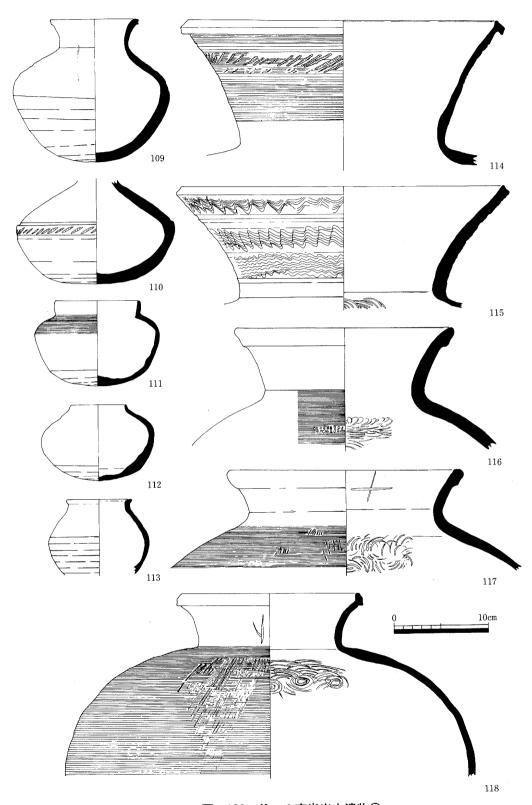


図-192 谷-1東半出土遺物④

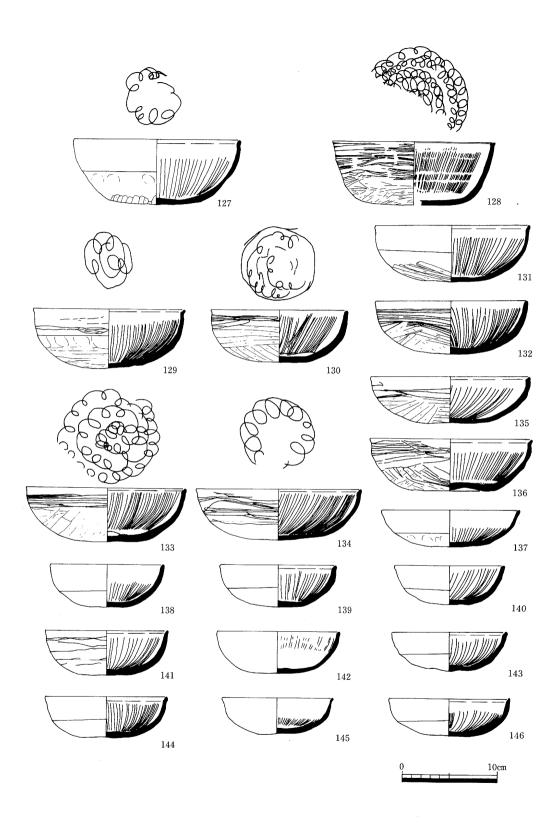


図-194 谷-1東半出土遺物⑥

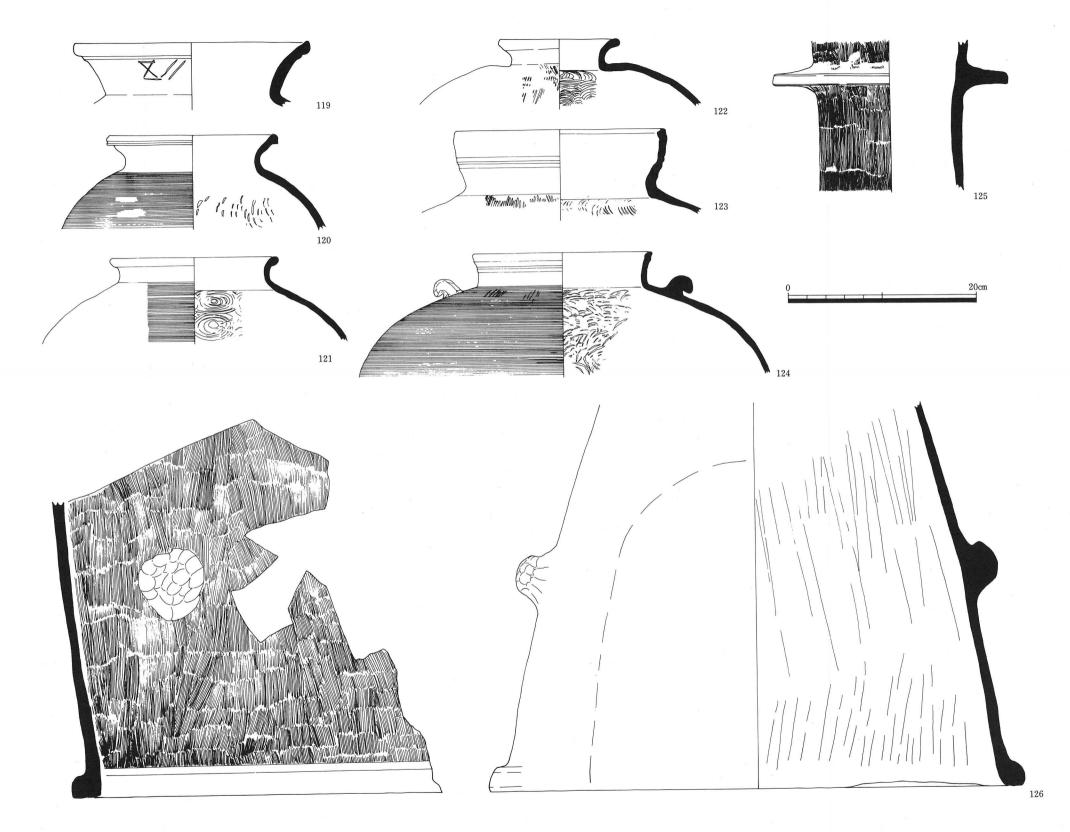
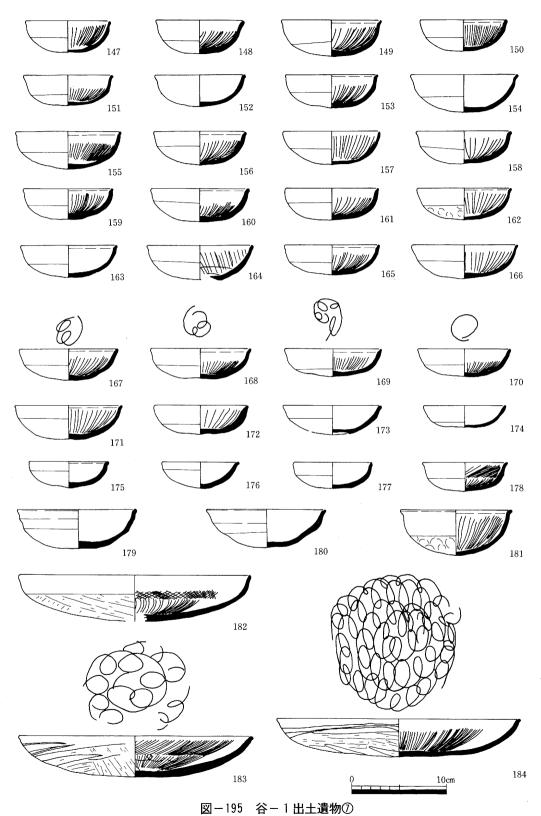


図-193 谷-1東半出土遺物⑤



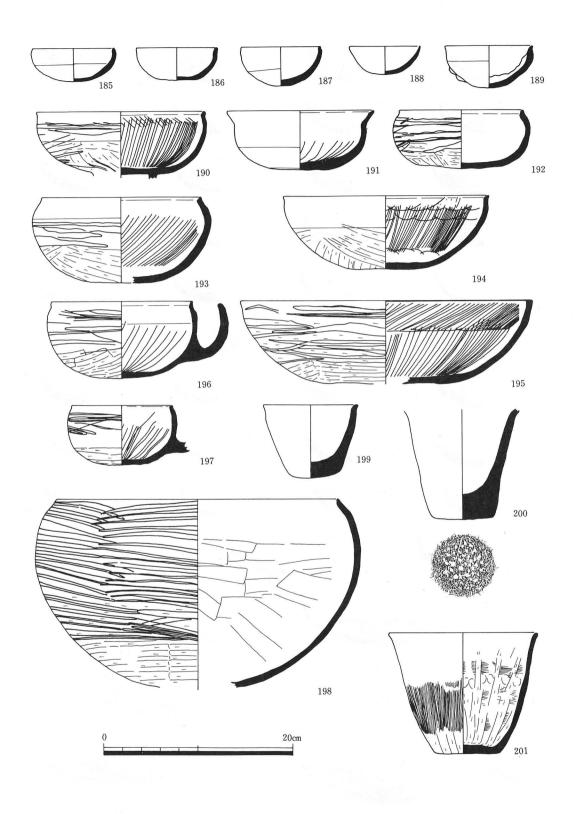


図-196 谷-1東半出土遺物®

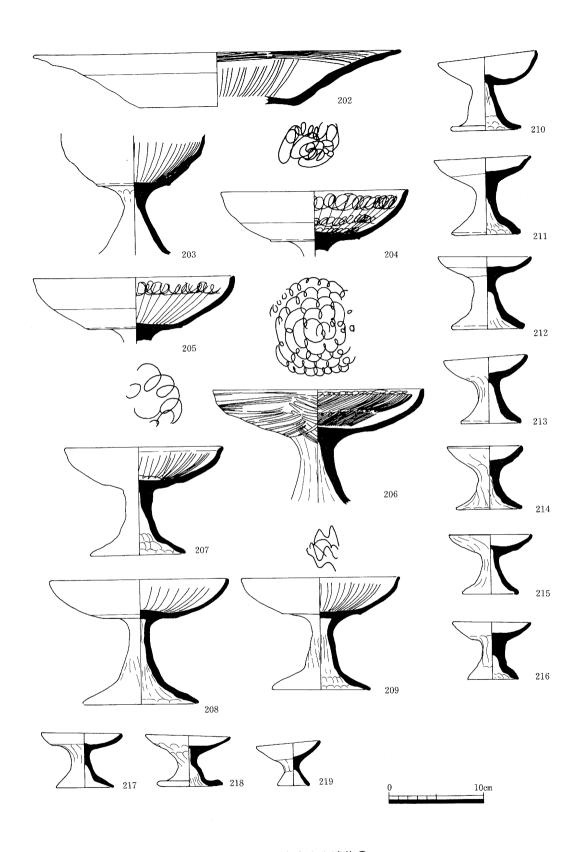


図-197 谷-1東半出土遺物⑨

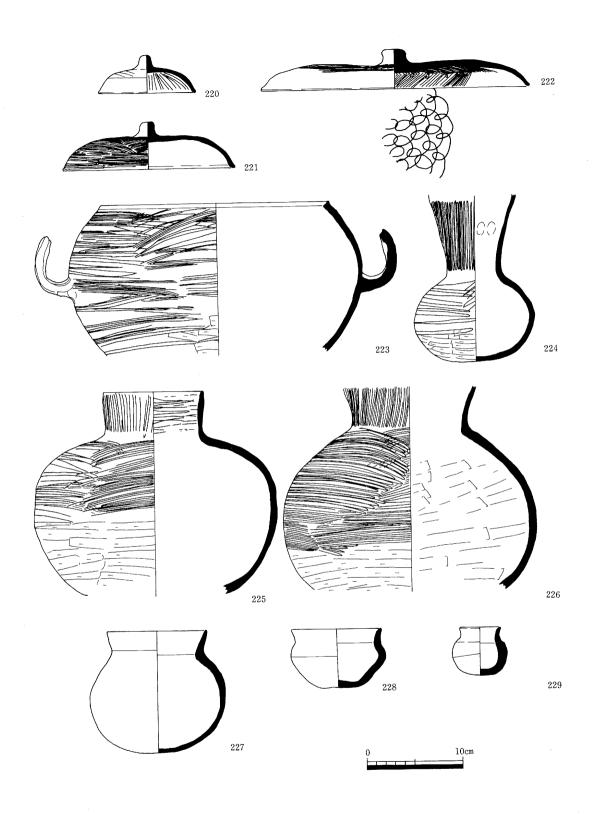


図-198 谷-1東半出土遺物⑩

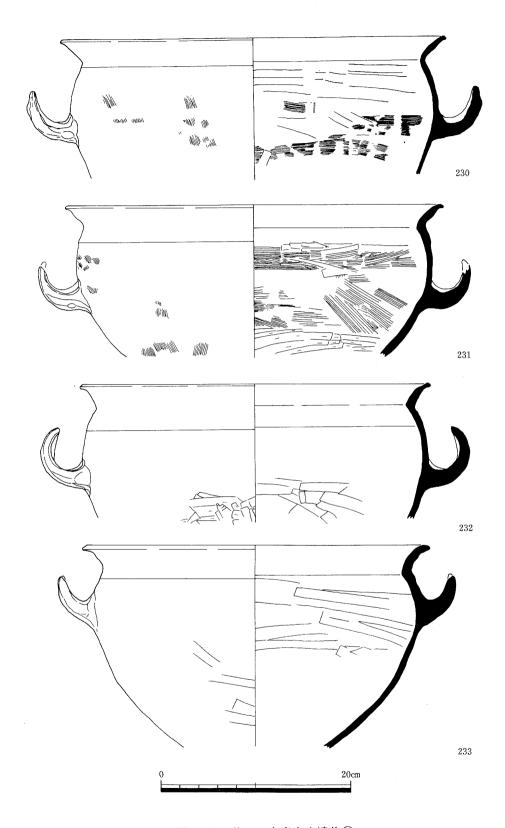
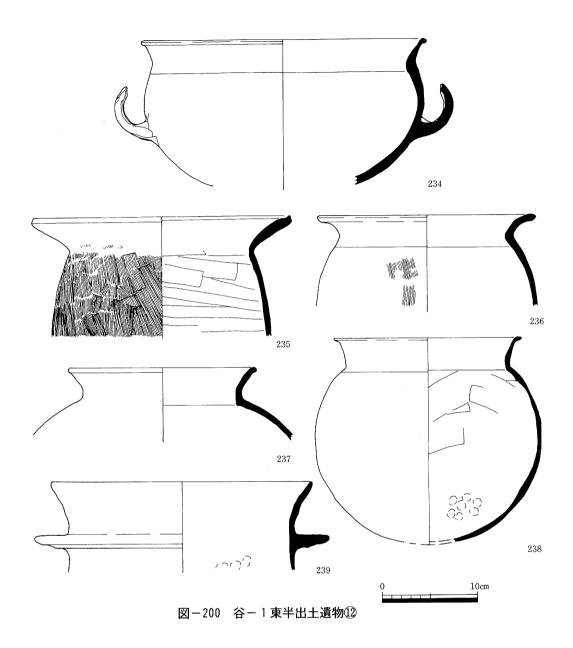


図-199 谷-1東半出土遺物①



 $249\sim270$ は谷-1の8ラインより西側で出土した須恵器・土師器である。

249~258は須恵器。249は杯蓋。内面に鈍いかえりを有し、やや扁平なつまみを伴う。250~253は杯身。250は高い立ち上がりを有し、251は短く内傾する立ち上がりを有する。252は、平坦な底部から斜外方へ直線的に口縁部がのびる。253は低い高台を有する。

254は小形の広口壺。低い高台を有し、肩部は明瞭に張り出す。255は有蓋短頸壺。肩部の張りはややあまい。体部下半は回転ヘラケズリ調整。蓋の重ね焼きの痕跡が残る。256は台付壺の底部。体部は丸く、外反する台部は凸線を境に斜下方へ直線的にのびる。257は壺の脚部。3~4本の脚を有するものであろう。脚は柱状にのび、下端で外方へふんばる形態を呈する。

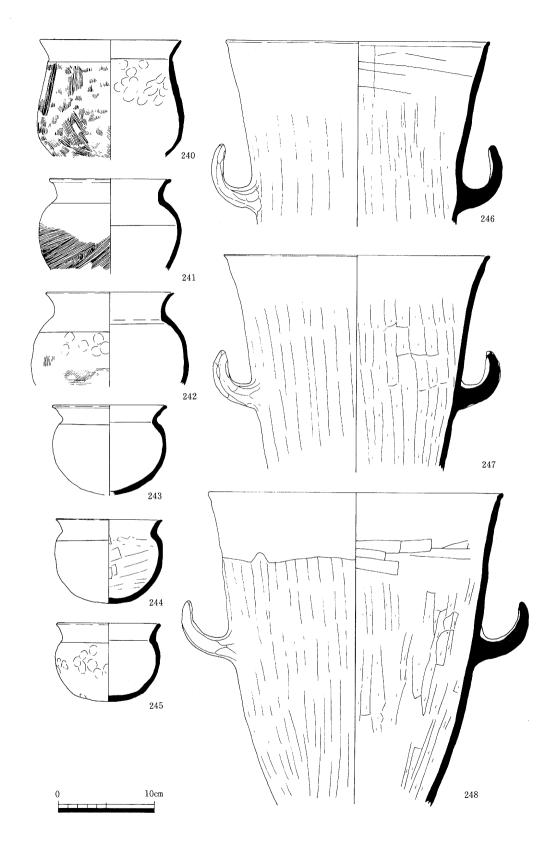


図-201 谷-1東半出土遺物[3]

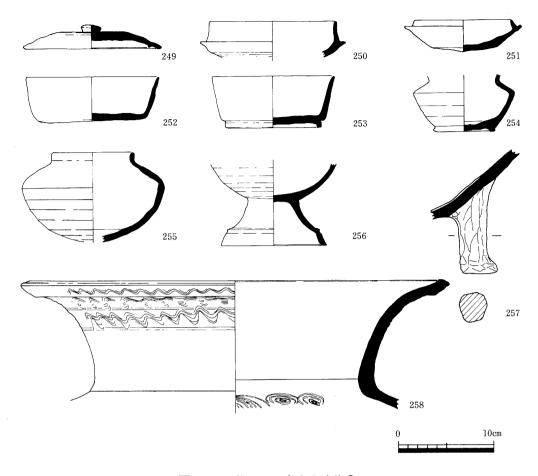


図-202 谷-1西半出土遺物①

脚はタテ方向の面取りを施すようなナデ調整。体部外面には平行叩き、内面には同心円文がみられる。258は壺の口縁部。口縁部は大きく外半し、外面に2条の浅い凹線と雑な波状文が三段にめぐる。体部内面には同心円文が残る。

259~270は土師器。259~261は杯。259は浅く、内面にラセン暗文、放射暗文が施される。 260は口縁端部が内方へまきこむように肥厚する。内面にはラセン暗文、放射暗文が施される。 外面底部はヘラケズリ、体部にはヨコ方向のヘラミガキを施す。261は高台を有する杯。内面 には放射暗文が一部に残るが、磨滅のため詳細不明。外面には、ヘラケズリの後、ヨコ方向の ヘラミガキを施す。

 $262\sim264$ は皿。262は口縁端部がやや肥厚する。内面には放射暗文、外面にはヘラミガキが施される。外面底部に墨書があり、「大小 $\square$ 」と読めるが、意味は不明である。263は内面に放射暗文が施されるが、6 cm前後の間隔で暗文の傾きや間隔が変化する。暗文を施す1 回の単位が6 cmと考えられる。264は内面にラセン暗文と放射暗文を密に施す。外面にはヘラミガキがみられる。 $1\sim3$  も、直交

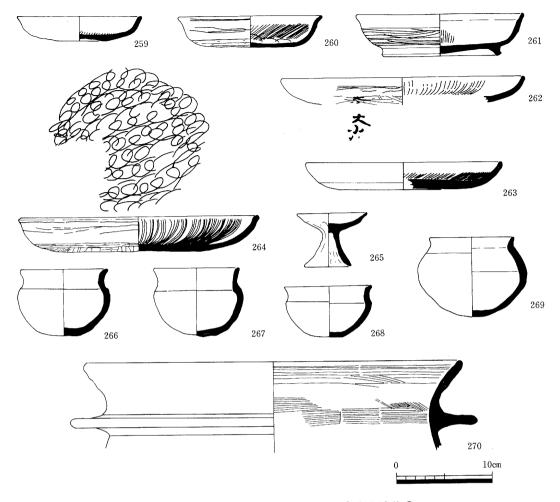


図-203 谷-1西半出土遺物②

265は小形、手づくねの高杯。全面を指頭で調整する。

266~269は小形の甕。266~268は、口縁部を強くヨコナデするため、体部との境に段がみられる。266・267は外面が指頭調整、内面がナデ調整。268は外面がナデ、内面はヨコナデ調整である。268は扁平な形態である。269は短い口縁部を有し、端部は尖り気味になる。全面ナデによって仕上げる。

270は羽釜。鍔は短く、ほぼ水平に取り付き、口縁部は緩やかに外反する。外面はヨコナデ調整、内面はヨコ方向のハケメによる調整である。鍔下面には煤が付着する。茶褐色で雲母を含む通有の胎土である。

谷-1の東半では6世紀末葉-7世紀中葉の遺物が大半であったが、西半では7世紀後葉以降を中心とする。これは、西半では谷-1を完掘できていないため、東半でみられる土層の更に上層の土層しか掘削できていないためである。また、古墳に伴うと考えられる遺物が含まれている点も注目される。

## H. 谷-2 (図204~207)

谷-2に関しては、12ラインより東側と西側に区分した。これは、12ライン付近には住居跡群がみられないために、それより標高の高い部分と低い部分に区別したものである。 $1\sim34$ は東側から出土、 $35\sim59$ は西側から出土した遺物である。

 $1\sim17$ は須恵器。 $1\sim5$  は杯蓋。 $2\sim4$  は内面にかえりを有する。 $6\sim10$ は杯身。10の口縁部は大きく外反し、器壁が厚い。低部に直径 $3\sim4$  mmの穿孔がみられる。11は小形の蓋。口縁端部は直角に屈曲し、扁平なつまみを伴う。12は甕の口縁部。内外面にヘラ記号と思われる線刻がある。13は小形の壺。瓶子と思われる。低い高台を有する。底部はヘラ切り未調整。内外面とも回転ナデで仕上げるが、内面底部は特に強いナデを施す。

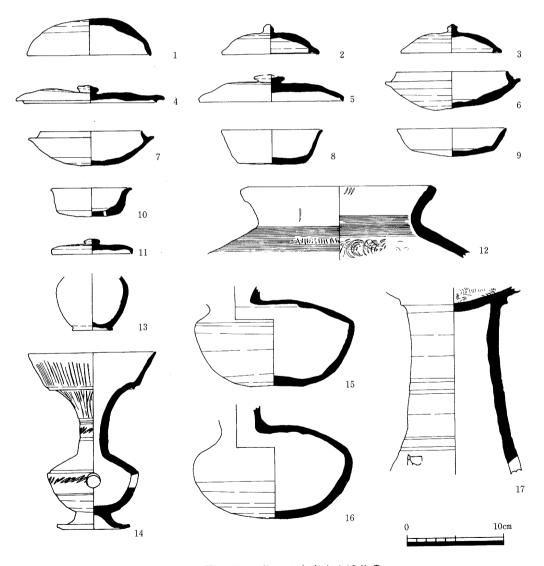


図-204 谷-2東半出土遺物①

14は台付碌。体部は、やや扁平で、肩部が明瞭に張る。口縁部はラッパ状に開いた後、凸線を介して斜外方へ直線的にのびる。口縁部と頸部上半にタテ方向のヘラ描き文が連続して施され、頸部中央に2条と1条の凹線とその間を左下がりの刺突文でうめる。体部にも穿孔を挟んで各1条の凹線が施され、その間を左下がりの刺突文で埋める。台部は外方へ大きく開く、低いものである。15・16は平瓶。15はやや肩の張った体部を呈し、16は丸味をおびた体部である。いずれも把手はみられない。17は器台。緩やかな裾広がりの脚部を有し、2条の凹線が2箇所にみられる。透し窓は縦長の長方形である。

18~34は土師器。18~22は杯。18~20は小形の杯。18・19は内面に放射暗文がみられる。21 は内面に放射暗文、内面口縁部にヨコ方向のヘラミガキが施される。外面は指頭調整。22は高台付きの杯。口縁端部は内方へ肥厚し、高台は外方へ開く。内面にラセン暗文と放射二段暗文が施される。外面は下半がヘラケズリ、上半にはヨコ方向のヘラミガキが施される。23・24は半球形の体部を呈する小形の杯。製塩土器であろう。25は高杯。杯部外面には弱い段がみられ、脚はラッパ状に開く。26は小形手づくねの高杯。27~29は長頸壺。やや下ぶくれの体部を有し、口縁部は直線的にのびる。体部外面下半はヘラケズリ、上半はヨコ方向の細かいヘラミガキ。頸部はタテ方向のヘラミガキ、28の口縁部にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。30は甕。体部の張りは小さく、口縁部は短い。31~33は小形の甕。34は鍋。1対の把手を有する。体部外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリ。

35~49は西半出土の須恵器。35~38は杯蓋。35・36は、かえりを伴わないもの。37は、内面にかえりを有し、小さいつまみを伴う。38は、かえりが消失し、器高は低く、ボタン状のつまみを有する。39~46は杯身。低い立ち上がりを有するもの(39~42)、立ち上がりを有しないもの(43)、高台を伴うもの(44~46)がみられる。44の底部内面には「問」の墨書がみられる。破片であるため、1字のみか、2字以上かは確認できない。36・43の外面には「×」のへラ記号がみられ、35の外面には赤色顔料の痕跡がみられる。47はすり鉢。外面に1条の凹線がみられる。48は脚付長頸壺。脚部には2条の凹線と三方の長方形の透し窓がみられる。外面体部上半から内面は回転ナデ調整、外面体部下半は回転へラケズリ調整、その間に1回転のみのカキメがみられる。49は器台。台部は口縁部で外反し、外方へ肥厚し、断面三角形状をなす。外面に2条の凹線がめぐり、それより上部にへう描き文を施す。下半は平行叩き目をカキメで消しており、内面底部には同心円文が残る。脚部には方形の透し窓がみられる。

50~59は西半出土の土師器。50は杯蓋。扁平なつまみを有し、器高は低い。外面には五分割のヨコ方向のヘラミガキが施され、外面口縁部にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。内面にも雑なラセン暗文がみられる。51・52は杯。内面に放射二段暗文、外面にヨコ方向のヘラミガキがみられる。52は内面に放射暗文がみられる。53・54は小形の杯。半球形の体部を呈する。55は小形の甕。半球形の体部から弱く外反する口縁部を有する。内面は板ナデ調整で仕上げる。

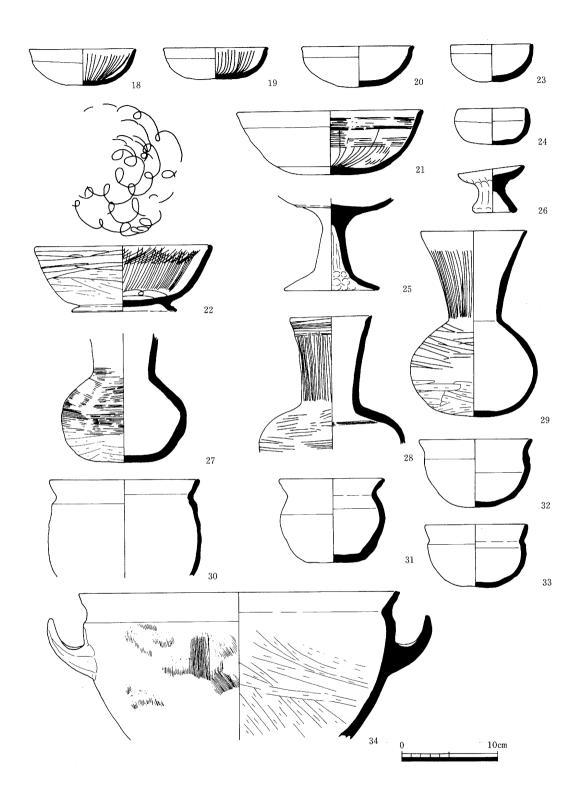


図-205 谷-2東半出土遺物②

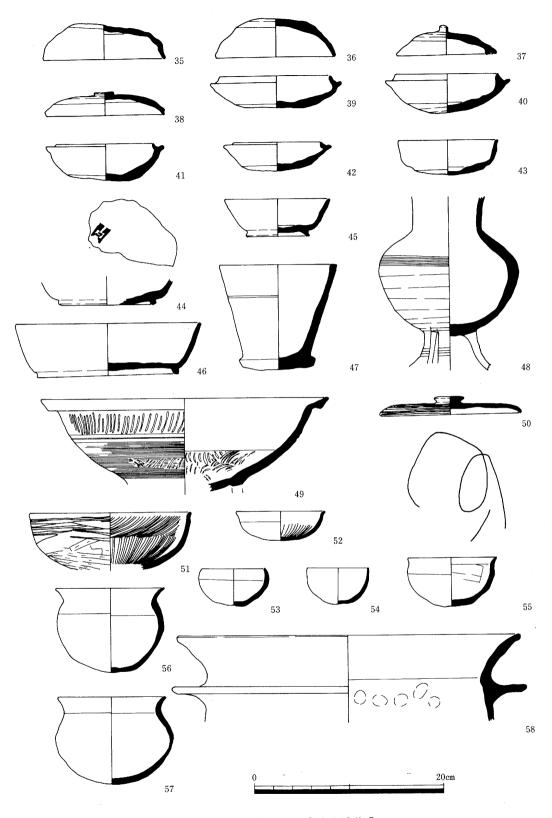
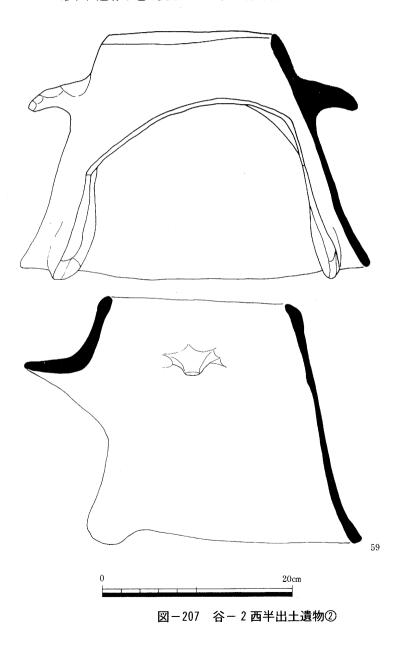


図-206 谷-2西半出土遺物①

56・57は小形の甕。口縁部は体部から緩やかに外反する。外面指頭調整、内面はナデ調整である。58は羽釜。鍔は短く、水平に取り付き、口縁部は緩やかに外反する。鍔下面には煤が付着。体部内面には指頭圧痕がみられる。59は竈。口径17.4cm、器高26.1cmを測る小形の竈である。全体の約60%を残す。口縁部は外傾する面をなすように調整し、庇は一体となった曲げ庇である。焚口はやや裾広がりの平面形を呈し、焚口部分に、厚さ2.3cm、幅5cm前後の脚部を2本有する。背面には脚部はみられない。把手は体部側面の上方寄りに取りつき、やや下方へ弯曲した比較的長い把手である。体部の器壁は6mm前後と薄い。胎土は雲母を含む茶褐色のものであり、通有の竈と変わらない。口縁部付近には、煤も付着している。通常の大きさの羽釜とは



セット関係になり得ないが、井戸-1出土の小形の羽釜(6)であると、体部最大径15.6cm、鍔最大径が20.1cmであるため、この竈とセット関係になり得ると考えられる。

#### I. 包含層 (図208)

2・4は建物-22付近、 1・3・6・9・10は建物-71付近、5は溝-6付近、7・8・11・12は建物-84付近の包含層から、それぞれ出土したものである。

1~5は須恵器。1は 杯蓋。天井部外面は、回 転へラ切り後、ナデ調整。 2は杯身。外面底部は、 回転へラ切り後、ナデ。 3は高杯。口縁部は、や や外方へ開く。外面底部 は回転ヘラケズリ調整。 脚部は外方へ開いた後、 下方へ垂下する。三方に

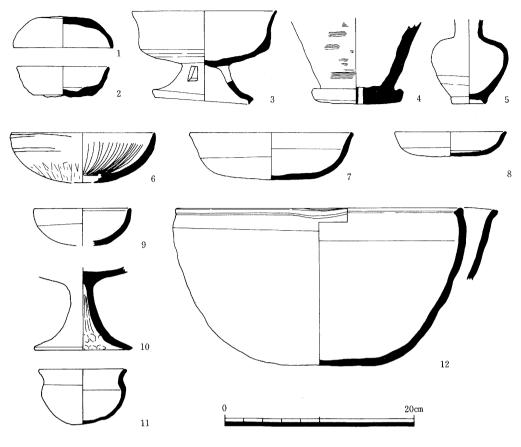


図-208 包含層出土遺物

長方形の透かし窓がみられる。 4 はすり鉢。底部外面に幅 2 mm前後、深さ  $1\sim 2$  mmの刺突痕が、約70個みられる。また、底部中心よりやや片寄った位置に、直径 6 mmの円孔が穿たれている。外面はカキメの後、回転ナデ調整。 5 は瓶子。断面三角形の低い高台を有する。

6~12は土師器。6~9は杯。6の内面にはラセン暗文、放射暗文、外面にはヘラミガキが施される。外面底部は一方向へのヘラケズリを施す。10は高杯の脚部。ラッパ状に開く脚部である。外面はナデ、内面にはシボリメ、指頭圧痕が残る。11は小形の甕。口縁部は緩やかに外反する。12は片口の鉢。体部は深く、底部は平底に近い。口縁部は、やや内弯し、端部で肥厚する。片口は外反するが、その外反度は弱い。口縁部はヨコナデ、体部は全面がナデ調整である。

包含層は褐色、あるいは黒褐色の粘質土であり、部分的にしか残っていない。また、遺物も 良好なものが少ない。遺物の時期は6世紀後葉~8世紀であり、かなりの時期幅の遺物を含ん でいる。

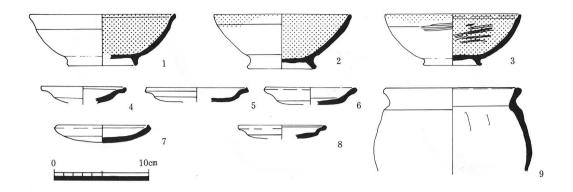


図-209 平安時代の遺物

# 平安時代の遺物 (図209)

平安時代の遺物は黒色土器・土師器が出土している。 1 は建物-109のピット-9 から、 5 はピット-24から、 4 はピット-25から、 6 はピット-26から、  $2 \cdot 3 \cdot 7 \sim 9$  は溝-6 から、 それぞれ出土した。

 $1\sim3$  は黒色土器椀。1 の口縁端部内面は浅い凹面状をなし、3 の口縁端部内面には浅い凹線がめぐる。高台は、1 ではほぼ直立し、2 では外方へ開き、3 では外反気味になる。2 の高台が最も高く、椀部も2 が最も深い。3 の椀部内外面にはヨコ方向のヘラミガキが部分的に残っているが、 $1\cdot 2$  では十分に確認できない。いずれも、内面にのみ炭素が吸着している。

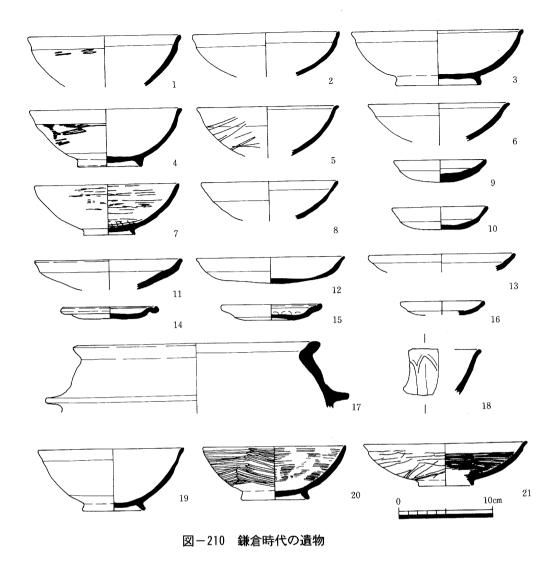
 $4 \sim 9$  は土師器。 $4 \sim 8$  は小皿。口縁部が水平に近く外反し、端部で上方へつまみ上げるような形態を示すもの( $4 \cdot 5 \cdot 8$ )、口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめるもの(6)、口縁端部が内方へ屈曲するもの(7)がみられる。9 は甕。口縁部は斜外方へのび、端部で肥厚気味に丸くおさめる。外面ナデ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ調整。

## 鎌倉時代の遺物 (図210)

1はピット-27から、2はピット-28から、3はピット-29から、 $4\sim6$ ・ $9\sim12$ ・14・17は土坑-5から、7は土坑-6から、8・13・15・16・18は土坑-6 の周囲の溝から、それぞれ出土している。 $19\sim21$ は包含層から出土しており、19は建物-14付近、20は建物-6 付近、21は溝-6 付近から、それぞれ出土している。

 $1\sim10$ は瓦器。  $1\sim8$  は瓦器椀。いずれも、器高は低く、低い高台を有する形態のものである。 7 の内底面には格子暗文、内面にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。  $1\cdot 4\cdot 5\cdot 7$  の外面にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。  $9\cdot 10$ は瓦器の小皿。いずれも浅く、体部からそのまま口縁部に至り、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、体部は外面が指頭調整後にナデ、内面はナデ調整である。いずれも、かなり風化しているが、 9 の内面にはヘラミガキの痕跡が認められる。

 $11\sim17$ は土師器。 $11\sim13$ は皿。11は体部から屈曲するように口縁部がのび、 $12\cdot13$ は体部か



らそのまま口縁部に至る。いずれも口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともにナデ調整である。 $14\sim16$ は小皿。口縁部が大きく外反し、端部で内方へ肥厚するもの(14)、口縁部の外反が弱いもの(15)、体部からなめらかに口縁部に至り、端部で丸くおさめるもの(16)がある。17

は羽釜。鍔は短く、水平に取り付く。口縁部は外方へ屈曲し、厚い。内外面共に煤、炭化物が 付着する。

18は青磁椀の口縁部である。口縁部は緩やかに外反する。淡緑色の釉をかけ、外面には削り出しによる蓮弁が表現される。

19~21は瓦器椀。19は器高が高く、高台は斜下方へのびる。20は器高がやや低く、高台も鈍くなる。21は器高が非常に低く、高台も断面が三角形状の低いものになっている。19は磨滅が激しく、暗文等は不明である。20は内外面共に密なヘラミガキを施すが、暗文の有無は不明。21は内底面に斜格子状の暗文を、内面には密なヘラミガキを、外面には疎なヘラミガキを施している。

## 古墳出十遺物 (図211・212)

 $1\sim7$  は、調査地区南西部で周溝の確認された古墳に伴うと考えられる埴輪である。 $1\sim3$  は原位置を留めていた円筒埴輪であり、図-169の① $\sim$ ③の埴輪に、それぞれ対応する。4 は、ほぼ原位置と考えられる状態で出土しており、 $5\sim7$  は周溝の西側から出土した埴輪である。

 $1\sim5$  は円筒埴輪。いずれも断面が低い台形を呈する凸帯を有し、凸帯 3 本、4 段からなる小形の円筒埴輪である。4 の器高は41.5cmを測り、 $1\sim3$  も、ほぼ同じ器高であろう。しかし、 $1\sim4$  は凸帯間が10cm前後の幅であるのに対し、5 では8.6cm前後となっており、外面調整も異なることから $5\sim6$  段になることも考えられる。口径は24cm前後と推定され、底径は14cm前後である。透し孔は、対向する位置に円形の透し孔が、体部の二段に互い違いに穿孔される。口縁部は体部から外反することなく、直線的にのびる。底部は器壁が厚くなるが、特に調整は行っていない。 $1\sim4$  の外面調整は1 次調整の左上がりのタテハケのみであり、内面はナデ上げている。5 は外面に1 次調整タテハケ後、2 次調整として継続するヨコハケを左向きに施している。ハケ状工具の静止痕は左下がりとなる。しかし、ヨコハケの施し方は雑であり、各所に1 次調整のタテハケが残っている。また、本来ならば丁寧なヨコハケを施す口縁部のヨコハケが、特に雑である。内面調整は $1\sim3$  と同様にナデ上げている。また、口縁部に「+」のへラ記号がみられる。5 の円筒埴輪は周溝西側の包含層から出土しており、原位置を留めていない。外面調整が $1\sim4$  と異なり、凸帯の数や器高も異なる可能性が強いことから、この古墳に伴う埴輪でない可能性もある。

6・7は形象埴輪。6は靫形埴輪。長身の柳葉形の鉄鏃を描いたものと思われるが、2個の 鋲かと思われる二重の円が刻まれており、理解し難い。矢の上・横は2本の平行線で画されて おり、平行線間は直交する直線が連続して刻まれている。縦の平行線から外側に、2本1対の 上反りの弧線が3本描かれており、これも各線の間を直交する直線を連続して描いている。円 筒部分に粘土板を貼りつけたものと考えられ、裏面には補強の粘土がみられる。表面は細かい タテハケ、裏面はナデ調整である。

7 は動物の脚であろう。中空の円柱状であり、断面の直径は4.2cmを測る。下端は台形状に 広がる。外面は細かいタテハケ、下端は指頭調整。馬の脚と考えるには、やや細いため、猪か 犬の脚と考えられる。

#### 埴輪群出土遺物 (図213~216)

11R地区で検出された埴輪群から、1~23の遺物が出土している。

 $1\sim7$ は須恵器。1は杯蓋。天井部と口縁部の境には明瞭な稜線がみられる。 $2\sim7$ は杯身。 $2\sim4$ は高い立ち上がりを有する。 $2\cdot4$ の受部は、ほぼ水平にのびる。 $5\sim7$ は内傾する短い立ち上がりを有する。 $1\sim4$ は、5世紀末葉を前後する時期、 $5\sim7$ は、6世紀末葉を前後する時期と思われる。

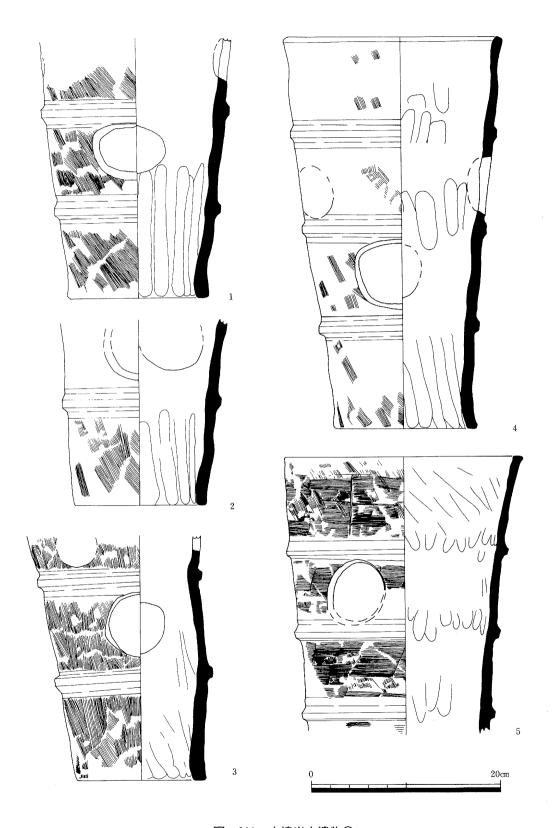


図-211 古墳出土遺物①

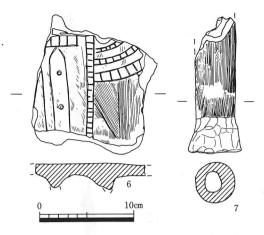


図-212 古墳出土遺物②

8~15は円筒埴輪。8~11は、外面に2次調整の継続するヨコハケがみられ、12~15は、1次調整のタテハケのみがみられる。口縁部は体部から直線的にのびる(8・12)。底部は肥厚するが、ナデを施すのみで、特別な調整はみられない。凸帯は断面形が低い台形を呈する。透し孔は円形で、各段に互い違いに穿孔される。凸帯は3本のもの(8)と4本のもの(12)がみられ、他は不明であるが、基本的には3本と思われる。内面調整はナデ上げを基本とするが、一部にハ

ケメの残るもの( $9 \cdot 10 \cdot 13 \cdot 14$ )、全面にハケメを施すもの(12)がみられる。口径は25cm 前後、底径は $12.8 \sim 18.8$ cm、器高は47cm前後、凸帯間の幅は $8.6 \sim 11.0$ cm、基底部の幅は $8.8 \sim 14.2$ cmである。12の体部三段めに「 $\times$ 」のヘラ記号がみられる。

16・17は朝顔形埴輪。16の口縁部はラッパ状に開き、端部で外反する。中位に断面台形の凸帯がめぐり、頸部に断面三角形の凸帯がめぐる。内外面共に左上がりの細かいハケメを全面に施す。17は頸部から体部にかけての破片である。頸部には上反りの断面三角形の凸帯がめぐり、体部の凸帯は台形断面を呈する。透し孔は円形。頸部は内外面共に左上がりのハケメ。体部は継続するヨコハケを施す。内面はナデ調整。肩部に平行線と曲線からなるヘラ記号がみられる。

18~20は蓋。18は立飾り部分の板状の破片である。2本一単位の線刻が、外形に沿って描かれている。両面とも同一の文様である。19は立飾りの柱状部であり、蓋の上部にソケット式に挿入されるものである。柱状部は中空であり、直径約6.4cm、下端は丸くすぼんでおり、上端から四方へ板状の立飾り部分がのびる。一部に弧線からなる文様がみられる。全面をナデ、指頭調整で仕上げる。20は蓋の端部の破片である。端部は浅い段を有して帯状にめぐり、内面には粘土の補充がみられる。外面は細かいハケメ、内面はナデ調整である。

21~23は家形埴輪。21・22共に、切妻の屋根部分である。21の妻側の軒端は直角に反り上がっており、幅も広い。妻には円形の透し孔がみられ、棟柱を表現した粘土塊が貼りつけられている。屋根には直線によって構成される線刻がみられる。22は軒端を欠損している。屋根の側面には、2本の平行線によって、方形の区画が描かれている。21・22共に、全面を細かいハケメで調整する。23は家形埴輪の軒と壁部分と考えられる。軒は約3cm出ており、壁には直角の切り込みがみられる。おそらく、この部分が方形となり、入口、もしくは窓になるものと思われる。軒にはヨコ方向のハケメが施され、壁部分にはタテ方向のハケメが施される。内面は指頭調整である。しかし、壁の厚さが約1cmであり、家形埴輪とすることに、若干の疑問も残るものである。

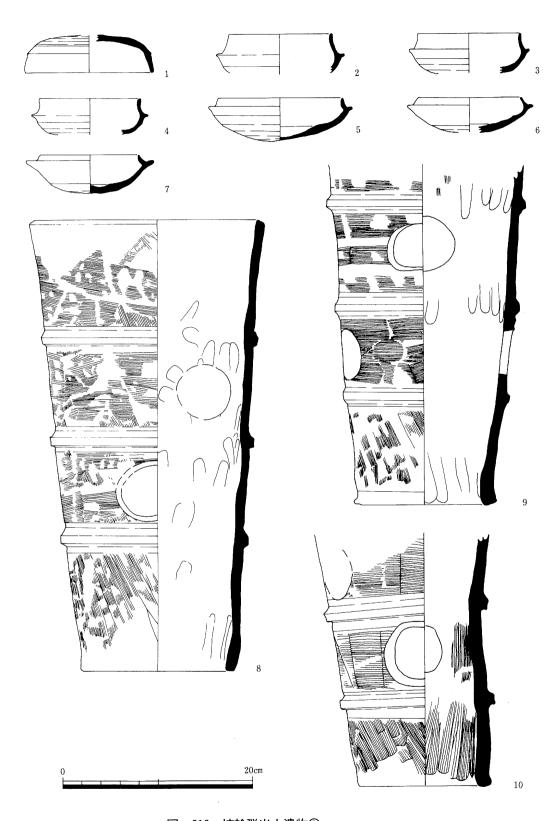


図-213 埴輪群出土遺物①

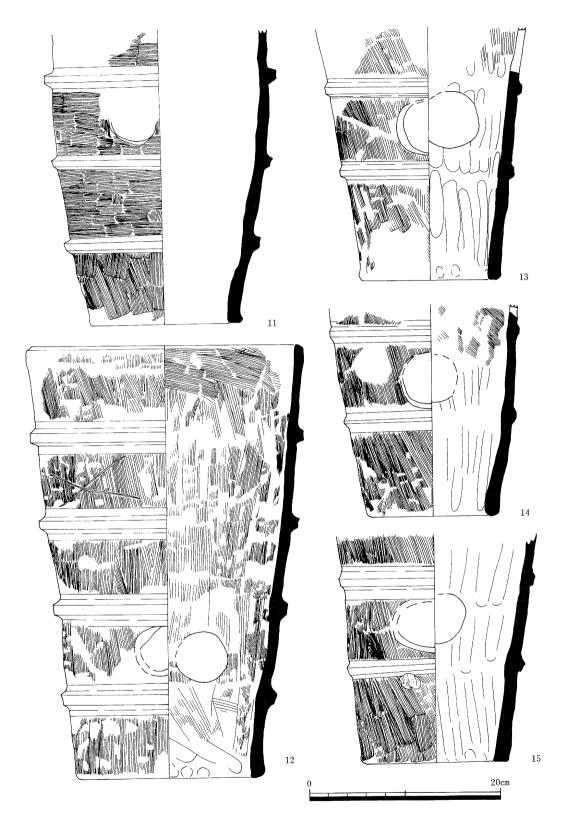


図-214 埴輪群出土遺物②

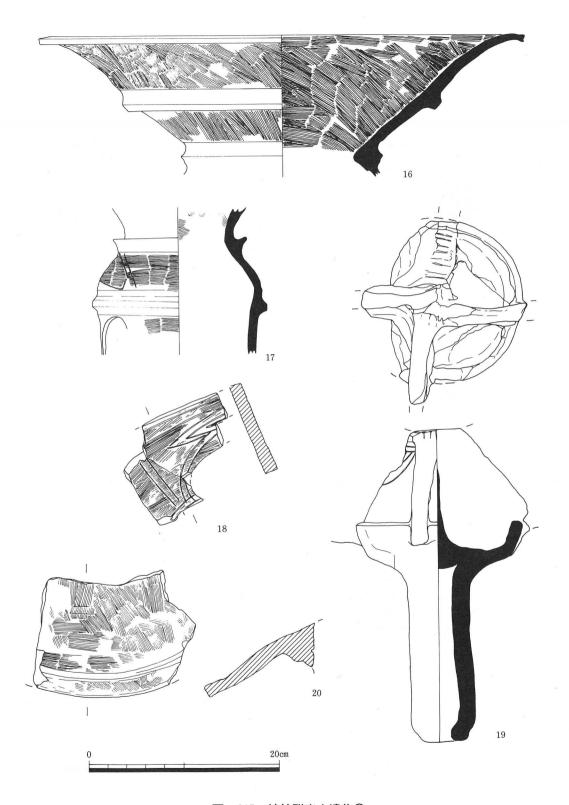


図-215 埴輪群出土遺物③

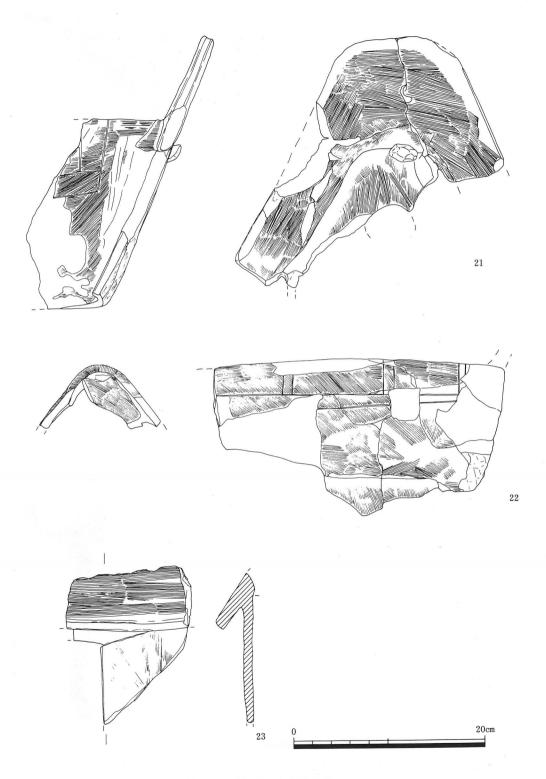


図-216 埴輪群出土遺物④

# その他の遺物

#### A. 埴輪 (図217~222)

図-217~220の埴輪は谷-1から出土したものである

- 1・2は円筒埴輪の口縁部。どちらの口縁部も、体部から直線的にのび、ほとんど開かない。口縁端部は浅い凹面状をなす。2の凸帯は低い台形断面を呈する。1は外面1次調整のタテハケ後、継続するヨコハケを施し、静止痕は左下がりとなる。2の外面は1次調整のタテハケのみである。内面はどちらも左上がりのタテハケであり、口縁近くはヨコ方向のハケメとなる。1の外面には「M」字状のヘラ記号がみられる。また、2の凸帯のやや上方に焼成前の円形の穿孔がみられる。外面での直径1.5cm、内面での直径0.7cmであり、外面から先細りのものによって穿孔されたと考えられる。
- 3・4は盾形埴輪。3・4共に、円筒に板状の粘土を貼りつけている。3は側縁に沿って、3本の平行線、その内側に横向きの鋸歯文を描き、鋸歯文の内部に5本の直線を刻む。その内側にも2本の平行線と鋸歯文が線刻される。下方には縦向きの鋸歯文が描かれ、やはり、内部に直線が刻まれている。外面板ナデ、側縁ヨコナデ、内面ナデ調整。4も同様の形態であるが、側縁に平行する直線は2本であり、鋸歯文内部の直線は6本前後となる。また、3に比して、1個の鋸歯文は大きく、線刻は雑である。外面タテハケ、側縁はナデ、指頭押圧、内面はナデ調整。

5 は靫形埴輪か。板状の右下が鋭角に尖る破片であり、外形に沿った2本の線と、その間を うめる直線が線刻されている。外面タテハケ、側縁ヘラケズリ、内面ナデ調整。

6~9は蓋。6は立飾りの先端部分。鋭角をなし、外形に沿って、各2本の線刻がみられる。表面ハケメ、側面はヘラケズリ調整。7は柱状部の上端が大きく開き、受部状になり、そこから四方へ立飾りがのびる。弧線からなる線刻がみられる。8・9は笠部分の破片であり、胎土等から同一個体の可能性が強い。笠は端部で弱い段をなし、外面には2本一単位の弧線と直線からなる線刻がみられる。外面はハケメによって調整されるが、上方では弧状のヨコハケ、端部近くでは放射状のハケメとなり、ある程度、外観を考慮したものと思われる。

10は不明の形象埴輪である。縦断面・横断面共に弯曲の認められない板状を呈し、そこに、 緩やかな弧を描く粘土板を貼りつけている。外面は4本以上の平行線と、その間をうめる鋸歯 文が描かれている。外面はハケメ、内面は板ナデによって調整される。盾の一部であろうか。

11~19は家形埴輪。11~14は屋根の一部である。いずれも切妻屋根と考えられる。11・12は同一個体の両側と考えられる。両側には低い凸帯によって方形の区画が表現され、2枚の板状に立ち上がった棟の上には半円形のくぼみがみられ、鰹木をのせていたものと思われる。妻には縦・横の線刻によって方形の区画がみられ、半円柱状の棟木が表現される。軒には赤色顔料が残っている。全面、ハケメによって調整する。かなり大形品であり、屋根の長さは65cm以上

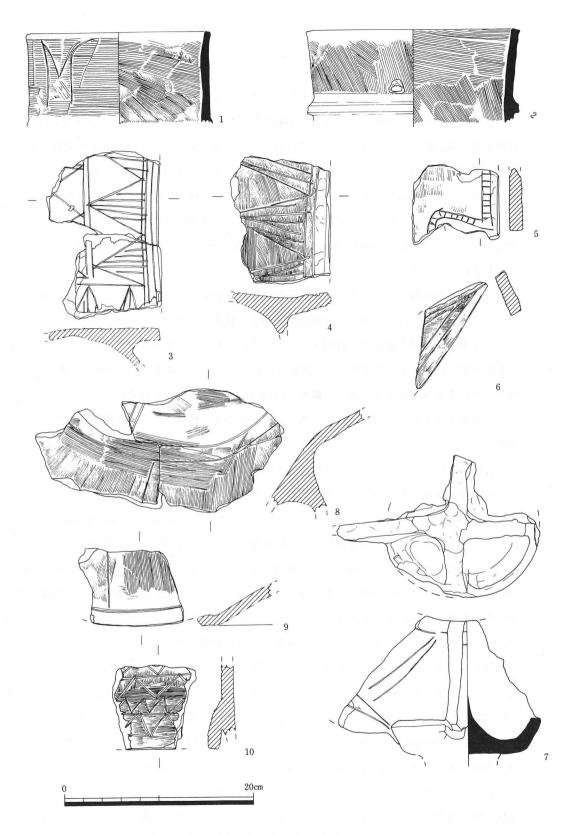


図-217 谷-1出土埴輪①

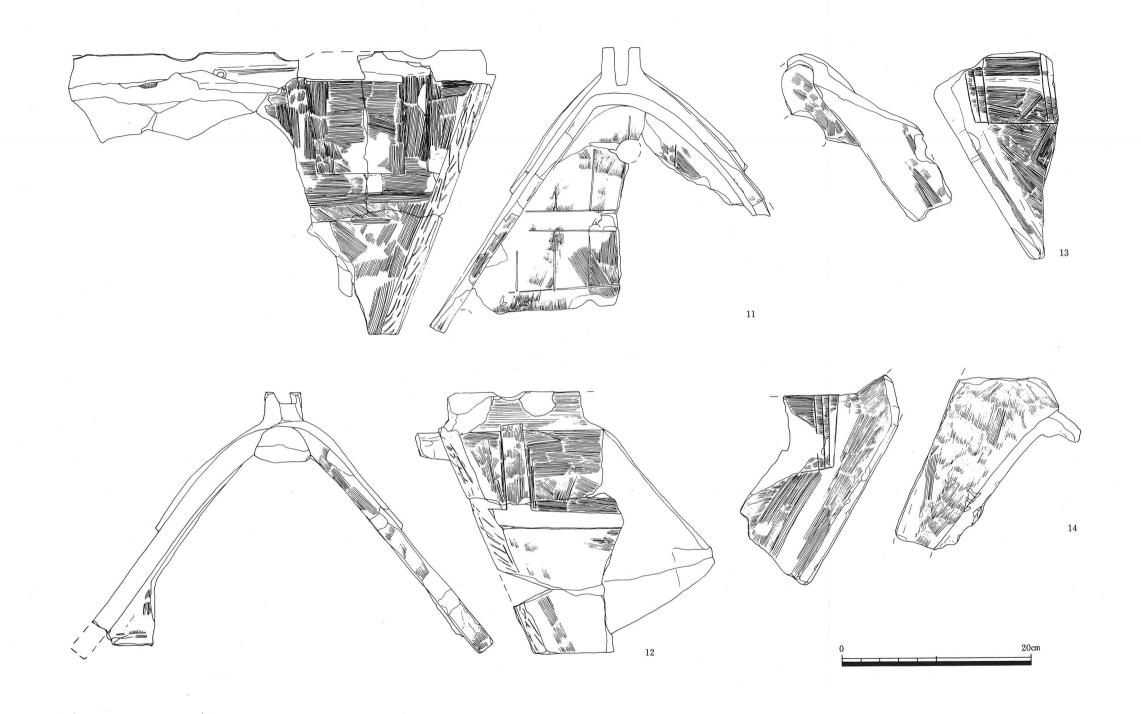


図-218 谷-1出土埴輪②

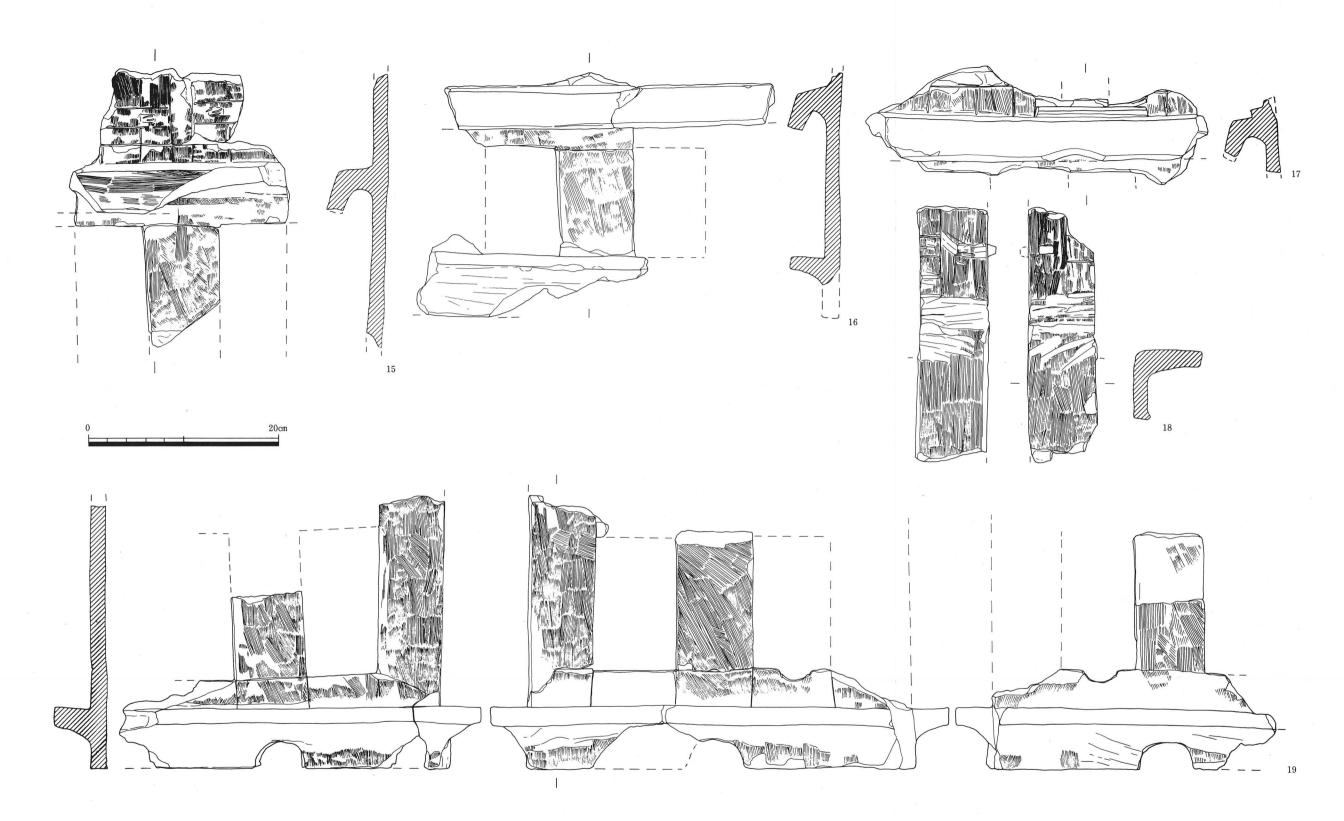


図-219 谷-1出土埴輪③



図-220 谷-1出土埴輪④

となる。13・14は屋根の側面に縦横の線刻がみられる。外面はハケメで調整する。

15~19は高床建物の一部である。底部は高く突出する凸帯がみられ、下面には半円形の切り込みが認められる。この底部から、板状の柱が立ち上がるが、19では、柱のない部分に半円形の切り込みがみられる。床は屈曲した凸帯状の粘土板を貼りつけることによって表現される。壁には縦横の線刻がみられ、17では段をなした入口と思われる部分がみられる。また、方形の小突起を貼りつけたもの(15・18)がみられる。柱を表現したものであろうか。すべて外面はハケメで調整され、同一個体の可能性がある。19から梁行2間、桁行2間以上であることがわかる。

20は不明であるが、形象埴輪と思われる。背面は直立し、前面が下開きとなる円筒状の外形を呈し、前面の三方に、中空の牛角状の突起がみられる。上下共に破損しており、全形は不明。また、上下左右も確実なものではない。暗橙色を呈し、磨滅が激しいが、内外面共にナデ調整と思われる。

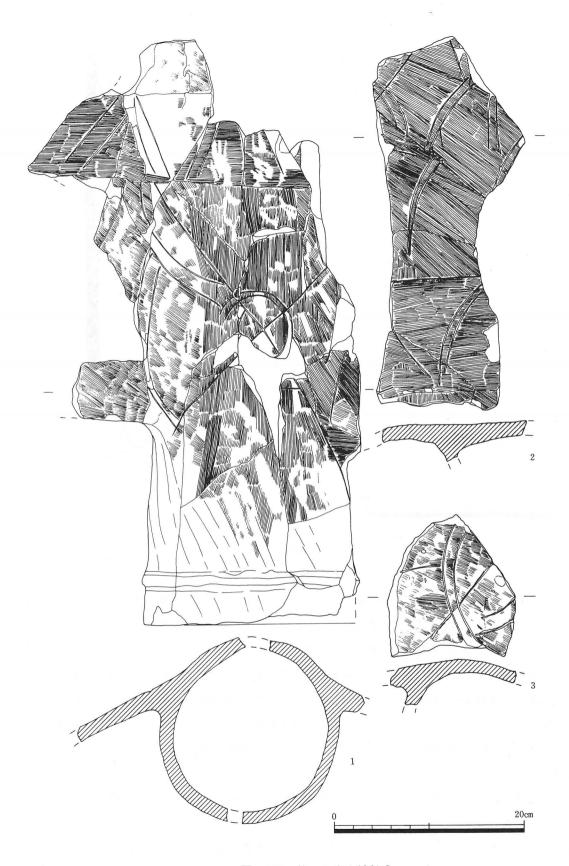


図-221 谷-2出土埴輪①

図 $-221 \cdot 222$ は谷-2から出土した埴輪である。 $1 \sim 4$ は靫形埴輪。1は直径20cm弱の円筒の前側面に粘土板を貼り付けたものである。高さは62cm以上であるが、上部、および周囲を欠損する。中央に二重の円形の線刻があり、そこから四方に直線がのびる。周囲には直線や弧線からなる幾何学的な文様がみられるが、必ずしも左右対称とはならないようである。側面の下端も左右で約3cmずれており、均整のとれた形態とは言い難い。底部には低く鈍い凸帯が1本めぐる。外面はタテハケ、他はナデ調整である。 $2 \sim 4$ も同形態と思われ、直線と弧線からなる複雑な文様がみられる。4では、壁面に対して約33°の角度で、直径6mmの円孔がみられる。焼成前に、外面から穿孔されており、鳥の羽や木製品をさしていたことも考えられる。いずれも外面は細かいハケメで調整される。

5 は動物埴輪の脚である。直径5.8cmの円柱状を呈し、下部は段をなして、やや裾広がりとなる。外面はタテ方向のナデ、下部はヨコハケで調整される。馬のひづめを表現したものであろうか。

6 は形象埴輪の台部かと考えられるが、不明である。上端に三角形状の切り込みと、一部で 平坦面がみられるが、更に上部へのびるのか否かは確認できない。上方には鍔状の凸帯がめぐ り、体部はやや裾開きの円筒状をなし、下端は不明である。外面上半はヨコナデ、下半はタテ ハケ、内面はヨコ方向のナデを施す。

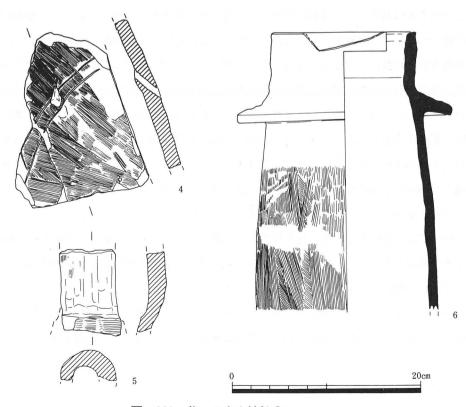


図-222 谷-2出土埴輪②

#### B. 屋瓦 (図-223~225)

屋瓦の出土点数は、あまり多くない。軒丸瓦が2点、軒平瓦が1点、他は丸瓦・平瓦の破片である。

軒丸瓦は、溝-6から重圏文軒丸瓦(図188-6)が出土している。もう1点は、複弁蓮華文軒丸平の小片であり、建物-109周辺の包含層から出土している。瓦当直径は16cm前後と推定される。中房には小さい蓮子を配し、複弁の蓮華文を細い線によって表現され、間弁も明瞭ではない。外区には小さい珠文が広い間隔でみられる。平安時代に下ると思われる。

軒平瓦は、無顎の巴文軒平瓦である。建物-16周辺の包含層から出土した。頭部が小さく、 尾の長い巴が2個で1組となり、7組の巴文がみられる。平瓦部凸面はナデ、ケズリによって 仕上げ、凹面は細かい布目痕と糸切り痕がみられる。

丸瓦は残存状態の良好な2点( $3\cdot 4$ )を図化した。丸瓦(3)の凸面には、有軸綾杉文の叩きがみられ、これをすり消している。有軸綾杉文は鳥坂寺B-3類の叩き目と同一と思われる。凹面には細かい布目が残る。丸瓦(4)の凸面には、縄叩き目が残る。縦方向に叩かれており、丁寧にすり消されているが、部分的に残ったものである。凹面には布の合せ目がみられる。

平瓦(5)は、0.5cm前後の幅の平行線に、数本の斜線が入った叩き目を施したものであり、この叩き目は鳥坂寺C-3類の叩き目に一致する。粘土板の合せ目がみられ、側縁は分割破面に雑なヘラケズリを施す。平瓦(6)の叩き目は、綾杉文と平行線文を組み合せたものであり、鳥坂寺D-10類に一致する。平瓦(7)の叩き目は、平行線と斜線からなる複雑な叩き目である。鳥坂寺D-6類と同一と思われる。平瓦(8)の叩き目は、平行線間に斜線や山形線のみられるものであり、鳥坂寺D-3類と同一と思われる。平瓦(9)の叩き目は、細い平行線の間に斜線が入るものと、平瓦(8)と同一の叩き目を併用したものである。鳥坂寺C-4類とD-3類の併用によるF-3類に一致すると考えられる。いずれも、凹面に模骨痕が残り、側縁に分割破面が残るか、もしくは、それを丁寧なヘラケズリによって消したと考えられるものであり、桶巻作りによる平瓦と思われる。

10~12は、縄叩き目を施した平瓦である。縄叩きは、いずれも縦方向に施され、1 cmあたり、4 本の縄目を有する。凹面には布目がみられ、布目は比較的細かい。凹面や側縁の状態から、いずれも一枚作りであろう。

平瓦は、7が谷-1西半から、 $5 \cdot 6 \cdot 8 \cdot 9$ が谷-2東半から、 $10\sim12$ が谷-2西半から出土しており、奈良時代の平瓦が、調査地の東側、つまり標高の高い部分から出土する例は少ない。

#### 参考文献

大阪府教育委員会『河内高井田-鳥坂寺跡』1968

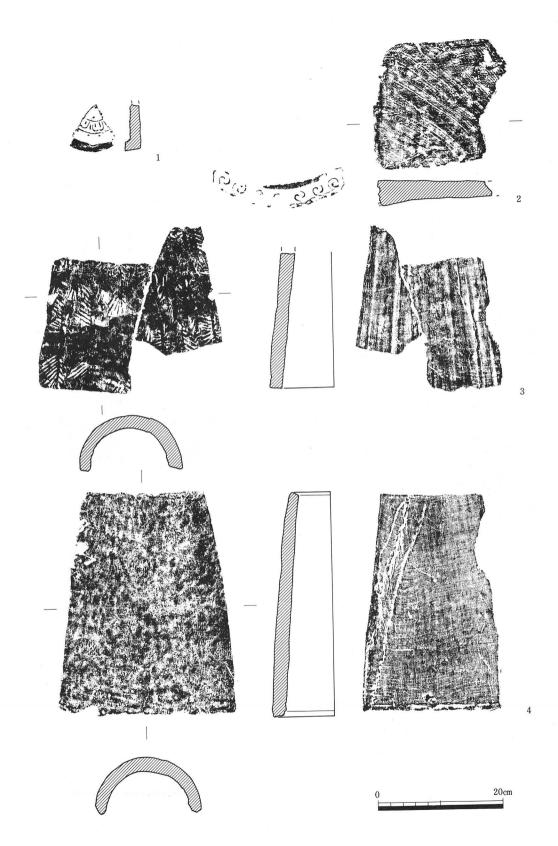


図-223 屋瓦①

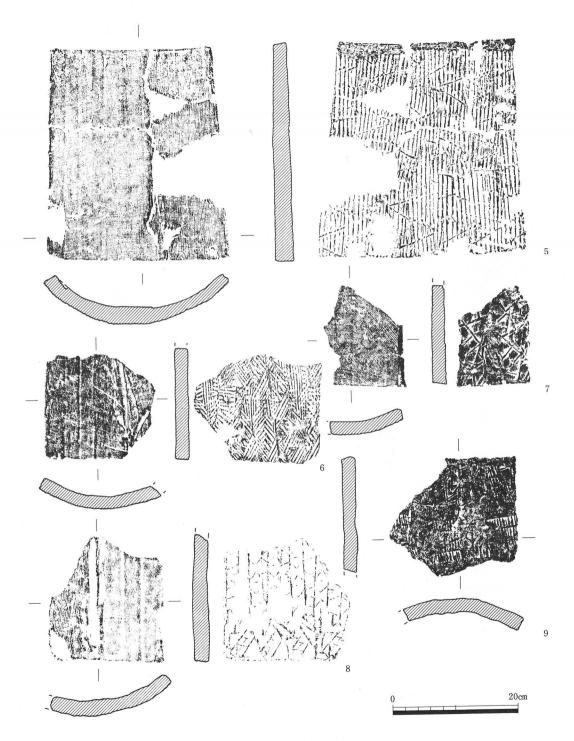


図-224 屋瓦②

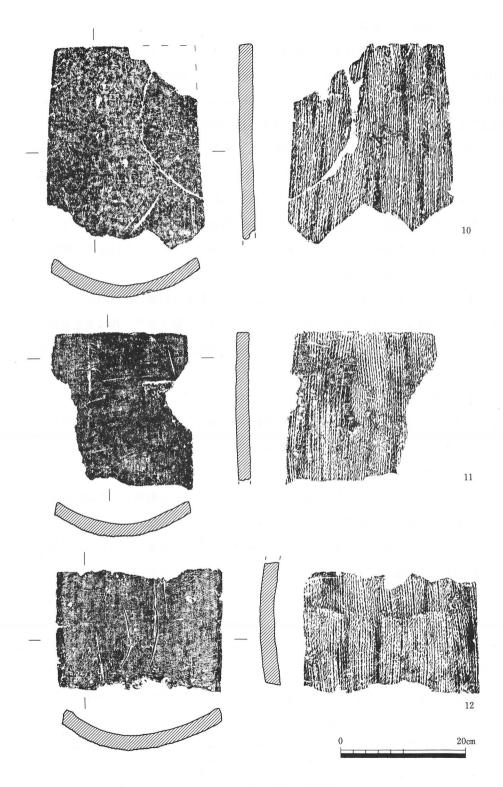


図-225 屋瓦③

## C. 木製品 (図226~230) 板状

木製品は、谷-1を中心に、遺存状態の良好なものが多数出土している。

1~7は紡織具。糸巻の枠木未製品、枠木、横木である。1は一端を欠くが、枠木であろう。 断面が円形に近い棒状をつくり、一端を断面カマボコ形に削る。削り調整が粗く、枘孔がない ため、未製品とも考えられる。2~5は横木が一部残存し、枠木長24~28cmをもつ中型の枠木。 全て枠木の腹面を平坦にして、断面がカマボコ形を呈し、横木の結合部から両端に向って斜め に削り込み、さらに2個所結合部間に、浅い刳形をいれる。そして枠木の側面から木釘を打込 んで横木を固定している。6は横木。中型の4本からなる枠木の横木。板の中央を幅広く残し、 両端を棒状に削り出して枝部をつくる。7は枘孔が背面に貫通するものを7個所もつ。全て円 孔で、焼火箸のようなもので穿孔されている。断面が半月形を呈する。ここでは糸巻の部類に 包括したが、用途が異なる可能性が強い。

8~10は刳物。8・9は長方形盤。板材の内外とも平坦な底部から口縁部が斜めに立ち上がる。口縁端部は長辺が薄く、短辺が厚い。内外とも加工痕を残す。横木取り。10は丸木舟形。 船後を欠くが、船首ともにやや尖らせたものと考えられる。棧をおとした溝を舷側の両側にあけている。

11は挽物。漆器の蓋である。内外の漆面がよく保存された状況で出土した。縁部内面の内寄りにかえりをつけ、頂部に宝珠つまみをつくる。内外ともに木心のうえに直接黒漆をかける。

12は両端部を欠く。丸みをもつ背部に、1個所円孔を穿ち、その付近に1列4個所の木釘を貫通させている。鳥形の頭部らしきものと考えられる。

14は木錘。丸太の中央に向かい、自然に細くなるようにした典型的な鼓形で、両端に旧丸太面を残さず、丁寧な加工を施す。蓆編みなどに用いられる「槌の子」の類。

16~23は下駄。下駄は台と歯とを一木からつくる連歯下駄である。出土した下駄は全て前壺を左右のいずれかの一方に寄せてあけ、後壺を後歯の前にあけたものである。16・17は歯と台が同じ幅で、縦断面が方形・台形を呈する。平面形は長さに対して幅がせまく、前端と後端が半円形を呈す。18・19の平面形は前後の端を弧形にするが、前幅よりも後幅をせまくする。19は後歯を消失するほどに使いこんでいる。20は鼻緒孔を熱した鉄棒で穿孔されたものと考えられる。22・23は、出土した下駄のうち、2点のみ高い歯をもつものである。平面形において、22は前幅より後幅をせまく、23は長さに対して幅がせまい。鼻緒孔は先を熱した鉄棒であけたらしい。歯のつくりは両者とも、前・後歯ともに側面からみて外開きにつくりだす。

下駄は16・19のように、使用によって足形、足指形にすり減ったものがみられ、普段の生活に使用されていたものと考えられる。また、いずれも30cm近い長さがあるため、大人用と考えられるものである。下駄は全て谷-1から出土しており、厚みがあるため、残存状態は良好である。

26は匙形。先端は半円形をなし、身と柄の境に粗い削りを施す。使用痕がなく、粗製品で、 断面に厚みをもつことから未製品と思われる。

27は杓子形。身の先端を一直線につくる。粗い加工で、身幅が広いので、用途が異なるかもしれない。

28は剣形。切先を山形に尖らし、剣身から茎まで中央に鎬をとおす。関部を削り込み、柱状の茎をつくりだす。茎部には黒漆を施す。

29は斎串。一端を欠く。細長い薄板の端を尖らせ、両側面に3個所の切り込みを施した串状品。

32~41は曲物。32は円形曲物の蓋。円板のうえにひとまわり小さい側板をあて、蓋板に2孔 1対、側板に1孔の結合孔を5個所あけ、樺皮で結合。結合孔は円圏に対して5個所均等にあ ける。側板の綴合せは1個所で行い、1列内2段綴じである。また、側板内面には斜め方向の ケビキが入る。蕎板内面に、黒と朱色の墨書痕がわずかに残る。33は底板のみ残存するが、円 板の中央とみられるところに2孔1対の円孔がある。ここに蓋の把手をつけたものと思われる。 35は長方形曲物。側板のほぼ完形品。側板は3重からなる。樺皮紐による綴合せは側板端の下 端にV字形の切欠きをいれるにとどまり、綴目をあけていない。よって、底板を落とし込んだ ものか、底板を結合する以前の未完成品なのか不明。36は円形曲物の底板。ほぼ正円。周縁側 面に側板を固定する為の木釘を打った痕が5個所残存する。38は桶の底板。2枚からなる合わ せ板で、2本の木釘で止めている。遺存状態不良の為、明細は不明。40·41は、ともに底板を 欠く。40は楕円形曲物。内外共に黒漆をごくわずか残す。側板の綴合せは2個所で行い、1列 外2段と1列内1段綴じである。側板周縁下部の結合孔は、木釘を用いたと思われる円孔が3 個所ある。綴じの部分内面に、斜め方向のケビキが入る。41は側板の下部にもう一重の箍をは めた釘結合曲物。側板の綴合せは1個所2列前内2段後3段。箍の綴合せは、1個所1列内1 段綴じ。底板との結合孔は5個所だが、箍から打込んでいない。側板内面ほとんどに、縦・斜 格子のケビキを入れる。曲物-2に対応するものである。

1・6・10・11・14・31・32・35・40は井戸-2から出土、25は土坑-11から出土、41は曲物-2から出土、他は谷-1から出土したものである。井戸-2から出土した木製品は、すべて下層から出土している。また、曲物-1は残存状態が悪く、実測不可能であった。さらに、土坑-10から出土した鋤は、整理時に、所在不明となってしまった。おそらく、他の遺跡の遺物に混入したものと思われ、確認できしだい、何らかの形で報告したいと考えている。この鋤は一木作りであり、柄の端部は欠損し、一部が欠け、また柄の2個所で折れていたが、残存状態は良好であった。刃先には、鉄刃をはめていたと考えられ、浅い切り込みがみられた。

	種類	長さ	幅	厚さ	備
1	糸巻・枠木未製品	(27.1)	2.8	3.0	著しい加工痕残存。
2	糸巻・枠木	25.2	2.2	1.85	柄孔は円形(1.0×0.9)。
3	"	23.95	2.1	1.7	横木半分残存。長(4.0)、幅1.7、厚1.0。
4	"	27.8	2.1	1.8	横木2個所残存。
5	"	(26.4)	2.4	1.7	横木を固定する木釘は異なる材質?
6	糸巻・横木	9.65	3.0	0.8	両端部に枘孔に入っていた痕あり。
7	不明	36.5	2.8	1.45	
8	刳物•長方形盤	30.2	(14.5)	高5.0	横木取り。
9	"	28.7	(10.3)	高4.9	横木取り。
10	刳物・丸木舟形	(15.7)	3.7	0.9	舟底に無数の刃物傷あり。
11	挽物·漆器蓋	10.3	10.1	高(2.5)	横木取り、ロクロ成形。
12	不明	(8.9)	7.9	1.4	鳥形?
13	"	25.0	11.3	5.3	表面焼け痕あり。
14	木錘	13.6	6.0	5.2	丸木材。加工痕一部みられる。
15	不明	21.3	22.2	高(31.0)	丸木材。地面を固めるもの?
16	下駄	28.6	12.4	高4.3	左足用。親指の位置に足跡痕。
17	"	27.5	15.0	高4.2	右足用。台部表面焼け痕あり。
18	"	29.1	11.5	高4.2	右足用。台部表面に足跡痕。
19	"	(25.5)	11.5	高3.1	右足用。台部表面に足跡痕。
20	"	26.35	10.5	高1.5	右足用。前、後歯を欠く。
21	"	(23.2)	9.8	高2.9	左足用。遺存状態不良。
22	"	(26.0)	11.5	高(5.4)	右足用。
23	"	25.4	10.4	高6.9	右足用。
24	不明	38.9	9.0	1.5	表面に刃物傷。完形品。
25	"	(10.7)	1.4	1.3	止め木、栓?
26	匙形	18.5	3.9	(2.3)	未製品。
27	杓子形	25.7	(9.0)	2.7	表裏面とも無数のノミ痕。
28	剣形	(41.5)	4.1	(2.1)	半身を欠く。
29	斎串	(19.6)	1.8	0.4	
30	不明	9.2	1.4	0.6	円孔を1個所もつ。一端を尖らす。荷札?
31	"	8.0	3.7	0.75	表裏面に刃物傷。

表-1 木製品観察表①

	種 類	長さ	幅	厚さ	備考
32	曲物蓋	径17.9		高3.7	表裏面に刃物傷。
33	"	23.2	14.2	2.0	表裏面に刃物傷。
34	曲物底板	(43.9)	(8.2)	0.9	表裏面に刃物傷。
35	長方形曲物			高5.0	底板を欠く。
36	曲物底板	18.0	(8.8)	0.8	中央部分を欠く。裏面に刃物傷。
37	"	(16.4)	(5.1)	1.1	復元直径18.4cm。木釘穴2個所。
38	"	40.1	40.8	2.1	2枚からなる合わせ板。
39	"	(12.9)	(3.4)	0.4	結合孔1個所。
40	楕円形曲物	18.0		高2.95	最小長さ16.1cm
41	円形曲物	径33.6		高(13.2)	遺存状態やや不良。

表-1 木器観察表②

# ( )内は現存値。単位はcm。

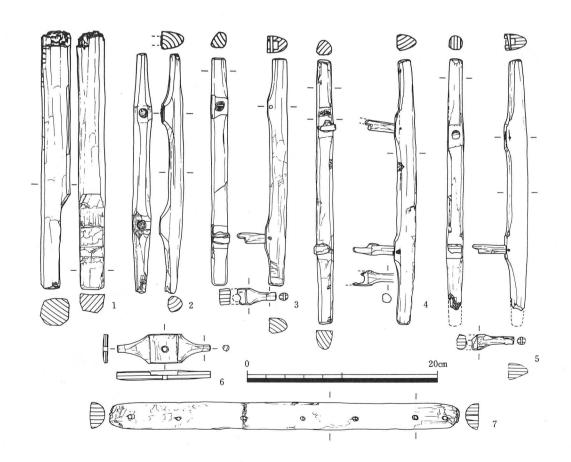


図-226 木製品①

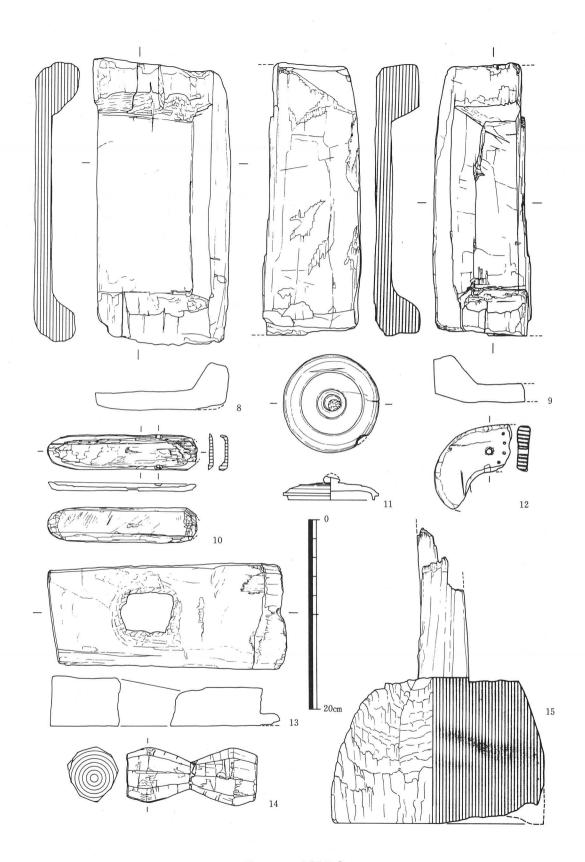


図-227 木製品②

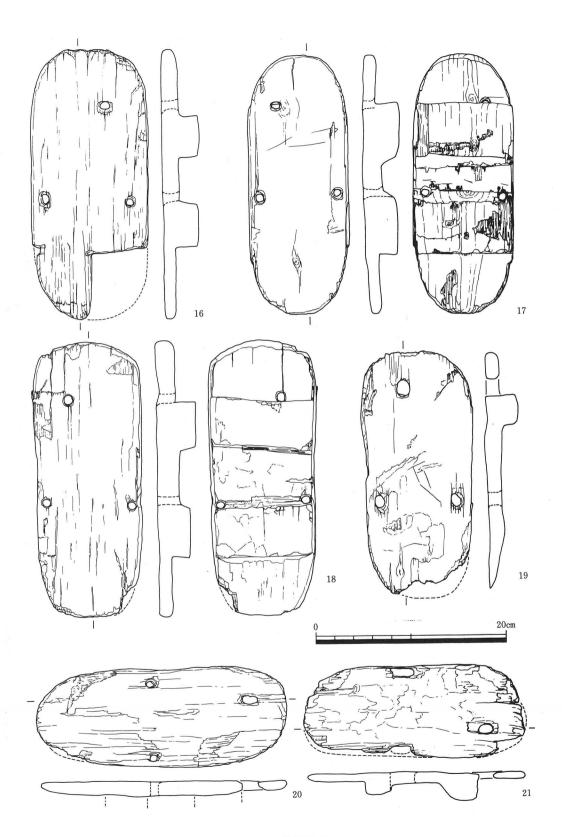


図-228 木製品③

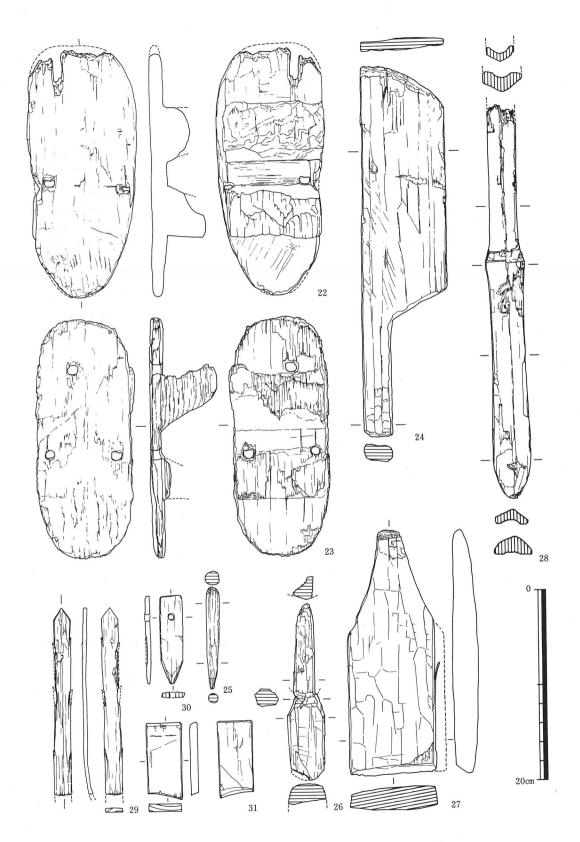


図-229 木製品④

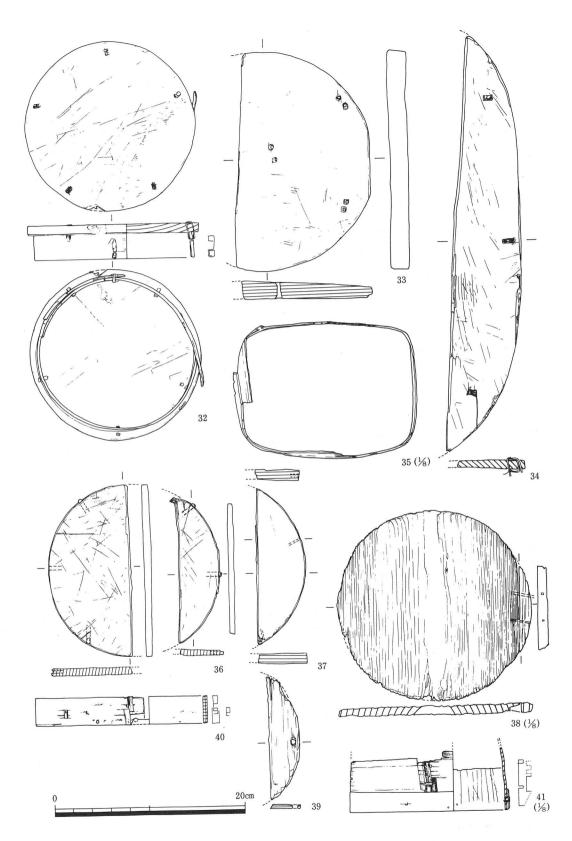


図-230 木製品⑤

# D. 鞴羽口(図231) cm。

鞴羽口の破片は多数出土している。断面形はすべて円形であるが、直径が6.5cm前後の大形のもの( $1\sim4$ )と、直径4 cm前後の小形のもの( $5\sim14$ )がみられる。長さを確認できるものは皆無であるが、大形品のほうが、小形品よりも長いようである。大形品は太さがあまり変わらない円筒形を呈するが、小形品は若干の先細り、裾開きがみられる。いずれも先端には溶融した鉄分や炭が付着している。また、外面の色調の変化から炉壁の厚さが推定でき、 $1\sim7\cdot10\sim12$ は壁厚3 cm前後、 $8\cdot9\cdot13\cdot14$ は1.5cm前後と考えられる。羽口の先端は炉壁から $3\sim5$  cm突出していたようであり、炉外へは $2\sim6$  cm突出していたようである。いずれも強い熱を受けている。胎土は粗く、多数の砂粒を含んでいる。

#### E. 鉄滓

鉄滓は $300\sim400$  g の重量の椀形滓が 7 個、10 g 前後の小塊状の鉄滓が100個以上出土している。椀形滓は楕円形平面で、半円状の厚味をもつ。最も大きい椀形滓は長径11.1cm、短径6.3 cm、厚さ5.3cm、重量450.0 g である。鉄滓の総重量は、3,257 g である。

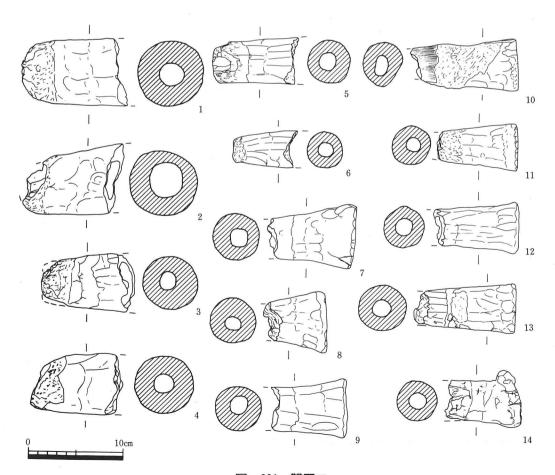


図-231 鞴羽口

# F. その他の土器・土製品 (図232)

1は弥生土器の壺底部である。平底の底部から斜上方へ体部が立ち上がる。底面には木の葉の圧痕が残る。谷-1の上層から出土しているが、他に弥生土器は認められず、他所から運ばれてきた土砂等に混入していたものと考えられる。

- 2は土馬。頭部・脚部を欠損する。全体をナデ調整する。
- 3~5は土錘。いずれも流線形の土錘であるが、形態や大きさは異なる。
- 6は灰色を呈する小形の椀である。断面は須恵質となり、内面には厚い融着物がみられる。 器壁は厚い。鍛冶関係の遺物であろう。

# G. 石製品 (図233-1~4)

1はサヌカイト製の有茎尖頭器。茎の端部を欠損するが、他は完存。現存長10.48cm、最大幅2.45cm、最大厚0.7cm、重量18.2g。両面共に、左側は左下がりの、右側は右上がりの剝離が施され、特に先端部は細かい剝離を施している。谷-1東端の上層から出土している。

- 2はサヌカイト製の石鏃。凹基無茎式で、剝離は雑である。
- 3 は滑石製の紡錘車。緑灰色を呈する。中央の円孔は回転穿孔の後、縦方向に研磨されている。表面には刃物キズがみられる。
- 4 は砥石。断面は各面が凹面状の長方形をなし、幅は一端が狭くなる。 4 面共に擦痕がみられ、かなり使用されていたようである。石材は流紋岩であろう。

# H. 金属製品 (図233-5 $\sim$ 7、図234)

5 は銅鏃であろう。凹基無茎式の形態を示すが、先端は鈍い。長さ2.7cm、最大幅1.9cm、厚さ0.2cm。直径3mmの円孔が3個所にみられる。

6は、帯金具の絞具である。長径4.1cm、短径2.3cmのC字形の金具の両端に、長さ0.7cmの 突起がみられる。断面は直径0.6cmの円形を呈し、突起には直径0.25cmの円孔がみられる。帯 の端部と絞具を、直径0.25cmのパイプ状の金具をさしこむことによって接合したものと思われる。C字形の金具には、0.5cmの円形断面を呈するT字形金具が取り付けられ、T字形金具が回転し、帯を締めるようになっている。T字形金具の先端には抉りがみられ、C字形金具と密着するようになっている。銅製品。建物-99近くの谷-2埋土から出土している。

7 は鉄鏃。先端と茎部を欠損する。現存長8.1cm、最大幅3.1cm、厚さ0.4cm。建物-16のピット-4 掘方内から出土しているが、建物-16の時期は確定できない。

 $8\sim10$ は銅銭。 $8\cdot9$ は万年通宝、10は神功開宝。皇朝十二銭の $2\cdot3$ 番目である。緑青のため、字面の残存状態はやや悪い。建物 $-63\sim65$ の位置する地山上面から、一括して出土。

## I. 獣骨

馬の骨などが、多数出土している。顎の骨や脚の骨が多くみられる。大部分が馬と思われるが、小動物の骨も出土している。

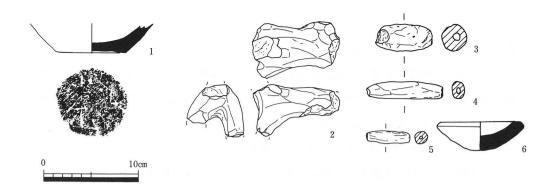


図-232 その他の土器・土製品

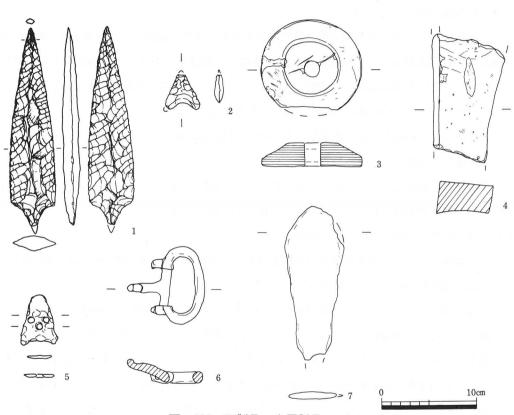


図-233 石製品・金属製品



図-234 銅銭 (原寸)

# 第4章 ま と め

## 1. 遺構 銅銭(原寸)

高井田遺跡において、これまでの調査によって検出された建物は、竪穴住居1軒、掘立柱建物169棟に達する。これらの建物の中で、時期を確認できるものは111棟あり、平安時代の建物8棟を除いた103棟は6世紀末葉から8世紀後葉にかけての飛鳥・奈良時代の建物である。内訳を述べると、6世紀第4四半期6棟、7世紀第1四半期13棟、第2四半期21棟、第3四半期13棟、第4四半期14棟、8世紀第1四半期3棟、第2四半期2棟、第3四半期4棟となる。この数値には、例えば7世紀第1四半期~第2四半期と考えられる6棟などを含んでいないため、実数は更に多くなる。その結果、7世紀代の建物総数は86棟となる。また、時期不明の58棟の大半も、ピットの形状等から7世紀代になると考えられる。

この時期別の建物棟数をみると、6世紀末葉頃から建物が建て始められ、7世紀代を通じて多数の建物が存在したと考えられる。特に7世紀第2四半期頃にピークがあると考えられるが、目立った増減はみられない。ところが、8世紀代に建物は激減する。8世紀代の建物の中には、烏坂寺に伴うと考えられる倉庫3棟などを含んでいるため、一般の建物は更に少なくなる。

建物の位置と時期について考えてみると、6世紀第4四半期の建物は、谷-1・2間の標高54m以下に限られる。ところが、7世紀になると、谷-2の南側にも建物が出現し、建物が急増するためか、標高64m付近まで建物が建てられるようになる。また、谷-2の北斜面にみられるような、急斜面を削平し、山側に溝をめぐらせた建物も、この時期には出現している。7世紀第2四半期になると、それ以前からの居住地を継承するだけでなく、更に高く、標高79m付近にまで建物が建てられるようになる。7世紀第3・4四半期は、立て替えによって居住地が継承されているが、8世紀代になると、標高54m以下にしか建物は認められず、しかも散在するという傾向にある。

また、6世紀第4四半期から7世紀第1四半期の建物の中には、規模の大きいものやピットの掘方が大形のものが多いように思われる。建物 $-7\cdot30\cdot82\cdot86$ などは、掘方の一辺長が1m、あるいはそれ以上であり、特に建物-7の掘方は大きく、最大のピット-6は短辺142cm、長辺210cm、深さ140cmを測るものである。建物の規模においても、建物-7は梁行5.32m、桁行13.72m、床面積73m²と群を抜いて大きい。他に桁行が10m以上となる建物は、今回の調査では建物-58のみであり、床面積は54.6m²以上である。烏坂寺の僧房と推定される建物は、梁行4.7m、桁行26m以上、床面積122.2m²以上、食堂と推定される建物は、梁行10.4m、桁行15.2m、床面積158.1m²となる。この2例を例外とすると、建物-7に匹敵する建物として、1985年度の調査時に検出された建物-30があげられる。建物-30は、梁行3間、6.00m、桁行5間、

10.88m、床面積65.3m"を測る。ピットの掘方の一辺長は120cm前後、最も深いピットー228は深さ128cmを測り、やはり掘方の規模も大きい。建物-30は7世紀第 $1\sim2$ 四半期と考えられ、古い時期ほど規模や掘方の大きい建物が存在した可能性が強いと考えられる。

建物の構造は梁行 2 間、桁行 3 間の建物が14棟と最も多く、梁行 2 間、桁行 4 間の建物が11棟とこれに次いでいる。それ以外には、3 間×3 間が 8 棟、2 間×2 間が 5 棟、2 間×5 間が 5 棟となっている。

7世紀代と考えられる建物の中で、総柱建物は 3 棟のみである。建物-32は 3 間× 3 間、建物-44が 2 間× 3 間、1985年度調査の建物-9 が 2 間× 3 間で、いずれも倉庫と考えられる。しかし、建物総数から考えると、倉庫が非常に少ないように思われる。また、倉庫の位置などにも、特別な規則性は認められない。倉庫を必要としなかったのか、あるいは他所に倉庫群が存在するのか、疑問が残る。

各建物は、基本的には南北、あるいは東西を意識しているようである。しかし、斜面地を削平することによって獲得した平坦面に建物が建てられているため、等高線に沿った建物が多くみられる。例えば、建物-7の主軸は磁北であるが、これも地形による影響を受けたものと考えられる。また、同時期と考えられる建物でも、建物群が異なると、方位を大きく異にする例が多く、一建物群内における方位の検討は意味をもつが、他の建物群との比較は意味をもたないことになる。

建物以外では、井戸や土坑が多数検出されている。土坑の大部分は水溜めとして機能したと考えられるものであり、井戸と共に、生活水を供給したものであろう。先述のように、谷-1・2の水を直接利用することはなく、むしろ谷-1・2を排水に利用していたようである。これらの遺構のうち、土坑-2・4・14は7世紀第2四半期に掘削されたものと考えられるが、他の大半の遺構は7世紀第3~4四半期に掘削され、8世紀第1~2四半期まで利用されている。1985年度の調査によって検出された井戸・土坑は、すべて7世紀第3四半期に掘削され、第4四半期に廃絶されている。廃絶の時期が異なるのは、今回の調査地内に8世紀代の建物が数棟存在することによるものと思えるが、大半が7世紀第3四半期に掘削されており、7世紀第1四半期以前の井戸・土坑が全く認められない点は注目される。おそらく、7世紀第1四半期以前の井戸・土坑が全く認められない点は注目される。おそらく、7世紀第1四半期以前は、谷底へ水を汲みに行ったり、わずかな湧水を利用していたのであろう。ところが、居住人数の増加等から井戸や水溜め施設が必要となり、7世紀第2四半期から徐々に作られ始め、第3四半期に至って急増することになったものと考えられる。

建物	間×間	規模	柱間寸法	方 位	時 期	備考
建物-1	$(3) \times (4)$	$(516) \times (784)$	172×196	N 28° E		
建物-2	$(3) \times (5)$	$(540) \times (932)$	180×186	N0.5°E		建て替え
建物-3	$(1) \times (2)$	$(212)\times(352)$	212×176	N0.5°W	7 C II	
建物-4	$(1) \times (2)$	$(196) \times (296)$	196×148	N 5°E		
建物一5	(1) × (3)	$(172)\times(500)$	$172\!\times\!167$	N7°E	7 C II	
建物一6	$(1) \times (3)$	$(124)\times(422)$	$124\times141$	N15.5°E	7 C II	
建物一7	$3 \times 5$	$532 \times 1372$	177×320 • 240	N	7 C I	
建物-8	$(1) \times (2)$	$(168) \times (320)$	$168 \times 160$	N3°E	7 C I $\sim$ II	
建物-9	$(1) \times (1)$	$(180)\times(268)$	$180\!\times\!268$	N8°E		
建物-10	$(1) \times (3)$	$(168) \times (600)$	$168 \times 200$	N2.5° E	7 C I	建物-12に先行
建物-11	2 × (2)	$380 \times (340)$	$190\times170$	N3.5° E	7CII以降	
建物-12	$(1) \times (3)$	$(214) \times (496)$	$214\!\times\!165$	N 1°E	7 C II	建物-11に先行
建物-13	(1) × 4	$(188) \times 728$	188×182	N0.5°W	7 C II	
建物-14	(1) × 3	$(148) \times 430$	148×143	N22° E		
建物-15	$2 \times 3$	348×544	174×181	N11°E	6 C W	
建物-16	2 × (3)	480×(688)	240×229	N 1 °W	7 C I 以降	
建物-17	2 × (2)	388×(320)	194×160	N2°E	7 C I ?	建物-16に先行
建物-18	$2 \times 4$	480×704	240×176	N23.5° E	7 C W ?	
建物-19	$2 \times 4$	360×476	180×170	N23°E	7 C IV	
建物-20	$(3) \times 4$	$(420) \times 728$	140×182	N17° E	7 C II ?	建物-18・21に先行
建物-21	$3 \times 3$	408×480	136×160	N16.5° E	7 C II∼III	
建物-22	3 × (2)	332×(328)	111×164	N15.5° E	7 C II	建物-21に先行
建物-23	$2 \times 2$	374×386	187×193	N14.5° E	6 C IV ?	建物-24に先行
建物-24	(2) × 3	$(360) \times 548$	180×183	N11°E	7 C II∼II	t .
建物-25	2 × (2)	382×(388)	191×194	N14°E	6 C IV	
建物-26	$2 \times 3$	344×480	172×160	N19.5° E	6 C W	
建物-27	$2 \times 4$	512×744	256×186	N8.5° E		
建物-28	$(1) \times (2)$	$(160) \times (320)$	160×160	N21.5° E		
建物-29	$(1) \times (3)$	330×(548)	330?×183	N12.5° E	7 C I	
建物-30	$2 \times 3$	432×462	216×154	N15°E	7 C I ?	
建物-31	$2 \times (2)$	388×(368)	194×184	N 10° E		建物-32に先行

表-2 建物規模一覧表①

建物	間×間	規模	柱間寸法	方 位	時期	備考
建物-32	$3 \times 3$	426×586	142×195	N4.5° E	7 C III∼ <b>W</b>	建物-33に先行、総柱
建物-33	. 2 × 3	$356 \times 630$	178×210	N 10° E	7 W∼8 I	
建物-34	$(1) \times (2)$	$(204) \times (400)$	$204 \times 200$	N 10° E		
建物-35	$(1) \times (1)$	$(270)\times(240)$	$270\!\times\!240$	N21°W		建物-36に先行
建物-36	$(1) \times (2)$	514×(440)	$257? \times 220$	N17.5°W		
建物-37	$(1) \times (2)$	$(172)\times(424)$	$172\!\times\!212$	N19°W		建物-38に先行
建物-38	$(1) \times (3)$	508×(684)	$254? \times 228$	N12.5°W		
建物-39	$(1) \times (2)$	$(140) \times (436)$	$140\times218$	N17°W		建物-36に先行
建物-40	$(1) \times (2)$	$(252) \times (496)$	$252\!\times\!248$	N29.5°W		建物-41・42に先行
建物-41	$3 \times 3$	416×488	$128 \times 163$	N26.5°W		建物-42・44に先行
建物-42	2 ×(1)	296×(192)	$148 \times 192$	N16.5°W	7 C III	火災痕跡
建物-43	$(1) \times (2)$	$(180)\times(272)$	$180\times136$	N19°W		建物-44に先行
建物-44	$2 \times 3$	$400 \times 400$	$200 \times 133$	N21.5°W		総柱
建物-45	$(1) \times (2)$	$(160) \times (368)$	$160 \times 184$	N16.5°W		
建物-46	(2) × ?	$(432) \times ?$	216× ?	N18.5°W		
建物-47	$(1) \times (2)$	$(196) \times (464)$	$196\!\times\!232$	N33.5°W		
建物-48	$(1) \times (1)$	$(132)\times(152)$	$132\!\times\!152$	N35°W	7 C II	
建物-49	$(2) \times (3)$	$(380)\times(464)$	190×151	N10°E		建物一50に先行
建物-50	$(1) \times (2)$	508 × (480)	$254? \times 240$	N 4 °W		
建物-51	$(1) \times (2)$	$(184) \times (336)$	$184 \times 168$	N1°E		
建物-52	$(1) \times (2)$	$(268) \times (400)$	$268 \times 200$	N12°W	7 C代	
建物-53	$(2) \times (2)$	$(272)\times(360)$	$136 \times 180$	N10°W		建物-55に先行
建物-54	$(2) \times (3)$	$(464) \times (292)$	$232\!\times\!97$	N2.5°W	$7 \text{ C I} \sim \text{II}$	
建物-55	2 × (4)	392 × (784)	$196\!\times\!196$	N23.5°W	7 C II	建物-56に先行
建物-56	$(2) \times (3)$	$392 \times 480$	196×188•104	N22.5°W	7 C III	
建物-57	$(1) \times (2)$	$(132)\times(304)$	$132\!\times\!152$	N18°W	7 C II∼III	
建物-58	? ×(5)	542×(1008)	? ×202	N 6 °W	7 C II	建物-59に先行、火災痕
建物-59	3 × (4)	480×(824)	$160\times206$	N19°W	7 C III ?	
建物-60	2 ×(2)	360×(320)	180×160	N33°W		
建物-61	1 ×(3)	170×(480)	$170\times160$	N28°W		
建物-62	$2 \times 4$	$336 \times 764$	168×191	N19°W	7 C II	建物-65に先行

表-2 建物規模一覧表②

建物	間×間	規模	柱間寸法	方 位	時 期	備考
建物-63	(1) × 3	378×490	189?×163	N13°W		建物-64・65に先行
建物-64	$2 \times 4$	$424 \times 772$	$212\times193$	N19°W	7 C II	建物-65に先行
建物-65	$3 \times 6$	$340 \times 878$	$113\!\times\!146$	N15.5°W	7 C III	
建物-66	3 × (2)	608×(428)	$203\times214$	N1°E	8 C III	
建物-67	$(2) \times (3)$	$(380) \times (620)$	$190\times207$	N2°E		
建物-68	2 ×(2)	356×(368)	$178 \times 184$	N16.5°W	7 C I	
建物-69	$2 \times (2)$	$344 \times (392)$	$172\!\times\!196$	N1°E		
建物-70	$(1) \times (3)$	$(240) \times (520)$	$240\times173$	N25°W		
建物-71	$(1) \times (2)$	$(184)\times(392)$	184×196	N6.5°W		
建物-72	$(1) \times (1)$	$(144) \times (160)$	144×160	N3.5°E	7 C IV	
建物-73	$(1) \times (3)$	$(260) \times (480)$	260×160	N12°W	7 C I ?	建物-74に先行
建物-74	$(1) \times (4)$	$(164) \times (640)$	164×160	N14°W	7 C II	
建物-75	2 × (3)	440×(408)	220×136	N5.5°W	7 C II	建物-76に先行
建物-76	$(2) \times (4)$	$(340) \times (640)$	170×160	N1°E		
建物-77	$(2) \times (4)$	$(344) \times (720)$	172×180	N11°W	7 C I	
建物-78	$(1) \times (2)$	$(170)\times(304)$	170×152	N6°E		
建物-79	$(1) \times (2)$	$(184) \times (380)$	184×190	N9°E	6 C IV	建物-80に先行
建物-80	$(1) \times (3)$	$(232) \times (560)$	232×187	N6°E	7 C II	
│建物-81	2 × (4)	$360 \times (736)$	180×184	N1°W	7 C I	
建物-82	3 × 5	532×988	177×198	N10°W	6 C IV	建物-83・84・85に先行
建物-83	$2 \times 5$	424×808	212×162	N19.5°W	7 C III	建物-84・85に先行
建物-84	$2 \times 3$	464×792	$232 \times 264$	N4°W		
建物-85	$(1) \times (2)$	$(196) \times (304)$	196×152	N19°W		
建物-86	3 × (2)	412×(448)	$137 \times 224$	N27.5°W	7 C I	2間×2間以上に建替
建物-87	$(1) \times (2)$	$(108) \times (280)$	108×140	N12°W		
建物-88	$(1)\times(1)$	$(196) \times (212)$	196×212	N0.5°E		
建物-89	$(1) \times (3)$	$(208) \times (480)$	208×160	N7°W		
建物-90	2 × (3)	428×(656)	214×219	N1°W		建物-89に先行
建物-91	(2)×3	$(328) \times 552$	164×184	N19°W	7 C II	
建物-92	$(2)\times(2)$	$(272) \times (384)$	136×192	N28.5°W	7 C II	建物-93に先行
建物-93	$(3)\times(4)$	$(392) \times (524)$	131×131	N35°W		

表-2 建物規模一覧表③

建物	間×間	規 模	柱間寸法	方 位	時 期	備考
建物-94	$(2) \times (3)$	$(424) \times (448)$	212×149	N24°W		
建物-95	$(1) \times (2)^{1}$	$(112)\times(240)$	$112\!\times\!120$	N13°W		
建物-96	$(2) \times (3)$	$(200) \times (528)$	$100 \times 176$	N17°W		
建物-97	$3 \times 3$	$524 \times 548$	$175\!\times\!183$	N16°W	7 C W	
建物-98	$2 \times 5$	380×896	190×176	N17°W	7 C II	建物-97に先行
建物-99	$3 \times 3$	416×596	139×199	N15°W		建物-100に先行
建物-100	$2 \times 2$	348×428	174×214	N16°W		建物-102に先行
建物-101	$(1) \times (2)$	$(108) \times (308)$	108×154	N18.5°W	·	建物-102に先行
建物-102	$(1) \times (2)$	284×(364)	284?×182	N9°W	7 C III	建物-104に先行?
建物-103	1 ×(3)	232×(416)	232×139	N13°W	8 C III	
建物-104	2 ×(3)	320×(360)	160×120	N7°W	7 C III ?	
建物-105	$(1) \times (1)$	$(180) \times (200)$	180×200	N10°W	_	建物-108に先行、火災
建物-106	$(2) \times (2)$	$(240) \times (300)$	120×150	N16.5°W	8 C I	建物-107・108に先行
建物-107	$(1) \times (1)$	$(132) \times (168)$	132×168	N9°W		建物-108に先行、火災
建物-108	$(1) \times (2)$	$(192)\times(380)$	192×190	N17°W		
建物-109	2×5	422×1070	211×214	N4.5°E	10 C	北・東に庇

表-2 建物規模一覧表④

表中の()は現存値、数値はcm、時期は四半期を示す。

註

(1) 1983~1986年度の調査によって検出された建物も含んでいる。1986年度以前の建物については、『高井田遺跡II』のP102・103に同様の一覧表を作成している。

柏原市教育委員会『烏坂寺-寺域の調査-』1986

柏原市教育委員会『高井田遺跡 I 』1986

柏原市教育委員会『高井田遺跡II』1987

(2)僧房・食堂は1983年度の調査によって検出された建物-1、建物-2にそれぞれ対応する。

柏原市教育委員会『烏坂寺-寺域の調査-』1986

(3) 柏原市教育委員会『高井田遺跡II』1987

# 2. 遺物

今回の調査では大量の遺物が出土しており、その大半は飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器である。それ以外には、埴輪・木器・屋瓦等が相当量出土しており、帯金具や銅銭等の出土も注目される。ここでは、須恵器・土師器について、若干の検討を試みることにする。

7世紀代の土器は、実年代決定において諸説がみられ、型式設定、あるいは共伴関係等にも問題が残されている。今回の調査では当該時期の土器が大量に出土しているものの、一括遺物と判断できる資料がみられない。井戸や土坑は多数検出され、遺物も多いが、いずれも50年前後の時期幅が認められ、層位による細分も、意味をもたないようである。唯一、一括遺物と考えられるのは、井戸-1の第10層・灰褐色粘質土上面から出土した土師器の甕、羽釜のみであ

る。しかし、一般的な傾向や遺 構の性格等を考えるため、あえ て遺構内出土遺物の器種構成等 を分析してみた。

図-235は、遺構内出土の須 恵器・土師器・埴輪・屋瓦の比 率である。この図から、一般的 には須恵器と土師器の比率が2 対8前後になると考えられる。 これは、出土遺物のすべてを数 えたものであり、破片となりや すい土師器の比率が、実際に使 用されていた比率よりも高くなっ ていることは間違いないと思わ れる。しかし、各遺構の比率が よく似ていることから、ほぼこ れに近い数値と思われる。その 中で、土坑-8・11の須恵器は 10%程度で少し低くなっている。 これは、土坑-8・11が8世紀 代を中心とし、他の遺構が7世 紀代を中心としていることに関 係があるのかもしれないが、詳 細は不明である。

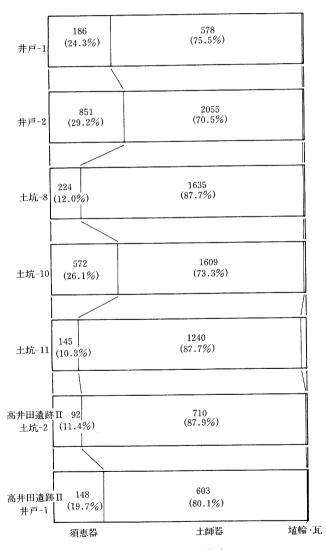
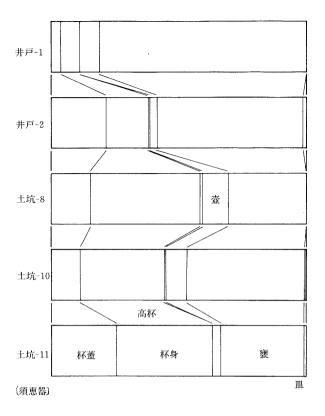


図-235 遺構内出土遺物の比率



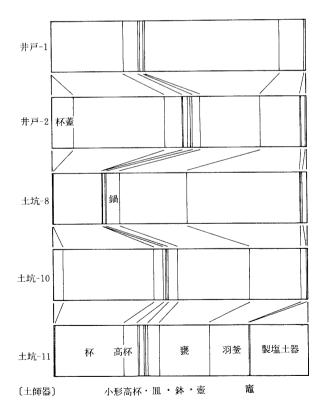


図-236 遺構内出土土器の器種構成

遺構内出土土器の器種構成について検討したのが、図-236である。各遺構において、須恵器では3.8~16.6%、土師器では26.9~74.2%の器種不明の土器があるが、図-236では、これらを除いている。

須恵器では、杯蓋・杯身と壺・ 甕の比率が、ほぼ半数ずつを占 める。土師器では、杯等の供膳 形態の土器と、甕等の煮沸形態 の土器との比率は4対6程度と なる。

この中で、井戸-1の須恵器 蓋杯が11.2%と少ない点が注目 される。これは、井戸-1出土 遺物から、須恵器の広口壺や土 師器の甕による祭祀的な行為が なされたと考えられることに関 係があると思われる。また、土 坑-8において、須恵器蓋杯が 58.6%であるのに対し、土師器 杯が19.4%と低い点が注目され る。土坑-8は8世紀初頭と考 えられるが、須恵器蓋杯が土師 器杯の機能をはたしていたため かと考えられる。やはり8世紀 代の土坑-11においても同様な 傾向がみられる。

これ以外には、土坑-11から 多数の製塩土器が出土している 点、土坑-8において、羽釜の 比率が高い点が注目される。 次に、須恵器蓋杯について検討してみたい。掘立柱建物のピット掘方から、形態の推定できる須恵器蓋杯が出土している建物は53棟存在する。それらの中で、陶邑編年のII型式の蓋杯のみを伴う建物が23棟、III型式の蓋杯のみを伴う建物が16棟あり、一方II型式・III型式の両者を伴う建物が9棟存在する。ピットの掘方であるため、問題も残るが、II型式とIII型式が併用されていた期間があったと想定される。これらはII型式第5・6段階の遺物とIII型式第1・2段階の遺物を含んでおり、藤原京などにおける編年に一致するものであるが、II型式の蓋杯が、かなり新しい時期まで残るように思われる。実年代比定の明確な根拠は持ち合わせていないが、遺構の相対年代を明確にするためにも、実年代を与えておくことが必要であると考えている。現在のところ、II型式は7世紀中葉頃まで残り、III型式は7世紀前葉頃に出現すると考えている。また、II型式とIII型式の併存は、その時期幅や遺物量から考えると、単に消費地だけの現象とは考えられず、生産地において併存していたのではないかと思われる。

更に、Ⅲ型式第2段階の蓋杯と比較すると、Ⅲ型式第1段階の蓋杯が非常に少ないことが指摘できる。これは今回の調査だけでなく、7世紀代の柏原市域、およびその周辺においてもみられる現象であり、Ⅲ型式第1段階の時期が非常に短いか、もしくは、その供給体制が異なっていたためと思われる。

土師器の杯においては、放射二段暗文を施す大形の器種が少なく、放射一段暗文を施すもの も、小形の器種が多いことが指摘できる。これも、今回の調査に限られたものではなく、その 供給体制が異なっていたことを予想させるものである。

今回の調査では、大量の土器が出土していながら、十分な検討を加えることができなかった。これは一括遺物が少なかったことと、整理期間が短かったこと、および筆者の能力によるものである。特に、須恵器蓋杯と土師器杯の平行関係、および他の器種の共伴関係について検討を加えたかったのであるが、今後の課題として残しておきたいと思う。須恵器については陶邑、土師器については土師の里などの生産地から近い点、および、当該時期においては、かなり先進地であったと考えられる地域だけに、今後、検討を深めていき、土器の供給体制等についても考えてみたいと思っている。

註

- (1) 中村 浩 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978 ほか
- (2) 西 弘海 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文 化財研究所 1978 ほか

#### 3. 遺跡

これまでの高井田遺跡における調査によって検出された建物の中で、7世紀代と推定される 建物は150棟近くになる。また、遺構の項で検討したように、これら以外にも建物を復元でき なかったピットや削平されたと考えられるピットが多数存在するため、実数は400棟前後にな るのではないかと思われる。また、建物の重複から考えると、建物の建て替えは平均20年前後 と予想される。建物総数400棟を単純に5で割ると80棟となり、80棟前後が同時期に存在した のではないかと思われる。

これらの建物には、官衙的な配置や施設はみられず、集落と考えてよいと思われる。集落と 考えるならば、7世紀前葉~中葉に建立されたと推定される鳥坂寺を氏寺とした氏族、おそら く鳥取氏の居住地であろうとするこれまでの考えに問題はないと思われる。

6世紀末葉に建物が建ち始め、斜面を大規模に削平することによって平坦地を得、建物が次々と建てられていったと考えられる。現在の造成にも通ずる、ひな段状の造成が行われているのである。このひな段上に多数の建物が建ち並んでいる様子は、河内平野に居住する人々、あるいは大和川の水運を利用する人々からも見えたはずであり、当時の人々は、この光景を、どのように見たのであろうか。

これらの建物は、7世紀前葉~中葉、烏坂寺の創建頃にピークを迎え、7世紀末葉まで続く。 ところが、8世紀になると建物は激減する。『高井田遺跡II』においても考察したように、烏 坂寺は奈良時代に天皇が巡拝するような寺であり、烏坂寺が衰退したとは考えられない。氏族 が居住地を他所へ移したと考えざるを得ないのである。

6世紀末葉、および8世紀初頭の変化は重大であり、おそらく、政治的な原因が強いのではないかと思える。また、この変化が柏原市域全域でみられるようである点にも注目しなければならない。

以上のように、高井田遺跡は7世紀を中心とする大集落であることが確認され、その集落の大部分を調査することができたと考えられる。しかし、今回の調査においても、遺構の大半は破壊されてしまった。また、遺構・遺物の量に比して、あまりにも調査期間、整理期間が短かったため、満足のいく調査とは言い難い。数年後、あるいは数十年後、一体、どの程度の人に、ここに貴重な遺跡が存在したと認識していただけるだろうか。念願の国民年金健康保養センター建設に、貴重な文化財の破壊という大きな代償を払ったことを覚えておいていただきたいものである。

# 参考文献

柏原市教育委員会『烏坂寺-寺域の調査-』1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡 I 』1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡 II』1987

# 高井田遺跡III

編集·発行 柏 原 市 教 育 委 員 会 〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話(0729)72-1501 内5133

発行年月日 平成元年3月31日

印 刷 サンケイ総合印刷株式会社

高井田遺跡 11 付図



